十二月一日發行

大正元年十一月二十三日印刷納本（毎月一回二十三日印刷納本）
明治三十三年十二月二十五日第三種郵便物認可

# 女學世界



第十二巻
第十六號

博文館


桃谷製
美顔水
BIGANSUI
OMOTANI
FIRST
素顔に化粧に
一等の美顔水
白粉の溶水に使へば
白粉の「のび」思ふ儘
朝夕使は疵を知らす
きめを細に艶を出す
評判も賣行も
一等の美顔水

▼十二月一日より▲

食器新製品陳列會

歳暮年始御贈答用品大賣出し

格安反物及雜貨大賣出し

▼十二月十日より▲

羽子板陳列會

東京
駿河町

# 三越呉服店

# 女學世界 第十二巻第十六號 十二月號目次

# クラブ新聞

禁轉載



## 婦人の自活

### ――新時代の化粧――

是からの社會は段々複雑になつて參ります。婦人が男子にのみ頼つて生活することの覺束ない時代が將に來らんとして居ます。婦人も矢張り自活の道を立てなければなりません。勤勞しなければなりません。つまり日常の仕事が益々忙しくなつて參るのです。仕事が忙しくなると悠々緩々と鏡臺の前に坐り込み化粧に憂き身をやつして居る餘裕がありません。何でも手つとり早く瀟洒とした化粧をするのが肝要です。

それには、クラブ白粉ほど輕便なものはありますまい。クラブ白粉の薄化粧は些とも手間を要しません。而かも甚清楚なること高尚なること、他に及ぶものがありません。それでも倘隙のない方には、クラブ洗粉の御使用を御勸め致します。朝、顔をお洗ひになる時、お風呂を召す時忘れずにクラブ洗粉さへ使つて居ればたとへ白粉はつけずとも肌の色澤おのづから美しく玉のやうな清かな人となることを得るのであります。

## △靜御前▽

「しづやしづ賤の苧環くりかへし」と鎌倉殿の御前で唄ひながら舞うた姿は何んなに憐れふかく而して何んなに美しかつたことでせう。今から想像すると、靜御前は中肉中脊で、顔の細おもてな、口元の小さい婦人であつたらうと思はれます。さうして其の舞衣の袖に若しもクラブ白粉の匂ひが薫じたらば更に一層の美しさを增した事でせう。



## 夜寒の床

天井か押入か、ガタ／＼と鼠の騷ぐ物音に、雪子は夢を破られた。眠りに就く時電燈は消して置いた、眼をパッチリと開いて見ても、部屋の裡は眞暗である。置時計の音のみがチクタクと耳に冴えて、寢覺の夜半は襟元が冷たい。

憑かる時、これまでのやうだと、白粉でよごれた寢卷の襟や、夜衣の襟が冷たく肌に觸れてその心持の惡さつたらなかつたけれど、クラブ白粉を使ふやうになつてからと云ふもの、その心配はなくなつてしまつた。クラブ白粉はのりがよくて、能くのびて、綺麗に高尚な化粧が出來る、而して、着物や襟なんどの汚れる心配は些かもない、嗚呼、化粧品は良いものを使はなくてはならないと昔の事や今の事を色々思ひ廻して居るうちに、雪子はまたウト／＼と快く夢路をたどるのであつた。

ぬりもの

美術蒔絵物

陳列縦覧随意

東京日本橋通室町

木屋漆器店

電話本局 五百九拾七番

長 千七百拾番

四千六百六拾二番

---

# 室内暖爐

破格大安賣



石油用、瓦斯用、石炭焚等

種々取揃有之候

其他西洋食器類一式陳列

○御一報次第目録進呈

○市内は無料配達仕候

宮内省御用達

東京銀座通り尾張町交叉點

十一屋商店

電話新橋 二三四三 二三四四

振替口座 九〇九二

子爵秋元興朝閣下題字
三輪田眞佐子刀自序
琴松園文雅著

# 花道池坊指南

▼三版▲

三輪田刀自曰『これまでも既に花道の著作は少くはありませんけれども多くは簡單なる手引草とでも稱したきものでありました。然るに本書は眞に指南の名に背かずして上は生花の濫膓より下は生花の方法に至るまで所謂科學的研究法を以て詳細を極めて居ります。』

杉浦非水君裝幀、菊版箱入大和綴頗高雅、紙數三百五十頁、口繪數葉及插圖約百個入

定價金壹圓
小包料十二錢

東京市京橋區弓町四
發兌元 三立社
電話京橋一八五三 振替東京九五五六

長崎縣大島中學校教諭文學士 佐々木信香先生
渡邊眞一郎先生著

# 國文の研究

# 漢文の研究

各冊 四六判總クロース上製金文字入
定價金五拾五錢 郵稅八錢

國語漢文の研究は修養の第一歩にして思想發表暢達亦た實に之に負ふ、本書は這般の要求を充たさんが爲めに著者が蘊蓄を傾けて編述せしもの**解說**は丁寧**懇切**を極め類書中の巨擘たり、各種**受驗者**小學校教員並に男女**學生**は勿論**國民**亦机上此書を闕くべからざるなり。

---

東洋高等女學校學監文學士 和田鼎先生
扶桑女學校講師 松崎雙葉先生著

袖珍 **土佐日記詳解**

三五版上製 價四拾五錢 稅六錢

再版

故菊池三溪翁著（返り點捨假名付）

訓點 **譯準綺語**

講述懇切丁寧坊間未だ本書の如きを見ず

天下の一大奇書・八犬傳、弓張月、膝栗毛、源氏物語の妙文漢譯書、九大家の評文亦珍

三六版上製 價四拾八錢 稅六錢

三版

石崎臺洲先生著

新體 **書簡文鑑**

作例を拔け作法を說く一讀能文の響を得る事明らなり

四六判並製 價三拾錢 稅六錢

發兌元 東京銀座尾張町 尚士堂

賣捌 東京神田 東京堂
東京橋 東海堂 北隆館

女（いの三）

女（いの四）



豐產


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一番　振替口座五〇二一番


香水の代用となる
千代田香油
木枯らしの吹きすさぶ初冬の外出に後れ毛一筋ゆるがずゆかしき薫りを送るは千代田香油の外にはあらず
千代田は純植物性の高等香油にして拔毛を防ぎ惡臭を去り髮を黑く長く美しき光澤を出す
定價 小瓶十七錢 中廿五錢 大卅五錢 特八十五錢 （送料八錢）
千代田香油本舗
石鹼發賣元
山岸三之助
東京馬喰町
大阪鹽町

女（ろの四）




山本昇雲畫

女（はの一）

# 百花爛漫の新天地

# 新婦人

拾二月の卷發行 一冊廿八錢 郵稅二錢五厘 ●六冊金一圓七十錢 ●十二冊金三圓卅錢

▲年の瀨 石版極彩色油繪……川村清雄

▲雪の曙 極彩色石版刷四頁掛……池田輝方

美姬欄によりて望む處 六花滿地忠魂と映發す

▲深閨の合奏 コロタイプ寫眞

●佐々木侯爵令孃道子姬 ●大石良雄後裔大石萬壽子孃 ●本多子爵令孃 ●大石陸女の墓

▲婦人の頭上に襲來せる飛行機と飛行船

▲南部坂雪の別……鰭崎英朋

新意匠になる字入繪本的創意

●淺野總一郎氏家庭 ●聲樂家原のぶ子孃 ●高橋正彦氏と夫人 ●湖上の松浦伯 ●進博士氏令孃

▲師走の女……太田三郎

●西本願寺法嗣裏方 ●大正藩と前と後の夫人 其の他名流名門令孃の小照數十葉

妍麗人目を眩す

每號連載

小說 婦人俱樂部……村上浪六

●雲のあと……幸田露伴

歲末の辭……幸田露伴

▲現代の若き女への書……鳩山春子

御大喪中の年始狀の書き方……小野鵞堂

▲癖直しの樹液……前田曙山

新婚の婦人に送る……水野葉舟

▲運勢の鑑定……船井梅南

所謂新らしき女……和田垣博士

▲霜燒と胼の注意……瀨川醫學博士

奥樣とお神さん……大町桂月

▲此頃の化粧仕方……遠藤はつ子

春仕度 着物の工夫……千枝子

▲東京女學館評判記……宇宙兒

二百十二年前の十二月に因みたる 特別記事

## 忠臣藏烈女觀

▲執筆者 芳賀博士●福本日南●嘉悅孝子●長谷川時雨 ▲新渡戸稻造●山路愛山●戸川殘花●遲塚麗水●兒玉花外

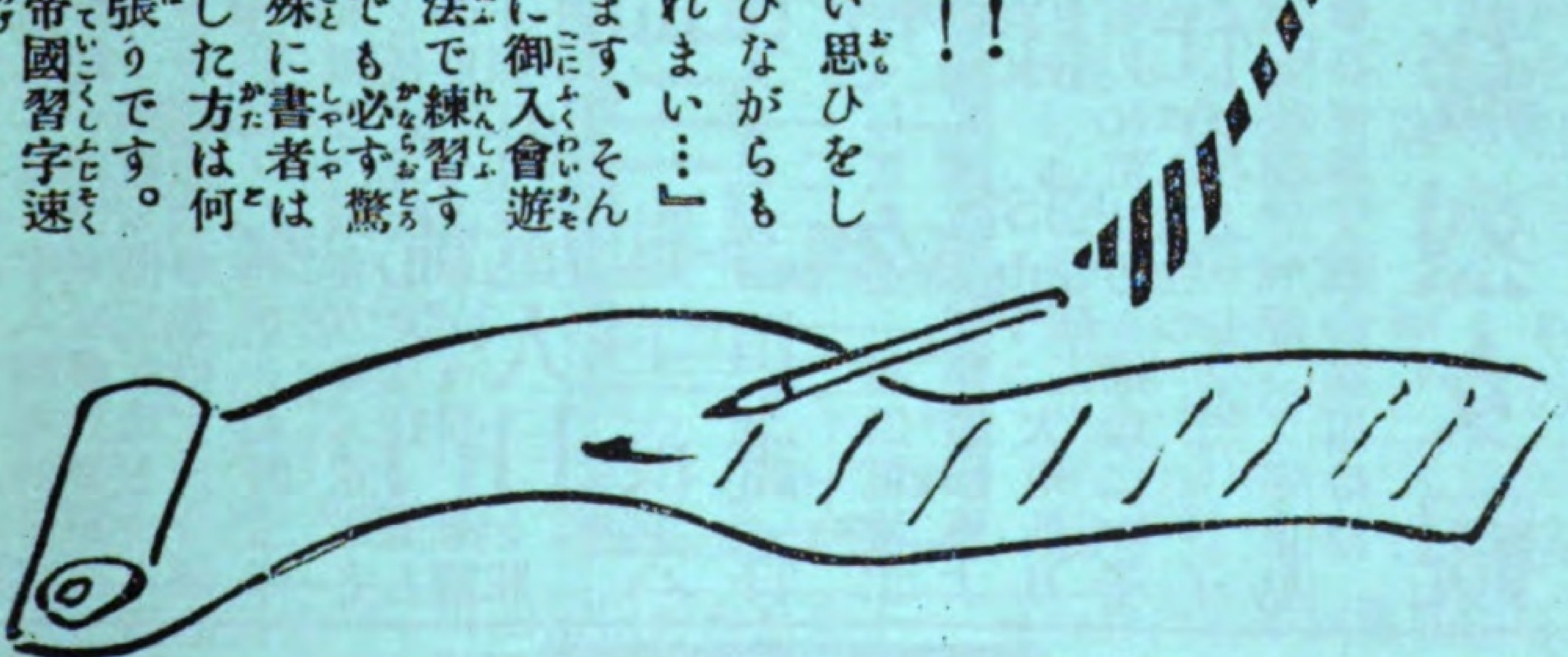
發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

女(はの三)

# 惡筆の方は速に決斷なさい!!



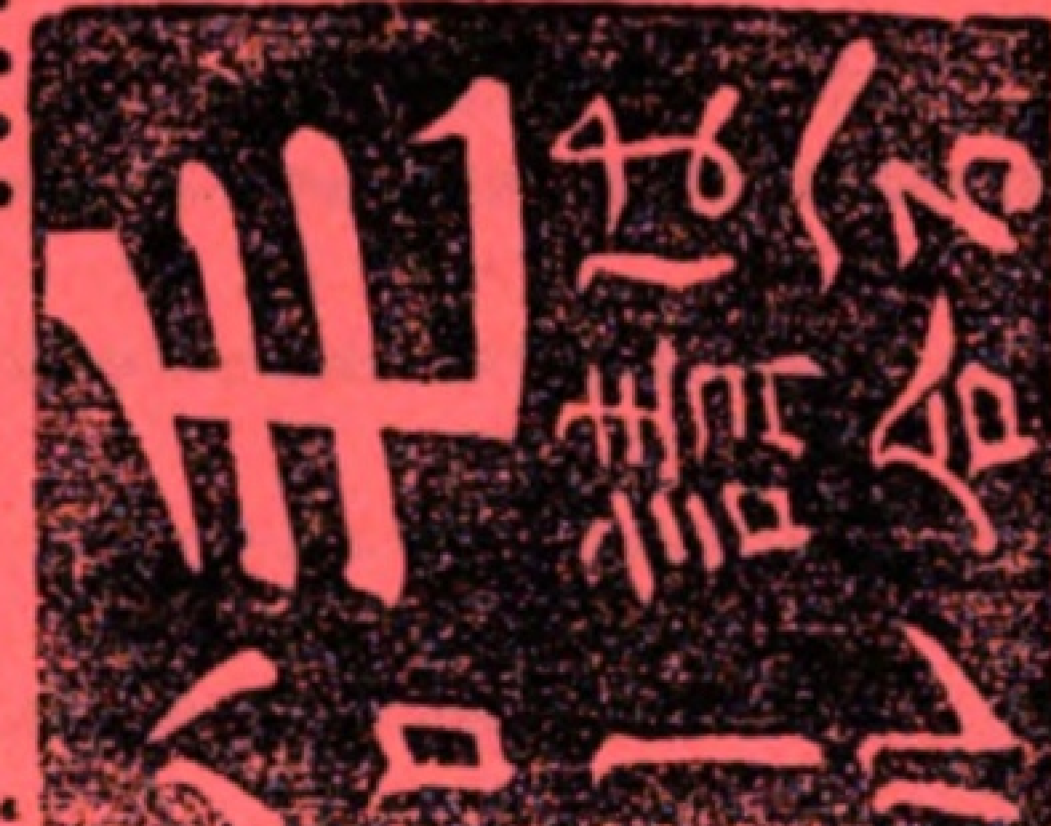
字の下手な方は手紙を書くにつけ、何をするにつけ、始終耻かしい、悔しい思ひをしなければなりませぬ。そうは思ひながらも『手習ひしたって急に巧くはなれまい…』とそのまゝ過す方が多うございます、そんな方は是非此際決斷して習字會に御入會遊ばせ。本會の專賣特許習字速成法で練習すれば六ヶ月で、どんな惡筆の方でも必ず驚くほどの能筆家となられます。殊に書者は小野鵞堂先生です、本會を卒業した方は何所へ行つても字については大威張りです。惡筆の方は東京本鄕大學正門前帝國習字速成學會へ「ハガキ」で住所姓名を御知らせなさい、見本及會則を無代で差上ます。





竹久夢二筆


最新通信教授
毎月二回講義錄發行
三ヶ月卒業 本會
獨特催眠法全部
十六法教授す
素人も一讀
實行保證
近時無責
任なる單行
本を販賣する
者あり大々注意
詳細說明書實驗錄
付會則等は無代送呈
大阪東區生玉
帝國神秘會通信部



は欧米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる奇藥を専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる妙藥なれば世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する贋造品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する亮響丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗悪の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早むる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●ハロールノ取次所左ノ如シ取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ註文アレ●●●●●●

東京本郷六丁目 瓜生藥局
名古屋京町三丁目 巴商會
京都五條通富小路 安江澤反物店
廣島市播木町 万代藥局
弘前市土手町 菊池藥店
京橋本港町十一 釜長商店
大阪東區平野町 丹平分店
寺町通石藥師角 福知藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
堺市甲斐町 一色藥局

# らい病

本劑は有名なる癩病治療藥を化學的方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども本劑を繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴かしむる事請合本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず●定價送料共(ザノサール)一ケ月分貳圓十錢●復方ザノサール一ケ月分參圓十錢

三河國碧海郡刈谷町
振替口座東京貳參壹壹
電話刈谷參拾貳番

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

---

# 見よ◎月經きな女子◎病める婦人

婦人病の多くは月經不順月やく止り發する者少なからず故に一日も早く女月丸を服用して健康と成れよ本劑は學理上有効なる藥種を蒐集し製劑したる良藥なれば婦人血の道月經不順月やく滯り又は**血塊**など稱へ永き間經水なき爲め腹痛する人或は女子十七八歳に至り月經なき人等に用ゐて特効あり必ず服用試られよ




藥價 一劑六十錢 二劑一圓十錢 特製 二圓二十錢 三圓三十錢 送料各四錢

# ●艶美白色美容劑

子供の折は美愛と賞せられし人も年頃になりて脂肪多くぶとく太り血太りニキビ吹出物ソバカス等の爲めに醜婦となる人少なしとせず故に美容白色ならんと思へば是非本劑を御試用あれ全くキレーに艶美白色と成る事を信じます

# 肥滿病藥




本劑は肥滿病内服藥と皮膚外用藥との二種有れば御注文の時は必ず患部御容體を書き添へ御申込有れば其容體に適合の方を送付致します

藥價 一劑一圓五十錢 三劑四圓三十錢 二劑二圓九十錢 四劑五圓半 送料各八錢

惡性尚疾の方は三四劑分の多き方が御利益になります

必ず御試用下さい

一手販賣 東京京橋中橋和泉町一 振替東京一〇六七七番 小宮愛生堂

# THE LADY'S GRAPHIC.

# 婦人畫報

十二月一日發行　拾貳月の卷　定價廿五錢　郵税二錢五厘　六冊税共一圓五十三錢　十二冊税共二圓九十四錢

## 畫報

◎旭光 石川畫伯筆 石版十八度表紙

◎二階の日なた 中澤畫伯筆 二頁大美人

◎兩陛下桃山御參拜

▼キャット夫人歡迎

▼跡見女學校桃山參拜

▼郵便局事務員の多忙

◎女官の方桃山參拜

◎泰宮殿下桃山參拜

▼投入花と盆景

▲在米中の姉と弟

▼筆端花さく夫人令嬢の揮毫

◎正月の重詰 料理の順序 詰方の手振

◎歲暮の家庭 いろ〱の寫眞 さま〲の模樣

▼成女學校箱根行き

▼女子美術と淑德高女の日光修學旅行……

◎羽織紐の作り方

▼大島 村井 入江 藤岡 岡崎 井上 隈 酒井 川上 橋本 池貝 井出 石渡 梅若 諸令嬢

◎洋裝の與謝野女史

◎令嬢と年の暮

## 花と匂ふ本年掉尾の本誌の盛裝

## 讀物

▼過古を顧みよ　佐々博士

▼今年の婦人界女學界　下田次郎

▼歲暮の贈物　高島平三郎

▼琴の師匠より見た弟子　鈴木鼓村

▼萬引女……　山本檢索係長

▼キャアト夫人に會ふ……　鳩山春子

▼女をたぶらかす男……　宮崎檢事

▼船より良人に……　與謝野晶子

▼結婚當時と今……　三宅やす子

▼汽車の中……　安井哲子

▼巴里の印象　安達夫人

▼婦人記者の下婢生活

▼五十錢會　野上彌生子

▼婦人界に彌蔓しつゝある女優熱　燕子

女(にの三)

東京市麴町區飯田町四ノ四　振替口座東京一一八一八番

東京社

電話番町二三三九番　各地到る處の書店に有り

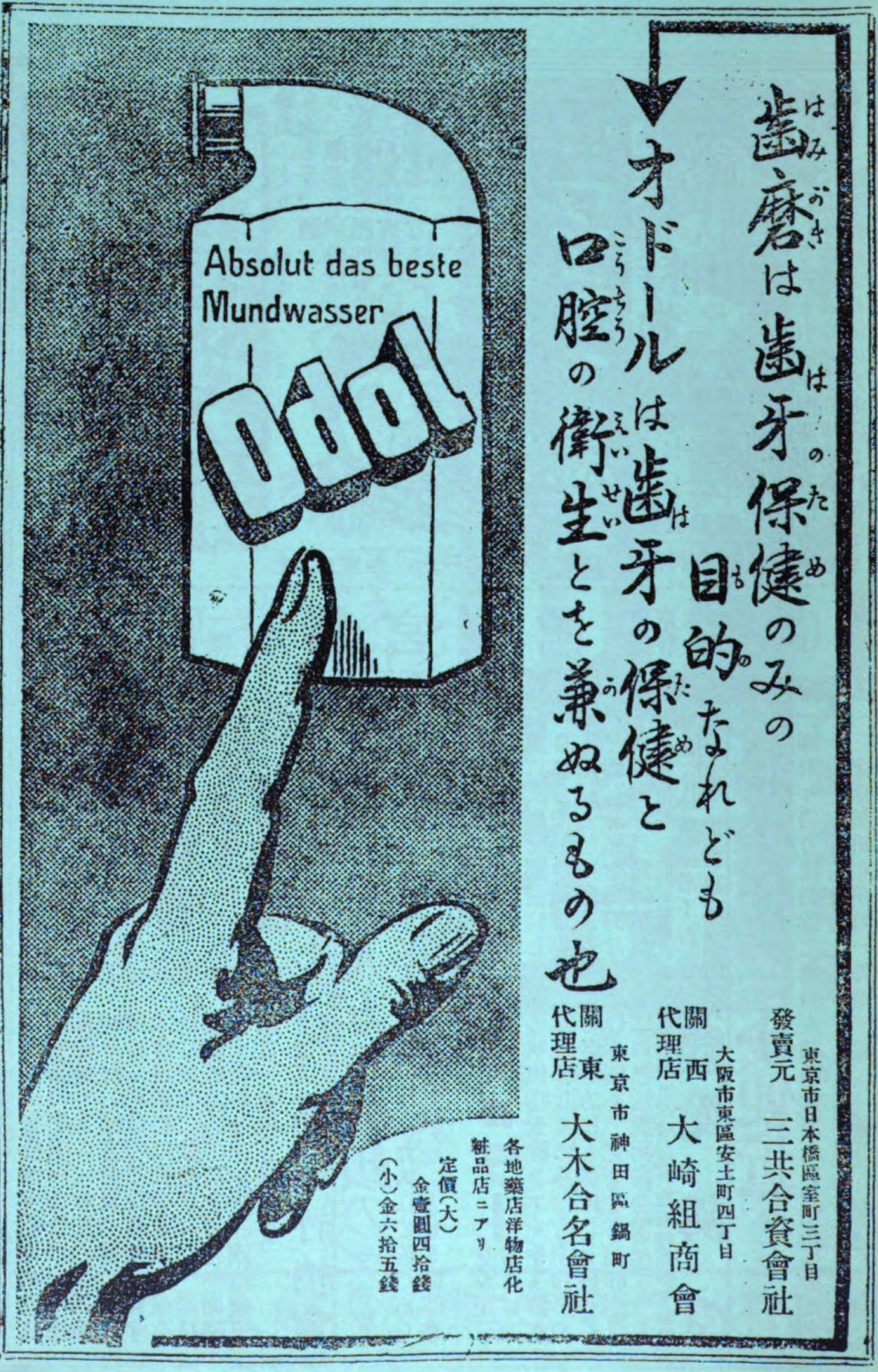
女(にの四)



河崎蘭香筆



武田壽筆



Absolut das beste
Mundwasser
Odol
歯磨は歯牙保健のみの
目的なれども
オドールは歯牙の保健と
口腔の衛生とを兼ぬるもの也
發賣元
東京市日本橋區室町三丁目
三共合資會社
關西代理店
大阪市東區安土町四丁目
大崎組商會
關東代理店
東京市神田區鍋町
大木合名會社
各地藥店洋物店化粧品店ニアリ
定價(大)金壹圓四拾錢
(小)金六拾五錢


女(ほの一)

# 毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓●三圓半●送料十錢

# 美顏散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる奇効藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓二十錢●送費十錢



▶にせ物あり乞御注意◀

# リウマチス特効劑

驚く可き効驗確實の特効藥 禮狀山の如し

七日分三十五錢
半劑七十錢
一劑一圓三十錢
二劑二圓四十錢
送料八錢

方名パウル氏丸は獨逸醫學大博士パウル先生發明の靈藥にして三十有餘年間服用各位の實驗報告に依り益奏効偉大なる特効藥と確信す…證明禮狀寫希望の方申込あれ送呈す

# 新宮藥館

(全快禮狀店内に保存す一覽を乞)

(東京本郷三丁目 振替一二五八四)

電話下谷一五四六番

# 竹柏會 竹柏會 竹柏會

竹柏會は**文學博士佐佐木信綱**氏主幹の和歌研究會にして**東京會員**の爲には歌文の講義點削をなし**地方會員**の爲には通信にて和歌の添削質疑に應ず入會規則書は郵券貳錢を送られなば直に發送すべし、なほ**文藝雜誌心の花**を毎月一回發行す壹年分前金壹圓四拾錢見本は一部拾三錢とす

東京市本郷西片町十 電話下谷五七〇番 竹柏會

# 冬季ご婦人方のお顏のアレ

て黑づみたる其上にも**ニキビ、リバカス**にて苦しめらるお方はどんなに勞はしいことで御座いませう此時季に醫師松永先生新發見の

## 美顏白色新劑フロラー

をお用になれば次第に皮膚を漂白にし此等の吹出物を除きアレをも防ぎ日ならず玉の如き美しき容貌となるのみならず白粉の代用品として老たる方にも若き方にも奥床しき色つやを出し氣品を高尚ならしむる極めて完全なる美顏劑なり尚郵券二錢御送付あらば白色法説明書を送呈すべし

定價五拾錢、壹圓、送料八錢、特製貳圓五拾錢、送料拾貳錢郵券壹割増

本舗 東京市下谷區百六番地 振替東京一四五六九番 愛隣堂

# ね小便又は小便近きにて

御困りの方は郵券二錢封入御照會下さい必ずなをるよい藥を御知らせ致します

東京神田和泉町一番地一號 神明堂


あゝ美しき紅葉！
あゝ美しき令孃！
紅葉は自然の化粧によりて紅に
令孃は大學白粉の化粧によりて
自然の化粧したるよりも
更に美し
あゝ
大學白粉！

長島式婚禮の式



（前號記事近代的婚禮式參照）

# 令嬢かゞみ



右、前田たみ子孃（麴町）
中、橋詰孝子孃（水戸）
左、加藤花子孃（神田）

女(への一)

女（への二）

貴婦人達はナゼ美しいでせう!!!

▲其れはこの樣にしてみがき立てるからであります

# 美顏と化粧法

定價送料共金三十七錢
切手代用は金四十錢

目次の大略 ▲色白くなる方法 ▲赤き顏を櫻色にする方法 ▲シワのよらぬ方法 ▲キメを細かにツヤを出す方法 ▲日にやけるを防ぐ方法 ▲齒を白くする方法 ▲手の色を白くする方法 ▲髮の毛を黑くする方法 ▲毛のぬけるを止める法 ▲毛をのばしつやを出す方法 ▲ふけを去る方法 ▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法 ▲あるべき所に毛なきを生ずる方法 ▲やせる法ふとる法 ▲鼻を高くする方法 ▲聲をよくする方法 ▲入浴の方法 ▲化粧品の選び方 ▲おしろいのつけ方 ▲衣服の模樣と縞柄 ▲衣服の縫ひ方 ▲衣服の着方

此外いろ〳〵の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其效果も面白い程あらはれます。私方へ御申込下されば特別に割引いたし差上げますから二錢切手十五枚又は一錢五厘切手二十枚手紙の中に封入して至急御申越下さいすぐ送本いたします

●本書著者　東京神田錦町三ノ二　高柳孝子

# 色白くなる

色黑き方、靑き方、赤すぎる顏の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい必ず色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します。冬になつてお顏のあれておしろひの付きが惡い方などはすぐなほります。皆樣に御實驗を願ひました所、日本一の黑美人などと笑はれた生れ付きの色黑が色白くなりました」とか「美人の神樣と拜んで居ります」などといふを始め數千通の御禮狀をいたゞいて居ります。

東京市神田錦町三　高柳こう子

## お正月

も近づきました、お正月迄に色白く美しい御顏にならうと思ふ御方は一日も早く切手封入御問合せ下さいませ

本劑は毛髮專門家醫學博士リンド先生の苦心發明せし處方藥にして未だ我國に廣く行はれずと雖毛生藥中効能最確實なるものなれば他藥を用ひて無効失望せる者も安心して御用ひあれ。

# 毛はえ藥の大王 リンド

本劑を患部に塗布する時は偉大なる効能を表はし皮下に至りて毛根を刺戟し以て毛髮の發育を旺盛にす婦人のはえぎわの惡しきを直し毛髮眉毛の薄きを濃くし、ぬけ毛を止め新毛を發するには壹瓶を用ゐ、ハゲ(禿頭病)無毛等には特瓶を使用せよ、完全なる毛髮を發生し其苦惱を去り幸福の身となるべし。此の如く藥効偉大なるも劇毒藥を含まず、皮膚を損せず、毛の發生すべき所なれば本藥にて發毛すべし御安心の上一日も早く此新藥を用ゐ蘇生の喜びを得よ●藥價送料共壹瓶一圓十錢●特瓶二圓十錢●着金次第送藥す

# そばかす

よく御婦人方の御顏に小さき黒點が澤山出來るものをソバカスといふ本店發賣のソバカス取り專門藥は維那醫科大學教授の發見せられし處方藥にして効能最も顯著なればキレイにソバカスを治し決して顏にあとを殘したり顏色を惡くする心配など決してなし御安心の上御用ゐなされ美しき御顏となられよ藥價送料共金一圓九十錢にて送

東京神田錦町三丁目
電話本局四五六七番
振替東京八六四二番

## 東雲堂藥房



# 身體ふとりて困る人

▲二十歳前後の婦人にして見にくき程

▲のぼせ症にして常に顏色赤く大便通じ惡く頭痛する事多き御婦人は東京市神田區表神保町十番地千代田製藥合資會社へ二錢切手封入御照會あれ身體に少しも害なく顏及び身體程よくやせてスラリとした美人となる良藥を詳報す

# 令嬢かゞみ



右圖子爵山内豐尹氏令嬢惠美子、左圖海軍少將榊原忠三郎氏令嬢操子

# 令嬢かゞみ







右、愛生病院長中村重治氏令嬢清乃子
中、横濱市助役川田正靜氏令嬢貞子
左、紳商岡惣五郎氏令嬢みち子




# ニキビ

## 吹出物を治療して色白く美しくする內服藥

ニキビ吹出物油顔其他皮膚ドス黒く色澤惡しく薄穢き等は概ね體內胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因す故に之を治するには必ず內服藥を以て體內より治療するを要す然る時は奏効確實にして外用藥の如く內攻の恐れなし是現今皮膚病學上の定論なり本劑は此理由に依り製出せる內服藥にして既に醫藥の成書に於て確實に効能を記載せられたるに係はらず先般報知新聞大阪毎日其他八大地方新聞に於て社會的試驗の計畫を發表し多數の患者に試驗し驚くべき好成績を報告せらる最早學理に於ても又實際に於ても疑ふの餘地なき有効藥たる事を確信するに至り茲に發賣す患者は只十錢郵券三枚封入申込あれば直ちに送藥すべし

**藥價** 四日分三十錢◎一週間分五十錢◎十五日分一圓
市內は電話かハガキにて御通知次第無料配達
地方は成るべく爲替又は振替の事

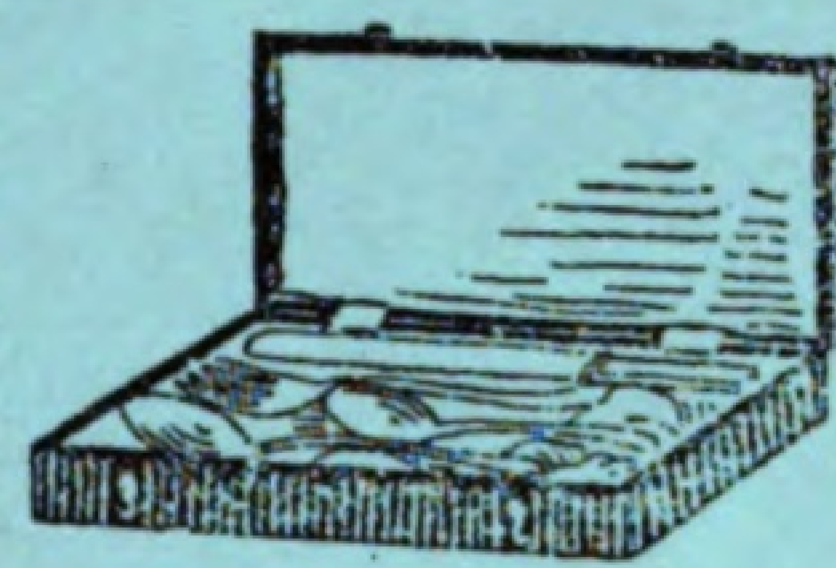
東京市下谷區上根岸町百十一番地
本舖 藥學得業士 金澤巖
振替東京四六七番電話下谷二二五九番

女(その一)

# 博通社特賣品

## 御正月の御準備

**舶來洋食道具**
頗る美麗なる函入にてクリスマス及年末年始の御贈答用として最も適當



一人前 特價參圓
二人前揃特價 金五圓五拾錢
三人前揃特價 金七圓五拾錢
送料內地二十錢

御正月にはなくてならない百人一首
皆さんが熱狂しての激戰亂戰にも屹度堪ふべき丈夫此上なしの此かるた



送料內地拾錢領土廿五錢
四號 特價四拾五錢
三號 特價八拾錢
二號 特價壹圓
一號 特價壹圓卅五錢

美麗函入 **特價金四圓九拾錢**
皆さん御存知の硬質陶器です御正月には御屠蘇はよしてハイカラにカフエーかココアを召上がれ御盆も同じ硬質陶器で出來牛乳入から砂糖壺まで附屬して居ります御註文下さればココアカフエーの鑵入も御匙も御安すく御取次致します

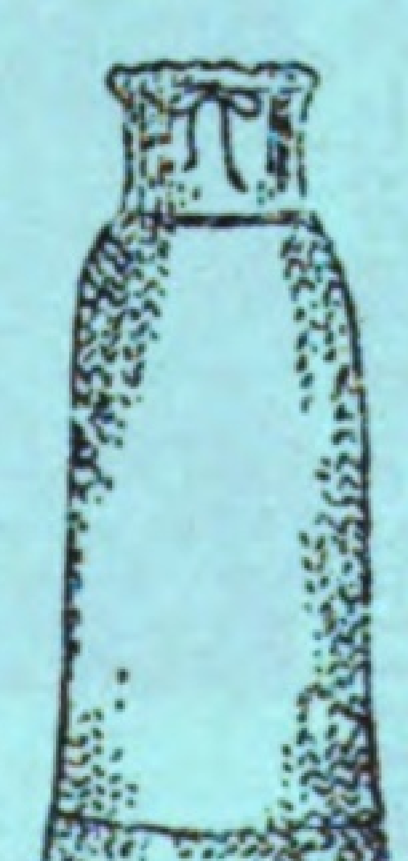
荷造送料內地四拾五錢領土七拾錢



## 寒氣が何時襲來して來ても善う御座りますか

### オカアさまもあなたさまも

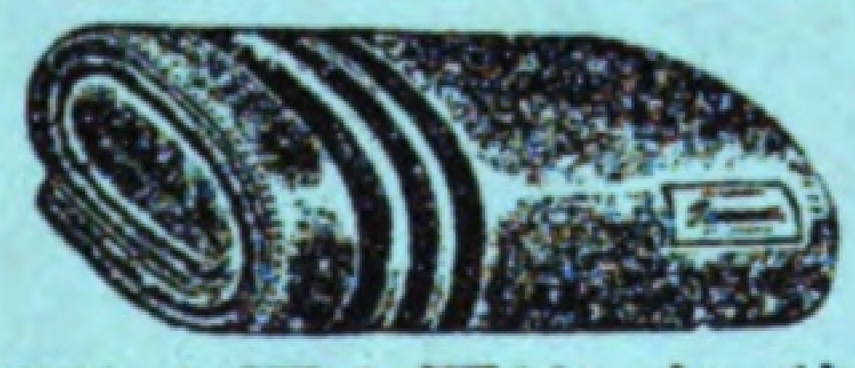
女子の方は大人と云はず青年と云はず身體を殊に腹部を冷やさない樣御注意肝要
純毛糸製厚くて暖かで丈夫な都腰卷を御召しなさいな



大人用 特價壹圓五拾錢
中人用 特價壹圓貳拾錢
小供用 特價壹圓
送料內地拾錢領土廿五錢

### 御やすみの時

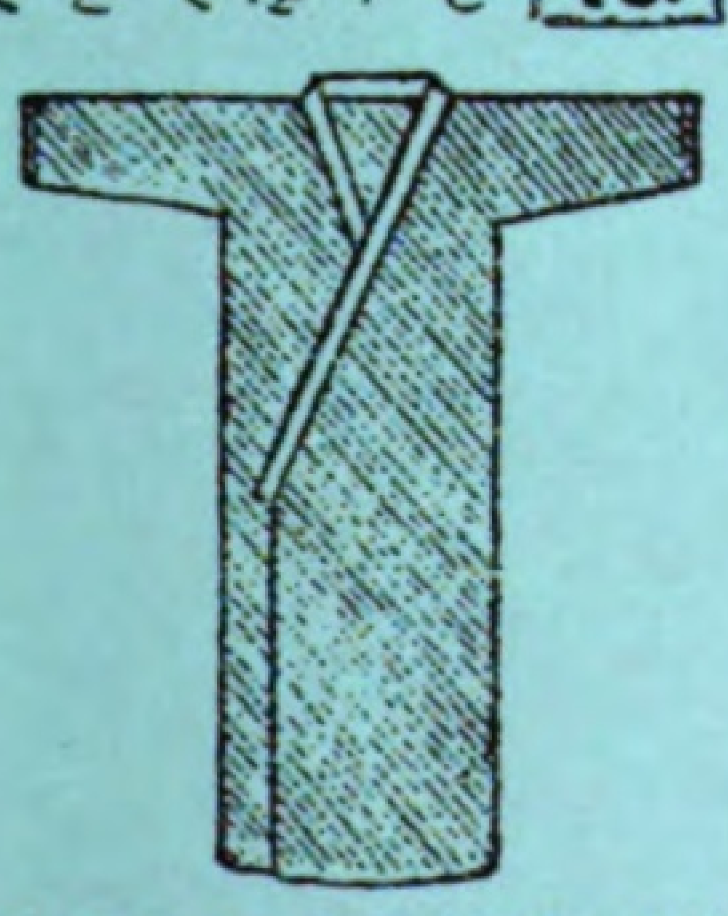
毛布にくるまつて寢る時の氣持の喜い事は忘れられません



純　白　特價六圓七拾錢
二枚續　特價四圓五拾錢
毯　色　特價六圓五拾錢
二枚續　特價參圓五拾錢
送料內地廿錢領土四十錢

### 御寢卷には

晝は都腰卷を御召しになり夜は此メリヤス製裏毛の御寢卷を着て毛布に包まつて御寢すみになればどんな酷寒にも決して



特製 特價壹圓八拾錢
上製 特價壹圓五拾錢
送料內地拾錢 領土廿五錢

**博文館代理部**
日本橋區本町壹丁目
振替口座東京五拾五番
電話本局六百四拾四番

女(への二)

# 女子文壇

十二月一日發刊　第八年第十二號　定價金拾五錢　送料一錢五厘

▲天之夢……………横瀬夜雨

◎無名婦人傳（本號には女仲買人の苦衷と隠れたる村の慈善家を紹介す）……………

▲神戸の印象……………森川葵村

▲歸省……………長曾我部菊

▲紐育のお豆腐買……………きん

▲一葉女史論
島崎藤村。水野葉舟。木内錠子。森田草平　相馬御風

◎自殺したる若き夫人（之れ新聞紙上にも現れざる最近の悲慘なる事實なり）……………白木いと子

▲姿見日記を讀む……………花世

▲無言劇犠牲……………白百合

▲木曾口の秋……………美水

▲耳袋

▲日本ないこと見立

▲化粧問答

◎出勤日記……………扇花

◎新奥様……………浪路

**豫告**

本誌は新年號より根本的記事の改善を實行す若き婦人方の讀物としては我邦無雙の好雜誌たらしめむ

發行所　東京市京橋區大鋸町十番地　女子文壇社（振替口座第壹七貳九五）　賣捌全國書店

女（その三）

## 美顔術（最新白色法）及
## 脱毛術を行ふ

神田駿河臺袋町（電本一七七二）

# 東京美容院

院長 北原十三男 美容術視察の爲

渡歐不在中の處今般歸朝従前通業務に従事

### 藥品部發賣品

完全なる脱毛材料　漂白化粧料　にきびそばかす藥　隆鼻器隆鼻劑有力なる毛生劑等美顔毛髮に關する新式器具藥品一切說明書郵劵三錢を要す

最新式
電氣應用
# 美顔術器發賣
（說明書贈呈）

定價金十五圓

千個限特價
金十二圓

女（その四）

# 柿紅葉



右上、西澤まさ子（京橋）　右下、横井富子（農學博士横井時敬氏令孃）中央、高村たつ子、西部京子（麻布）
左上、伊藤千代子（本郷）　左下、井上節子（松山）

## 錦木



右上、名倉けい子（東京女學館出身） 右下、寺垣海軍少將令孃千づゑ子（學習院出身）
左上、松山棟庵醫伯令孃みれ子。（東京女學館出身） 左下、高石登美子（東京女學館出身）

# ●死亡者十萬人

## △深憂すべき國家問題
## △可驚肺病患者の蔓延

### △北里博士の實驗報告

刀圭界の泰斗北里博士の實驗統計報告に依れば我國に於ける肺結核患者の死亡率は人口一萬に對し廿八乃至卅人に達し全國を通ずる時は一ヶ年平均十萬人に達し尚益々增加の傾向を示しつゝありとは實に深憂すべき國家問題と云はざる可からず而して本病に對する治療法に就ては醫界の懸案に擢り各國專門大家が心血を傾注して研究しつつあるも未だ完全なる療法の發見せられたるを聞かず斯界の缺陷として痛嘆せられつゝありしが今回偶然にも本病治療法及び特効藥が松尾ドクトルに依つて始めて發見せられたり余は此の報に接して直に同氏を訪ひ親く其實驗談を聞くを得たれば左に其概要を記して一般患者の參考に資せんとす。

△松尾ドクトルの談話　氏は獨逸留學より歸朝されたる新進のドクトルなるが聞く所に依れば本病は極めて緩慢なる慢性傳染病で治療が却々困難である從つて療法も容易に發見されない私も隨分苦心しました、と新劑發見の動機と研究徑路を語られたり茲に其詳細を報ぜんとするも紙面の都合上遺憾ながら略する若し患者にして其詳細を知らんと欲せば返信料三錢封入東京麹町區九段下飯田町四の十六如山堂藥院へ（電話番町二八八二番）女學世界愛讀者なる旨記入照會あれば新療法に關する患者の心得家族の注意や從來ありふれた療法の誤つて居た事や種々患者の參考に成る事を委敷書た大册子を無代にて贈與する筈である。

女（ちの一）

# ちゞれ毛直し（くせ）（復法ベント）

定價九十錢 小包料一個に付八錢

本劑は一度之れを使用すればちゞれ毛、くせ毛を直伸し永く使用すれば殆んど治す

# 毛はへ藥（エフ、ビコール）

定價（特製金三圓 並製金一圓五十錢） 小包料一個に付八錢

本劑は頭髪は勿論眉、口髭其他凡そ毛の生ずべき所に皮膚病其他故障の爲め生毛せざる者又は發生せるも極めて微弱なるに塗抹すれば生毛疑なし

# 生毛強壯劑（エフ、トニツク）

定價 卅日分二圓五十錢 小包料十六錢 十日分一圓 小包料八錢

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして毛髪を美化するにありされば身體強健血行良好となり皮膚腺の分泌を盛んにして毛根の營養を能くし從つて薄毛、縮毛、赤毛、髪等に連用せば奇効あり

發賣元 東京市本所區外手町八十七番地 深澤國華堂 振替貯金口座東京二〇八二五番

# 美髪法（けをよくするほふ）

□毛の無き處に毛を生す法……
□くせちゞれ毛を治す法……
□呑んで毛を良くする法……
□白毛赤毛を黒くする法……

郵券二錢封入御申越あれば直ちに贈呈すべし

---

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒症 りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京淺草瓦町廿八 淺草橋通 電車停留場横

# 中央醫院

諸病 ぢ 梅毒（横根 下疳） 全身梅毒等 りん病消渇

子宮病 血の道 月やく とまりたる病 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等 生殖器病 夢精 萎縮 遺精 早漏 發育不充分症等

わきが 色の黒き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸病 腐れ疾患 いんきんたむし等症

▲病症記し郵券二錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥説明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地 淺草橋通瓦町 電車停留場横

# 中央藥院

女（ちの二）

●圖書目録

御入用の方は往復ハガキにて御申越次第即時進呈仕候

東京本町 博文館

圖書陳列所 博文館内にあり

---

美術造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋 關口商店

電話下谷四〇五一番
振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送アレ

---

くれなゐ

本誌は經營者の駄作を發表する機關ではない今回弘く普及のため**無代**送呈する希望者は自作の歌句小品等を添へ申込まれたい

大阪東區生玉 くれなゐ會

---

1. Faubourg Saint-honore V. RIGOUD

品切にならぬ内

ソバカス
消美劑
最新輸入

早く申込まれよ

Docteur (パエレイー) PIERRE

**皆樣方の心掛け一つ**

皆樣方が今迄でおまよいに成て居る「ソバカス」は如何にしたら美麗に消ますか美顔水や美顔クリームはたゞあれをふせぐ爲です粗惡なる藥を使用しますとかへつて黒くいやになります注意せねばならない本劑は佛國巴里リコウド會社より初めて輸入せられたるものにして澤山ある方で二週間少い方は一週で美麗に消まず實驗せし御方より禮狀及び名古屋市濱小路の御方より御明の一冊がきつて居ります早く心掛け一冊樂くくらすは是い世人の花とずいふべし前金の外一切販賣致さず候定價金壹圓二十五錢送料書留十二錢

輸入元 神田區小川町一番地 本澤商會

---

洋畫講義録

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を頗る詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり

繪畫講習録

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖も忽ち上達せしむ毎號美色繪畫多し

當代一流大家數十名執筆、會費月卅六錢、一ケ年卒業、規則無料進呈

東京市麻布飯倉四丁目
電話芝三九六八番

大日本繪畫講習會

---

洋畫材料品總目録

無代進呈

百餘箇の精密なる圖々挿入したる詳細目録は御一報次第郵税を要せず無料進呈す可し好畫家必携の好冊子也

女(ちの三)

女（ちの四）

# 照り葉



右上、菅原貞子（神田） 右下、山之内俊子（牛込） 中、前田直子（麻布） 左上、久國菊子（芝） 左下、小池ちよ子（秋田）

# 藝の花



右上、西尾菊枝（靜岡）右下、佐藤みち子（秋田）中、木村貞子（秋田）左上、三神ふん子（秋田）左下、小佐野せん子（牛込）

# 懸賞募集

歳末歳始の
御進物用として
高尚優美なる
好適品

## 問題

(一) 此美人は何香水を見て居ますか
この香水の名

(二) 此香水の製造所の國名と會社の名



## 解答規定

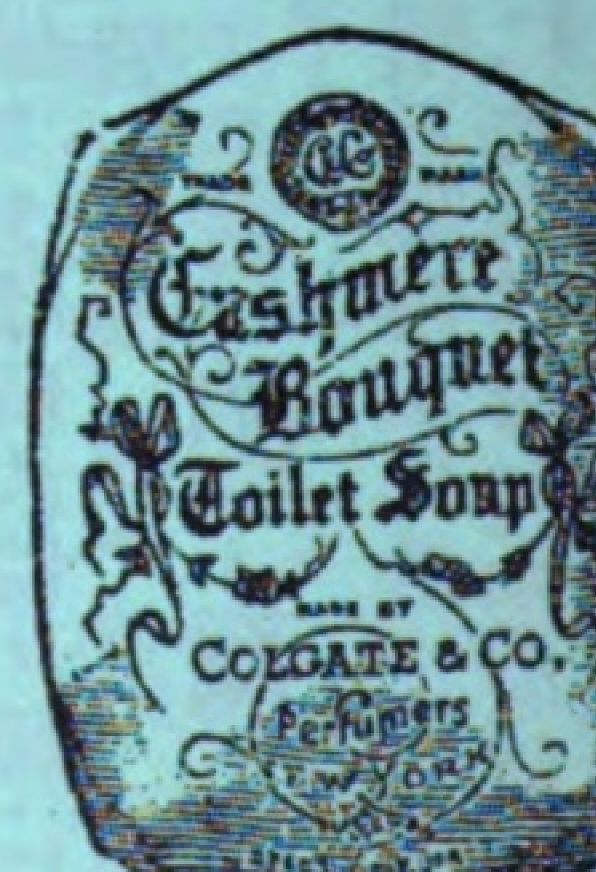
用紙は ハガキに限る
期日 十二月廿五日限り
名宛 東京本町三丁目 博文館廣告部宛
●當選者多數ノ節ハ抽籤シマス

發表は二月の本紙上で致します

## 賞品

一等賞（一名） 三越切手 金参圓
二等賞（三名） カシミヤ香水、中瓶金壹圓廿錢
三等賞（十名） カシミヤ石鹸（一個）金六十錢




大層品の好いかほりね●●●
えゝこれは
米國コルゲット會社製造の
カシミヤ香水
著名の和洋小間物店、呉服店、食料品、本店に販賣します、本品に大中、小瓶等の四種あり

女（りの一）











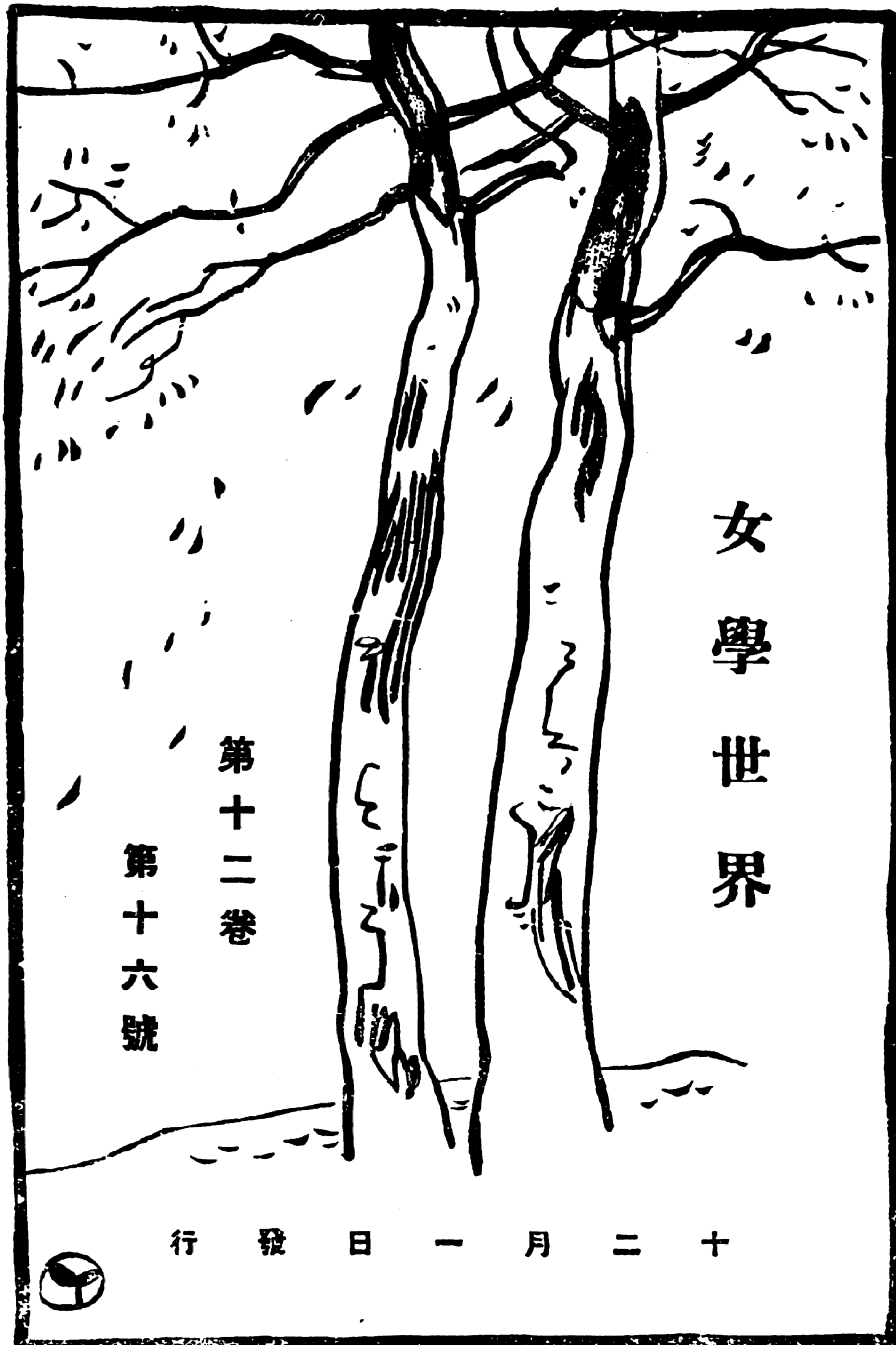




女(りの二)

女（りの三）

女(りの四)


女學世界
第十二卷
第十六號
十二月一日發行



# 風俗鏡

## ―男の様々―

磯千鳥

○

女の見たる男は

少年の程はいと愛らし、されど物心つき初めて、同じ年頃の男女の區別覺ゆる頃よりは、あらずもがなと思ふ。今迄の鈴を振る如き聲の變るも此頃也、姉の友達等に事もなげに話しかけられて顔赧らむるも此頃也此頃よりははしたなき事も口にせず異性に對する禮を知る。脆きものよ、男は汝が名なり。

女には聲變りと云ふものなし。又男にして、醜きは喉佛と云ふもの也、鵜呑にせし玉子が喉に塞りし樣にいつも〳〵膨れておはす。唾など飲み込めばびくりと動き給ふもおかしき佛也。

不揃の齒、反身になりたる齒、亂杙齒これ等も男に多し。亂杙には河ならば鯉も棲むらむ、されど齒の亂杙はこひには縁なきものと諦むべし、煙草呑の齒の裏も汚きもの也。

十八九の頃になりぬれば男には、透繪の樣に乳髭と云ふ物生へ來、可惜少年の時代と別るゝなれば悲しかるべしと思ふに實は然らず、「此髭行末は物になるべきや」など鼻の下少し途切れたるを頻りに氣にするもをかし。

無精者の顋鬚、毬栗の如く延びたるは女の耳の後に垢ためたるよりも穢し。女などの『剃りては如何』と言へば、己はさにも心にも懸けぬらしく、顋を張りて

かさこそと撫で廻し、或は幼き者を抱く時は、顎鬚にて頰擦す。

由來鬚は男の年を老けさす。役目柄なればと云ひて鬚を蓄ふ男、脣の突出でたるを隠す為めの鬚。一は警戒鬚にして、一に保護鬚なり。かいせると云ふは錨鬚と呼ぶべく、尖短く剪みたるは輕少の感を抱かしむ。あるかなきかの幻鬚。厚顔なる鯰鬚。

世を儚み、我身を思ひくたしたる男は、鬚すら下むきて生ゆ、かかる男に我娘はやるまじく思ふ。去年の今夜と詩を誦して筑紫の果に身亡し菅公は此下向の鬚なりけらし。實に鬚のみは重寶なる物なれ、いかに惡しき容貌な



ふけし夜の行合の霜に似てしかとなと身に寒くあたらまりけん（伊勢）

るとも男なる限は生えずといふ事なし、今様の書生は卒業せぬ前より美鬚を貯へたり、鬚ある口にて嚙みへらさるは親の脛こそ慘ましき限なれ。

○

男が眉の形、目のたゞずまひは、千差萬別一朝にして盡すべくもあらず。薄く、淡く、蟲の嘗めたる如きげぢげぢ眉、濃く太く、眼蓋の邊迄、生え蔓こり口髭を倒につけたる如き眉。

目隠して、福笑ひの眉毛おきたるに似たる形。さては造化の神が氣まぐれに、ほくちを摘みてふと吹きつけたるにやと思はるゝ眉。一は造化の福笑ひ。一は自然の醉興眉とこそ呼ぶべけれ。

或は八の字に、或は一文字に、汽車が信號の樣に單純なる眉根。今にも眼の上より滑り落るべく見ゆる危げなる眉。何れ人生を滑りて渡る男なるべし。

凄じき眉には——

生人形の眉。押繪の眉へのへのもへのの眉。而してぴりけんの眉。大臣の眉毛も異相なるが多し。

老人の眉の雪の樣に白うなりたるは芽出たし、かかる眉毛には二本三本いみじく長き毛があるよ。されど眉毛の半白、藁灰眉は佛性を去る事甚だ遠く間々惡相に見ゆるも詮なからむ。

更に降りては、男の眼



波は千鳥千鳥は波を蹴るかな（小波）

出眼、奥眼、菱の眼、骰子の眼は更なり、近代的なる眼には、猜異の眼、不可解の眼。

眼鏡の下なる光澤なき眼は、死眼。親の死目には自から別あり、かゝる眼は牡蠣の實のごとく光無く、亦落凹み、硝子板の下なる吸込穴のごとくも見ゆ。若し世に金縁の眼鏡と云ふ物在らずば、如何に醜き樣なりつらむ。眼鏡は男の福音とや云はまし。

總じて男も女も、眼蓋のすこし櫻色したるはよし、雀斑と云ふものいやちこに、或は黑き輪のつきたる眼元は淺ましき限也

亦男の横見る振を秋波とは凄まじ。醜波とよびてはいかに。その他——

きよと〱絶えず動けども、實は何物をも視ざる男の眼、女の顔としあらば正面より正視して、此方が顔

赧らめ眼を俯するも、猶も打見守る蛇のごとき男の眼。『甚き目』の眼は必ずかゝる眼ならむ。いとをかし。憂目の眼はいつも涙に浮べる故にや。

○

眉目にも増して多様なるは男が頭の姿なり。才槌頭、石頭、俵頭などの異名は女にはなくて男の物なるも快し。かの陸軍に縁ある先尖りたる頭は砲弾頭とや言ふべき。武蔵野の、草より出でし満月の、只丸々と赤きかむろ頭。（かむろ、實は禿頭の謂也。）また僧侶の子弟は、著しく頭の形悪しきは稀有のことなり、多くは小さきなりにつる〳〵と丸きもをかし。親薯の子には子薯の實ると同じ故にやあらむ。



鶯鶯や女の國に生れ來て（初紫）

若き男の艶々と分けたる髪の毛は、赤面したる折など油汗をかくもをかしく、亦髪を分くる事が洒落者の別名となれるも由々し。かゝる油をつけたる頭をこそ、まことのしやれかうべと云ふにや。

凡て男は、醜き頭の形を恥ぢらひて帽子と云ふものを被る。帽子の裏は女の繻絆の襟裏よりも垢ぢみて、異様の臭すなり。

油つけぬ男の髪は、犬の肌を嗅ぐ心地するも怪しけれ。

○

諸々の男の癖には羽織の襟を何時も内側に折れこませたる男、妻楊枝を衣物の襟にさす男、足袋、下駄の類ばかり常に奢りて、足袋は極上の品、水をくぐりしは好ばず。下駄は柾目、俎板の如く

大なるに金錢を厭はず、されど羽織の紐、帽子などの類はいとも古びて意に介せざる男――かゝる男は何がな身態の上にて他人に優れむと思へど、凡ての物、良き品を購ふ資なければ一部分を限りて、人には負けぬ氣前を見するなり、足袋道樂、下駄道樂。なべて男が道樂は、その虚榮心より出づること多し。

その他――

小指の爪を長く延す物好の癖……爪の長きは長壽の相と云ふ、さもありぬべし、爪を長う延す如き、心鈍き男は憂世に苦を感せざれば從つて長生をもするなるべし。

長爪の男に對しては深爪の男あり。物等考ふる折は血の滲むまで、爪を嚙む。深爪は小心、潔癖、猜忌の證なり、我と我、小さき心にて、我身を食ひ耗すなり

淸げならぬ男の癖は數限りなくあるよ、

日當良き處に鏡おき、毬栗の頭かさかさと雲脂搔き落し、鏡の面に微塵に積りたるが硝子の表を底とに二重に見ゆるを娯しげに打見守る癖。

總じて男に鏡持たすれば、よき事はしたらず、斯る男は又、鼻の穴吹膨らせ、勢い込めて鼻毛引拔き拔きたる毛をば紙の緣に、面白う植ゑたてなどす。女はかかる事やはする。

○

刺身に山葵、麥飯にとろゝ汁、諸々の食物に附物、出合物あるごとく、世事萬般にも此事あるもをかしけれ、月に叢雲、名士に胃癌。亦藥の罐詰の類が僞物御要心なるごとく、暴風洪水には古今未曾有の文字がつく。

進物に熨斗、卒業に髭。

金持には親類附纒ふべし。稅金は不平を伴ふ。成金に蓄音器……

成金は由來趣味を尙ぶ『金』と云ふ物持てば如何なる趣味娛樂をも購ふべしと思へるにや。假に骨董を蒐め、或は景勝の地に邸宅を構ふるが常也。然も其骨董を蒐むるや珍らしきものとし云へば僞物にてもつかむ。亦邸宅は忍び返、嚴に結び、犬など夥多飼ひ、そが終

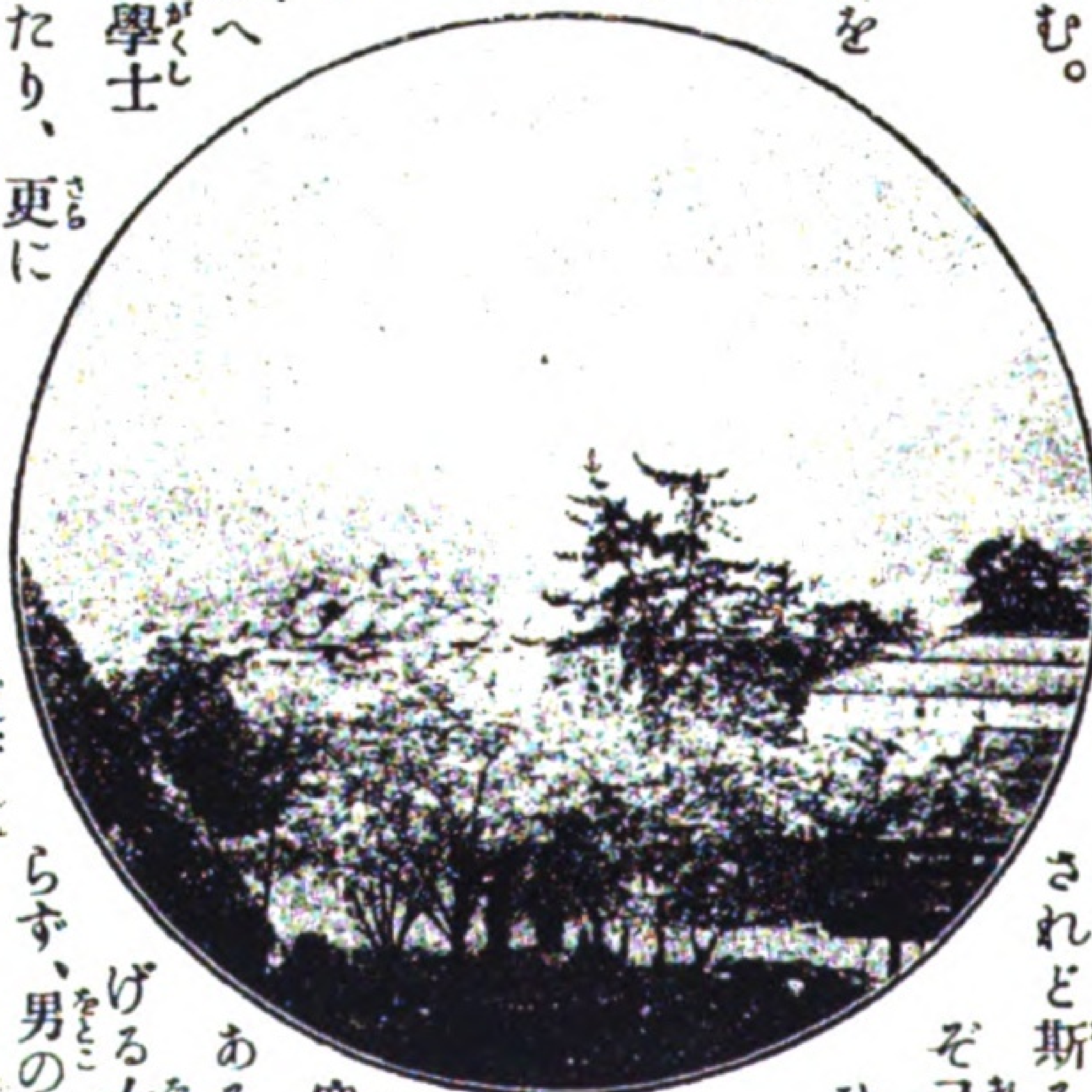
夜吠ゆるをも、成金はよく眠れば知らず、息子の嫁は華族より貰はなむ、茶の湯生花は物靜なれば習ふべし。音樂には浪花節――かゝる男は妾をも趣味の一つに心得たるにやあらむ。

○

その他、文科大學生、家庭教師を望む、と廣告などにあるをも、出合物の一つに數ふべし。亦出貧し得る妻を求む、とあるはかならず醫者なるもをかし。

古來醫者は利慾に富む、養子に行くとも花々しく開業したしと思へるも醫者也。大學を出でたるは醫學士醫學士と名刺にも標札にも書つけたり、更に嗤ふべきは何々高等醫學校、醫學士と記したるにて、醫學校を小さく醫學士を大きくしたる。

これ等は男の虚榮心と言ふべきにやげに男が名利の爲に、親を利用し知己を利用するは怪むに足らじ木に攀ぢむとする者は花を捕へずして、先づ枝に縋らざるべからず。閨閥の爲には心にも添はぬ女が、美はしくも見え、戀しくも思はるゝ時世也。



されど斯る男に限りて女の事のみ惡し樣に云ぞ己を知らざるの甚だしきもの也、或ひは女は虚榮の動物など、動物扱にしあるひは女子と虚榮などと此二つは離つまじき物の樣に言なす。女教師の萬引、女學生の竊盜――――數多き女なれば萬引もあるべし竊盜もあるべし、さしたる不思議のある事かは。況して父の如き老人に嫁げる女ありとて、女同志の嗤ふはいざしらず、男の口より嘲弄を受ける道理はあらじ。

女の新ダイヤ、男の鍍金。女の人造眞珠、男の台成金。女の望といふ玉の輿と、男の欲する人爵とは其儚さは、そも何れ。

爾今女に向ひて虚榮呼はりは、先己を匡して後にするこそよけれ。



# 身だしなみとコート

棚橋絢子

△お洒落ではない

私はお洒落と云ふわけではありませんけれど小ざつぱりして居るのがすきです。木綿着物でもきちんと縫つてある、皺くちやでない、そして垢のつかないのを着て居たいのです、又いくら美しい人でも顔もろくろく洗はないで襟首に垢をつけて居ると云ふ不精者は大嫌ひです、よく年寄なんぞ何でも構はないと云ふ人がありますがそれでなくても年をとると不精になり勝ちなもので随分氣をつけるやうにして居てもいゝ加減になるのですから若いうちからさつぱりして居る習慣をつけて置く事が必要です、私は若い頃から毎朝糠を使つて首から顔を洗ふと云ふ習慣がついて居りますので今日この年になつても一朝だつて欠かした事はありません、冬でもちやんと肌をぬいで洗ひますが癖になつて居るのですから臆劫でも何でもありません、さうしなければ氣がすまないのです、ですから若い者が顔の先へ白粉ばかりこて〳〵塗つて鼠色の首をしてゐるのなどを見ますといやな感じがいたします、身だしなみと云ふ事はたゞ白粉ばかりつけることではありません、白粉はぬらなくとも宜しいからその手間と襟首の方を洗つたらいゝだらうと思ひます、それも方々垢を落し

てその上に白粉をつけると云ふのなら大層身だしなみがよいので決して惡くはありません。しかし學校へ通ふ女生徒などは夫迄には及びません

△不格好な着物

それから着物ですが垢の付かないのは勿論のことで出來るなら縫ひ方にも氣を付けたいものです。羽織の襟肩に白針が出て居たり、袖の丸みは火口を包んだやうな格好だつたり、袖口がとび出してゐたつて云ふのを着て居る人も隨分ありますが如何にも意久地なく見えて品性にも關ります、又そんな人に限つて自分の身體に似合はないやうな不格好な着物を着るもので大きなりをして袖付を少しばかり付けて後から肘が出て居たり、肥つた身體に身幅がせまくつて前がよく合はないやうなのを着て平氣で居ますが、私は上着と下着がよく合なかつたり、襟の付け方が氣に入らなかつたり、袖口がまづかつたりすると決して其儘では着ません、自分で縫へばそんな事はありませんが人に縫は

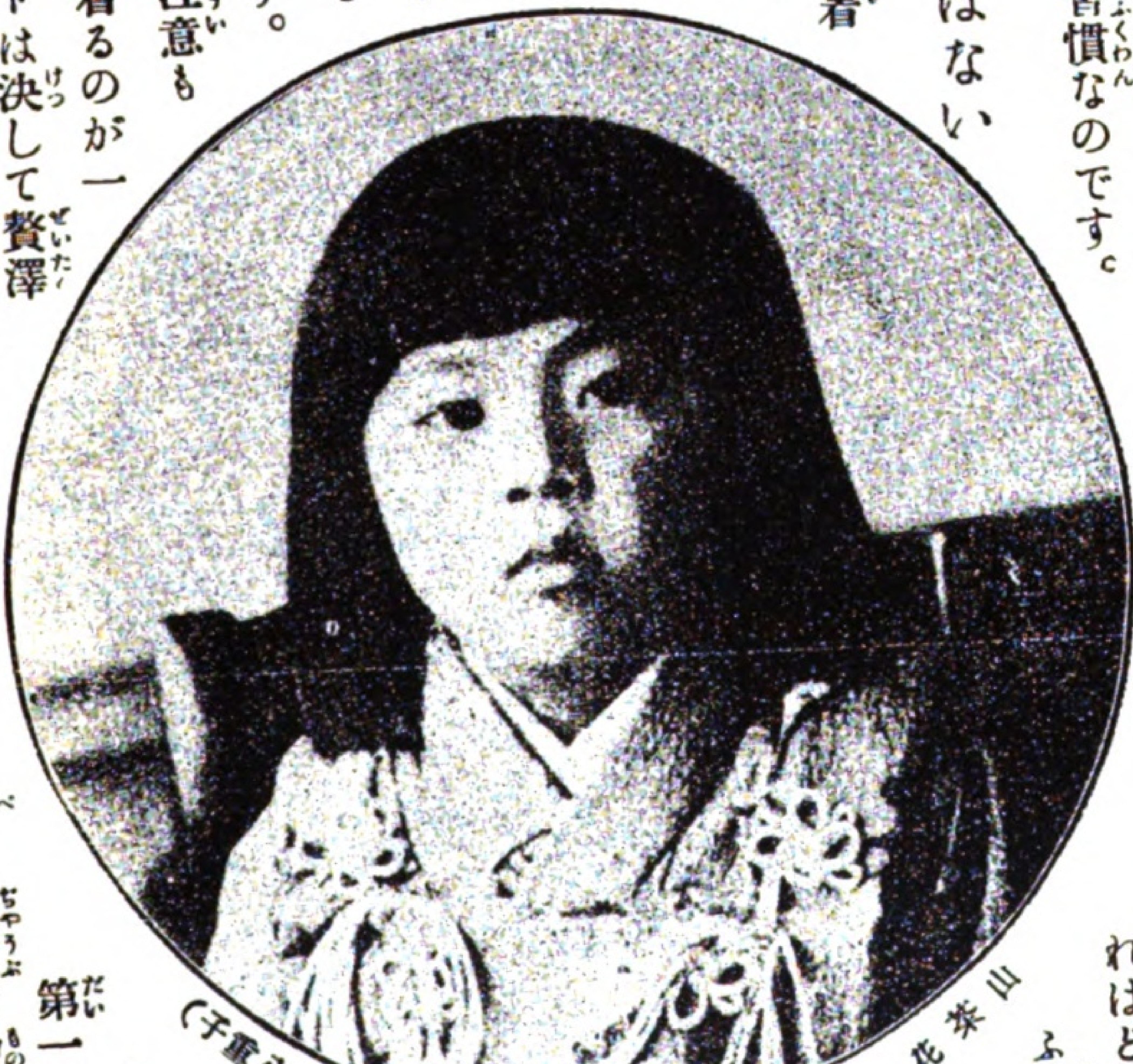


もきもあくす戀すてふ名や流れなん水のしたまでかけかよふ世
（西園寺入道）

せると時としてそんな事がありますから何時でも自分ですつかり縫ひ直して仕舞ひます、我儘なやうですがこれも若い時からの習慣なのです。

## △コートは贅澤ではない

これからは又夏と違つて着物が多くなりますし、綿入物はさうたやすく洗濯も出來ませんから成る可く汚さないやうに着る心掛が大切です、注意の仕方によつては一冬さう汚さずとも切らずとも着られるのです。それにはいろ／＼細かい注意もありますが先づコートを着るのが一番よいと思ひます。コートは決して贅澤な品ではありませんあつてもなくても宜しいものではありません、電車などに乗りますとよく席が汚れて居たり、汚れた着物を着た勞働者などと隣り合つたりする事がありますけれどコートを着て居ればどんな場合にも着物の汚れると云ふ苦勞はありません、ですから私はもう大抵外へ出る時にはコートを着ない事はありません。



山茶花や白鳩群るゝ庭日和　（八重子）

それにこれから一番困る事は裾廻しの切れる事です木綿は別としまして縮緬や羽二重は少し歩くと直ぐに破けます、破ければ裾直しをしなければ着られません、しかし裾直しをすると云ふ事は中々面倒ですし第一には不經濟でもありますからなる可く丈夫な物をと考へます、一番簡單なのは歩かないやうにするとか一寸出るにも俥にのるとかすれ

ば宜しいがそんな事は誰にでも出來ると云ふわけに行きません、そこでまづめりんすが暖かいと云ふ點からも丈夫なと云ふ點からもよいのですがその代りどうもくッついて裾さばきが惡う御座います、若かいうちは何でもありませんが私どものやうに年をとりますと足の運びが惡くなりますから裾さばきが惡いと一寸電車の乘り換へ場所などで走りたいと思つても裾がボタ〳〵して走れません、その爲に乘り後れたり何かしますから外をあるくにはめりんすもあまり感心いたしません、それも平生はまだ宜しいがよい着物にはめりんすと云ふわけにも行きませんから是非共縮緬とか羽二重とかを付けます　さうしますと裾の切れるのがほんとに惜しいやうな氣がします。



裾の彈でぬくきく庭面や石蕗の花
（秀蘭）

そこでこの頃私は外を歩くにはいつでも裾をはしよる事にしました、着物の裾をはしよつてもまだ長襦袢もありますから格別寒いこともありませんし、それに丁度よいことは冬はコートを着ますので裾をまくつても見苦しくはありません。かうしますと裾もいたむ憂がありませんし、足の運びも輕くなりますから近頃はもうかうする事にきめて居ります。近年は短かいコートが流行しますが短かいのでは裾も端折れませんから私は經濟上から長いコートばかりを着て居ります。



# 長所に失敗する婦人

甫守謹吾

△性質だけ女になりたい

先頃、私が或る小學校を參觀した時に、一教室で男教員が外國地理の教授をして居ました。其の時に、この地方へは我が國から何々を盛に輸出する、こゝからは何が輸入されると云つて教へて居たが、その土地の地勢や地味氣候の關係も說かず、何が故にその品物をその土地で要求するかと云ふ需用供給の關係も說明せずに、無暗に輸入する〳〵と云ふ事のみを教へてゐました。又或る教室へ入ると、算術の時間でして、黒板にかいた數字を、右の方から寫して居る子供もあるし、又一人の女生徒は髪の中へ指を入れてゴシ〳〵頭を掻いて居たが、教師は机間巡視をして居ながら、一向そんな事には頓着しないで居りました。それで私は後で一同の集つた席に於て、男教員も今少し綿密な注意を以て兒童を扱はれたいと云ふ注意をしたら、その中の一人が、どうも男子は細かい注意が屆かないで困ります、そこへ行くと女は性來綿密なものであるから、いつも羨しく思ふ、私は今後性質だけ女になりたいと申しました。その時私は、それは甚だ了簡違ひではあるまいか、男子には男子の長所があり、女子には女子の長所がある、それで世の中は保つて行く事の出來るも

ので、男は男らしく剛健な處に、女は女らしい柔しい綿密なと云ふ、そこに各尊い價値があるのです。然るに男子が女子の如き性質であつたならば、男子たる價値は何處にあるか、女子が女子の本領を失つたならば、不完全なる女子たる事を免れない、何れにしてもさうなつたらそれは不具者で、敎育者には極めて不適當である、各その長所と缺點とを知つて、長所は愈ゝ伸ばし、缺點をば補つて行くのが人間の修養であり、又第二の國民をかく指導して行く事が敎育者としての職責である　徒らに他の長所を羨んで、自己の尊い所を忘れてはならないと話をしました。

小春日やこぞのうつし繪眺め入る　（帆子）



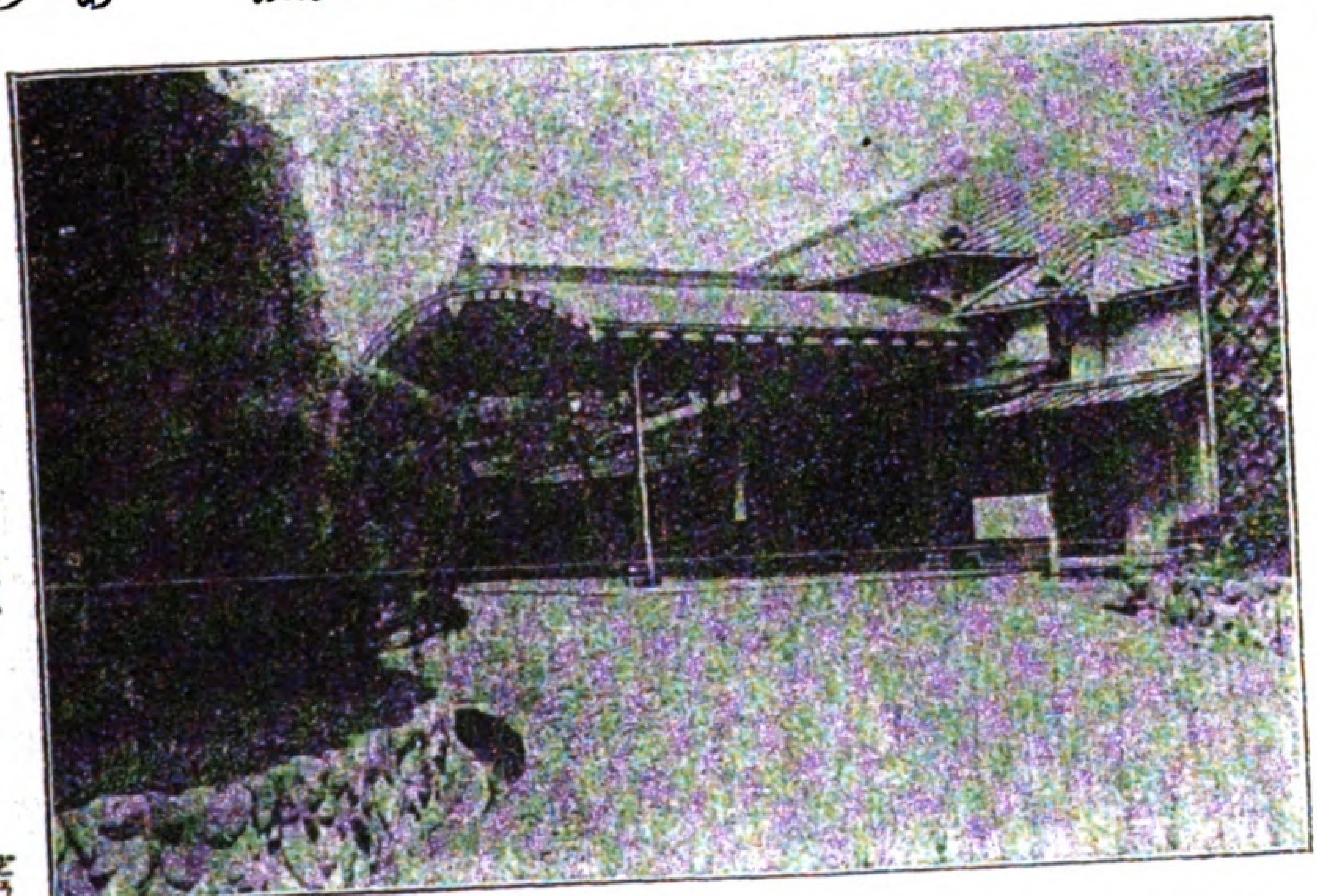
### △女生徒のストライキ

又或る學校では、一人の男敎師が上級の女生徒を受持つた所が、その級一同が申し合せて同盟休校をして、盛んにその敎師の排斥をやりましたそれから如何なる原因かと探つて見ると、その敎師は女生徒を扱ふのであるからと思ふて、一から十迄細密な注意を拂つて、それ櫛のさし方が下すぎたの、半襟が出過ぎた引込み過ぎた、やれリボンが曲つたと、女でもする樣な世話を燒いたのださうです。生徒の方では、男と云ふものは大ざつはなものと考へて居るのにあまり、コセ〳〵世話を燒き過ぎるので、その煩ら

はしさに堪へられなくなつて、遂にストライキを企てたのでした。これらは全く今申した様な、男子の本領を失ふて女子の眞似をした失敗であります。

## △感情に失敗する

しかし多くの場合、人間は缺點に失敗するよりは、長所に敗るゝものであります。長所は卽ち缺點と云ふのはこの事で、誰でも自覺して居る缺點短所にはよく注意するから、比較的やり損ひが少ないが、反對に自身が長所であると信じて居ると、つい油斷が出來て、その爲に思はぬ失敗を招く事があります。婦人の失敗が多く感情の上から來るのを見ても明らかで婦人の長所は感情であるのに、稍もすればその感情で過ちを醸すのであります。女教師などが、往々感情に走せて訓練に惡結果を來すのは、何か自身に面白くない事があると兒童にその不平を移し、甚だしいのになると、兒童が思ふ様にならないと云つて兒童の前で泣き出すなどと云ふやうな事があるからです。教師が泣くと云ふ事は兒童にとつては最も烈しい刺戟で、決して常態とは云はれません。感情を無理に抑へて、嬉しくつても嬉しさうな顔もしない、悲しくつても平氣で居ると云ふのも、元より人情に外れて居るが、右のやうなのも教育上よい事とは申されません。これは母親が子供を扱ふにしても同様で、一時の感情に任せて、賞めたり、叱つたりしては、立派な教育は出來ません。教育者の



砂清き玄關口や春迎え　（有林）

みならず、すべての婦人が等しくこの爲に失敗するのですから、この長所を益〻發揮させると同時に理性を以て指導すると云ふ事を忘れずに、極端に走らない樣に心掛けるのが最も大切であります、さうなつてこそ、初めて感情は婦人の長所であると誇る事が出來るのでさもなければ却つて厄介物になるのであります。



# 日本の女學生に對する希望

前英國大使令孃　ミス、マグドナルド

私は日本へ參りましてから、女學生について興味を持ち、種々研究して大に感ずるところがありましたので左に少しお咄申上たいと思ひます。

今日は、何れの國も進歩の時代で、日本の婦人も矢張この勢ひに向ひつゝありますが、婦人の思想が進めば、國民全體の思想も進むと或人が言はれた通り、婦人の進歩は實に國家にとつて大切なことでございます。昔から働らきの範圍を家庭に限られて居た日本婦人が、今日俄かに廣い舞臺へ立つて、樣々の事業に働らかれるのは誠に喜こばしいことであります。併し今まで少しも知らなかつた境遇に入つた若い婦人の身邊には、危い事情が附まとふものでありますから、親御や教師はこの危い境遇に立つ若い女子を保護されるのは、甚だ大切であること申すまでもなく　これと同時

に私共も皆様と力を併せて之の策を講じたいと考へるのであります。

▲昔の狀態には引きもどせぬ

私は只今まで東京婦人の狀態のみを調べたので、田舎の女子のことは未だよく知りませんが、日本國を兩分しにら、其一は東京で、他の皆を合せたのと匹敵する程の勢力があると聴きますから、東京に在る女子を研究して解決の道をつけることは、他の婦人に大なる影響を與ふること丶信じます、總て或問題を解決するには極實際的に考を及ぼさなければなりません。例之ば、或人は、今の婦人の狀態より昔の方が安全だと云はれますが、それなら今の婦人を昔の狀態に引戻したらどうかと申すと、昔の婦人では今の社會に適當せぬことは、實際に徵して明らかですから、かう云ふ事を考へて見たところで出來ない相談でありませう。どうしても實地に行ひ得る適當の方法を設けて保護することを講じなければなりますまい。これについて私は二つの考が浮びます。一は今の婦人問題の中心を研究すること。一は實地解決の方法を工夫することであります。而して將來の母たるべき今の女學生の狀態について、國家の前途を推測し得ることを信じますから、女學生を婦人問題の中心として研究したいと考へるのであります。

▲誘惑に遇ふは當然

昔の日本婦人は、只家庭の内で働らき、國家や世界の事に興味を持ものは少なかつたが、その時代の婦人は、出來るだけの力を用ゐて家庭に貢獻し、至つて安全なものでありましたが、今の婦人は敎育や世渡りのために家を離れて苦を嘗むる時代となりました。只今東京七十の女學校に於ける在學生は一萬五千人程と聞きましたが、その内三千の女學生は、親や親戚や朋友の家をはなれ、學校や靑年會の寄宿舎もはなれて、下宿屋に起臥すると云ふことを探知しました。かやうな家は、精神的のことを忘れて居るのが普通の習ひであ

りますゆゑ、無垢の少女が誘惑に遇ふのも當然の勢だと思ひます。

## ▲高く深い教育が必要

この悲しむべきことについて、昔のやうに婦人の教育を低くして安全を計らうとするのは、時勢を考へぬ誤りで、却つて今より一層高く深い所謂精神的の教育を施こすのが急務だと思ひます。過渡の時代は特に婦人問題について困難を感ずるもので、嘗て某女史は、明治の始から女子教育が盛んになつたが、今日は丁度血の河を中程まで渡りかけたやうなもので。對岸へ着くのに中々苦しい。さりとて引返すのも矢張苦しいのであるから、苦を忍んで目的の對岸まで渡らなければならぬ。こゝを渡り通すには高く深い精神的の教育の力に依らなければならぬと云はれましたが、實に女史の言の通りであります。



足早に竹の林やみそさゞゐ　(修然)

## ▲親の心を思ひやつて

若い女子は、第一に身を重んじ人と正しく交はり、確乎とした心をもつべきですが、只確乎としただけでは品性が高いとは云はれず、その上に我儘をおさへ、人に同情心を注がなければなりません、かやうな精神を養成するには、周

園の感化が大切ですから、私共は皆様と力を合せて、不完全な家に下宿する若い女子のために慮り、吾家に招くとか教會に導くとか、其他適當の方法で修養の道を與へたいと思ひます。若し私共が田舎に住んで吾娘を東京に遊學させた場合には、娘を保護してくれる良い同情者を切に希望するに違ひありません、これを思ひやつて在京の女學生のために出來るだけ盡力したいものと存じます。

## ▲看護婦問題も中々難かしい

東京に在る看護婦は、二千人と聞きましたが、彼等の勤務する病院の中には隨分下等のものがあるやうですから、甚だ危険を感じます。西洋でも餘程以前より若い看護婦を用ゐましたが、社會も自身も普通よりずつと高尚の職業と認めて居ります。日本では看護婦を並の商賣位に考へ、品性の低い女でもドシ／＼病院に雇ひ入れ彼等自身も尊い天職を忘れて只金儲主義になつて居るのが多いやうで、私の知人なども永々の入院中、看護婦が、不公平不信切に病人を取扱ふ有樣を實見し、失望して私に話したことがありました。今の日本は、この看護婦問題を容易に見過すことは出來ますまい。身體を烈しく使ひ心を苦しめる看護婦に一番必要なのは靈的修



琴の音に水のしらべや通ひけんさんもほしかたきけさの袖かな　（如覺）

養でありますが、それが尤も缺乏して居るのは遺憾な次第です。これも諸姉が盡力して解決をつけなければなりませぬ。私共は是非看護婦を助けたいと思ひ立ち六ケ月前より女子青年會事業の一部として聖書研究會を始めました、只今は未だ二十餘の看護婦を集めたばかりではありますが、幾分の助けを爲て居るつもりであります。

## ▲工女も一問題

會社、商店の女事務員や工女に對しても見のがせぬ問題が横はつて居ります。特に工女は、他の職業者より多數で、東京ばかりに五萬五千人もあるさうですが、無教育のものが多いので品性を高める方法が中々困難であります。併し日本の社會をもつと高尚にすることに趣味を持つものは、下級の女をよく研究して解決の法を執らなければなりませぬ。凡て上中流の婦人方が自身の氣品を高くすることを勤めますと、下等社會の女子も自然向上が出來ること丶信じます。

## ▲朋友や家族のためにも

私共の責任はこれのみに止らず、家族及び日々交はる友や、時々遇ふ疎遠な人にも如何に吾心の感化を與ふべきかを考へなければなりませぬ。貧な人には申すまでもなく、生活は樂でも精神に苦痛ある人にもあらゆる同情を注いで、希望を認めるやうに力を添へることが大切です。身邊の人々のために働くのは、つまり一般の社會を高くする一部の働らきであります。

## ▲絶對の標準

私は日本の有様を詳しく知りませんが、日本に參つてから出來るだけ研究して考へて大概は判りました。過渡の時代は何國も同じことですが、今の若い日本の女子は、昔の趣味を捨たがりますけれども、新らしい趣味も未だ本當に解し得ないでこれを守りかね、只自分の考や慾望に任せて居ると云ふ有様です。從つて誘惑に導かれ過失を仕出かし易く、尤も危い境遇に

立て居ますし、自身も心の標準がないために常に煩悶を免れないのであります。私はかゝる原因を認めていろ〳〵心配して見ましたが、どうしても女子の心に絶對の標準を保たさなければならぬと確信しました。宇宙を支配するもの、人間より大なる者、即ち眞神の意に從つて、獨りを愼しみ、愛の範圍を汎くして一心不亂に勵精するのが人のふむべき眞の道であることを悟らせるのが根本問題であると信じます。皆樣も同胞の女子のため、ひいて國家のために彼等を導く方法を考へ、着々歩を進められんことを切望いたします。(母の會講話)

## 蒲の鞭

袖頭巾

○我は我なり

我未だ人に阿る術を知らず。お世辭いふを覺えず。如何なる時にても自らを辯明するさへ此の上なき面倒なりと思ふ。かゝれば事につけ折りにふれ世は我を遠ざけ、我また世に遠ざかりて、數多の人の爲す樣を眺めては冷やかに打ち笑むのみ。もと〳〵人に好かれむ事褒められむ事を求めねば、貧しき知能を盡して精神を勞せざらむ煩ひも無く、空笑みして對手の氣を迎へむ要もなし。抑善といひ惡といふもこれ人の定めしものなれば、善なるが故に取るなく、惡なるが故に捨つるなく、己れはたゞ思ふがまゝを言ひ思ふがまゝを振舞はんとするのみ。

○鏡

何れの國の物語ならん。昔或姫君幼きより一つの鏡を持ち給へり、其の鏡に寫す時は如何なる面輪も花の樣玉の樣に美しう見ゆる物なりしと。されど姫君はそを知り給はざりき。或時鏡をと召し給ふに、お側の者何の心得も無く他の鏡を參らせしに、姫君は始めて寫し見給ひて大に怒り、柱にや當てし庭にや投げし、其の鏡を微塵に碎き給ひしといふ。

女としてまこと美しう生れ出でしは如何計りの誇りならん。醜きはまた此の上なき苦痛なり。其の間の隔りいふべからず。或女詩人は生涯の總ての幸福を犧牲にしても姿形の美しう有らまほしといひしとか。大凡今の世の歌には自らの美貌を褒むるが常なり。或人の「六尺いづれ白藤の花」と詠まれしを、そも如何なる髪にかと思ひてやう〳〵見れば眞は短くておどろに亂れ艶枯れたるのなりき。此の君西の國に遊び給ふ時世にも華美やかなる装ひしたる寫し給見えぬ。其の友染の袖振りて頭にはボンネットを戴き足には草履穿きて歩む様子を思ひ浮べては、誰が目にも如何計り異樣ならんと他所乍ら浦恥しき様を覺えしが、軈ての歌に「美しきイスパニヤンよ」といひつゝ彼の國の子等は追ひ集ひ來ぬといふ。其の自信の強さよ。かくてこそと轉感歎のほかはなし。



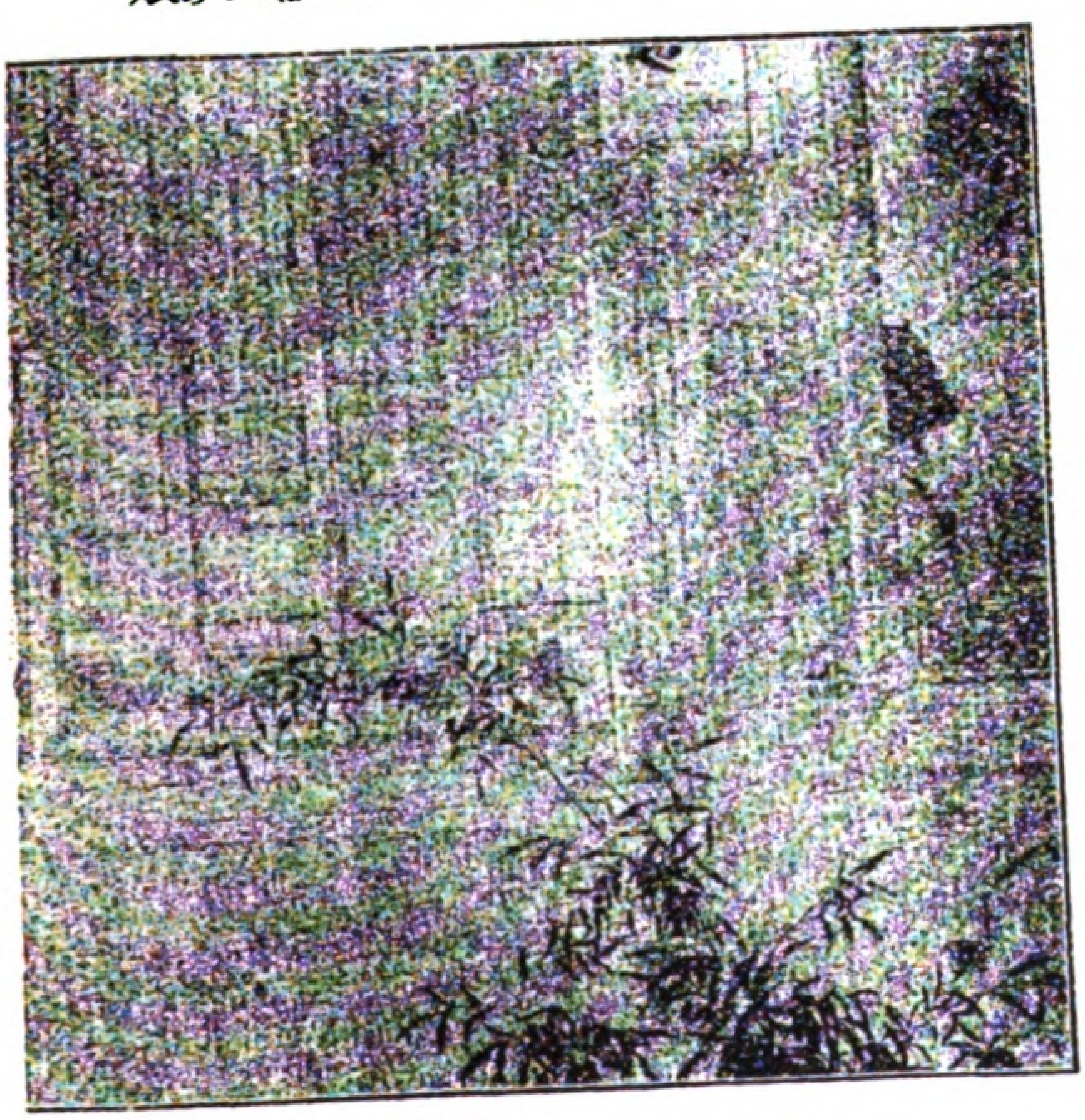
さゝなきや日和坊主に日のあたる（青奴）

されどかく自らを美化せずば詩にはならぬものか。かくするのみが眞の詩にはあるまじきを、此の大河の流れそめてより、僅に上水を汲み取りし數多の浦若き女詩人等は、目に見えぬ、心の波、耳に聞えぬ心の聲を外にし、只管美しき歌詠まんとして盛に自らの姿を褒め髪の長さを稱へぬ。中にも佐々木とかやいふ文學博士は女には御座すまじきを、美しき髪に何とかの花を挿頭し給ひし御歌などさへ出で來ぬ。淺やかなる物眞

似ならずや。

○上より見ると下より見ると

上に向ひては大方ならず面持ち繕ふ人も、下に向へば思ひの外不用意なるものなり。されば我等下の下より遙に頭を上げて上流の人を見るに、先づ目につくは其の懷しく氣高き方にはあらで賤しく忌はしき方なり。廣き社會の表面に立ち一世の模範を以つて自任する家庭や賢婦人は、其のよく知れ居る丈殊に懷しからず。彼等は未だ思慮定らぬ若き女を對手とせる讀み物に聲を擧げて言ふ。『我は如何にして夫の事業を助けしか？』曰く、『我は如何なる嫁を擇みしか？』曰く、『理想に叶ひし我が家の娘！』曰く何曰く何と、何ぞ鼻の女の多き事よ。未だ世を知らぬ少女等は如何なる感を以て聞くらむ。よのその話の題はさる向の人の營業上都合善き樣に付けしものとせるも、何時も何時も斯かる見出しを付けさせて甘じて善き氣になりて饒舌る處餘りに恥無さに驚く。かゝる事を言ふは宅の婆や、隣の娘にてすら恥ぢて爲さざる事なるを。



宗右衛門町の

野山に立てるヒーロー、ライオンなどの廣告札は大に自然の風景を害す。斯く爲さすとも我等はヒーロー、ライオンの存在は疾く知る所なるものを。我聞く開業醫は開業の始め玄關先に我家の履物を並べて置き門行く人に見せ、患者の來るとも頓には診ず、やう〳〵來合すを見計ひ徐に診て人影の絶えぬ樣にし用は無くとも俥仕立てさせて忙

げに市中を乘り廻して歸るとか。世は樣々となり、世渡りは變るとも總て夫れ〴〵の術策を盡して己れを賣らんとするは一なり。娘や息子など數多持つ上走りしたる夫人は盛に舌を以つて自家の將來を盛にし、思ふ所有る娘は、我から姿形を萬人の目の前に晒して意外に高く割善く賣り付けんとす。げに廣告の世なるかな。されば奥懷しき品位ある家庭の夫人令孃は隱れて其の高風を學ぶによしも無く、あらずもがなの口の女鼻の女は限りなく我等が前に煩す。かゝる中にて最も著しき者は○○○○、彼れに何等の學識と淑儒の有るを聞かず徒に家を外にして夫の爲外助の功を誇らんとせし者、目尻の下りし男ならざりせば疾くにも見限りはてしならんを。さもなかりしに愈ゝ増長し益一世の模範顏す。此の頃姑となり後家となりても猶害毒を世に殘さんとす。こは女の模範などには到底有らずして虚榮の標本なり。其の家庭は廣告屋なり。嫁は姑に似るといへども かゝる事は似ずもあらなん。



（島成圖）

◉人家に三つあり聲あり讀書聲孤兒聲、紡織聲あり、其最も厭ふべきは婦人評罵の聲なりこれ惡、飲酒喧呶の聲なりこれ狂、街巷笑談の聲なりこれ淫、これを聞かんよりは寧ろ夜靜なるとき犬聲を聞き、天明に鷄鳴を聞くに若かず、人をして清曠ならしむと 〔陸象山の語

◉邵康節に四不赴あり、官府などの公會一、相識らざる人々の會合二、大勢の集會三、酒の會四、又四不出あり大寒、大暑、大雨、大風の時は一切外出せざるとなり。



# 高女一年生

玉造小町

年毎に幾百十人の少女子を迎へては、又同じく送り出す、この女學校の春は千紫萬紅賑やかに、送り迎へらるゝ幾百の少女子の、何れ可愛からぬはなけれど、さて、幾十人の先生にも、幾百人の友達にも、可愛がられいとしまれて、憎まれ口一つ聞かねといふ少女子が、そも幾人あるであらう。

今年の四月、一年生に入つて來た何某の花子さん一年生として先づは大柄の方、どこが美しいと云ふ程ではないが、ふつくりと肉付きのよい頬はいつも薔薇色で、はりのよい眼元と、にこ〳〵した口付きが先づ可愛らしい。

「先生今朝お當番をしやうと思ひましたら、バケツが見えません。」

「あなたよく探しましたか。」

「ハイ」

「それじやもう一度見て上げませう……、ホラ此處にあるではありませんか――一年A組としてありませう。」

「アラ、先生、私A組がわかりませんでした、ご免下さい。」

何といふ無邪氣さであらう。

「花子さん今日のお當番は誰でしたか。」

「アノ……百合子さん、ソシテ、さつきさん。」

「さうですか。こんな掃きやうではきたないですから、もう一度きれいに仕直しなさいと云つて下さい。」

「お仕直し、それぢや私が致しませう。」

「イエ、當番の方にいつて下さつたら宜しい。」

「デモ、百合子さんはもう歸りなさいました、私しておきます。」

言葉も終らぬ中に、花子さんはいそ〳〵と箒を持つて行つてしまつた。

地理の先生が種々の標本を持つて教室へ運ばれるのを廊下で見て居た花子さん、物珍しさうにのぞいて居るとどうしたはづみか積み重ねられた標本ががらりと先生の手から落ちた。

「アラ先生、拾ひます。私持つて參りませうか、運ばして頂戴。」



山茶花に夕日たぢろく庭のくまにいとかまびしき鵯の聲　（藻風）

未だ小學校氣の失せぬ花子さんは何がな先生の御用がしたくてたまらない。上級生の先生の側を横を向いてでも通らうとするのとは大ちがひ、

「あなた地理が好きですか、」

「エヽ、それでも歷史の方がすきです。標本を見せていたゞく時は、地理もほんとに好きですけれど、」

花子さんにはちつとも遠慮がない。

「女學校へ來て何が一番面白いですか、」

「私、ヨードーエンギに乘るのが一番すきです。」

「ヨードーエンギ、アヽ遊動圓木ですか、」

「私女學校へ來るやうになつてから、朝ちつともお母

さんに起されたことはござりません、そして早く學校へ來て遊動圓木に乘りますのが一番樂しみでござります、でも小學校にはあんなものはありませんでした。」

敎室に於ける花子さんは、極よく出來る方とはいへぬ。けれども其の眞面目で熱心であることは、どの先生からも認められて居た。そしてなまじひ出來るのを鼻にかけて、他の生徒に高慢ぶつたり、先生の問ひを鼻であしらつたりするよりは數等よいと云はれて居た。

或國語の時間であつた。先生が凹凸といふ字を黑板にかゝれて其の讀みを問はれた。優等生が「オウトツ」と讀んだ、こんどは意味はと問はれたら又他の生徒が「デコボコ」のことであると答へた。

先生は「さうです、さうですが、この字を一字一字別々に讀める人がありますか。」

一年生にはちとむづかしかつたと見え、誰れ一人手が擧らない、今迄熱心に考へてゐたらしい花子さん、ひよつこり頭を上げると一緒に手を擧げた。

「花子さん、いつてごらんなさい。」

「デコ、ボコ、」

それが眞面目で、眞劍である。

今日は一年生の校外遠足であるとて、晝食の時、生徒控室はいつもより一層賑はつた。「うれしい」「うれしい」の聲があちらにもこちらにも聞える。やがて一時の鐘を合圖に一年生は校門を出た町の中こそは列を正して歩いたが、熟した稻穂が黃金の波をそよがして居る田圃路へ出た頃には、生徒の足も大分疲れて居た。

いつも活潑な花子さん今日に限つて殿してゐる、病身者の淸子さんと一緒に。

「花子さん、どうしてそんなに後になつたのですか、」

「アノ、淸子さん、今日お靴でいらして足がいたいと云ひなさいますから、さつき私の下駄と取りかへつこしましたの、」

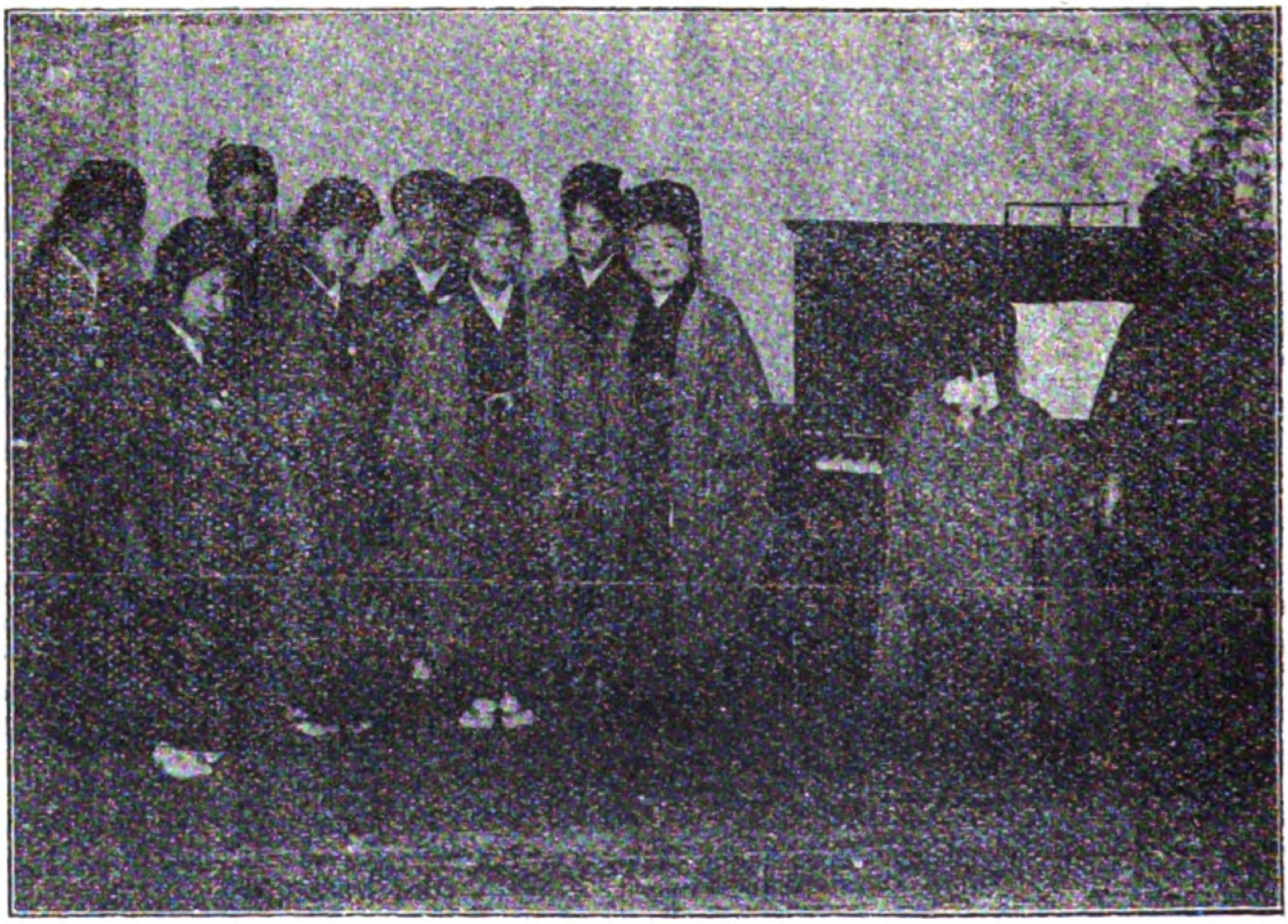
見れば花子さんの赤い緒のついた日和下駄は淸子さんの足にはかれて、花子さんは不格好な大きな靴でコトリ、コトリ、

秋日和の變り易く、氣遣ひあるまいと出かけたのがもう五六町も行けば目的地に着かれると思ふ頃から紺碧の空いつしか薄黑く、颯と吹き來り風に誘はれてポツリ〳〵と降り出した。

まことに野路の村雨で雨宿りする家もなければ、傘かる人も無論ない、

「着物がぬれる」「袴がよごれる」「お母さんに叱られる」今が今迄うれしい〳〵と云つた口から、こんな不平が湧いて出る、氣の弱い兒は早や泣き出しさう。

一番弱られたのは先生、行くに行かれず歸るに歸れ



君が代は八雲の空のはしめよりよむともつきし和歌の浦なみ　（寂蓮）

ぬ、それでも『歸る歸る』の聲が高いので先生ももう仕方なく、『そんなら返りませうか。』

殿にあつた花子さん、何時の程にか先生の傍へ來て、『先生も少しです、參りませう。私このハンカチを頭からかぶつて行きます。折角此處まで連れて來て戴いたのですもの、』

この花子さんの一言に先生は此處まで連れて來た疲れをすつかり忘れてしまつたと云つて居られた。

○

來年の三月にはもう卒業といふ今年四年生の時子さん、

級中一二の才媛で而もこの町一の富豪家の一人娘、そのやゝ釣り上つた眼と少しそげた頰とが「ギズイ」とか、凄いとか乃至ヒス的だとか惡口云ふものはあれど先づは十人並すぐれた器量、『お內のお孃樣は何から何までお揃ひで結構でございます』と時子さんのお母さんに挨拶する人があると、『何のまあ、何時迄もねんねで、もう仕方がありません、學校の方丈けはまあ〳〵お蔭でいつも優等でございますが、さてもうよい年齡をして未だ娘らしい所はとんとありません、女は今が盛りじやから、もちつと髮も綺麗に上げて、お化粧でもしたがよいと申しますけれど、お化粧等すると學校で幅がきかぬとか云ひまして、御覽の通りリボン一つ挿すではなし、內にあるものじやから銘仙の着物位着て學校へ行つたらと申しましても學校は綿服ときまつて居ります、とそれは〳〵先生の申されることに背いたことは、私が何と云つても致しませぬそれでも、操行だけは甲になれぬと口惜しがるのでございます。時折は主人とも話すことでございます。どんなお見さんが甲になられるのやらと、夏冬には先生への心付けも並一通りはいたして居りますのに。』

今から二年程前のこと、時子さんが未だ二年生の頃であつた。『明日は英語の試驗をします』と放課後に英語の先生からの宣告。

『アヲ、オヤ　マア』と何れも開いた口がふさがらぬ。級生一同の騷といつたらなかつた。併し、臨時試驗といふ事は此の學校のきまり。仕方がない、何れも〳〵急いで書物包をこしらへて歸つて行つた。

時子さんとはいつも成績の一二を爭つて居た春子さんは掃除當番をすまして控室へ來て初めて試驗のことを聞いたので、これも急いで歸らうと、書物包をこしらへると、今日二時間目に確に使つた英語の、ノートが一向見えぬ、これは不思議と種々探すがどうしてもない。居殘つた二三の友も氣の毒がつて一緒になつて探してあげたが、やつぱり見えぬ。なんぼう優等生の春子さんでも明日試驗となれば今日復習せぬわけにも行かぬ。けれども無いものは仕方がなく、其日はしほ

しほと歸りました。翌朝又早く來て探して見たが、やつぱりない。すると始業十分前の鐘が鳴つた頃、時子さんが來て、

『ア、春子さん、私どうしたのでせう、あなたのノートが私の包の中に入つて居ましたの、私今日試驗ですけれども、昨日はちつとも書物を見ませなんだので知りませんでした。今朝來がけに今日の時間割を合はさうと、包を開きましたらあなたのノートが入つて居りました、ご免なさい。』

ふいと、春子さんの机の上にノートを投げ出して行つてしまつた。

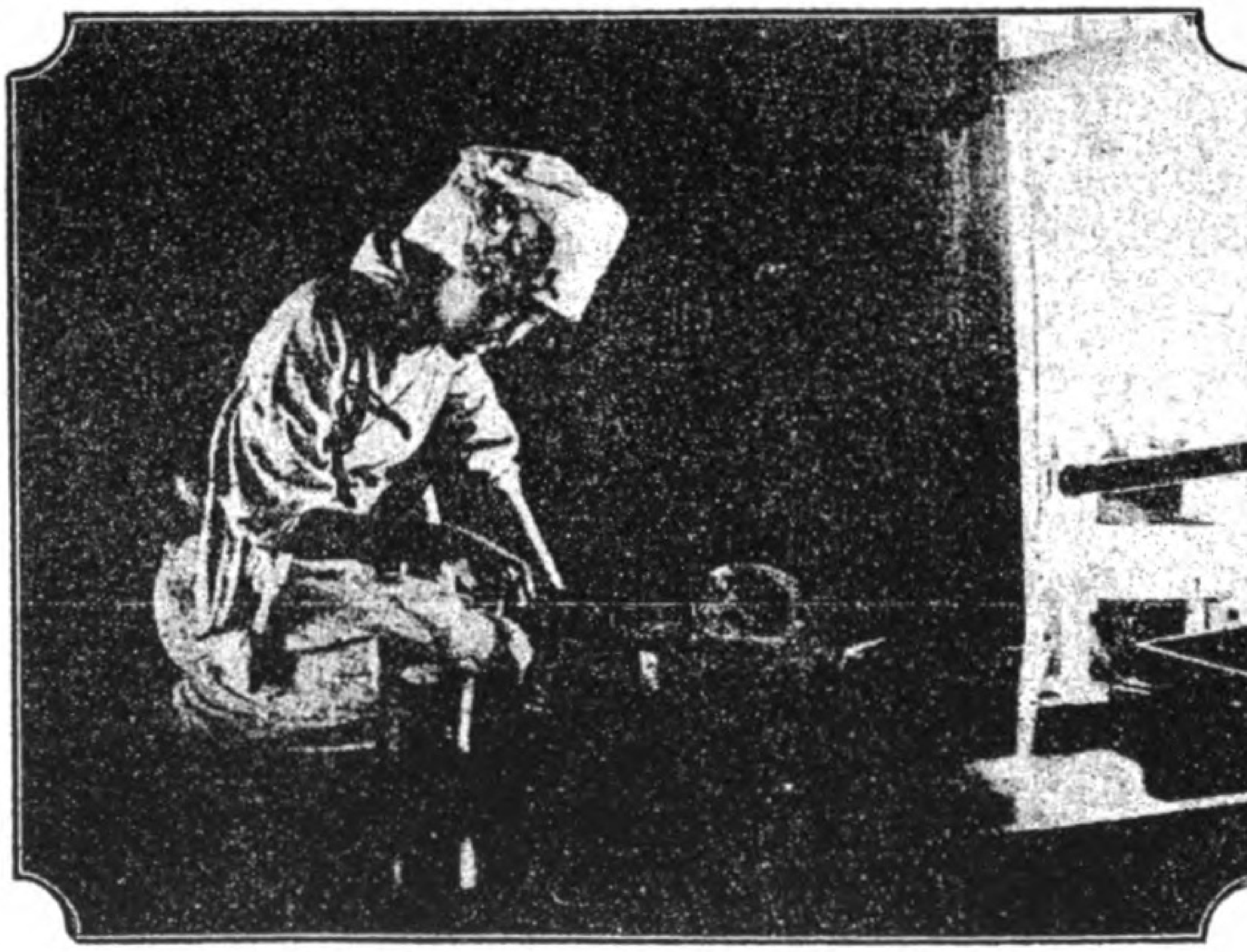
おとなしい春子さんは何にも云はなかつたけれど、十目の見る所、誰れも彼れも此れは時子さんがわざと持つて行つたのだと云つて居た。これを聞いた時子さんは春子さんに聞えよがしに、

『誰れが春子さんのノートなんか持つて行くものですか、どうせ碌な事は書いてありませんよ。』

なんぼう優等生であつたつてどうしてこれに操行甲がつけられやう。

けれども二年後の今日の時子さんはもうこんな思慮のないことはしませぬ。

教室に於ける時子さんといつたら、それは〳〵落ち付き拂つたもの、歷史の先生のお話が面白いとて、皆が笑ひ轉けるやうな時でも時子さんばかりはその取り澄した態度をび〳



冬の夜や征夫を待つて手内職　(花子)

ともさせぬ。無論につこりと笑つたこともない。先生の頑々の間を出されて皆の生徒がそれぞれに得意になつて手を擧げる時、時子さんは、いつもまどろこしいと云ふやうな顔つきをして、自分丈けは決して手も擧げねば、答へやうともせぬ けれども、先生のお話がむづかしくなつて皆の生徒が首を傾けて理解に苦しんで居る時の時子さんの得意は思ふべしである。成る程時子さんはよく出來る。が出來るも出來る筈、家では家庭教師を二人も付けてゐるといふ事、併し時子さんはそんなこと、おくびにも出したとこはない。同級生の誰れ彼れが何の彼のと尋ねると、時子さん何時も頭を横にふつて、

『イエ、私なぞ家で十分おさらへ等することとありませんよ、朝學校へ來ます前に、一寸書物を開いて見る位が關の山です』と、

　盆と暮れとには、此の時子さんのお母さんは御丁寧に各先生方のお家を廻はられる。小僧二人に山と積んだ進物を荷なはせて、

『毎度娘がお世話になりまして有り難うございます。どうぞ此の上とも宜しく、これは粗末な品でございますが。』

　いただき物は一切、斷つて居りますと云へば

『イエ、もう皆様とも一應はさう仰しやいますが、何のこれしきのもの、ほんの內處で』

『一應はさう仰しやいますが』とは、遂には收めるといふ事か、何といふ憎らしい挨拶であらう。私は之れを聞いた時、私なら其の品物を先方の面に抛げつけてやるのにと思うた。尤もそんなことで貰ふ先生があればそれは無論貰ふ人が惡いのではあるが。

　時子さんの服裝は、成る程其のお母さんの云ふ通り質素ではあるけれども、それにも似合はず時折は金時計等を帶の間に挾んで來て仲間生徒に見せびらかすことがある。

『此れ此の間、お母さんに買つていただいたのです。お母さんは、も一つよい方をと云はれたけれど、私もうこれで結構と云つたのよ。……それでも先生は身分

相應より少し控目にした方がよいと仰しゃつたでせう。……それでも白圓からしてよ、未だ之れに金鎖が付いて居るの、今日は態とこんな紐つけて來たけれど、

『あなたそんなよいのを學校なんかへ持つて來て落したら大變よ。』

『ナニ、落したら又買つていたゞいてよ。

『アラ先生が、先生に見付かつたら叱られませう。』

『先生だつて、こんなの見たこともなくてよ、先生の月給三倍も四倍もし無ければ、こんなのは買へなくてよ。』

時子さんの口もとから何時になく白い齒がちらと見えた。



山茶花や繪本ならべて兒に見する　（柳眉）

◎昔の質素　おれが十三のとき手作りの花染のかたびら一ッ有るより外は無かりしその一ッかたびらを十七の年迄着たるによりすねが出て難儀にあつたせめてすねのかくれる程のかたびら一ッほしやとおもふた此やうにむかしは不自由な事でおしがつたまた晝飯など喰ふといふ事は夢にもない事夜食といふ事もなかつた今時の若い衆は衣類のもの好にこゝろを盡し金を費し食物は色々の好の事をめさるゝ沙汰のかぎりとてまたしても彦根の事をいふてしかり給ふ故後には子供ともに彥根婆々と云はれしなり。（おあんものがたり）

五ッ六ッ茶の子に並ぶ圍爐裏かな　桃青

# 姉妹



女（ぬの一）

女(ねの二)

第十八卷第十六號……十二月一日發行

# 文藝倶樂部

| | |
|---|---|
| 菊判本文紙數三百廿頁○原色寫眞版一枚<br>寫眞版光澤紙刷八頁○普通版四枚二色刷<br>光澤紙二頁○木版彩色數十度..錦繪一枚 | 正價二十五錢<br>郵税二錢五厘 |

烏兎匆々歲月流るゝごとく大正元年も茲に暮れんとして本誌は掉尾の偉觀を全うせんと、先づ巻頭に巖谷小波氏の喜劇「小學教員」を載す。是れ家庭劇に恰好なる好脚本、近く有樂座に實演せらるべし、次に本山荻舟氏作小說「三人の舞姫」及び鈴木秋風氏作小說「大和屋」とを收む兩々新作家中の白眉たるもの、清新に氣紙上に横溢するを見む若夫れ新講談に至りては一龍齋貞山氏が是も得意の讀物伊賀の水月死諫問答を掲ぐ。其の如何に波瀾に富むかは一讀の後知らるべく活社會、演藝界其の他の各欄愈趣味と實益とを以て充溢せむ愛讀を賜へ!!!



女（ぬの四）

東京　博文館　本町

# 家庭の好伴侶研究材料

松浦政泰君編 ○婦人美譚 上下貳冊 定價各金壹圓二十錢 送料各金十二錢

鳩山春子女史著 ○婦人の修養 全 定價金壹圓二十錢 送料金十二錢

下田歌子女史著 ○三體女子消息文 全 定價特製金壹圓廿錢 並壹圓送料各十二錢

小原要逸君 外二氏共著 ○實用家庭百科全書 全 特價金貳圓五十錢 送料不要

手塚かね子女史著 ○家庭の友西洋料理法 全 定價金壹圓 送料金拾貳錢

笹木幸子女史著 ○年中行事家庭儀式料理 全 定價金壹圓 送料金八錢

渡邊徹君著 ○人格論 全 定價金壹圓二十錢 送料金拾貳錢

蘆川忠雄君著 ○新處世術 全 定價金四十五錢 送料金六錢

坪內逍遙君著 ○所謂新シイ女 全 定價金九十錢 送料金十二錢

藤本班嶺君著 ○戀愛の研究 全 定價金五十錢 送料金六錢

稻坂秀松君著 ○西洋女大學 全 定價金三十五錢 送料金四錢

發賣元 東京本町 博文館　發行所 東京神田鍛治町 精美堂

女(その五)

ドクトル 藤浪剛一君 織戸正滿君 共著

# 人類と婚姻の歴史

洋裝菊判南京綴 （正價金壹圓拾錢 郵稅十錢） 紙數三百七十餘頁

**アリストテレス**曰く、凡て國家の本づく處は男女の性愛にあり。國とは何ぞや、家々相集る處、其處に國ありと。男女相逢ふ處茲に家あり、家々相依れるもの也。家とは何ぞや、男女相結んで一體を爲し、始めて之を作るもの也、國は家を基として成り、國は男女の性愛に本づくとせば、兩性相逢ふて新らたに家を作るの式、彼の婚姻は即ち天下國家の依つて以て其源を發するの因にして事、之より重きはなかる可き也。之を以て古來婚姻を目して人生の盛儀、人倫の大典と云ふ、其理由も亦實に茲に存するる也。

而かも世界民人の數、實に幾千億、國民に族亦幾百千、各々相異れる氣候風俗を有し、相異れる沿革、人情を有つ、人倫の大典たる婚姻も氣候に依り、歷史に依り、將た民俗の文野に依りて、一律の下に之を論ずるを許さず、或は雜婚、共同婚あり、掠奪婚あり、賣買婚あり 或は一夫多妻あり、一婦多夫あり、貞操の觀念の厚薄、婚嫁の式典の差等、數へ來れば綿々盡きざる可し。

本書は實に章を分つ事二十有餘、頁數亦約三百六十頁、其論ずる處、古今に貫き東西に亙り、世界現在の凡百民族の習俗を探つて、廣く實例を集め、之を最新科學の判斷に基きて聚め、論斷せしもの也、而かも著者の一人織戸氏は種々なる風俗の研究に深き士にして、亦藤浪氏は近々獨逸より氏自身の專門學を探究の傍ら聊か探得て歸朝せられし士也。如何に研究の深くして如何に詳細に渡りて奇々怪々の實例あるか 即ち本書を一見せば明かなる處、一々茲に喋々せず。

東京日本橋本町 **博文館** 振替東京二四〇

女（ぬの六）

新潟耳鼻咽喉科院長 鍋谷傳次郎君著

# 家庭寶典 通俗臨床醫學

全壹册
洋裝菊判上製
紙數約一千百頁
正價金貳圓五拾錢
小包料十六錢
滿、鮮、樺、臺、準之

## ■本書の特色■

晩近通俗醫學書の刊行は汗牛充棟も啻ならざるが如しと雖も往々にして世人を誤らしむる者なきにあらず著者茲に見る所あり先づ**總論**に於て**健康**の**根本**を單に**物質的醫學**にのみ求むる者の**誤想**を**喝破**して**其眞理**を論じ、**各論**に於て有ゆる**各專門科**の**病患**を**細大洩**らすなく最も便利なる**系統**を以て**排列**し其特徴原因注意經過療法等に就ては平易に忠實に記載せり殊に其療法に至ては知らしむべくして而も行はしむるべからざる者多きを以て毫も祕することなく記載すれ共而も其間の區別を明瞭に注意せり吾人は本書を以て**通俗醫學書**の**完璧**として世に紹介す

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇番

女(わの七)



# 如何したら一人前の女が造れるか

向軍治

### ▲自然と結婚主義を主張す

女子は、良妻賢母となるのが第一の目的であるが、場合に依り獨立經營の任に當る者もあり、或る事情のために結婚せぬ者もあり、偶には主義の許に獨身生活をする者もあらうから、あながち獨身生活を否定するにも及ばず、又否定する必要もないと思ひます。大概の女子は、高等女學校を卒業する年頃になれば、獨身生活の困難なことや、馬鹿氣て居ることを自覺するものです。私の娘なぞも獨身主義になりさうだと思つて居たが、卒業間際になつたら、絕對にこれを否認して、結婚主義を主張するやうになりました。

### ▲或る點までは主義をゆづる覺悟

私の娘は主義的に育てられたので、主義の合はぬ人とは結婚したくないと云ふ考をもつて居た。それなら場合に依り獨立しても主義を通したいと言ひさうなものだが、決して結婚は否認せず、或る點までは讓歩して居ます。例之ば宗教の如きも、基督教主義の人に配したいが、さうゆかなければ佛教信者でも良い、宗教は異つても、無主義の人でなければいゝと云つて居ま

す。又私の家では、宗教と禁酒禁煙の運動とは別物と見做して居るもの〻、家族一同は、禁酒禁煙主義を實行して居るから、娘もこの主義の人に配したいと言て居ます併し墮落した社會に處してさう窮屈に考へては、結婚が出來兼るから、酒さへ飲まなければ、煙草の方は辛抱すると言つて居ます。年頃になつた女子の考は先づこんなもので、主義を持たしても決して心配はありません。親が何々の主義になれと指定するのは勿論宜しくないが、子供の時から、人間は主義に依つて立てと敎へこんだのは、德育の近道であります。

### ▲性格を作ることに努力すべし

昔の士は、主義生活に依つて良い性格を養ふたのは申すまでもないが、士風の良い土地では百姓町人も感化をうけて、この生活を爲たのであるから、今日でも出來ぬ筈はないと思ふ。勿論職業に依り多少の難易はありませうが、性格の壞れ易い職業の家庭では、倘更この事に努力しなければならぬ。倘性格は遺傳にも大に關係があつて、努力してもむづかしい場合があるが、傳來の腐敗だから駄目だと諦らめずに、現在の親は、その子孫を善化する遺傳を作らうと勉むべきです。さうすれば乾度或る點まで改良が出來るし、假令現在に效はなくとも、代を重ねる内に改良が出來ます。昔の士だつて生抜に良性格が具つて居たわけではなく、矢張先祖から代を重ねて築き上られたものです。成上りの華族より世襲華族の方が一般に人格の高い傾があるのもこの加減であります。

### ▲女子を育てる三要件

女子は、思想が早く定まり、結婚後方向の變化するものであるから、敎育が却々むづかしいが、學校や家庭で、技藝を授くるに止まるので、性格養成に大に努めなければならぬ。女子は良妻賢母たらしむべきであるが、從來の女大學主義ではこの文字の意味に當はまらぬから、第一に性格を研き上ることが大切である。

それに次で思想を世界的にすること、次に實際的の教育を施すことが必要であります。

## ▲天道をヌキにした宗教

性格を研き上るには、家庭が先に立つて宗教的となるのが必要です。宗教的と言つても念佛やアーメンを稱へたり、寺や教會へ參ると云ふ意味ではありません。我々の育つ頃は、寺や教會へ往くことを奬められはせぬが、宗教的の教育をうけたのである。即ち天道を崇拜せよ、この世の事は盡く天命で定まるものぞと教へられたのである。天が何だか、命が何んなものだか、そんなことは研究せぬが、此の世には一の天より出でた道理があつて、地上の物を支配して居る。この道理に從へば人間も國も立ち、背けば亡びると云ふことを四書五經に依つて深く教へこまれたのが吾々の宗教教育であつた。



今日稱ふるところの忠信孝悌も、その根源はこれと一つですが、唯惜いことには、根源の天道をヌキにして、

忠信孝悌を注入的に敎へるから、靑年時代になると、男女とも道德を形式視して、本能主義に奔る傾が生じて來る、それを、何の宗敎に依るも道は一つであるが、天地間にはさまる人と云ふことを充分に悟らせて、性格を硏き上れば、八釜しく注入的の小言を並べないでも自から進んで忠信孝悌の道を行ふやうになるのである。かう云ふことは何うしても家庭や朋友から感化を及ぼす方針を考へなければなりません。

### ▲上下の女子に必要な世界的智識

中以下の家に嫁した場合には、世界的智識の必要はないと思ふ者であらうが、決してさうでない今日は下層の人も新聞を見て、何處の國には何んな事件が起つて居て、それが吾職業に間接の影響を及ぼして居る位なことは注意して居るから、妻も土耳古と伊太利の戰爭はどんなもの位は心得て居る必要があるし、特に下層には移住者も多いから、妻が世界の有樣を略々心得て居るのは、海外の發展上必要であらう、中以上になれば、尙ほ更子供の敎育にも良人の手助にも大いに世界的の智識が要るのは申すまでもなく、都會に活動する良人ならば、大抵外國との交際があり、見るものにも外國語があるから、妻は外人との一寸した應對や、手紙位は判る位の素養が欲しいものです。

### ▲良人の地位を進める工夫

良人を助けるには、實際的に熟練した腕で家政を處理し、良人の務が忙しければ家內の交際や書簡のやりとりを司り、良人が心配なく外に發展が出來るやうに工夫すべく、良人の地位が低く收入が少いからと云つて、ブツ／＼愚擬をこぼさずに、無益の費を省いて成るべく良人に旨い物を食はせて、元氣をつけ、修養をつませるやうに仕向ければ、自づと地位も高まる次第です、又都會に住む中以上の活動家で、新聞雜誌を澤山に見る人の妻君は、自分が先づ閱讀して必要な部分へ符號をつけて置き、良人に讀ませることなぞは、忙

しい良人の非常な手助けとなるものです。今の女子はかう云ふ働が出來る程度まで學問する必要があらうと思ひます。

### ▲操縦の力が要る

良人に健全な生活をさせるには、操縦の力が要る。申すまでもなく、家庭は、奮闘して歸る良人の休息場、慰安場で、翌日の元氣をこゝに養ふのであるから、妻は、音樂、庭園、其他何に限らず高尚な趣味によつて、家庭を愉快にし、良人を樂しませることが必要で、妻にこの操縦の力があれば、良人が墮落する心配はないものです。



### △今日の賢母の務

今日の賢母たらんとするには、第一に前に云ふ如き宗教的の性格を具へて子を感化し、次に世界的に發達させる工夫を爲なければはならぬ、西洋では家庭の讀書が盛んで、幼い子には母親がお伽噺をする、少し成長すれば晩食後に父母が讀んできかせる。もつと進めば親が選んだ書物を自身に讀ませると云ふ風ですが、昔

の偉人は大抵この感化を受けて居る。その力は偉大なものです。今日の母は、子供の質問に應じて新智識を供給すべく、地圖を見せて今日戰爭しつゝある外國の位置を教ゆるなぞも、興味あり、益あることであらう。尚は小學時代は勿論、中學や高等女學校卒業位までの學科は、母の監督が必要で、技術の如きも母の自然の感化が大なるものでも、子を導くのに、かやうな考を以て實行しなければ、今日の賢母たる資格はないのであります。

### ▲女學校卒業のみでは不足

女子教育に必要な國語、外國語、數學、地理、歷史、博物、音樂、裁縫、料理の諸學科、今日各學校で手落なく授けて居ますが、遺憾ながら實際的應用に縁遠い教育法であるためか、教ふる者も眞劍になれず、習ふ者も一生懸命でないので、卒業したまゝでは、とても一人前の女になれぬ。何うしても家庭で骨を折つて活用の智識を養はなければなりません。女子の實地の働きの內、普通的で尤も大切なる裁縫に割烹なぞも、學校だけでは却々旨く養へぬが。この二科はどうとか工夫して五年間に少しづゝ教へて效が少いなら、最後の一年を專らこの二科に用ふるやうにしては如何かと思ひます。私は主義も教育法も氣にいつた女子學院へ娘を通はせた、果して他は申分なかつたが、裁縫と割烹はやはり不充分であつたので、卒業後專門の學校へいれた。ところが、こゝは樣々の人間が集まる所爲か、空氣全體が下等で、學生の思想が低いから不快だと本人が嫌がつて、遂ひに止めて了つた。こんな工合で、何れの親も不都合を感ずるに相違ありません。五年間育てられる學校で、せめてこの二科だけでも、略々物になることが出來たら、誠に幸福だと思ひます。





# 大勇者乃木夫人と副島伯

福本日南

△戰鬪の勇者と平生の勇者

明治の時代から大正の今日に至るまでの間に、自分は二人の勇者を見出した。其の一人は故副島伯で、他の一人は、近く世を去られた乃木夫人である。人の勇を談ずる者は、概ね戰鬪の勇をいふ。其の勇も貴くないことはないが、此等の場合に於ける勇氣はどちらかといへば出し易いもので、極く／＼の臆病者でない以上は大概は勇者となられるのである。眞の勇氣はさうではなくして平生に處する間にある。昔は孔子が、門下三千の中で一番勇者であつた子路を評するに何と言つたか、「敝れたる縕袍を衣て狐貉を衣たる者と立つて恥ぢざる者は其れ由か」と言つた。由を評するには、他に言葉もあつたらうに斯かる語を以つて評して居られるが、此の事たる、一寸考へれば、何でもないやうだけれども、其の實は中心に自ら深く頼む所がある者でなければ、斯かる勇氣は出ぬものである。孔子の此の評を我々が知つてゐる人に當てはめて、其の語に背かざる一人は故副島伯であつた

△剝げ古びた車上の偉人

其の一例として自分の記憶に離れないのは、明治二十六年のことで、狂漢津田三藏なる者があつて、當時の露國皇太子、今の同國皇帝ニコラス二世陛下を傷つけ

た、其の際、我國の上下の憂慮は並大抵の事ではなかつた。これが爲に、先帝陛下は、至尊の御身をもたせられながら、態々鳳輦を攝陽に枉げさせられて、御自らニコラス二世の御寢座に歩を移させられ、御訪問あらせられた。已にして其の局も無事にをさまり、陛下は東京へ還御あらせられたが、誠に恐れ多いことで、國民一般は感慨の涙をそゝいだ。それで鳳輦が新橋の驛頭に着御あらせられた時には、皇族、大臣を初めとして、御迎へに出づる者は雲霞の如く驛頭に集り、やがて鳳輦が宮城へ向はせられた時には、其の御輦の後へには、月卿雲客馬車をつらねて御供申し上げ、其の美々しさ言はん方もなかつた。其の中に交つて副島伯が出て來られるのを見れば、剝げ古びた馬車で、おまけに車臺に上つてゐる馭者の腰に卷いてゐる毛布を見れば赤毛布で、而かも其の毛が切れて、往來の辻待馬車にも多く見ないやうな粗末な物である。

### △紗の服のやうな羅紗服

それから其の馬車上の主人公副島伯の服裝如何と見れば、先生の禮服も餘程古いもので、出來た當時には羅紗であつたらうが、羅紗の羅は何時かすれ切れて、たゞ紗の禮服と言つてもよい。それに同じ古色を帶びたシルクハットを被つて、以上申した綺羅びやかな鹵簿の列に屈いて居られる。斯かる服裝では、大概の人ならば可笑しくつて、見窄らしくて、きまりが惡るくて御供が出來なかつたであらうが、併しながら車上に座せらるゝ先生の顏をのぞけば、悠然としてせまらず如何にも社稷の臣とは斯かる人をいふのであらうと思はしめた。其の風采は今尚ほ眼前にほの見える。成程孔子が子路を許した一語の如き、確かに斯かる場合をいふのであらうと、當時感歎にたへなかつたのであるこれが其の一つ……。

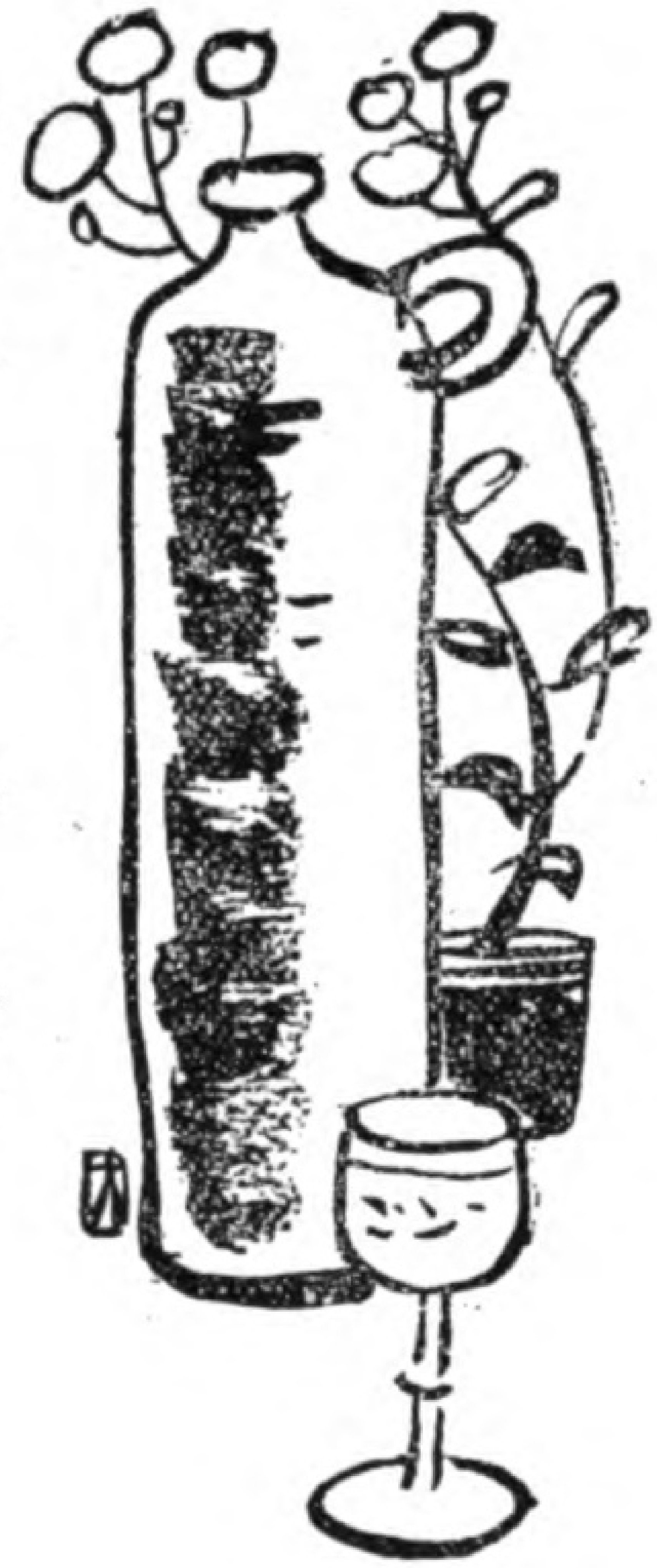
### △乃木夫人の禮裝

併しながら、達德先生の如きにあつては、此等の事は言ふに足らぬであらうが、女性の身に至つては左樣

はまゐらぬ、平生交際の間に於ても、人が流行を追ふた肩掛をしてゐるのに、自分一人時代遅れの肩掛を用ゐるといふ位な瑣末な事でも、なか〳〵仕難いことである。況んや朝廷の晴れの御儀式の際などに至れば、尚更である。然るに亡くなられた乃木夫人の行動如何と顧みるに、儀式等の際には、何時も、世を去られる前日、伯と共に書齋に於て撮られたといふ、彼の寫眞の上にも見える古式の服裝を用ゐられた。古式の方から申せば、眞面目な服裝に相違ないが、併し時代が時代だけに、多くの貴婦人が裝飾して朝廷に參內するといふやうな場合には、槪ね洋服を用ゐる際に、此の服裝のみで通されたことを思はねばならぬ。昨年の觀菊會の際であつたか、數千の貴婦人花の如く御所に集つた。其の扮裝は皆な洋服であつたさうだが、其の中に古式の服をつけて出たのは、たゞ乃木夫人一人であつたといふ事である。

## △巫女が飛び出したやう

古式の服揃ひの場合ならば、それで結構で、別に見劣りすることもなければ、氣後れすることもないが、衆嬪諸姫皆な流行を追ふた洋服を着て居る中に、たゞ一人古式の服を着て立つといふ事は、恰かも巫女が神樂でも舞ふ爲に飛び出したやうで、大概の婦人には出來ないことである。然るにも拘らず、乃木夫人は、悠然として其の間に處して、更に臆せられた樣子もなかつた。おまけに、其の手にせられた所の中啓の如きも房もなければ、飾りもなかつた。それを手にせられて貴婦人の間に立ち靜まつて禮敬を失はず、上の御寵招に應へられた其の勇氣は、全く眞勇ある人でなければ出來ぬことであらうと思ふ。自分が明治から大正の今日までに男子で一人、女流で一人の眞の大勇者を見たといふのは、此の兩に就てである。夫人の死や誠に壯烈であるが、それにも勝つて勇ましいのは、以上述べた常に處せらるゝ所の勇である。此の眞の美德が今の女流に一番缺けたる所のものであらうと思ふ。世の婦人達は、どうか思ひを此處に止めて貰ひたい。（談話）



警世嘲俗

# 一人一話（三）

## 恐るべきバチルス

警視廳警部　坂口鎭雄

丸の内は帝劇と竝んで新築されたいかめしい赤煉瓦の警視廳内の一室に、帶劍カッ／＼と扉を排して入つて來た坂口警部は、近頃物騷な不良少年少女に就て、美しい髭をひねくりながら、話をした。

◎迷惑なる副産物

文明の進歩、教育の發達は、一方に新進氣鋭の青年及び新しき婦人を生むと同時に、一方裏面には、又不良少年、不良少女、と云ふやうな副産物をも盛に産出しつゝある。一口に此の不良少女と言ふ中にもいろいろ種類があつて、警視廳の方では、大體次のやうに分けて居る。即ち不良女學生、浮浪少女、不良職工等で、孰れも社會の風紀を紊し、無垢の少女を墮落の淵に誘ひつゝある所の恐る可きバチルスである。しかしこれら不良の輩は、最初よりかく生れ付いたのではなく、種々の原因と經路とをへて純然たる墮落女となつたので、その原因の第一は、家庭の注意が行き届かなかつたと云ふ事にあるのは勿論であるが、なほ此の外重なる原因と見做す可きは、社會教育の缺陷、學校教育の不完全等である。今日では、都下のあらゆる女學校には、一として全く不良女學生の居らないと云ふ處はない。上流の子女が學ぶ學校でも、一般士民の女學校でも、必ず一二の不良女學生が席を置いてゐる。

この不良女學生は、不良少女中の稍ゝ高尚な方で、下等なものは、各種の工場に通ふ女工、電話局の交換手

又は一定の仕事をして居らない浮浪女子などの中にある。年齢は大抵十三四歳から廿一二歳位まで、男子即ち不良少年が七歳位から廿四五歳位までの範圍であるに比べて、如何に女子の墮落が急激であるかゞ解る。

◎父母は少しも知らず

そこで無垢の少女が如何なる經路をたどつて墮落するかと云ふと、前にも述べた通り、家庭の取締不完全が重もなるもので、表面は頗る嚴重でも何處かぬけて居る處があつたり、まだ年が行かない子供だからと思つて油斷してゐるなどから取りかへしのつかない事になるのが多い。その例としては、某家の令孃の如きは、家庭は極く嚴重で、緣日等にも一人出してやると云ふ事はなく、何時も必ず女中を付けて出して居た。處が令孃と女中とはとつくに妥協が出來て居たので、家は二人で出て行くが、途中で分れて令孃はその相手たる不良學生の許に、女中は出入りの魚屋の若者の處へと、各〻自由行動をとるのであつた。歸りは豫て定めて置いた時間に一定の場所で待ち合せて、何喰はぬ顔して二人連れ立つて家に歸るので、今夜は何處で何が面白かつたとか、賑やかだつたとか、いゝ加減な事を云つてつくらふて居た。それゆゑ父母はそんな事は露程も知らず、全く温和しい少女だとのみ思つて安心しきつて居たので、警視廳の方から通知に接しても、最初は決して信じなかつたが、後にすべての事情が解つて、非常に驚いたことがある。

◎危險なる活動寫眞

次に社會敎育の方面は、即ち芝居、寄席、活動寫眞等の興業物で、この中でも活動寫眞は最も危險の伴ふ場所で、こゝには數多の不良學生、浮浪青年が入り込み、種々の手段をめぐらして意志の薄弱な少女を誘惑しやうと待ち構へて居るので、うつかりするとそのワナにかゝつて喰物にされ、後には全く墮落して仕舞ふのである。不良少年が女子を誘惑する手段は、「握り」と稱して雜沓にまぎれて女子の手を握るのと、「ぶつこみ」と稱して用意して置いた名紙や艶書を袂に投げ込むのと、「送り」と稱して艶書を郵便で送るのとある。

女と云ふものは至つて氣の弱い者で、手を握られても人中などでは極りが惡いかして、聲も立てずに默つて居る。するとと男子の方はよい事にしてます〳〵その歩を進める。艶書なども、初めの時は氣味惡るがつて、大抵封も切らずに捨てゝ仕舞ふさうだが、二度三度と繰り返すと、一體どんな事がかいてあるのかと云ふ好奇心から、恐いもの見たさについ開封する氣になる。見るとさすがにうまい文句が並べてある。中にはこの乞を容れて呉れなければ死んで仕舞ふなどと書いてあるのもあるといふ。するとまだ世間見ずの少女は少なからず心配して、若し自分の爲に死ぬやうな事があつては大變だなどと考へて、とにかくいゝ加減に返事を出す。これが抑ふ間違の初めで、遂にはその不良青年の爲に一生を誤るやうな事になるのが普通である。

◎令孃と辯士

近頃は又良家の子女と活動の辯士と變な關係を生ずるのが往々ある。辯士中に風采の美しい說明の上手な者があると、觀客は拍手喝采して大騷ぎをやる。この時に女子から喝采でもされると、彼等社會には頗る名譽なので、彼等は必ず其の女を歸途に擁してお禮を云ふ。或は又入らつしやいなどとお世辭をふりまく。少女はその言葉を信じて又出かける。かくして數回の後には、漸く辯士とも馴染になつて、活動寫眞はそつちのけにして辯士の樂屋へ遊びに行く。その中、今度はその下宿にまで押しかけるやうになる。近い例は、先達も新聞に載つたが、四谷の某高等官の令孃が、福寶館の辯士御靜寬なる前科者に迷つて家を脫け出し、その下宿へ潛んだ。家から何度迎ひに行つても夫婦にならねば死ぬと駄々をこねて動かない。そこで警視廳の方で懇々說諭を加へて連れかへられたが、その父母は據ろなく、戸籍を一人別にして結婚させやうと云つて居た。その令孃は高等女學校を卒業したのである。又先達は九段の某女學校の生徒が二人、夜遲く淺草公園を徘徊して居たので調べると、家は生花の稽古にかこつけて出たが、實は活動寫眞のはねるのを待つて、その辯士の下宿へ一緒に行く心算でうろ〳〵して居た

のである事が判つたから、說諭してかへした事がある。

こんな例はまだ〳〵澤山にある。

◎同性の愛

學校教育の方の影響と云ふのは、近來學校に於て權利と云ふやうな事をしきりに說いて聞かせる結果、子供でも親に對して絕對的服從などはしない。殊に信書の如きに至ては、親子でもその秘密をあばく事は許さない。とか何とか小理窟を云ふので、少々怪しいと思つても親展書などは開かないと云ふ風で、その間に不正な手紙なども往々交換される事がある。又寄宿舍に於けるものは、女生徒と女生徒との間に同性の愛、即ち俗にオメサン或はイーチアザーなど稱する關係が行はれる。中には老嬢の舍監が獨身の寂しさに、美はしき少女を愛して不自然なる關係を結ぶと云ふ事などが少女の心を不眞面目な方に導く動機となるのである。

◎いろ〳〵の關係

都下で不良少女の團體としては芝にぶらんこ組と云ふのがあり、本所に銀杏連と云ふのがある。ぶらんこ組は浮浪少女で銀杏連は女工でこれは皆な髮を同じやうな銀杏返しに結んで組のシンボルとして居る。根岸にはすみれ連と云ふのがあつて、これはすみれ會と云ふ會を組織して、會長があり會員相互に情夫の周旋をなすのであるが、その會長は平生短刀を懷中して美少年を脅かし、又會員の中で、ある男子を得たいと云ふ者があれば、必ず交涉してその望を遂せしめる。

それから少し高尙なのになると、海月組と稱するのがある。これは赤坂の海月と云ふ待合を根據として居る一團で、虎之門女學館の女生徒と學習院の野良公達とが學校の歸途に會するので、これらの女生徒を調べて見ると、先方が學習院の公達であるから、行く〳〵は伯爵夫人、子爵夫人になれるだらうと云ふ虛榮心から、喜んで關係を結ぶらしい。名門の子弟でも富豪の娘でもかう云ふ點にはなか〳〵油斷が出來ないのである。

◎眞壁のお鐵

牛込で有名なる眞壁おてつと云ふ女の如きは、陸軍

少佐の娘であつたが、不良學生と親しくなつて、或時浪花節を聞きに行つた。處が幡隨院長兵衛の一節をきいて大に感動して、女だてらに俠客とならうと云ふ野心を起し、それから不良學生に金錢を振りまいて自分の部下とし、姐御として立てられるのを得意に、事があれば顔役然として飛び出して行くと云ふ風であつた彼の女の父は日清戰爭に戰死したので、母と二人その扶助料で相應に暮して居たが、母は娘の事を苦に病んで死んで了つた。おてつは一人になつたのを結句幸ひと、氣隨氣儘の事をして居たが、其の內漸く金に窮して來たので、今度は他の男をだまして金を捲き上げ、それを振りまいた。しかしそれもつゞかなくなつて、後には支那人の妾になつた。警視廳あたりで呼び出さうとしても却々來ない。何か云ふと直ぐ眞壁のお鐵さんを知らないかと云ふ調子で、丸で芝居でする辨天小僧のやうに肌ぬぎになつて尻をまくつて啖呵を切る。そんな樣子を見ると女らしい處なぞは露程もない。

これらの不良女子は、又悉く男子との關係がある。その爲に服裝を飾り、髮飾りを美くして、その男子の歡心を買はんとする。しかし何時迄もは金が續かないので、漸く惡心を起して呉服店で萬引をする、小間物店で髮飾りを胡麻化す、店員をあざむいて品物をかたるなどの犯罪をなし、遂には淫賣婦になるなど普通である。かうして一度刑を受けると、恥も外聞もなくなつて、ます〳〵墮落の淵に沈んで行き、同時に良家の女子をも誘惑して魔道に引き入れやうとする。警視廳ではこれらの女子をばよく〳〵說諭訓戒をいたし、再びかゝる事はせぬと云ふ誓書をかゝせるが、それも頗る怪しいもので、放免になるとすぐに又惡い事をする。矢張り一般犯罪者とさう云ふ點は變らないのである。

## 女先生の內幕

### 內幕を知る女

痛烈骨を刺すといふ皮肉は御本人の柄にない處ですが、毎日顔を合せて居る中でこれほどの御意

見をなさるとはこの方よつぽど豪氣な御婦人と見える。

何ですつて？ 馬鹿にしてるわ、それで敎育家？ フーン敎育家も凄じいぢやありませんか。

エ？ 自分だつてゝすつて？ いつ私が敎育家風を吹かせましたのよ。私はね、かうやつて學校へ出てゐるんだつて、皆さんのやうに、パンの代に差支てぢやあ有りませんのよ、どうせ暇なんだらう、一寸でいゝから、是非手傳へにつて、のつぴきならない所から賴まれて、據所なく出てるんですからねえ。卷頭から理由が違つてるんですよ。

從つて敎育家だなんて、チンから思つて居ないんですもの。そりや皆さんには、考へもやりくちも違ひませうさ、高等師範といふ籠の中に、三年間辛抱させられて、お重箱の隅を小楊子の先で突ついてるやうな、育てかたをされた連中ぢや無いんですからね。皆さんのお眼から御覽なすつたら、餘程變チキリンに見えませうとも。

エ、〳〵、それで澤山ですわ。私や何も、あなた方に價踏みして貰はなくつたつて、一向差支は御座いませんのですからね……。

だから言ふんですよ。敎育家〳〵つて、二言目には其語の出ない時は無いんでせうだからさ。そんならば其やうに、何故ちやあんと、御自分のおからだに、箔をつけて置かないんですつてば……。

敎壇に立つて講義する時には、何喰はぬ顏をして、己程えらい者は無いやうに、何でも私を見習ひさへすれば間違ひつこはない、位にいふて居るんでせう？ そりやあまあ、さう露骨には言はなくつてもね、早い話がさうなんでせうといふのよ、ね？

さうして、「夫が、夫が」つて、日露の役に名譽の戰死を遂げた所中尉に、どの位自分がつくして居たかを生徒に言つて聞すぢやありませんか。

それでも、家へ歸れば如何なんですよ。每晚〳〵、決つたやうに影のさす野山賢學士つていふのは、ありや一體何なの？

人の恥を、好んで明るみへ引張り出す譯ぢやないけれど、そつちの出ようが出ようだから、途、こんな事だつて言ひ度くなるぢや有りませんか。いくら教育家だつて氣張つたつて、たかゞ女ですものね。そりや事情によつちや再婚もなさいませうさ、又、御遠慮なしになすつたつて、構ひつこはありやしませんさ。再嫁は悪い事ぢやないときまつた今日ですもの、なさるなら公になさいと言ふ事なんですよ。早く立派に、野山醫學士令夫人と、御披露なすつてお仕舞なさいまし。知らない人は、私達みたいに惡く疑ぐつたりしやしませんから、大丈夫、金のわきざしよ。安心なもんだわ。

エヽ、まア、呆れた。ぢやあなたは身も心も野山さんの奥様に成り濟していらつしやり乍ら、公然だけは何いつ迄も、所中尉未亡人で、遺族扶助料をお受けなさるおつもり？初めつから、色と慾との二筋がけで、そんな眞似をなすつたんですか。卑劣だ、汚ないわ、思ひきつておしまひ遊ばせよ。どうせ見捨て仕まつた所中尉のお位牌に對しても、受けられるわけのもんぢやありますまいにねえ。

内緒に、こんな暗い影をもつ身で居ながら、よく隱面もなく、純潔な處女達の前に立つて、教授などが出來るわねえ。呆れるよりも、感心致しますよ。それで貴女、自分の良心に對して、恥しいとは思はない？尤も貴女方の御連中には、三越へいつて萬引をなさるかたさへあると言ひますから。兎も角、度胸はいゝには違ひありませんがね。

何だつて？ぢやありませんか、あなた方が育て上げた、日本最高學府の學長さんつていふのは、いつだつたか文部省で會議のあつた時に、何でもかでも女には體操を教へなければならん。今の世間は兎角、女の體の發育に重きをおかすなげやりに爲てあるから、體の發達が惡くつて、西洋人なんかとはとてもくらべものにならぬのだから、女學生には是非とも體操を一番重いものゝ一つとして、教へなければならん。ふき掃除位でおつつく譯のもんぢや無いからつて、大氣張りに氣張つて、時の文相○○○の君に。

「ウンやれ〳〵、犬にやれ！　然し、どうせやるなら機械體操やたなのやうなもの迄敎へんといかん、でないと、見世物にやならんからなあ」つて、思ふさま冷かされて、チユーの音も上らなかつたと先生だつて言ふぢやありませんか。これを以て推して知るべしね。

立派な先生方の御意見はさておき、私達の側から見りや、ともかくも髮を結つて、女の形をした者に、長い球竿にとつかまつたり、亞鈴をわしづかみにしたりして、オツチニ〳〵とやられた日にや、面目ないやら氣の毒やら、何とも言へぬ氣持に成りますもの。

或る畫家が、近頃の女は足袋をはくから、足の恰好がわるくなつたと、嘆息なすつたときゝましたが、足袋どころぢやない、今ぢやもう、靴をはいたり、コーセツトをはめたり、いやはや、玉の肌も臺なしになつてしまひましたわね。今の先生方は、出尻鳩胸の女を澤山にこしらへて、何處へ輸出するお心算なんでせうね。

花の都は山の手邊に鎭座まします、某高等女學校の校長さんは、最愛の夫が、軍艦うねびの乘組で〇〇の航海の折から、艦と共に行衛不明となつたまゝ、生死の程も定め難いのを、いゝ機にして、僅か一年程の間に今の△△へ嫁つたんですと、さうしてその主人の尻押で今は天晴、校長になり澄して居ますが、その、うねび艦乘組士官が、萬一生きて還つて來たらば、面白い芝居が見られるでせうにねえ。

今の若い女が、この種の人々に敎育されて居る間は良妻賢母などの出來やう筈はありやしませんわ。

女學生上りと攻擊する前に、一つ、先生方の方を改良なすつたら如何？　そりやあね、給料を目的に、雇はれて居る連中ですもの、生徒がどうならうと、構ひつけない氣かも知れないけれど、犧牲にされてる若い女こそいゝ迷惑、おたまりこぼしが、ありやあしませんわねえ。

エヽ、だから、あなた一人を責めるのぢやないのよ。だけれども貴女だつて、餘り賞めた眞似はしてゐらつしやらないのだから、そのおつもりで、大きな事をお

つしやいますなつて、御忠告申しただけなのよ。あら、そんな顔をなさるなよ、女の怒つた顔は、般若の面にそつくりですとさ。みつとも無いからおよしなさいまし。ホヽヽ、まあ、さよなら、ね。

## おめでたい孃樣

### 現代式にあらざる　古い女

古い女と申しても決して讀めにくいのお婆さんではございませんよ、憎いか憎からぬかは、おはなしの質を見て御推察を願ひます。

一體どんな人が眞に新らしい女だか、私にはハッキリ申すことは出來ませんが、此の頃新聞雜誌で騒ぐある一部分の婦人、所謂新らしい女といふ人達に對しては、私は左程新らしいといふ感じをもちません。第一、新らしい女、云ひ換ゆれば自覺した女といふものはこんな事したら世間で新らしいと思ふだらうなんて、そんな淺薄な考で、普通の女のしないことをして、得意になつて居るものではありません。例へば、大分世間の問題になつたノラだつてさうでせう。自分が多年步いて來た途を捨て、良人子供を顧みないで家出したといふのも、何も新らしいと思はれ樣といふ氣でしたのではなく、子供にも良人にも換へられない大切なある自分の考への爲に、すべてを犧牲にしたのです。世評はとにかくノラ其の人に取つては、至つて眞面目な問題を眞面目に考へて、色々の苦痛と戰つて自分の信ずる道に向つたんですから、其の結果は兎に角、其の行爲に對しては、心から同情もし、又尊敬も拂ひたくなつて來ますが、併し、ノラのしたことが新らしいからと云つて、或る人達がノラのした樣な眞似をするのは所謂新らしがるので、眞に新らしいとは云はれません。

近頃、新らしい女は思想上にも生活上にも囚はれないといふ處から、したい放題のことをし、ありつたけの我儘を働いて、自分は新らしい囚はれない女だといふことを自負する人も、ある一部分にはありますが、我儘と新らしいとはちと勝手が違ひやしないかと思ひ

ます。一定の主義があつて、確かな根柢が定まつて居て、そして古い束縛から逃れてゆくのならまだしもいいですが、さうでなく、只だ一時の氣まぐれに、女だつて何も男と同じ生活が出來ないことはないと、云はば片意地となつて、ビールも呑めば酒も呑み、又夜を明して花も引くといふ風になつては、新らしいといふよりは、むしろ我儘ななげやりの生活になつて仕舞ひやしないかと思はれます。それには何も新らしい命があると云ふではなし、又わざ〱新らしい敎育のある女の試みを待たなくつても、遠の昔に、敎育も何にもないしかも捨鉢の女が、ざらにやつてることですから、あまりめづらしいこともありません。又吉原遊びだつてさうでせう。引手茶屋から箱提灯に送られて、何々樓に元氣よく乘り込んだのは、自分達ばかりだと得意がつて居るのは、それこそ世間見ずな野暮な話です。今更お孃ちやん達の發企を待たなくつても、少し意氣な生活でもしてるお茶屋や待合のお神さんなんか、夫婦づれで登樓して、隨分もてたなどいふことは、よく聞くことですから、女の吉原遊びが新らしいと云つたら、思ひがけない社會に新らしい女が澤山ありませう。

然し大方、そんな社會の人の遊ぶのと私達とは理が違ふ、といふ考へでせう。なる程、文藝とか藝術とか云ふ方面に携さはる新らしい人達の頭には、吉原の空氣を知るのも必要だし、又藝者や女郎と近づきになるのも、又十二階下の女の研究も、皆な無駄なことではありますまい。けれども、何もそれを自慢らしく世間に吹聽して、新らしがるにはあたりません。只だ眞面目な研究の結果の立派な文藝となつて世間に發表せられたら、それこそ新らしい女の人々の眞面目な研究の結果として、社會に歡迎され、其の體度の不眞面目でないことを證明することも出來ませうが、今の處では、只だ普通の女のしないことをして、世間をアッと云はせ樣と、空騷ぎに騷ぎ廻つてるとしか、一般の人には見えません。勿論ある一部分の人達は、さうでもないでせうけれども、少なくともさう思はれるのは、これから何かやつて行かうと云ふ上に就て、至つて不得策

だらうと思はれます。併し、今の所謂新らしいと云はれる人達は、頭も相當に出來た方許りで、何をなさるにも何か深い根柢のあつてのことだらうと存じますから、私どもが彼れこれ申すのは、却つて失禮かも知れません。只だ私は前に申し上げた樣に、眞に新らしいと云はれる女は、この頃の所謂新らしいと云はれるある一部分の人達とは、決して同じではないと思つて居ります。

# 活動辯士の婦人觀

活動寫眞辯士　古河內樂波

東京市中に數多き活動寫眞館の中でも、映畫も客種も比較的高尙だと評判のあるものは錦輝館が第一であるといふことで、樂波君は此館の主任辯士で顏も古く、且つ其の沈痛なる辯舌と巧妙なる身振とに滿堂をヤンヤと云はせる。君が壇上に現はれる時、常連の子供等は、口を揃へて古河內！古河內！と囃し立てる。

活動辯士の婦人觀ですつて？恐れ入りましたね。成程、あの四谷の活動寫眞館で某辯士が何處やらの令孃に引つかゝつた事件ですか。あれは全く女の方が箸にも棒にもかゝらぬ莫連者ださうですよ。某辯士に對しては唯だ氣の毒だと云ふより外ありません。貴方がたは如何思ひます。そりやア男の方も取合つたのは惡いが、併し、女の方から仕向けられては、餘程確乎したものでないと、つい誘はれますからねえ。けれども、あんな事は滅多にありません。全く例外です。

一寸、世間では活動辯士と婦人とは中々緣が深く關係し易いやうに考へてゐる。實に殘念です。決してそんな事はありません。――何ですか、客と客との間ですか？そりやア無いとは云ひません。何しろ暗がりに男女――靑春の血の燃ゆる男女が席を同じうして見るのですからねえ。多い中にはつい思はず間違つた事が起らぬとも限らないのです。

一體、我々辯士が稍々もすれば、そんな惡評を受け

るのは、つまり看客を喜ばせやうと云ふ、所謂藝人的の處が多少でもあるからなんだらうと思ひます。無論、商賣としては、是非藝人的な事もしなくてはなりませぬ。辯士たる亦難いかなですよ。

併し、如何に看客を喜ばせるが目的であると云つても、唯だ喜ばす丈けでは、どうも滿足する事が出來ません。何か一つ、唯だ一箇所でよいから、一つの映畫に就ては必らず何所かに婦人子供衆の爲になる箇所を十分に説明して、深く腦に刻みつけ度い！ 斯う云ふ考は常にもつてゐるのです。其の點から云へば、活辯も一種の敎育家でなくてはならぬと云ふ事が出來ます。處が、現在の狀態では、殘念ながら一般の辯士が敎育のないものばかりである。惡く云へば、社會の敗北者と云つた風です。斯う云ふ事も我々活動辯士が社會から動もすれば侮辱される原因かとも思ひます。

兎に角、今後の辯士はもつと敎育のある者でなくてはなりませぬ。現に、外國から輸入される映畫などに就て見るに、其の畫面と云ひ、說明書と云ひ、我國の習慣道德から考へると、實に戰慄を禁じ得ぬやうなものが幾らもあります。それを其の儘辯士が說明したら、大變な事になるのです。社會主義的なものもあれば、破倫不德の罪惡もあると云ふ有樣。之れを取捨し、巧みに國の狀態に當て箝るやうに說明すると云ふ事は、餘程の頭腦が必要です。敎育が肝腎です。

いつかも「ヘンリー八世」と云ふ映畫が來た時、其の說明に就て、大分苦心した事があります。其の畫面と說明書とによれば、ヘンリー八世は或る政略上から、長兄の妻であつた婦人を迎へて后としました。處が、その後何時しか女官のアンヌと云ふ美人と戀に落ちました。そこで、だん／＼后の方を疎んずるやうになり、遂に之れを離緣する事にし、カーデナル大僧正の許可を得、更めて女官アンヌと手を握りましたが、此の事がローマ大僧正に聞えると、ヘンリー八世は道德上の罪人として幽閉されて了ふ、と云ふのです。

其處で、今、ヘンリー八世の戀に就て考へて見ますれば、長兄の妻を后としたのは、政略の爲めで、眞の

愛情によつたものではありません。之れに反して女官アンヌとの間は眞の戀愛によつて結びつけられたのであります。一方は形式、一方は眞情、誰れしも前者に疎くなり、後者に熱するのは無理もありません。然るにヘンリー八世は遂に罰せられたのですから、大に同情し度いのが人情でありませう。けれども、それでは后の立場がない。政略の犧牲となつた后にも同情しないわけには行きません。

之れを如何に説明すべきか？　此の問題に就ては隨分頭腦を使ひました。なんでも三日ばかりは、その事ばかり考へてゐたのでした。

其他、斯う云ふ例は幾許もあります。映畫の通りに話せば諸方へ差障りが出來る。殊に西洋の役者の巧妙な表情と、深遠な脚色とに對しては、非常なインスピレーションを受ける場面も少くありません。それを其の儘云ひ現はさうと思へば、可成六ケ敷い事も云はねばならぬし、又極端な事を語る必要もあるのです。併し、それでは女子供の看客には適しないと云ふ事になる。それは中々面倒なものですよ。

西洋の人情物になりますと、平氣でキッスしたり、握手したりする。それが日本の風俗習慣には一致しないのですから、説明の時に餘程手加減をする必要があります。さもないと、日本人の頭には非常に深く强く映るから、從つて善惡の感化も多い譯です。善の方が强いのならば云ふ事はありませんが、多くは惡の方が强く映するものですから、活動辯士の責任は中々重いのです。

一體に子供には戰爭ものとか、競爭ものとかの、勇ましい、又奇拔なものが歡迎されます。彼のジゴマが大喝采を博したのも、要するに映畫が奇拔と巧妙とに充ちてゐた爲めだらうと思はれます。

婦人客のよく泣くのは、新派悲劇であります。辯士の説明の如何にもよりますが、つとめて哀れつぽくやりますと、殆んど滿場が歔欷の聲に埋まつて了ふ事があります。西洋もの丶哀れつぽいものでも、よく泣きます。併し、舊劇では餘り泣くのを見た事がありませ

ぬ。
要するに、我々の眼から見ると、男女に限らず、看客は、興味を極端なものに對しより多く感ずるやうです。即ち、非常に恐ろしいとか、非常に悲しいとか、又非常に嬉しいとか、凡て、さう云ふ極端なものに對して喝采すると云ふ傾向が明かにあります。
之れは、結局都會に於ける激しい生存競爭によつて、頭腦の神經が痲痺し、病的になつてゐるので、ナマぬるい刺戟には感じない爲めであらうと思ひます。實に恐ろしい世の中になつたものです。次第に斯う云ふ傾向が募つて行くのでありませうが、遂にはどうなるでせう。
今後の事を云へば、辯士も十分修養し、又教育を受けて、社會から半藝人扱ひを受けないやうにならなくてはなりません。例の原のぶ子さんが上海に行つて、活動寫眞の舞臺で獨唱をやつたと云ふ事を聞いて、日本では、『活動寫眞の舞臺で？』『それはどうも・・・・。』と蔑んだやうな口調で語り合つたものです。實際まだ、日本人の頭には活動寫眞と云へば、何だか低級な下等なものと云ふやうに考へられてゐるのです。處が、今度歸朝した原のぶ子さんの話を聞けば、上海あたりで活動と云へば紳士淑女の見るものと相場がきまつてゐると云ふ事です。
話はちがひますが、活動寫眞の映畫が如何に強く看客の腦底に映るかと云ふ事は、先般來ジゴマを見た爲めにジゴマ少年やジゴマ賊がポツ〳〵現はれたのに徴しても解ります。映畫と共に、辯士の辯舌も亦却々侮り難い力をもつてゐるのです。看客の中には、若い婦人なぞで、非常に説明の巧みな辯士の名をそつと歸りがけに下足の處で尋ねると云ふやうな方があるさうです。どう云ふ目的だか知りません。何ですつて？　私など毎度尋ねられる方だらうと？　戲言云つちやいけません。





# ナマクラ庖丁

ヴヘールの女

△一時全盛でしたジゴマにパドラ、それも女と云ふ字を冠せたのもありました、エ、映じ出しまするは、大正元年極めて最近の長尺フヒルムでして、最初三越呉服店にて萬引中の光景、その手ぎはの鮮さをよくお目とめて御覽じませ。

△マグダの向ふを張つて、あたし何か奇抜なことやりたいわ、恐ろしや、斯麼會話をさる電車の中で聞かされたことがありました。またさる大家の奥さまが、ノラとマグダとジゴマとパトラと、此四つが何の事だか解らず、旦那樣に伺ふと、「ウム外國の葉卷と酒の名だらう。」嘘の話にあらず、こんなお家は天下泰平なりですわ。

△内藤千代子の寫眞が女學世界に出て以來、スキートホームの買ひ手が減りましたつてネ。内々妹の女學世界を見て、千代子は理想の女だつて云つてたさる兄さんが、「何だコンナ拙い面して、夢二式が聞いて呆れら、僕なんか持參金つきでも、貰ふのは眞ッ平御免だ」ですとさ。

△乃木夫人を馬鹿な女だと冷評して生徒から暗打を喰つて額におでこを拵らへた先生がありました。勿驚、先生も生徒も女なのですよ。

△知る人ぞ知る、青踏社の新しき女達、鴻の巣もカッフエーライオンも、將たヨシハラもいゝが、矢張り月に七日は普通の女でいらつしやいますッテネ。

△律子や浪子や嘉久子や須磨子に憧憬して、女優たらんとするもの、全國に幾百、幾千なるを知らず。と聞きまして私は涙がこぼれます、あゝ乃木將軍の奥樣は、

い〻時に世を去られたものです……。

△××軒にて、アイスクリームと間違へて、バターを頰張つて目を白黒させた貴婦人がありました。香の物一片、落ちたのを見て、鼈甲の笄と間違へた昔の上臈もございました。

△貴重な半日以上を白牡丹に空費して、髪結つて貰ふ女があります、世の殿方達よ、かゝる女を女房にお持ち遊ばすか。

△八千代、萬龍、ゑみ子えらいわネエ、彼れ等は。愛國婦人會の幹事だの何だのと、低い鼻をうごめかしても、テンとアキマヘンせ、然るに彼等たるや一擧手、一投足と雖も屢ゝ二號活字となりて新聞に掲げられる。ア、私も女の子を産んだら藝妓にしやう。とある教師のナイショバナシ。

△松浦佐用姫の二の舞でもやりさうだつた晶子夫人、工面が出來て花の巴里で暫らくは呑氣な美的生活、毎日手を携へてオペラのおたのしみ横文字交りのお歌に私どもは隨分あてられました。ミユンヘン紀行の中にはすごい一節がありましたつけ。

△洋行中は和服で押し通すなんて御出かけ前は氣焔萬丈でいらしつたのに、巴里だよりによれば人に目をつけられるからとて洋服。矢つ張り晶子サンも女でした。尤もあの御面相で華美な友染か何かで歩いたら、氣の弱い金髪美人は目を廻すでせうテ。

ホームシックで到頭歸つてらしつたのはまだしほらしい。

△人間製造説、何て奇抜な發明でせう。理想的の人格の人間を拵へたら、私は其の血液を取つて今の各階級の人々に血清注射し度い。一體、今日本にえらい婦人つてあるか知ら。

△天下にごろ〳〵してゐる淪落の女、其の墮落の徑路また多岐多様です、「あたしも一度は新しい女と云はれて、青鞜社でペンとつた事もありますの、雷鳥、紅吉なんて皆、男なくては夜のあけぬ國の人なんですよ。」こんな氣焔を吐く十二階下の女が大正三年にありましたツてね。

△婦人雜誌の購讀者は、女六分に男四分とは去る物識りの話ですが、最う五分々々ぐらゐでせう。『男の雜誌に女が投書したら、寧ろ歡迎する位だのに、若し婦人雜誌に男が出して見給へ、無論沒だらう、女は全く劃がいゝね。』と甲が云ひますと、乙『そりや君、無論さ、編輯人が鼻下長の男だからネ。』

△今年の文展を飾る花の一朶に、大阪の島成園女史あり、『宗右衛門町の夕』とか云ふ美人畫を出して見事褒狀にありついたり、これで三都の三園女史とて、先刻御承知の東都の池田蕉園、京都の上村松園と並稱せらるゝに至りしは目出度し〱〱。』と聞きましてから、成園女史の許へ若い男が行く〱、とはイヤハヤ男つてものはベラボウな妙なものですわね、明年あたり、名古屋から公園女史か肺炎女史ぐらゐ出るさうです。依つておまけに目出度し〱。

△新しい女、新しい女も大分古くなつて、今度出るのは何でせう、横濱のハイカラ美人が飛行機に乗りそくなつて大分名を賣りましたつけね、グット奇々拔々な事をして天下の野郎やアマッチョをアッと云はす女は無いものでせうか。ア、私の起つべき時は段々近よる近よる。

△モデルの女のゆく末は多くは墮落と聞くだに可哀想です、文展に幾千の瞳をあつめて、其の御本尊は・・・と思へば、あゝ藝術家の罪か、社會の罪か、そも〱またモデル女自らの罪でせうか。

△私娼征伐の早稻田の御連中の向ふを張つて娘子軍も自ら、各學校の精鋭をすぐつて、ヨシハラはじめ諸方へ自由廢業か何かの勸誘、遊說に廻はつちや怎うでせう。

△郎君をつゝいて部下の首を切つた山脇房子サン、一時は新聞でも攻擊しましたけれど、今はもう皆ケロリ閑として、むかしの夢、あゝ長いものは卷く、——卷かれる身になつたらネエ。

△賣學の富本博士が天下の攻擊をくつて實にいゝ氣味です、博士の家を飛び出して、自殺を企てた、先年の小間使も定めしちつとは浮ばれるでせう。

△天下の婦女を毒するものも澤山ありますが近來は女優を其の最なるものとして特筆大書しなければなりません、其の毒むしろ藝娼妓輩以上でせう、藝娼妓たらんと希望するものは下層の女ですけれど、現今女優熱が中流婦人社會を風靡する力は、全く侮り難いものがあります。高女卒業生あたりが、虚榮にあこがれて女優たらんと欲するもの丶多いことは驚くべきです、私の知つてる人だけでも十指に餘ります、所謂お轉婆連ぢや無い比較的、中以上の成績の淑女が私かに女優熱にかゝつてるのを見聞くに及んでは慄然たらざるを得ません、私は常から「べからず訓」式の女に慊らぬものですが、むしろ今となつては、女優熱患者より勝つてゐます。

△世の女優志願者の君たちよ、君達が希へる女優生活は、そんなにいゝものでせうか。君たちは華やかなる帝國劇場に入りて其の空氣を吸ひ、美しき舞臺の華を見る毎に、先づ眉に唾つけたことありますか、あゝ女優生活の裏面、君達よ知りまさぬか、美しき歌舞の背蔭の彼れ等は、私かにいと私かに其の節操を金にかへて恬として恥ぢません、否なむしろ小遣取と心得、尋常茶飯視してゐます。理想の抱負のと、昂然口にしていらつしやるR、M孃の如きすら、昨日は某子爵の若殿と緣りの酒に醉ひ、今日は某伯爵とシエークハンドで後園のそゞろ歩き……。

△女優志願者の君たちよ、君達ちは猶ほ心醉の熱おさめになりませんか、彼れ等の卑しむべき行爲を見聞くも、妾劇界の人とならば、泥中の白蓮の如く世を渡るべしと仰しやいますのですか、けれど〳〵君たちよ、シエークスピーアの言「弱きものよ、汝の名は女なり」は終に眞理なのを如何しませう。

△私は最うこれでお別れ、終りに臨みまして私の大きらひな女の名を茲に連ねさせて下さい。下田歌子、山脇房子、羽仁もと子、柴田環、長谷川時雨、平塚明子、森律子、松旭齋天勝、内藤千代子、春本萬龍、お金夫人とお鯉、それから一般的にきらひなのは、肥つた看護婦、廿歳以上の藝妓、五人以上子を產む女、會話に外國語を交る女、田舍訛の東京辯の女學生、ヴエールの女、卷煙草のむ女、指環の多い女、乳房の大きい女、近視眼の女、オールドミス、



# しのび音

白妙

物凄きな秋の夜長のつれ〴〵にとてか纔一重へだてた田鶴様の御宅から毎夜の如くにお琴の音がかすかに聞えます。

お琴の音など容易に聞かれぬ村人は懐かしさうに御門によつて聞き惚る。道行く人も歩をゆるめて？

月清き夜は月光に中身そむけた華奢なおからだに琵琶取り上げて纎手おもむろにシヤンシヤンヒンと。

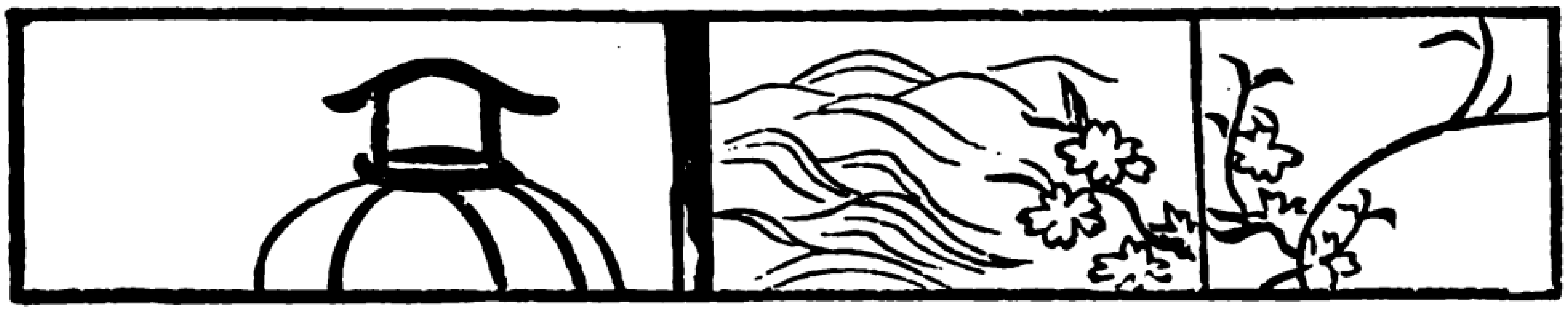
其時妃橘姫
かたむく船の舳に立ちて
如く海原のあれ立つは
海原御神の業ならん
妾がいのち犠牲にして
命の御難すくはんと
留むる暇も波の底
身を躍らしてぞ入り給ふ
妃の念力通じけん
さしもにあれし大海原
波風次第におさまりて
船は上總に着きにけり
かくて東夷も平ぎて
君凱旋のおん旅路。

＊　＊　＊　＊　＊

あゝその悲痛な叫び。柱にもたれてきゝ入つて居た私胸が一ぱいになつて思はず涙しました。白いお顔を上向けてお目めをちつととぢて。琵琶弾く人つて皆あゝ云ふスメイルなのかしら。細面の、美しいお顔立ち、房した眞黒なお髪を飾り一つない頭高な束髪にお結び遊ばして純白の襟を豊に重ねた胸元に絆の裏上げチラチラと青磁色み帶の間にリンゲ輝くお手を入れてへフハフと落延する窓によつては、淡路懐しや戀ひしやと、泣いて通ひし浜千鳥つて澄んだお肉聲で御吟なさる多美様ほんとにお羨やましい月一回の雑誌さへも遠慮して讀んで居る私とくらべては。

父がかう言ひますの女が色々な雑誌讀むと生意気になつていかんてさうでせうか數ならぬ私が月一册の女學世界や少女世界を讀んだ位で自分の境遇も省みる事の出來ないそれより以上の虚榮心を起すな





んてそんな意志の薄弱な女ぢやないと思ひましたけれど。

でも考へましたの私。不快に思ふ父の前で何も好んで讀まなくともと思ひましてそれ以來は父の前では一切雜誌を開きません偽善者の様ですけど暇々には燃え立つ様な緋縮緬の襠の重なる紙入の仕上げに餘念がない時折は兩親の好む茶を立てゝまでも。

けれど燈火親しむ秋の夜にどうしてぢつとして居られませう。赤々と灯の輝く室に入つては寄木の机にもたれて新刊の雜誌の頁を繰る音のみ靜かな夜陰にパラパラと!!!

＊　＊　＊　＊　＊　＊

〇月〇〇日

南風強かるべし。との警報が所々に掲示されました。其夜の風に一帯の海岸が荒れたけれど村人の豫期して居た程の事もなく今朝は麗かな小春日和。

朝飯後君に手傳つて臺所に立つ大がいしまつたら九時少しすぎ。

「君や寒いから早くしまつておあたりそしてお室に炭ついでてお呉れ私一寸奈良屋まで行つて來るから」

「ヘイ何か御用でしたら私行つて參りませう」

「イヽエいゝの昨日へらの先をつてれ私行つて買つてくるからいゝわ」

緋の縮緬入帯の間にはさんですぢ向ひの奈良屋まで。

こゝの小間物屋はほんとうに嫌な家よ人が買ひに行くと何しに來たと云ふ様な顔して人の顔ばかりジロジロ見て居るへら買つていくらですかつて聞いたら「七錢」。と云ふ拾錢銀貨出したら自分で錢箱の前にすはつて三錢のおつりをほーい、なんてなげてよこすにくらしさつたらありませんわ。かへつてお客様の方から今日は毎度有難うございますすみません何下さい。なんて行くといゝ氣になつて。「お出で何かい」なんてまるで召使が主人に何かお詫に行く様な風よ。まさか小間物屋の主人の御機嫌伺ひに來たものでなしこゝだからこそお客もあるが都會へ行つたらすぐこんな人生存競爭に敗けてしまふのだ都の商人風など藥にしたくもない。

いろんな事考へながら家へ歸つたら髪結さんが來てお母様の髪結ふてゐた。茶の間に新聞が配達されて居たけれど後に見ることにして室に入る。まあ炭がカン





かん扱つて鏝さへ挿してある少しの事ながらよく氣が付いた事と嬉しく思ふ。銭板の前に紅の勝つたメリンスの座蒲團しいて昨日裁つた縢れずの縮緬の羽織を出す派手なクリームの色紋羽二重の裏がよく似合つて嬉しい。皆様お聞き遊ばしたらおかしゆうございませう。高が羽織一枚それに色だつてねずみなんて今流行らないわつてね。でも私これ去年の春からほしくつてほしくつて居たんですのに此度やうやう買つて頂いたものですから嬉しいんですわ。

郵便!!!

聲の終らぬ中に君が襖細目に開けてお手紙でございますつて置く。『あらまあいゝ事君誰結ふたの髮』あの髮結さんの下すきさんが「

「よく似合つてよどれ後向いてごらんぐるりと後向いて美しい襟足に長いたぼ多い毛をふつくりした前髮に大きな桃割赤い鹿の子掛けた所何んだか半玉の様だ、でも可愛わ私より二つ年下の十七ですもの。私も日本髮に結ふて居たいけれど似合はないから。

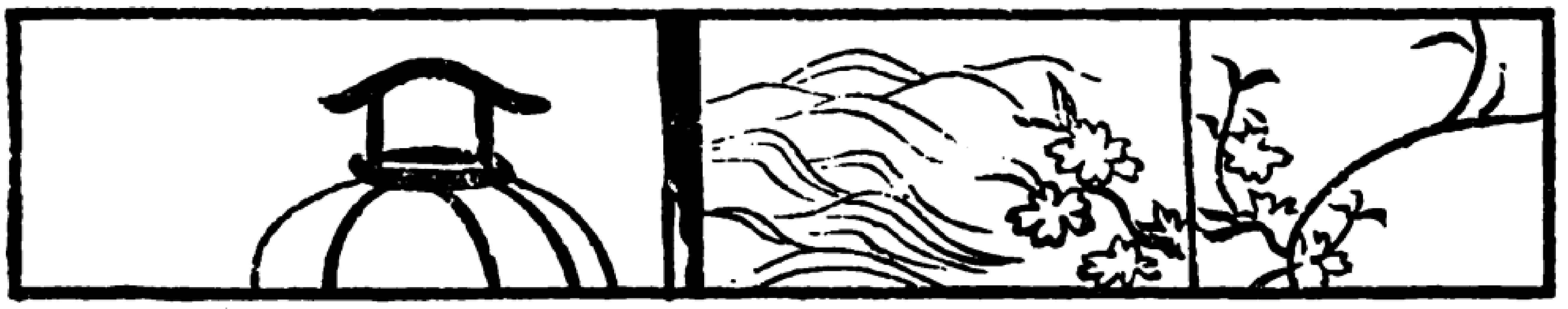
分の厚いお手紙お榮様と云ふ事すぐわかるいつも變らずお便り下さる御眞情の程深く〳〵お禮申上げますわ。お手紙の餘白にこんな事が書いてある。

九月號の女學世界なんかに出やうとは夢にも思はなかつたお二方のおん寫繪、私何か寶物でも見付けた様な氣がして約十分間ばかりは無意識に凝視ましたけれど自分が今まで思ひ詰めて居た程の割に是れと思ふて書く程の事も見出しません、お寫眞に付いては讀者の方が數々の御批評お二方とも十月の誌友倶樂部讀み行く内に思はず會心の笑みをお洩し遊ばした事でせう。何と言ふても上原様は名家の愛嬢五分も透かさぬ令嬢振りお上品な落ち付いた方。しかし内藤様は綾子様と趣を異にしてゐらつしやる思慮深い決斷力に富んだ方。すつかり垢脱けしてどことなく捨て難い所がおあり遊す。今になつて勝手な様ですけれど目のあたりに拜見するよりゆるやかなお筆の跡で想像いたした方が花ですわね。貴女何うお思ひ遊ばしますか。

私も同感ですわ。

縫掛けの羽織後廻しにして早速御返事書く。この方女學世界の熱心な愛讀者で毎月の發行されるのを待つて種々な御思を書き送られる四月の増刊悲劇十番の發行された時などは大變なご立腹で長々との御批評の一ふし!!





悲劇と云ふからにはそれや悲しいお作に違ひありませんが其の中から私は最も悲むべきことを發見しました。外でもありません悲劇十番の中に『貧のぬすみ』と云ふのがありましたれあれですの。忘れもしません去年の十一月發行日本少年に『恨めしの月よ』と云ふのを私大變感じ今でもすつかり覺えて居りましたの。それが四月の増刊に名を貧のぬすみなんかと變へて出やうなどとはゆめにも思ひません。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

親不孝な子と言はれる私自分で自分の心がわかりませんわせまい胸に包み切れぬ程の苦痛も人前へ出ると勉めて押しかくまうとする心が起りますの。ですから皆様がまあ律ちやんにもそんな御心配ありますの。つておつしやいます私そんな御言葉頂く度になんだか侮辱されたやうな氣がして腹立しいわ。

優しくおつしやつて下さる母樣の前で涙一つ見せず顔一つあからめぬ私!!

『お前の強情なのに母樣も呆れてしまつたよ』

ほんとさうだ私の強情なのは先天的なのだから。

でも室へ入ると熱い涙がハラ〳〵と落ちます故しらロ涙？いゝえ母樣すみませんわ。あれ程までおつしやつて下さる母樣の前でなぜ優しくできないのでせう此の涙の半分もお見せ申したらどんなにかお喜こび遊ばすでせう。けれどそれは不可能なことですわ。不孝な娘も父の病重りゆく程にひそかに家を脱けて○○寺へ參りました。多くもあらぬ貯金の中より三週間分のお祈料拂つて『當病平癒御修業』と書いたお札を床の上に。朝夕は人しれず熱き祈りをさゝげました詩人の泣くてう逝く秋の夕べいろ〳〵に思ひせまつては。つい★ロリとします。

---

○人間一日の食料を米五合と定めしこと可なり古きことなるべし三省録に新武者物語を引て曰く人の食物は朝暮二合五勺づゝ然るべしと瀧川左近將監積り定められしなり按ずるにこれ一度の分量を云ふ朝夕にては五合なり。

○花柳界の女子が衣裳自ら脱すると吉凶なりといつて喜ぶ風ありかれて淫なる風なりと思ひ居りしに支那もこれと同じ風ありと見えて堅瓠集に今婦女の裙帶忽ち脫すれば俗にこれを喜歡喜といひ燈花、鵲噪、蜘蛛垂絲、醉人衣中と共に喜事ありとなすとあり。







# 生來多病の人二十年間の活動

## ハリス夫人の事

天翔る雲

### 一、修養の意義

實行を除いて修養の意義は無い筈である。人は、墓に入るまで修養に要すといふけれども、徳をさめ智を磨くの工夫は、見聞によつて得たことを實際に行ふにこしたことは無いのである。『人のふり見てわがふり直せ』といふ諺も、人はとかく缺點の多いものであるから、他の優れたる所をみては之にならひ、他の見苦しい缺點を見ては、自ら戒めよといふ意味なので、日常の修養に意を用ゐよとの敎へとみてよからう。孔子樣程の聖者すら、心の欲するまゝを行うても、過なきに近いと仰せられたのは、七十の齡を重ねられてからのことで、その間の修養はなか／＼、凡人の及ぶべからざる苦心もあつたらうと信ぜられる。かの『賢をみてはひとしからん事を思ひ、不賢をみては內に自ら省る』とあるのも、この間の消息をもらされたものとも考へられるから、聖者の足許にも及ばぬ我等にあつては、行住座臥、心を己が修養に用ゐて、學ぶべき美點を賢者の上に認めた時は、先づ、之にひとしからんことを求め、不賢者の蹉跌や失敗に對しては、その轍をふまぬだけの用意をする必要がありはせまいか。實行は即ち修養だといふのは、かゝる點をさしたのである。

家庭の人形となつて、生きた道具が何かの樣に見做されて、それで滿足して居られる女なら知らぬこと、苟くも相當の敎育を受け相當の知識を有して、新時代の婦人たる自覺を有するものであるなら、自ら婦人の地位を高め婦人の品位をたもつ上からしても、その身の

修養を怠るべからざることは明かであるから、これまでの婦人に通有な弱點と見做されて來た、自家の修養を忽にするといふことをば、何より先に打破つて、時代におくれぬ新知識の收穫をはかる一面には、絶えず婦徳の修養をはからなければなるまいと思ふ。色と香とを併せ有する所に花の美しさは認められる。知識はすぐれても、婦徳のともなはぬ女は、いゝは、香なき花の色のみ美しいのと同じではないか。人の眼を驚かすには足りようが、床しきものとして愛ではやされる資格はあるまい。人の世の花とたゝへられる婦人の誇りは、美しき知識の色と、床しき婦徳の香とを併せ保つ所におきたいものである。玉を磨くには他山の石を用ゐるとやら、故ハリス夫人の生涯の如き、新時代の女の鑑として、之より學ぶべきふしは尠くないやうに考へられるから、こゝに、その美點として傳へられることを述べて、賢を見てひとしからんことを希ふ人々の參考に供へやう。重ねていふが、修養は實行によつて意味を生ずる。他の美點を認めても、之を學び得うでは、修養にはならぬ譯である。

## 二、夫人の略歴

フロラ、ベスト、ハリス夫人は、六十年の生涯を神のため夫のため、人のために捧げて、去る明治四十二年の秋のはじめ、かねて埋骨の地と定められた美しの大和の都、東京に於て逝去された。生れは米國で、メードウエルの高等女學校を經てアービング大學に三年の業を卒え、更に、アレガネ大學の考試に應ぜられて、文學士の稱號を與へられた。これが、ハリス博士に嫁ぐ前の學歷であるが、文學については、ことに深き嗜好を有せられ、學生時代から、文才を以て師友の間にたゝへられて居たといふ、それが、深厚なる信仰の上に立たれてから、外國傳道に一身を捧げたといふ希望を懷かれ、明治六年の十月、日本へ派遣さるべきハリス博士と結婚するにいたつたのである。そして、日本へ傳道の門出は、夫人のためには、樂しかるべき新婚の旅行で、明治六年の十二月には、冬の粧ひいか

めしき富岳の雄姿に、歡喜の胸を躍らせつゝ、夫妻相携へて横濱に着かれたのであつた。爾來三十五年間、夫人は、その所謂『美しの大和』の知己として、わが同胞を愛し後進を導き、健康すぐれざる身を以て、よく博士を助け、神のため人類のため力を盡されたことは、人間の業と思はれぬ位尊いものである。日本傳道の半途に、病氣のため一度母國に歸られたけれども、その間にもやはり、彼地に於ける同胞のため、絶えず心を碎き力をつくされたので、夫人が生涯の心血は、實に、『美しの大和』のためにそゝがれたものと見るもよいのである。中にも同情に堪へぬ一事は、夫人がわが國への再度の航海中、掌上の珠といつくしまれた一女兒を亡はれたことである。明治十年の冬、夫人は母國に歸られて、フロレンスと呼ぶ一女を擧げられたのであつたが、その翌十一年の十月、ハリス博士に伴はれて、再び日本に來らんとする航海中に、この愛兒を亡ふの悲慘をみるに到つたのである。何事も神の攝理と思ひながらも、後にも先にも無いたゞ一人の愛兒を、不自由勝ちな航海の途上に亡はれた夫人の悲みはどうあつたらう。後年（明治十四年）夫人が紀貫之



の土佐日記の英譯を企てられたのは、たゞ日本文學を愛好した結果としてのみは言はれない。貫之も航海の途上に京にて生れた一女兒を亡うて居る。土佐日記の一編は、子を先だてた悲しさと航海のわびしさとで織なされた涙の文字である。

　あるものと忘れつゝなほ亡き人をいづらと問ふぞ悲しかりける。

　世の中に思ひあれども子を思ふ思にまさるおもひなきかな。

　忘れ貝ひろひしもせじ白玉をこふるをだにもかたみと思はん。

英譯の筆を執る迄に、夫人はかゝる歌を如何にみられたであらう。脊の君ハリス博士すら、メソヂスト宣教二十五年記念會の會場に於て「われら夫婦の心は常に日本の土地を離るゝことなし。われらの愛兒は、彼處に眠れるにあらずや」といはれたのをみても、他よりも愛情濃やかな夫人の心の影をしのぶに餘あることと思ふ。夫人の遺骸は、今、この愛兒の墓と並んで青山の墓地に横へられてある。『われ生れば爾らも生きん』と彫られた墓碑の前にたつと、愛の權化ハリス夫人の溫容が眼にせまるを覺えるであらう。

## 三、夫人の修養

内村鑑三氏は、函館時代からの夫人の知人な相であるが、夫人の葬儀を營まるゝに當り、友人總代として夫人に對する感想を述べられた中に、次の如きふしがある。

「彼女は人の善を見るの非常の力を具へて居つた。惡を見るの力は誰にもある。乍然、善を見るの力はごく少數の人のみにある。詩人ゲーテの云ひし如く、人の惡は、その表面に現はるゝが故に何人にも見ることが出來る。然し、その善は深く奥に潜むが故に、極少數の人のみ之を見ることが出來ると。而して、ハリス夫人は、この少數者の一人であつた。彼女はまた善を見るのみならず之を擴大する力を具へて居た。日本今日の如き社會に在つては、人は努めてそ

の善を外に現さゞるのみならず、社會の嘲笑冷遇を恐れて、之を深く心の奥に匿さんとする。而して、その結果として、善は益〻萎微して終に殆ど認め難きに至る。斯る時に方りハリス夫人の如き人があつて其鋭き眼を以て斯くも萎微したる吾人の小善を發見して呉れ、之を擴大して吾人に示し、失せんとする吾人の希望を取返し、吾人に存在の理由を示し呉れると同時に、又、社會に對し、殊に吾人の敵に對し、吾人を辯言し呉るゝは、吾人に取り實に大なる恩惠である。而して、ハリス夫人は、斯くの如くにして、幾多の人を救つたと信ずる。余の如きも彼女により斯くの如くにして救はれたる者の一人である。余が已れに何の善きことなきを思うて、自暴自棄せんとせし時に、彼女は、余にも亦確かに或る美點の存することを示して呉れ、余をして幾度か回生の感あらしめた。而して余に余の美點を示し呉れしのみならず他人に對して、余の善を紹介して呉れ、余をして幾度となく思はざる所に思はざる同情者を得せしめた。』（山鹿氏編ハリス夫人による）




普通の人には他の善を認めるとすら出來難いのであるから、之を擴大することは、なほさら困難なことである。近い所に耀く婦人の眼は、よく他の缺點などを見出して居て、その人の噂でも出ると

すぐ之をけなす傾が多いのに、他の小善をも擴大してその人にも示し、外のものにも之を吹聽して呉れるといふのは、實に美しい同情ではないか。深い修養のある人にして、はじめてなし得べき美點とはいへ、我等の大に學ぶべき所だと思ふ。それから、夫人の文藻等についても、内村氏は、次のやうに述べられてある。

「夫人にして、若しも米國に在つてその天才を修養し、かつ之を發揮したならば、天晴第一流の女流文豪ともなられた事であらう。夫人が、インデペンデントなどに寄せられた詩歌が、いつもその紙面の第一面に記載せられるのは、文學者にとつては、その技量を證明する所の大名譽であるのは、世人のよく知る所であるが、ハリス夫人の投書は、一方ならず珍重せられて、その紙面の重要なる部分に記載せらるるのであつた。元來婦人が世にも稀なる文學の天才と、高尚なる氣品と大なる將來ある身にして、それらを盡く抛ちて日本の傳道に來られたのは大なる獻身である。（山鹿氏編ハリス夫人による）

夫人が、文學的天才を有されたことは、疑もないことであるが、その天才の發揮には相當の努力を要する。インデペンデントの寄書が、いつも重要視された一事から推しても、夫人は、日常に修養を忽にしなかつた一端をうかゞはれる。とかく不健康がちな身でありながら、我國の文學を愛好せられ、平安文學の研究に意を用ゐられたことなども特筆すべき點であらうが、夫人を知れる人をして、ハリス夫人は博く諸書を讀んで居られるから、何の邊からでも言葉がたきとなつて交際することが出來る、例へば進化論から話しかけても、高等批評より論じても、面白く應對して呉れると感歎せしめてゐた點は、讀書趣味を解せぬわが國の婦人にきかせたいことである。

## 四、美しき人格の光

日常の行爲は、おほひ難き人格の光であらねばならぬ。「夫人の行を通してキリストの影を仰ぐ」と言はれる程、ハリス夫人の行ひには、常人の及び難い幾多

の美點が多かつたので、山鹿旗之進氏の手になつた『ハリス夫人』の如きは、全編ことごとく、この美しき人格の光を以て充されてをる位であるが、こゝには、その中の數節をかりて、我等の心の糧となるべきふしを示さう。

神道實行派に柴田禮一といふ老敎師があるこの敎師は一家の見識を懷き明治十九年頃に『敎林』と題する雜誌を發行して、その主張を發表した事がある。明治二十六年、米國シカゴに於て、大博覽會の催ありしとき、之と同時同所に、萬國宗敎會議も開かれたが、柴田敎師は、我國の神道を代表して出席した。敎師は、かねてハリス監督と同夫人の高德を聞及んで居たから、桑港に上陸するや否や、直にハリス監督を訪ひ、且つ夫人にも面會して、宗敎大會に於て朗讀すべき論文の訂正を乞ふた。所が、聞きしにも違はぬ深切の待遇



そして、厚意を快く承諾された。教師は土産に、日本の銘茶を贈つたら夫人は大層悅ばれたさうである。論文は、丁寧に訂正して渡されたが、いよ〳〵今朝はシカゴに向つて出立といふ早朝に、夫人は態〻、オークランドより桑港に出向きて、停車場に教師の發車を見送られた。そして、夫人の言はれるには、『私は鳥渡氣がつかぬ點がありましたから、御發車前に是非今一度御面會しやうと思うて參りました』と。そして三種の神器のうち珠につきて何か訂正する所があつたらしいとのことであつた。夫人の申されるには、『同じ珠でも幾らもござりますがこの貴い珠は、この珠の字でなければなりませぬ』とのことであつた。夫人は、その論文をば、一は朗讀の際に讀み易きやう、一は紛失の虞なきやう、タイプライターにて二通に認め、その一通をば、行李にいれさせ、他の一通をば教師の衣服の裏に縫ひつけさせるなどその他萬事に心を添へられた。そして卒ざ發車といふ前になりて、夫人は、左も名殘惜しげに車窓に近づき、『私は生來多病の女でありますから、この度が、この世の最初の御面會にて、又最後の御面會になるかも知れませんけれども、再び天國にて御眼に罹ります。私の知る所では、佛教は無神論の樣でありますけれども貴師のは、有神論でありますから、シカゴでは乾度貴師を歡迎いたしませう』といはれた。

由來、宗教家などゝいふものは、その信仰が堅ければかたい程偏狹に陷つて、他宗の者などは目の敵のやうに思つて居るのが常であるのに、ハリス夫人が、その異教徒のために、あらゆる便宜を與へられたといふのは、何たる偉大な行であらう。愛の權化、愛の權化、我等はこの語をハリス婦人に冠することの極めてふさはしきを思ふのである。夫人は、平常召使などを遇するにも親切なものでそこにも常人の及ばぬ美點を認められる。

ハリス夫人は、嘗て、一度も商人の品物を高し安しと値切つた事が無いさうである。僕婢の仲間同士が

見聞した他の多くの奥様方に比べては、これが、極めて珍しいことなので、僕婢はまづこれにも敬服したのである。偶ま、物賣が雨に濡れて來る時には、身の爲め惡し。衣服を乾せよと、内に入れて暖爐にあたらせたのである。乃で彼等はまた感服したのである。靑山學院の構内に、數人のお客を招待する時には、臨時に近隣の厨人を借入るゝ事がある。宴會終れば、監督夫婦は、勝手に來りて『厨人さん、皆さんのお骨折で御料理が大層よく出來ました。寔に難有うございます』と禮をいふ。乃で彼等が悅服したのである。一年三百六十五日永い月日のうちには折ふし怠惰けて油賣る時の無いではないが、縱し、そこを見つかつて、此方ではつと思うても『奥様の方では、一度も忌な顏をなされた事なく、一言もお叱りなされた事がムりませぬ』と、乃で、彼等は、心服せざるを得なかつた。（山鹿氏談ハリス夫人による）

栗木初次郎といふは、妻みねとゝもに、明治三十八年の四月から、四十一年の十一月まで、ハリス監督の許に奉公したもので、栗木は、専ら勝手元を働き、妻のみね子は、部屋の掃除など奥向の事をして居つたが。ハリス夫人は又なく眼をかけ親切に使うて呉れた。そのうち、みね子は、妊娠したれば、夫人の歡び一方ならず、それより後は、日頃にまして彼を勞り、身重の軀で、二階の昇降りは衞生にわるしとて、産前四ヶ月の間は、態々別人を雇入れてみね子の代りをさせた。その他に尙ほ風の吹く時、砂のたつ日などは『お前さんの身體で斯樣な天氣に外出は害になるから、』とて用を遂させぬ。よくせきの場合には、人力車にのせて外へ出れた。みね子のいふには『今思出しても奥様のお蔭で、身分不相應な養生をいたしました。それは、産前、身體が丈夫でなければならぬからとて、一ヶ月程は、毎朝、私のためにスープを飲めよと仰せられました。奥さまは『私は常の身體、お前は大切の身體故、私はスープを飲まずともよいから、お前だけは是非飲んで呉れ』と被仰いました。私は、あまりの御親切に忝ないやら、

勿體ないやら、兎角の御返事も出ませねば却つて御不興のやうでありましたから、そのお言葉に従ひました。月滿ちて兒を産みおとしますと、それから毎日一度は、乾度赤兒に湯をつかうてやれと被仰つて、お指圖して下さりました。何でも斯様に百日以上も續いた事で厶りませう。私風情のものが、高價の石炭を毎日燒いてつかひ湯を沸すことは、冥加に餘る次第であります。それからお暇をいただき良人がいよ〳〵商法を始める様になりました時、『願はぬことだが、萬一、商賣に損でもして、二進も三進も足掻のとれないやうな時には、男はどうでも身の振方がつくが、お前とその兒だけは私が引取つてやります。遠慮なくいつでもお出なさい』といはれました。」云云(山鹿氏編ハリス夫人による)

如何に自家に召使ふ者とはいへ、斯くまでに慈悲をかけて、いたはることは、普通の人のなし得ることだらうか。美しき人格の光は、その人の日常の行爲をてらすとゝもに他の人の心の闇をも照さずにはやまぬ。我等はハリス夫人の人格より學ぶべきふしの殊に多きをみとめるのである。

## 五、妻としてのハリス夫人

(一)學問は飯と心得べし。腹に飽くがためなり。掛物などのやうに、人に見せんずる爲めにはあらず。(二)學問は置所によりて善惡がわかる。腹の下よし。鼻のさきわるし。(三)學問は輕わざのやうにするがわるし。輕業は、人を眼下に見おろし、人のあたまを踏むもの也。とは古人のものされた學問の心得である。所が、少し教育のある現代の女はその學問を掛物などの樣に心得てすぐ鼻のさきにかけ人にみせびらかさうとするから困るのである。ハリス夫人は、前にも述べた如く文學者としての天分を有する上に、夙く高等の教育を了へ、不斷の修養によつて、女としては、あり餘る程の學識をそなへて居られたが、毫も之を鼻にかけて物知りめいた振舞をすることの無かつたのみならず、博士に仕へて貞淑の妻だつたことは知れる人のひとしく

歎稱した所である。これも、山鹿氏の著に引例せる尾花信子氏の所感の一節をかりるとよく判る。

一、日常規則正しきこと。夫人は病身にてありながら、居常規則正しきを好ませられ博士の外出なされし後は、そのルームを綺麗に片づけ博士御歸宅後机に向ひ給ふとも、何一つとして御不自由なき樣、御注意なされ置かるゝこと、誠に周到なる御用意の程、他の驚くばかりにて候ひき。




二、來客に接して頗る快活なる談話をなされしこと。夫人には廿年以上の宿患あらせられしにも係らず、その來客に接し給ふや、努めて快活の態度に出で給ひ、客をして毫も不快の念を抱かしめざるやう注意なされ給ひき。(下略)

三、晴天の運動を慈善的になされしこと、夫人は病褥に親しみ給へども晴天拭ふが如き好き日和には、何時も腕車を驅り給ひて、一二時間の運動を市中になされ給ひき。その方法は、普通人のそれと異り、先づ病院を見舞れて、病魔のしもとに呻吟せらるゝ可憐の老若男女を慰藉し給ひ、或は道すが

ら、兵士、又は貧しき人に遇ひ給へば、親しく之を慰め又は物など與へなどして、只管に同情仁慈の御恵みを吝み給はざりき。時には面識なき人々を伴ひ歸りて、親しく種々の物語などし給ひ、物品を贈與なされてかへし給ふ事なども屢々にて候ひき(下略)

四、死にいたるも勤勞を惜み給はぬこと。積年の宿痾刻一刻と身に迫りて、前途現世に於ける存在の豫知せらるゝの時、如何に、意志堅固なる壯夫と雖も、落膽失望の淵に沈まざるものは少からん。況んや凡庸の人に於てをや。然るに、夫人の信仰と忠實とは、遂に如上の片影だも見出す能はざりき。夫人は、如何なる氣分勝れ給はぬ時と雖も、かつて讀書を廢し給ひしとなく、或は新聞に、或は小說に、或は古の物語、土佐日記、及和歌等に、一々妾をして朗讀せしめ、之を傾聽して、無上の樂みとなされ給ひき。その妙處に至り、感興油然とし給ふに於ては、御手づから之を抄錄し給ひて、改訂翻譯し給ひ之を知人の示し、又は英字新聞に寄書さるゝを常とし給ひき。

(鬼花信子氏寄信の一節)

この他、逸事として傳へられる中にも、夫人の淑德をしのぶに足るべきものはいくらもある。

三十八年、東京に歸つてから夫人は、奉公人などに就いての多少の心配があつた。その都度私には、打明けた相談があつたが、いつでも、結末には、「ミスターハリスは疲れて歸りますから（博士は常に旅行不在勝なり）私は、ゆつくり憩ませたいと思ひますそのことは決して話さないで下さいと」注意されたものだ(傳教所轄中村忠藏氏所感の一節)

ハリス夫人が日夜の祈禱は、只々良人の傳道に成功あれかしとの一念の外なかつた。されば、我身の健康兎角勝れざるのが、萬一、良人の傳道の妨となりはせぬかと只管それのみ心配して居られた。さればにや、監督が、地方を巡回し居るうちにも、夫人より受取る書信には、いつでも、傳道獎勵の文面であつた。嘗て、信濃なる飯田に滯留せし時、東京の夫人より寄信を受けられたが、その書中には、少

しく病の氣ある樣覺ゆれど、さして案じ給はる程の事ならねば、心殘りなく巡回傳道を終えて歸京し遊ばさる日を待ち侍る云々とあつた。然るに、その實、夫人の疾病は、咽喉炎にてなか／＼手重く、ドクトル、マクドナルド、ドクトル、フオールスの二名醫も立會ひ、最早一日も監督の外に在るべき時ならねばとて、夫人に告げず、親友ソーパル博士より急ぎ歸京せよとの電報を發した。それで、ハリス監督は夫人の病氣を知られたとの事である。（山鹿氏編）



（ハリス夫人にあげられし返事の一節）

今度いよ／＼旦那樣（ハリス博士をさす）が朝鮮からお歸りになるといふと、前以ていろ／＼お迎への仕度でございます。そして最早お着といふ二時間も前からいそいそ遊ばして、何處に病氣があるかと思ふやうに毫しもお苦し相なお顏はなさりませぬ。旦那樣はあれがお好きこれがお好きと、品々取揃へて、食事の時刻に遲れるも、御自分も食べずに、ちやんと待つておいでなさいます。それは／＼旦那

樣によくなさいます。（山鹿氏編ハリス夫人の一節）

夫唱へ婦從ふを舊時代の陋習と罵り、夫を夫とも思はず、男性化することを新時代の覺めたる女と心得て、しきりと新しがる不所存者にはハリス夫人の墓の土でも呑ませたいものである。

## 六、夫人の活動振

ハリス夫人は貞淑の聞え高かつたが、決して、わが婦人の或者の如く引込思案の人では無かつた。廿年來の宿痾のため、夫人自身では、體力の思ひにまかせぬを遺憾とせられたであらうが、精神方面の活動はその間しばしも休む所がなかつたので、その感化の力は頗る大なるものがあつたのである。かくて病褥に親しみながらも、よく博士の傳道を助けられ、道のため、人のためにつくされた一事は、夫人を知る者の、敬服措く能はざる所である。かの、函館遺愛學校、靑山手藝學校、桑港婦人ホーム、仙臺育兒院等は、何れも夫人のか弱き手によつてその基をつくられたものと傳へられるが、桑港婦人ホーム創設當時の如き、一身を犧牲としての婦人の活動振は、有髯男子を後へに瞠着たらしめるものがある。これも、「ハリス夫人」の著者の筆をかりると、

或時、ハリス夫人は、桑港の支那町に、四拾餘人の日本の婦女が、惡人共の人身御供にあがつて、日夜涙ながらに淺ましき世渡りをして居るとの事を聞込まれて、何とか彼等を救出さん術もがなと苦心された。そして之がため、久しく唯一人で胸を痛めるのみであつたが、遂に、わが友人に打明けて申すには、「這麼ことは、牧師に相談しても屹度それは危險の事業だから思ひとまれといはれるだらうし、去りとて君の外に、誰にも賴む者なし。あはれ、わが心を察して、一臂の力を添へ給はれ」といはれた。乃で、友人も、一言二言位は、差控へる樣に諫言はしてみたものゝ、一端かうと思ひ詰めて決心したからには、容易に受引かるべくも見えなかつたので友人も「宜うございます。心易く思召されよ。私の最

善を盡し申さん」とて、それから警察署へ赴き、事情を申述べて、適當の保護を願うた。警察でも、矢張、その志は殊勝ながら、隨分危險な仕事だから貴下方だけでは……と鳥渡大事を取つて呉れたが、此方より達ての依賴に、職務柄、さらばとて數名の正服巡査を附添して呉れた。そしてなほ、その他に平服の巡査をも遣はして、蔭ながら、保護の上にも保護して呉れた。軈て、七人の巡査と共に警察を立出でんとする時、警部は、『喃々』と呼びとめ、なほ『心得の爲めに申上げて置くが、此處ぞと突止たる家に入る時には、巡査より先に入つてはなりませぬ。又、いよ〳〵その家に入りし後には、甚麼ことがあらうとも、決して、先方の身體に手を觸れてはなりませぬ。若しこの二つを忘れたなら、事によると思ひもよらぬ迷惑にあひ、逆まに難題を申込まれても、その時には、警察の力でも仕方がありませぬ宜しいか、含み置かれましたか』と念に念を入れて呉れた。かねて、市街の地圖で、これ〳〵と目星をつけて置いた家々へ、片端より這入つて見た。（中略）

見ると、稍暗い處に盛裝した支那婦人が二人居た。あつと驚いたが、心を靜めて、つか〳〵と進みより、唐突、『貴下は日本人ではありませんか』と問ひかけたら、先方でも不意を食つて、『いゝえ、然うではありません』とつい、日本語で口が滑つた。それから、ハリス夫人は、深切にその不心得を戒めて、『若し、貴女が職業を習ひたくば、敎へます。學問がなされたくば、學校へ入れてあげます。それ故、どうぞ、斯やうな悲しい怖しい處よりは、一時も早くお逃げなさい。私が一緒に案內いたします』いざとばかりに急立つれども、一向に應じて呉れない。『私共は、別に職業も覺えたくなく、學問もしたくなし。こゝに居るのは、黃白ほしさの醉興であります』と要らぬお世話と言はぬばかりの劍もほろゝの返答に、夫人は、尙ほも言葉をやさしくし、『さうでもありませうが、如何程黃白がありましても人間として、眞の神樣の道を踏外してはなりませぬ。さらばこれをお讀

み下され」とて携へたる教への小冊子を渡したけれども、彼等は『こんな本はみたくもなし』とて、人人の眼の前で引裂きました。流石の夫人も、この權幕に膽つぶれて尙ほも勸むる言葉も出でず、この花束は、私が、貴下等の身の上を心配し、且つその靈魂を愛する眞心のしるしであります。せめて、これだけは、お受取り下さい』とて、彼等がいつか悔改める期あるを祈念しつゝ、花束を一つ一つ分配されたが、その手先は、わな／＼と顫へて居つた。斯くて、その場を引揚げた後、ハリス夫人は『是で私の願が適ひました。よし、卽座の成功はないやうでも、神樣は必ず、私どもの祈禱をきいて下さいます。彼等は、いつか、何處ぞでその罪を悔改める時が厶いませう』といはれた。また／＼斯樣な醜業婦は澤山居るべき筈だけれども、その家屋の構造が所謂伏魔殿で素人にわからぬ仕掛がしてあるから、卒ざといふ急場に臨めば、普通の壁を鳥渡押すと、サッと開いて、次ぎの部屋に通じ、眞晝を欺く明るき部屋でも、人眼にかゝらぬ隱し鈕に、そと觸れば、黑白もわからぬ眞のやみとなる工合で、これには、警察官まで、頗る愕いて居つたさうである。

その當時、便船毎に上陸する多くの日本婦人の中には、惡漢のために欺かれて活きながら、地獄の苦みを受くるものなどもあつたので、ハリス夫人は、之を救ふためにかくの如き活動をなされたのである。今の世には、敎育のある婦人も大分ある。自覺ある婦人もすくなくはない。けれども、かゝる婦人程、犧牲的精神には乏しいかの觀がある。自分さへ滿足すれば、人はどうでもかまはぬといふのが、彼等の信條のやうにも見えはせまいか。自己を犧牲としても、他のために盡すは、大なる愛を有する者でなければなしえぬことである。ハリス夫人の大なる所は實にこゝに存するのである。我等の學ぶべき所もやはりこゝに見出されるのである。




# レーベン

## レーベンの特色と効能

レーベンは常持醫學士の發見に係るものにして米食人たる東洋人種に適合すべく和漢洋法を折衷して得たる植物性の藥物にして「リンサン」の多量に加味せる絶好の良劑なる事は醫學博士岡田、森戸山腦病院長等の證明による明白なる事實なり。

**醫治効用** は回性、興奮、鎭痙の三作用を兼備せる最新式の錠劑なれば腦、神經衰弱、頭痛、眩暈、逆上、便秘、不眠ヒステリー等を治癒し心神爽快元氣旺盛ならしめ殊に人生の快樂を奪はれて長へに悲歎憂愁の涙に暮るゝの人は皆何れも腦神經衰弱其婦人にありてはヒステリー患者なればなり故に以上記載の其一を患ふる人は最後の試藥として

レーベン百錠乃至二百錠を試みよ其効神速に顯はれて平靜和樂の健康體となり、得も云はれぬ愉快に其日を送る事を得べし、夫の大黄の下劑を主とせる粗藥にあらず、論より證據今直に試みよ ●本病患者には腦神經衰弱自然療法と精神療法とを發行所へ「ハガキ」にて申込次第進上す

定價

| | | |
|---|---|---|
| 三十錠 | 三十錢 | |
| 五十五錠 | 五十錢 | |
| 百錠 | 八十五錢 | |
| 二百錠 | 一圓六十錢 | |
| 四百錠 | 三圓 | |
| 八百錠 | 五圓五十錢 | |

各藥店にあり無ば發行所へ全國送費無料信用なき藥店にて他藥を賣付んとす注意

發行所

東京銀座弓町電話京橋三〇八番 振替東京七七七七番
大阪市安土町電東三二四六番 振替大阪三一四四番

弘濟藥院
中南定太郎

(その一)

統計學專攷　伊東祐穀先生著

大正元年

# 袖珍世界年鑑

全一册　菊判半截（縱五寸二分横三寸八分）
洋裝總クロース金文字入上製舶來上質紙鮮明刷頗美本
紙數　六百餘頁
定價金壹圓廿錢（郵稅八錢）

**大正二年一月卅一日迄——特價金壹圓**（外要送料）

本書は**著者の心血**を**滌ぎたる世界年鑑**の内容に倣ひ**日本の部、各國の部、世界の部、實用の部**の四大部に分ち大年鑑の粹を拔き精を萃め重きを新事實の報道に措き**記事の簡潔と携帶の便**とを以て**實用の資**に供せんとするものなり著者の統計學に篤き世既に定評あり去る明治三十九年中本書第一卷を創刊して再版を重ねし以來毎年復た續刊して殆んど**空前の盛況**を呈せるは本館の私かに誇りとする所にして爾來江湖の推奬により茲に更に第七卷大正元年分を刊行するの時機に達せり

本書は袖珍書なれば「ポッケット」挿入用として最も適當に一たび繙かば**宇内の大勢**を窺ふに足るべし然れども一部矮小の冊子能く精を悉すとのみ言はず廣汎の記事細大の事跡之を索むるに在來の**世界年鑑**あり特に本書を發行する所以抑も期する所なくんばあらず乃ち本書も又逐年校訂を加へ世界年鑑に先んじて恒に報道の速進を旨とし至便なる袖珍書として刻下需用の一端に適ひ以て國勢の隆運に副はんとするの微意なり而して本篇の内容が歳と共に更新し如何に改竄に留意せるかは切に愛讀諸君子の清覽を待つ所にして過る一ヶ年間に於ける世界の變遷も亦少しとせず其消長は斯の篇具さに説明の任に當るべきなり

東京日本橋本町　**博文館**　振替東京二四〇番

女（ろの二）

# 廣告御得意各位に謹告

本誌も彌〻當號を以て本年度の終刊と相成申候從て本年度に於ける本誌外各雜誌廣告に就き御得意方の深厚なる御同情に依り時節柄にも不拘好成績を擧げ候段弊館深く感謝する處に御座候玆に乍略儀紙上を以て拜謝の微意申陳べ候尙來年度も倍舊の御引立を蒙り度此段懇願仕候

追て**來年度本誌初刷廣告**は**十二月七日**を以て〆**切期日**と確定仕候へば歲末御多用の事と奉恐察候へども右期日迄に是非共御用命仰付られ候樣乍憚御手配被下度是又併せて奉希上候

東京市日本橋區本町

**博文館廣告係**

---

有益至便

# 御歳暮品

## 御進物用圖書切手調進仕候

●圖書切手は優美高雅なる函入にて其儘御進物用として最も適當に御座候●右圖書切手は本館發行の圖書中御隨意のものと御引替可申候●切手函中には約三百頁の美麗なる本館發行圖書總目錄相添へ圖書御撰擇の便に供し申候●圖書切手は本館及び全國各地賣捌店に於て持參の御方望みの圖書と引替可申候●地方よりの御注文は送料及雜費として別に金拾錢を申受く

東京本町 **博文館** 振替口座東京二四〇番

女(ろの三)

# 大正二年 當用日記

▽賣捌所は全國各地の書籍雜誌店及紙類文具店到る所にあり

全國に數百萬の需要者を有し更に海外にまで發展し殆ど博文館の獨占事業たるが如き觀ある日記類は編纂印刷製本の精を拔き美を凝らし近々市場に現はれんとす希くは倍舊の好評を賜はらんことを

常用日記は卷頭に皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表等色刷して掲ぐ……………

## 《當用日記定價》

大形（菊判）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）○正價五十五錢 郵税十四錢

中形（四六判）

總革製（舶來洋紙總革製金字入堅牢美本）○正價金八十錢 郵税十錢

特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）○正價金、拾錢 郵税十錢

上製（舶來洋紙總クロース金文字入）○正價金卅八錢 郵税十錢

小形（菊判半截）上製（舶來洋紙總クロース金文字入）○正價金三十錢 郵税八錢

紙數各五百四十餘頁

附錄 ●金錢出納錄●知己人名簿●雜錄●統計表●米價換算早見表●諸税則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年暦●徵兵規則……

電話番號本局 三〇三・二六二〇

發兌元 東京日本橋

# 懷中日記

博文館發行

趣向
體裁

（當用日記）日々欄には過去同月日の重要歷史、七曜、干支及び俳句を上欄に錄し天氣、寒暖、發信、受信及び摘要の記入欄を其傍に新設す尙各月の初めには其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新設し、每日記入欄には細罫を付し秩序ある記錄たらしむ

附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、四季名勝直覽、及び內外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり

（懷中日記）每月の初に當月の行事、食品目錄及び詩歌、俳句、遊覽案內を揭げ日々の上下欄に內外名家の格言を揭げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を附記し卷末には當用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸税則及最新重要の統計表等百頁を附す

▽取次希望の方は御申込次第精々御便利に御相談可仕候

懷中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮曆代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として揭げ細長形は背面に他の二種は腹部に鉛筆挿を設く

（（懷中日記定價））

**細長形**（舶來洋紙頓美本總クロース 金文字入 細長形 携帶至便）
▲正價金貳拾錢　郵稅貳錢

**上製**（舶來洋紙頓美本總クロース 金文字入 紙數三百〇六頁）
▲正價金拾八錢　郵稅貳錢

**並製**（舶來洋紙模クロース表紙 金文字入美本紙數三百六頁）
▲正價金拾貳錢　郵稅貳錢

紙數各三百〇六頁

附錄
◎雜錄◎統計表◎利子早見表◎諸種規則摘要◎郵便諸規則◎徵兵規則大要◎年齡早見表

本町三丁目 博文館

振替貯金口座 東京二百四十番

訂正を施し美裝せられたる新著

發行所 東京市日本橋區通三丁目 振替東京一七一九番 成美堂書店

今村順子先生
小谷野千代子先生 合著

尋常小學 裁縫教本

全壹冊 價四十五錢 送料八錢

三訂 裁縫教授法

全壹冊 價六十錢 送料八錢

今村順子先生著

新編 裁縫教科書

●文部省檢定出願中●

全三冊 上編價五十五錢 中編價四十錢 下編價六十錢 送料各八錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 振替東京二八〇九番 目黑書店

本書の最良なるは既に女子教育界に定評あれば今爰に云ふを欲せず

女(ろの八)

# 越路の空

内藤晨露

皇太后陛下御歌

大宮のうちにゐてさへ暑き日をいかなる
山か君はこゆらむ

明治十一年の夏より秋へかけて、先帝陛下は北越へ御巡幸あらせられた。うら若き皇太后陛下は、兩國停車場まで奉送あらせられ少時の別れながら堪へがたく惜ませ給うた、見送つた近侍の人々は、何れも御胸のうちを奉察して、涙垂れぬ者とてはなかつた。

然し、御發車時刻は來て、先帝は御巡幸の途に上らせ給うた。

還御あらせられた皇太后陛下は、廣き大宮も寺の如くまた空虚の如く物寂しくあらせられたであらう。

かゝる間に日は行き、月に過ぎて、御庭の森林の青葉も萎えしぼむばかり烈しい暑さの夏が來た。――夢の間もえわすれ給はぬ帝の御上、まして遠き越路の、その昔は鬼も棲めりといふ、嶮しき山々。その山々を大宮のうちさへ暑き夏の眞晝に、帝はいかにして超えさせ給ふであらう?

「いかなる山か」、これがこの一首の生命を爲してゐる切なる御心を、はるかに奉察することが出來るのである

同じ年に詠ませ給へるに、

初雁をまつとはなしにこの秋に越路の空
のながめられける

空には絹を流したやうな雲が浮び、その下に、野の草は物懐しいさまざまの色を染めて群り咲く秋は來た夜は星天のすみ渡るにつけ、初雁をまつとはなしに打眺め給ふ越路の空、御座所近き御庭のすみには少さき蟲も啼交したであらう。

御うら若き皇太后陛下より先帝へ送らせ給へる御歌――まことに、大宮のうちにして今日は如何なる御歌のあるべき、その昔の御歌を拜しまつるにつけ、われに、かしこみまつるべき言葉はなく、頬を傳ふものはたゞ恐懼措く能はざる涙である。



# 西陣の風俗

森の女

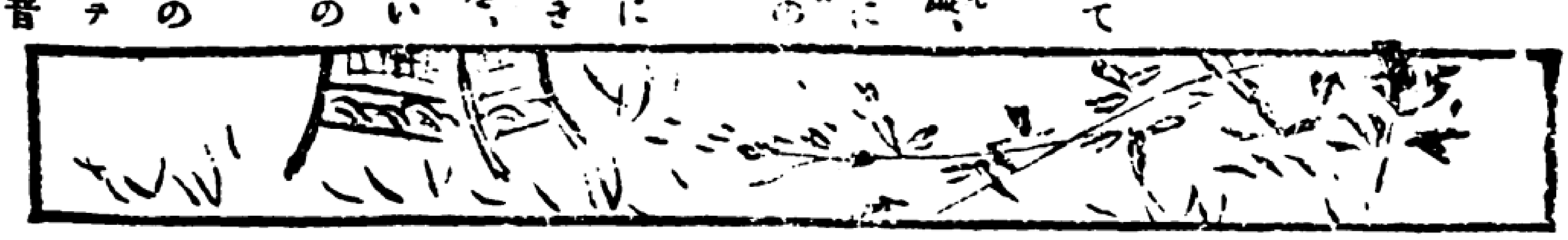
## △糸屋町

京は戊亥、西陣の中ほどに糸屋町とて、あの名高い西陣織の原料品、白綵透綾の生絲の商家が入町、軒を並べて居ります。

知る人は御存知で御座いませう、ぴか〳〵と光る迄に磨けた荒格子の表戸、定紋打つたる五幅布の白麻の暖簾、壹間こゝの敷居を跨ぐ人は、主人も番頭も若者も、丁稚を除く外は皆、眞夏でも淡な重ね着で足袋をはき羅紗やお召の一幅前垂を締めて居ります、肩には何れも黒紋の白一反風呂敷を細長く疊んで掛けて、一見糸屋町の人」と解る姿、

敷居を跨ぎますれば、店の間には家の主人と是等のお客とが賣買の掛引を待ち合せた、他のお客に見えない様にして、爪彈きのよい算盤で價を立てゝ居ります、漸う價が定まりますれば、雙方がぽん〳〵と大きく三度手を叩きます、それは昔の武士の金打とも同じく、堅い約束の證なので御ざいます、他のお客は横の空地に暫く待つ間を、ぱち〳〵と碁石や將棊を戰はして居りますが、ほんたうに繁華な所の血氣盛い人が御覽になつたら、意氣地がない程、悠長で御座います。若い〳〵男の人でも、顏色はどう致しましても蒼白がゝつて、あの生氣の溢れた赤い血の人は稀にも見られないので御座います。

男でさへも此樣な者を、まして女は床の飾物の樣で御座います。斯ふ云ふ私も實はこの糸屋町に生れた乙女なので御座いますが、實際つまらのは姫で今では漸う女學校へ通はせて貰ふ樣になつて、奥の離れも一部分はカーテンと變り、裏の立てつめた小屋もグラウンドとはなりました。けれど官役のおうちのお友達が花見遊山に憧れ音





樂會に連れ立つ等の事は、見てもく許して戴けませぬの。學校へ行くにも雨が降れば遠い道を走る車、重い荷物なれば送つて來る使ひも皆「お嬢様」として近所の手前を飾る爲で御座います。

只一人の姉などは、やはり昔風の遊藝萬端に念を入れて艶やかな町娘風として育てられましたので御座います。

幼な心にも私は美しい姉さんが、お針差な横に置いて優しい聲で長歌うたひながら、御細工物を遊ばして入らしたのをさへ覺えて居ります。そのかはりやはり内氣でして、至つて弱々しう御座いました。母はいつも人様の前に私を出した時「この子の樣にお轉婆では困りますけれど、姉娘の樣に内氣では又一生苦勞が絶えませぬ」と。

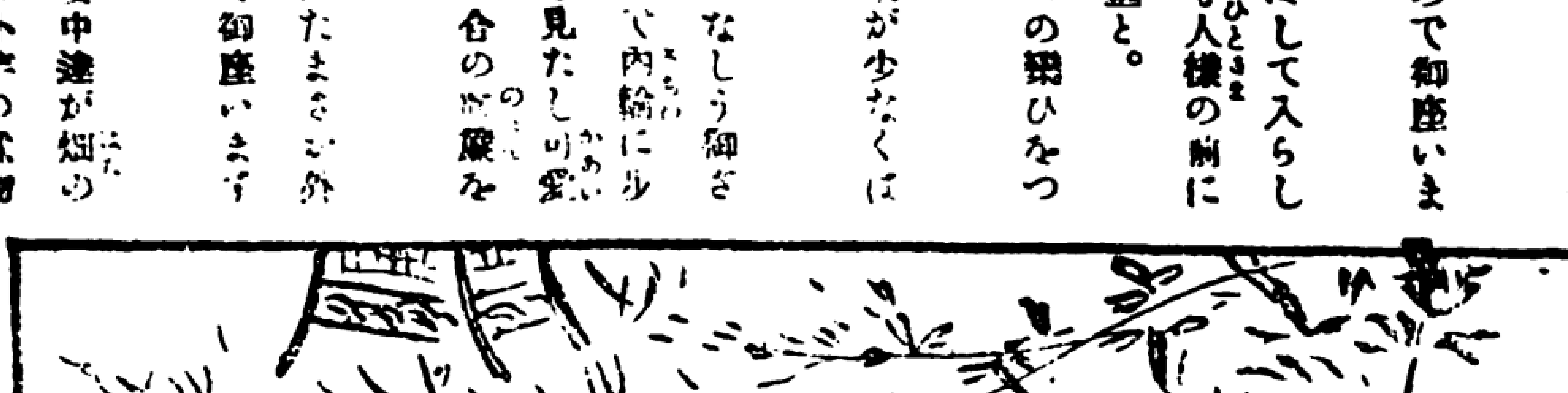
姉娘、姉娘つて姉さまはもう大阪の遠しい市の中に二人迄子をもつたホーム、ホーム、スヰトトホームの築ひをつくつて居る人ですの。

私の家、許りではありません。糸屋町は總體、家内の者が他の商賣の人より弱くて、病人のある家が少なくは御座いません、勿論運動が足らなくて外の空氣にあたる折りが少ないためでは御ざいますが。

家庭は何處の家庭も嚴格で、家には行儀見習の女中もありますから私の樣なお轉婆でも、家ではおとなしう御ざいます。大きなお枕を胸高に締めて衞生も何もあつた者でなく紐、帶を固くく結び合して前にかゞんで内輪に歩かされますの、行儀わるく物を食べましたら牛になると叱られます、奧深い家の中では門を通る樂隊も見たし可愛らしい小學生の切りに行き交ふ有樣も眺めたいので御座いますが、其時にはいつも店の間と室内との合の暖簾をそつと揚げて一闘越しに門通りを見るので御座います。

母は一番それが樂しみで、此時だけ戸外の有樣や邊りの人が見えて、その他にお彼岸や親類付合にたまさか外に出る位です、女中達でも晩に賓物屋へ行くのが關の山、晝は一歩も外出致させませぬ。さうで御座いますもの前にも云つた樣な割合病人が多くて蝋細工の樣な顏色の人も稀らしくは御座いません。

食物も朝はお汁にお漬物、晝も精物で、晩には心許りのお肴がつきまして、それを若い者、丁稚、女中達が畑の鰮の賣り歩いた帳場に腰かけて戴きます、月の中で一日と十五日には鮭に牛肉のお汁、棒鱈に蒟蒻に小芋の煮物





お鮓しがつきます番頭は最少し上等で家内の者は心の儘で御座います。

何は兎まれ行儀正しく富家と見なされて居る糸屋町は繊帳に行燈式でその鋪、人の目につき易い所で御ざいますから私どもは毎々初春の雑誌で承りますあの青春男女の膝つき合したカルタ會などは兎ても見られなく兎ても行はれないことで御座います。ですけれどもやはりうら若い女のことですものあの様な記事を讀みますれば胸の血が躍るやうで御座います、爲て見たう御ざいますわ一度だけでも。あゝやつぱし私は壓へつけられたる糸屋町の箱入にせられた娘で御ざいます。

一緒に女學校へ通つた中田樣も大阪の今を時めく富家に御嫁ぎになりました根本樣も下京の華やかな劉硝家の奥樣として皆糸屋町の娘はこの界隈を抜けて賑やかな所へ嫁つて終ひまして他から來た人が糸屋町の奥樣として皆その儘の家風を守り難かしい務めを盡して行くので御座います。

## △織　屋　町

糸屋町に打續く家は總て西陣物の織屋なんで御座います、お千代は純粋の、織屋娘で、白く濃く塗つた顔に殊さら頰に小さい黑子が愛嬌を見せて、別に取り立てるといふ所は御座いませんが顔といひ姿といひ丸々と肥つて着物に掛けた黑襦子の襟が一しほ引立てゝ居ります、前に置かれた機には、はや新らしい柄のお召が大半仕上げられて、日やけのせぬ白い手に取換へられる梭は絶え間なしに、お綛に細く美しい縦糸の中を縫つて其度にスッタンタン、スッタンタンといふ氣たゝましい機の音は響いて居りました、一分〳〵長う出來て行くお絹（織物）にはお千代の精力がそれだけ含まれて行くので御座います、分は寸となりましたお千代はやはり上氣した頭を俯下げて輝いた眼をお綛の上に見つめて居ります、突然横合から。

『京でー生れーて神田ーでーそーだーち、今ぢやーおえどーの、あの左ー褄ー、チョン〳〵スッタンタンと機の調子に和して若い男の聲が聞えました。

あちこちの機子、俗に云ふおへこの口からも身だらがましい歌が始まつて可愛らしいお千代の脣からも見かけに



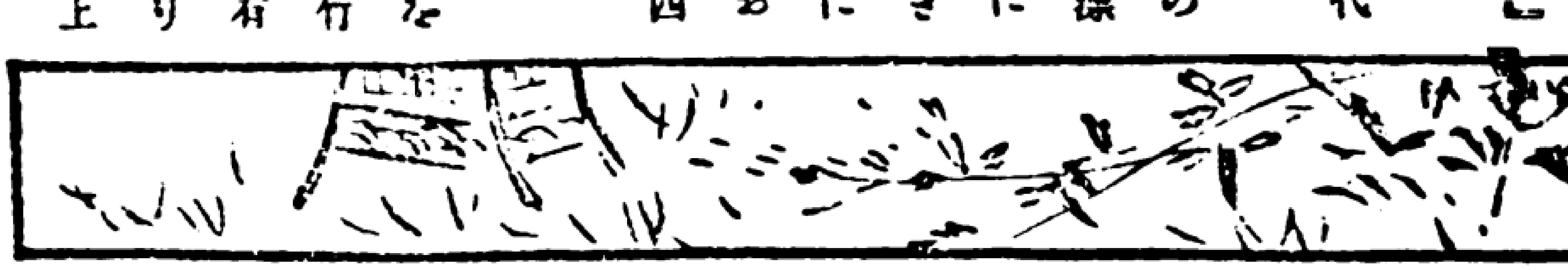


よらぬ俗な歌が流れました。實際お千代の親は、『女の學問は生意氣になる』と信じて尋常卒業後家の手助けがてらお千代は機屋におろされてしまひました。お千代は其後遊學の人と口きゝ合つて居るのですもの自然高尚な心は抜けて、年立ち皆の花開くがまゝに『機屋の娘』と見なされる樣な情味たつぷりの風情となりましたのも無理はないので御座います。

斯うしてお千代は毎日〳〵朝は六時頃から夜十時近く迄他の織子と同じく精々と働いて一體物稀らしい乙女時代に何の樂しみがあるんでせう。

美しう織れて行くお絹の出來榮えだけが樂しみなんでせうか？　いえ〳〵やはりお千代も春闌なはの女ですもの若い者に有り勝ちな好みがあるので御座います。お千代は機織る間にも時々恍惚として云ひしれぬ微笑み頬に漂はして居りますが、あれは大好きなお芝居のたのしかつた事を思ひ出して居るので御座います。ですもの月の中に只二日しかない、一日と十五日の休日をまちに待つて朝早うから髪結床や風呂場などを賑やして夜後遅つてりと磨き上げた姿を近所の盛り場や四季折々の花の名所等に表します、晩には必ず近所の芝居、寄席等に陣取つて半月に只一度しかない休日を心から樂しむので御座います、この日は西陣機屋一般の人が揃て遊び樂しむので、これがお千代はじめ、すべての人の生命なので御座います風儀に關せない機屋と機り覺しい素風とか兩方維持し合つて西陣をつくつて居ると思へば不思議な對照では御座いますまいか。

此頃まではむかしの風儀のこり町人は猶以て御旗本衆五六千石取らるゝは供の中小姓は紙合羽を着し木綿合羽を所持せしは家老用人ばかりなり、當時は小もの中間下女半女まで木綿合羽を着す世界になれり元祿八年堺町市村竹之丞座に京都より女がた開山水木辰之助下りて顔見せに鑓おどりをして末世に名を殘すそのとき水木辰之助傾城有馬の富士といふ狂言にて傾城に成て装束は緋の小袖無紋のものを着したり今は金織金襴のたぐひ名もしらぬ唐すりを着し右の如く美麗を第一とするなり元祿時代までかの者は緋繻子装束に金銀の箔にて紋所を付しが高なれば左のみ上下は寮はなし次第〳〵におごりに長ずるなり畢竟金銀が世に澤山に行はれたりしなり。（元正間記）



# 新らしい女の解剖

二木かつ女

## △獨身と自由

所謂新しい女と云へば、妾には必ず新教育を受けた積極的の女と云ふ事が、直ぐ聯想に浮びます。惡く申せばお轉婆畠の產物――お茶ピー肌の御令孃。それが不思議に九尺二間の棟割長屋からお生まれ遊ばさないのも、大なる特色であるやうに思はれます。然う申すと、何んだか初めから惡口を云ふやうに聞えますが、決してそんな浮調子なお話ではありませんので――敎育のない所謂下層社會からは、そんな智識的な自意識の強い女は先づ境遇上から云つても產出しやうがないのでせう。すると題目の新しい女と云ふのは、少くとも肺病患者と一般、重に中流以上の方の家庭に育まれる特質を有つて居るやうに思はれます。それほど內攻的に、秘密發育を遂げる事は驚くべきもので、嚴格くすれば、爲るほど成長し、揉みほぐさうとすればするほど瘤のやうに隆起してきます。「おや〳〵、自家の娘が……あの娘がまさか……」と云つて、家出とか姙娠とか云ふやうな事實にぶッつかつて初めて驚くのは、嚴格家の御親父樣方ばかりではありますまい。しかし新しいにも種々性質がありますから、然う一概に申上げる譯にはいきません。けれども、これだけは一つ、新しい女に通有の性質かと思はれます、曰く自由を得たい！　これが一步誤ると、たゞの氣儘、たゞの勝手になつて、所謂下層社會の無智な人々に變らないやうな事になるのですが、そこは新敎育を受けておいで遊ばすだけに、淺猿しい女性の本性を露骨にはお現はしなさらない。しかも獨立の氣象に過ぎた所謂新しい女子は、あらゆる舊來の習慣や道德や法律には柔順に服する事が出來ないと見えます。――それは新しい男子方も然うでせうけれど――今の夫婦關係や家庭事情を以て、なほ女子に甚しい屈辱があると信じて、好んで、

或はやむなく、詮方なく、獨身を御主張あそばすのでもござんせう。そこで問題は面白くなります、玆に一人の男方があつて、その方がサイノロジーの本能をお有ち遊ばして居て、主客轉倒、夫妻其位置を異にするやうな方があるとしたら如何でせう。新しい女は「妾達はもッと〱内部生活をもつてゐる深刻なものだ」と被仰られるに違ひありますまい。一體如何すれば可いと被仰るんでせうね。



## △戀愛と結婚

新しい女が、あの男ならば風采から見ても、男前から云つても、社會的の地位から云つても、箇人としての趣味好尚から云つても、些ッと悪い氣もしないとお思召しても、いざ結婚と云ふ事になると、なかなか深い心理を吐露遊ばす。そんな俠骨漢のやうな男子方に厭氣をさすのが第一歩でもありませうけれど、「妾の戀愛は必ずしも結婚を意味しない!」とお出で遊ばす。一面には其智識が、、、わづらひとなつて、知らず〱男子の征服を受けるのも怖しいのでござんせう。と云つて、長い一生の間尼さんのやうなうら寂しい生活に

満足遊ばすことの出來ないのも・新しい女性の特色のやうに思はれます。妾に云はせれば、絢爛人の眼を奪ふやうな風をしてゐる舞姫も、おつに印象的とか象徴的とか何んとか云ふ流行語を狙つて、黒いものづくめや茶色づくめで、人の眼を牽く用意周到も、申さば同じやうな修飾の悲哀とやらかと存じられます。修飾の悲哀と云へば、必ずしも其扮装や髪の結ひ樣ばかりではありません、「男の爲る事が何故女に出來ないか」といふ意氣込みは、英國の婦人などに比べると、現今日本に出來あがつた或る一部の新しい女などは、非常に興味深いコントラストのやうに思はれます。

## △女の參政權と快樂主義

いづれの國、いづの歷史にも、新しい女が男女平等論に中毒した氣味のあるのは止むを得ませんけれど、先頭頻りに喧傳された――そして益々盛んになりつゝある英國の女權擴張論はど恐ろしくも亦物凄いものはござんすまい。妾が知つてゐる範圍で、女子が國會議員の選擧權を有してゐる國には、芬蘭、ニユージーランド、などあります。英國は以上の二國とは同じでない、然う容易く此の大問題を決する事は出來ません。が、しかし英國の新しい婦人連は邪が非でもこれを得やうとして居ます。或時は大臣を襲撃して、膝に大怪我をさせるなど、誠に大和民族に生れた女性には、夢想する事も出來ない亂暴――寧ろ狂態と云はざるを得ない事で。西洋の新しい女が日本の新しい女に比べて、一倍節制に乏しく、そして極端であるといふ事は此の一事件でよく解することが出來ませう。と云つて妾は必ずしも蟲も殺さないやうなツンと澄ました樣子をして、其實はあの蔭でトカゲ食らうか杜鵑と云つた風の、所謂ノラ猫式の新しい女に推讃の辭を呈する譯にはまゐりませぬ、少くとも覇氣の缺けてゐる點だけでも、本家は本家、もち屋はもち屋、流石に西洋の新しい女は識見もあり主張もあり意志も感情も強く、そして爭ふ處までは矢でも鐵砲でも爭つて、飽まで積極的に公私の生活に活動し、女の腕前を見せてやらうと云ふ處

は素晴らくも亦見覺しいと存じます。そこへ行くと、日本の新しい女にも這麼事をお教し〻申してさしあげたい。『どうせお遣りになる位なら、辨慶の向ふ脛をかつぱらつて泣面をさせた、牛若丸の呼吸でおやりなさい』と。おや御免なさいましよ。

メゾン鴻の巣も結構、よか樓も結構、青い酒も赤い酒も結構々々。妾のやうな下町育ちの無學女でも、所謂新しい女がそんな處へ出入するのを、決して不思議がるほどの野暮テンでは御座んせんが、快樂主義が何麼主義か、アナクレオンでもドンフワンでも、人間らしい生活を有つてゐない和製のゴム菓子見たやうな有象無象を、必ず眼中にお入れ遊ばしますなよ。——「男の爲る事が何故女に出來ないか」と被仰るのなら猶更のこと、男の生活でも人間の生活でもなんでもない、情調と氣分の中に遣る瀨ない思ひをして、ガチガチする頭を赤い酒に腐蝕させてゐる男らしくない男を、男だなど丶思つたら大間違ひ本統に新しい女の恥だと存じます。が若しこれが新しい女の廣告にでもなると思召すのなら、寧ろかぶとを脱いで、お江戸八百八町を、樂隊づきの廣告旗を押立て丶練り歩くのに限ります。

少くとも多少レフワインされた生活が妾達の尊敬し羨慕する新しい女の生活だといたしましたら、强い酒を飲んで花街を遊び廻はるやうな生活は、自暴自棄になつた投機師の妻君か、品性の墮落し盡した壯士役者の女房にでもありさうな逃口ではござんすまいか。尤もその邊から大藝術大傑作が產出れるのだと被仰られると、妾共にはグーの音もござんせんけれど——。

## △義務と服從

新しい女は、此義務と服從といふ文字ほど嫌ひなものはないやうに思はれます。親に對しても、社會に對しても果ては自己に對しても義務と服從とを缺く。『强いやうでも弱いからだ。女は女だ！』と利いた風の男子方に大きな言を云はれる所以でもありませう。それは新しい女が箇人主義者であるからでもあるでせう

が、義務のない生活ほど箇人に取つて無責任なものはござんすまい。けれど、これほど人類に取つて迷惑なことも亦ござんすまい。

西洋は耶蘇敎國なだけに、宣誓といふ事は今尚重きを置いて居る樣子です。結婚式の席上でも、新郎新婦は牧師の前で誓ひを交はす、されど其誓ひは同文ではありません、新婦のには（obey）即ち夫に服從すると云ふ一



月やどる澤田のおもにふす鴫のこほりよりたつ明方のそら　頓阿法師

句が、新夫の妻を（maintain）即ち扶養するといふ文句の代りにあります。詳しく云へば夫に服從の義務はないが、妻は夫に服從の誓ひをせねばならぬのです。西洋の女に取つては、此の服從の誓ひは新しい女と同樣、必ずしも雲烟過眼視する譯にはまゐりません。時によるとムニヤ／＼と此服從丈けの所を誤魔化して仕舞ふのもあるとの事です。惡口屋は、或女は（go gay）と云ふのが語音が近くて、其

意が面白いからとて、爲ういふ者もあると冷かして居ます。

又一教會堂で勞働者の結婚式が行はれた時、牧師が此の誓ひを嫁に言はせやうとしたけれども、服從の一語はどうしても澁つて言はなかつた、逞ましき新夫は聲を勵まして、"Go on, parson, I'll make her"『先をお讀みなさい、私がさうさせます』と云つたのが今でも一話柄になつてるさうです。

### △婦人解放論とヴヰクトリア女皇

前の話とは違つて、ヴヰクトリア女皇御結婚の時、時のカンタベリー大僧正、恐れながら此の一語を省きてはと申し上げたるに、女皇には御氣色却つて麗はしからず、"I wish to be married as a woman, not as a queen"『朕は女皇としてにあらず、女として結婚したし』と、宣ふたといふ話があります。所謂婦人の解放論を、喃々するやうな浮薄な一部の新しい女の爲に、何と興味ある皮肉ではありますまいか。

妾もお粗末ながら女の一人でありますから、婦人解放論も機會さへあつたら、驥尾に附してどし／＼やりたいと思つて居ますが、時候の故で黴が生えたり、暑さの故でだらけてしまふやうな飴細工や眞粉細工の新しい女は眞平御免。況して強烈な青い酒や赤い酒で譯の分らぬ新しい氣分情調を聞かされるやうな時代が長く續くのなら、此麼新しい方々には早く魚河岸のかみさんにでもなつて、宿六をお尻に敷いて天下泰平に暮していたゞいた方が、どんなに妾達の爲に幸福な次第でございませう。



# 女工生活の一日

重松淑子

袴の燒穴を氣にし乍ら、學校通ひは昔の事、今ではもう姿も風も有らばこそ。是れも一つの新らしいこゝろみだと思つては居りますけれど『フン女工か』と世間の人からは冷笑の眼で迎へられる。私だつて女ですもの、帶も着物も新ダイヤのピン一本位もと思つても、老眼鏡のひま〳〵から、仕立物なさる母樣の、怪しい手つきや『よしてお呉れ』と云つても肯かない弟の夕刊賣、氣忙しい黄昏頃の人波のなだれる交叉點を悲しい細い聲で『二六、中央、やまと……報知……』、もうもう身を切られるより辛い思ひに、あゝ一枚と思ふメレンスの半襟でも、横目で見ても、……鰹の切身に舌鼓打たる母樣のお顏を見るのが嬉しくて、袴もといて、袷の裾まわしに成りました。ピシャンコの下駄が氣に成つても、少年世界に笑くぼを寄る弟を見るのが嬉しくて、卑しい女工の生活もむしろ樂園の逍遙だと、星を頂いて朝戸出、寒き冬の町をテク〳〵本所横網まで通ひます。北の工場に事務員兼女工として勤務して居る時でございました

此社會には有り勝の、雇主との折合がつかなくてと申すのは給金の云々の事で。ストライキの果が三十幾人の職工を解雇して了つたのでした。廿五人の女工取締の私は、此の際に於て取る法をさへ知らず、頭に立つての苦心。また世馴れぬ私の頭腦には、只面白い事の樣に考へて居たのが半分だつたのです、主宰とも見ゆる三四の工女を影に呼んで、此のまゝ靜めて貰い度と頼んで見ましても、金無くて何の己れが……、給金を倍にして下さらなければ……。四十にも三十にも手の屆く樣な人許りですから、青二才だのメソ鰻だのと云はれる。私などは、アベコベに云ひ捲られて了ひました。かうなると無教育な者程手の付けられ無い者は御座いません。止むなく一先づ休業として、六人餘りの女工と、四人の男工で熔場にかゝつて、腰掛の下からも秋立つと云九月の其日でした。熊手の樣な手に遊の閑ま

り、○○省御用の電池の張拔をこさへて居ました。昨日に變る飛鳥川、嫌で〳〵仕様の無かつた紺の道行かけて、私は切口に木賊をかけて居ますと、本宅の下女に連られて來た女、又世話が燒けると思ひ乍ら、見ると着物のこなしで只者ならずとは一目で知れた。潰しとやらん云へる髪形、こりや珍らしいと内心面白く思つて居ました。

例に依り、私がお師匠役、澁の世話から火の加減、紙の順序に刷毛の使用法、上げ澁の呉方、他の人達に睨まれる程丁寧に數へて居ますと、「私の時には十分の一も數へて貰はなかつたわ」。實にも女、これが第一の惡癖だと承知して居ますが……。薄刷毛の落書、手をついて歌申上る蛙かな、と思ひ切つた惡筆で、横の障子に。――それに指先で穴をあけて覗く男工の方。又師直の二代目が初まつた」、『煙草も未だ吸して貰へない小僧の癖に生意氣だよ嫌らしい。』迚も皆様に眞面目に御目にかける品物では御座いませんが、此の方面の娘、女房には、此の口で先づ普通男子の二三人が力んでも勝てる物では御座いませぬ。

何になつたとて頭と名が付けば、……と皆様は申るれますが、張り拔工女の取締では氣がきゝません。炭が入る割に品物が上らぬ、切り口の紙が付いて居ない、中の木綿がブク〳〵だ、澁を溢す、刷毛が切れる、主人からの小言は皆私に云はれても、工女には半分も傳へたらそれこそ大變です。「勝手にしやがれ、べら棒め、手前の工場ばかりが日が輝るんぢやないぞ」。お嬢様方決して土方の言葉では御座いません、本所深川の或る一方面の婦人の言葉ですから驚きませう。早く仕事を上げて下さいと云へば、一個について十枚位紙を拔いて了ふ。氣を付けないからと大目玉、炭の催促や澁の請求位なら猫の子でも出來るつて有様。他の工場はお八つが出るのに、此所は何も出ない事の、聞にたへぬ話まで。終ひには主人の頭の禿て居る事まで言ひ出して奴茶瓶だの、逆螢だのと奥に聞えはしないかとハラ〳〵します。其時に糊と小使の爺さんに賴んで、お燒芋の十五錢か餅菓子の三十錢も買はねば、何時も私

は泥鼠の様に云はれるのでした。二日も燒芋が續けば「シミッタレ、お芋なんか牛の食ものだい、」「たきにはみつ豆でも買ねえな。」

五時打つのを待兼ねて、三時云から手の澁を輕石で落したり、仕事なんか出來やしません働け／＼では決して人は動く者では御座いませんね。それも全く澁の手を輕石でゴシ／＼洗つて、ヤッと落る位ですから、無理も有りませんがお湯が一パイ有るでは無し、殘つた火をザーと水の入つたバケツにかけて消す其濁まつた灰汁で、皆が手を



洗ふつて程細かい細工なのです。冬はまだしも夏などの情なさ。ジリ／＼汗と、澁くさい澁くさいと云はれるので、人中には出られませんでした。隨分嫌な仕事ですねえ。三日目に例の潰島田の人が私に囁きました、名前はお美代さんと云ふ「ねえ重松樣、泥水上りの私等風情、一山殺文の情ない人間でも、意地にかけたら強者で御座いますよ、酸いも甘いも散散嘗て來たんですからねえ、西向けハイ東向けハイと使はれては居るものゝ高砂屋の美代吉が片肌脱げば、大臣だつて華族だつて、蟲つけらも同然ですよ、」私は面白い

氣性の女だと、非常な興味と好奇心が手傳つて、身の上語りに花が咲き、二度三度は主人に白い眼を見せられて居ながら、秋櫻の亂れた仕上場の隅に寄つては話しました。實の親で有り乍ら、私を銘酒屋とかへ賣り飛ばしたいばかりに、夜毎日毎に責られて辛い事や、藝妓になればつて折角足を洗つたものゝ又沈んでは蓮の花にも顔向けが出來ない事まで、澁の爲にゝやけた惡臭の非道い白い指先で染りさうなコスモスの花瓣に爪跡をつけ乍ら話しました。

監督さん、呉澁の上りです、下張り下さい、小刀が切れぬ、紙の順序が分らない、底の浮を直して呉れと、云ひ合した樣に一度に大手からドットせめらては流石の强者も一度に敗北、帳簿に時間などとめて下張を渡す。高い小窓の下に並んだ女の口からは、思ひ出したやうに、野卑な聞に得堪ぬ俗歌が連發されるので、並んだ丸髷の赤い手柄や銀杏返しの根がけまで、何故か『淺ましい』を感せずには居られませぬ。江戸櫻の番頭が、私の顔見て笑つた、金物屋の息子が挨拶した、大切の金銀珠玉を得た樣に負けず劣らずの大混戰。『靜にして頂戴よ、お話は禁じて有るんですからねえ、それより面白いお唄でも聞かして頂戴な皆さん』おかま蛙と名のある四十女が『お唄ひよ、餅菓子の三錢位出ないとも限らないよ』と謎の樣な言を、……洗張り取て來よと頼まれた三十錢の中、ふかし芋に二十錢は消えて了ふのでした。

庭には砂子は金銀の、玉を連ねて敷妙のいほへの錦や瑠璃のとぼそ、硨磲のゆき桁瑪瑙の橋、池のみぎはの鶴龜は、蓬萊山も餘所ならず、君の惠ぞありがたき、鶴は……

掃よせられた塵の中に、ピカリとした珠玉の光りは、藝妓のお美代さんでした、洒性突だと人は云ふけれど五日目の今日、あくどい色彩の中に交つて、上品な長唄の鶴龜、お美代さんには大變な努力と云はねば成りますまい。私に對して、外の女工の雜談を止めたいばかりかと思へば、私は感謝せずには居られません。實際私は名前ばかりの煙の樣な人間でした『何を云つ

てやがる、女と云へば手前ばかりの様な面しやがつて威張られてたまるかい』。梅干婆と名の有るのが、イボジリ巻にさした杉箸の折で、グイ／＼頭を掻き乍ら、ホイロの間からペロリ黒染んだ舌を出される時の氣味の惡さ、前世如何なる罪ありてと随分悲觀もします。汁が足らぬ、火が通らぬ、肉が薄いと絶えず小言を持つて行つても、其の場限り、『ハイ』と返事は立派でも、賃銭の方に關係しますので丁寧に一々貼る人はまれで、仕上りを目方にかけては、鋸で切られて、其のお尻は何時も私の仕事に不忠實だとか、むつかしい言葉で、電氣の作用で人生の終焉を知る法を發明中の旦那様に怒鳴られ、『一人の頭に立つものは――』、お定まりのそれを、ハラ／＼する頭の上から工場に響く大聲で叱り飛ばされる時には、ドット笑ひくづれる女のこゑ、『あゝ止めて了はう』と何時も思ひますが學帽に紺がすりの弟の呼聲の聲が耳については、思はず負けて居ました。




二十にも足らぬ身を以て、すれ涸しの口惡な工女の氣嫌氣褄を取つて暮らす情なさは、何時もお美代さんの齒切の好い性質に慰藉を得て滿足して居りました。

お晝飯の時の一騒ぎ、四疊半の中央に足のグラ付く

食卓を擴げ、火の横に一時間も前から文福茶釜と名のある鐵瓶をかけたのに、川柳の粉を入れて置き、茶碗の世話から箸の世話、午砲を相圖に臺所で爺やさんが拍子木を打つと、打ち切らぬ先に、ソラと親の仇にめぐり逢つた樣な騷ぎ。手の澁も洗はゞこそ、我一にと好い場所を陣取つて、網に上せた貼拔きの燒けるのも知らぬ顏。「重松樣、見て頂だい」。平氣なもの。其の間に居場所の亂雜なのを直し、常ならば二十五人の持場の火加減から澁の色、十人位まで見れば、早時間は來て了ひます、お副食物のやりとり・御飯の小言・人の殘飯まで流し込む老婆・油斷をすれば辨當箱の風呂敷まで卷き込まれて了ひます。二十分の休の間に、急いで母樣が心づくしの團十郎煮のおさつが山程、お美代さんに一口上げたいと思つても、研すました皆の眼の光恐ろしくて、急いで了つて、お茶一口と思つても有らばこそ、お藥にも出來ぬ有樣。故意と食卓の上に流して了ふ女の惡いのも數有るんです。あつちこつちに陣取つて、壽座の俳優が何とやら、私共には譯の分らぬ言葉でキヤツ〳〵と云ふ騷ぎ。時間が來たよと被仰る所を、エヘンと大きなせき拂ひ。ピンと頭まで響くのでハラ〳〵しても、仕事につかばこそ。切り口に砂紙ゴシ〳〵かけ乍ら、目顏で知らすのを知つて居ても、向ふの山を風が吹くと云ふ調子。障子の穴からお美代さんが「一番さん、二番、三番・六番・十一番さん、ベリ〳〵澁がはがれますよ―」。これでやつと席がふさがると、時計は早二時十分前。帳簿に記載の困難さかゝりの時間は思ひ〳〵で、歸る時は我一にと、火鉢の火の仕末も當まかせ、ベンチの座蒲團まで投げ出してさツと主人に挨拶もせず、ドヤ〳〵凱歌を奏する有樣で、歸つて行く。後仕末は主人に見張れて居る前で皆私一人の役。螢の樣な火の氣まで、ヘナ〳〵に曲つた火箸で、一つ一つ拾ひ込む面倒は、大風に灰まいた樣な性質の私には、全く涙が出ます。夜業の有る時なぞ、八時頃まで主人の居られぬ時は、心覺えの小説の話を聞かせても、お半長右衛門やお園六三に涎を垂らす手合を相手ですから、骨が折れる事一通では御座い

ません。

クワー、情ない迄大聲でのあくび、ジリ〳〵電池の裾が燒ても、平氣で居眠して居たんですもの。…片明りの時分を、やつと縛めから逃れた氣持で、すれ違ふ人毎に惡臭はせぬか、振り返りはしなかつたかと氣兼きがねも、同じ職業者でも隨分情ないと思ひます。電氣のパッと點く頃を、渦の樣に西へ西へと流れ寄る木の葉と共に、古巣に歸ります。何時か雜誌で讀んだ、百目の鷄を食べるより五本の蓮根の方が滋養になる事を思ひ出して、殘りの十錢で通りの八百屋から大きなのを一本買て歸ります、親子三人が夕食の膳に上るのは、一時間後なんです。新聞折る弟の手傳しながら、樂しかつたお美代さんのお話をお聞せします。「二度目なんだらう、早く歸つてお出よ、皆賣なくても好いからねえ」右の肩から斜に籠かけて出る弟の後から、帽子を被せてやり乍ら、被仰る母樣、白毛のふへるお頭を見る度に、私の責任が重くなる樣な氣がして、日毎日毎にはげみを增すので御座います。弟の歸るまで、母樣と二人縫ひかけの綿入れくけ乍ら、昔話しに夜は更けて、あれ冬が來ると庭の隅から蟲が鳴く。




日
一日。八日。十五日。廿二日。廿九日。
月
二日。九日。十六日。廿三日。三十日。
火
三日。十日。十七日。廿四日。
水
四日。十一日。十八日。廿五日。
木
五日。十二日。十九日。廿六日。
金
六日。十三日。二十日。廿七日。
土
七日。十四日。廿一日。廿八日。



# 料理食品文盲手引（十二）

小泉迂外

### △御歳暮の重詰

世は歳暮になります。冬の短い日ざしが用捨なく窓に迫つて、どちらの主婦も春の準備に忙がしく、その中で又御歳暮の贈物に頭を痛めねばならない時がまゐりました。

　とりやりもをかしき村の歳暮哉　抱一

で、御歳暮の贈答品は地方々々によつて、種々異つて居るので一概には申されませんが、近頃は何事も簡單主義が流行るので、それたけ無趣味な實利的な御歳暮が殖えてまゐりました。鹽引の鮭や砂糖袋は敢て惡いとは申しませんが、それよりは少し面倒でも、主婦が手を勞けた重詰などを贈るといたせば、戴いた方でも非常に氣持もちがひ、且趣味の上から見ましても、鹽鮭などゝは格段の相違です。

それで此重詰なども贅澤をいへば切りはありませんが、先づ普通ならば、八寸の二段物の重箱として、上の重には、鴨の作り身、貝の柱、牛ぺん、白瀧、花に切つた慈姑、竹の子、松茸、銀杏ぐらゐ取雜せ、下の重には鮟鱇、獨活、松露等の汁の實に、二色味噌を手際よく詰合せ、何れも下に芹か小松菜を敷けば結構です。

### △いとこ煮

維新以前には、毎歳十二月八日を「御事始」と稱へまして、江戸の町家では、戸毎に、竹の竿先に目籠をつ

けて軒先に立て、邪氣を拂ふなどといふ御禁厭をいたし、又其日に限つて、御事汁と云ふ、里芋、こんにやく、大根牛蒡、にんじん、燒豆腐、あづき等を入れた特別な味噌汁を製つて食くといふ習慣がありました。

斯んな事は何年頃から始まつたのだか解りませんが、寛永時代には之れを「いとこ煮」とも稱へたさうで、其頃の「料理物語」といふ書に、「小豆、牛蒡、豆腐、芋、大根、燒栗、くわゐ等いれ、中味噌にてよし、斯やうにおひ／＼に煮




申により、いとこ煮といふ」と記してございます。芋、大根、豆腐など硬きより軟きものと順序を追つて、漸々に煮るといふ語呂が、甥々に似るといふ詞に通じるので從弟似を洒落て、いとこ煮の文字を宛てたので、大昔の料理の名稱にはよく斯んな洒落が多いやうです。

一體、此の御事始といふのは、人によつて種々に解釋されまして、其說明も昔から、區々ですが、初めは僧家の風俗で後ちに轉じて正月を迎へるお備をする第一日といふ

やうな眞味に探るのが最も穩當な說でございませう。

## △ひらめと鰤

ひらめと鰤とは追々寒くなればなる程、眞味が出てまゐつて寒中の刺身、燒物には是れに越すものはございません。

元來鰤といふ魚は、西は九州薩摩潟から北は奧州外ケ濱と、矢の根五郎の臺詞ではありませんが、本州の周圍を年中遊泳つてゐるので、自然其の季節も漁獲る場所で違ひますが、十二月から梅の咲く頃までは東京に近い三崎あたりに廻りますので、それで此の頃のを東京では賞翫致すといふ理由なので、美味い代りに値も頗る不廉いので一寸惣菜にはなり兼ねます。家庭用には三月頃乃ち北陸沿海へ廻つた時がよろしく、味は少々劣りますが、味噌漬にして燒物に用ゐれば隨分食けます。

ひらめはやはり寒中三崎邊で取れるのが江戶前と謂つて、一番上等ですが、近來では鐵道が到る處に通じてドシ／＼、遠隔な地方の魚が容易に運ばれるので、それが爲めに江戶前の魚が頗る壓倒されて、普通の魚屋や仕出屋では皆價の廉い點で遠方の魚を用ふ傾向になりました。殊に甚だしいのは、下等な魚屋等で北海道から捕られます大鮃を平氣で、ひらめの札の下に切身にいたして賣つて居りますが、とても口に入れる品ではありません。婦人などは先づ其の六尺もある魚身を御覽になつたばかりで首をお振りになりませう。

鰤はとに角、ひらめなどのあまり廉い切身は、充分御注意あそばさぬと飛んだ失敗をなさいます。

## △澤庵漬

樹々も色づき、前栽に霜見る朝が重りますと、もう、どちらの家庭でも澤庵漬に甲斐々々しきおさんどんの扮裝が見られます。

鹽何合、糠何合と一樽の割合だけ御示しになつて、跡はお炊婢どん任せに、御自身は日當りのよい緣先で新聞でも御覽になつてもすみますが、主婦が手を下る

ない迄も親しく御臺處に臨んで、何かと御面倒を見た方が其漬け工合に無理が尠なく、從つて漬味も又一段とよいやうに思はれます。

澤庵漬の名の起原は、彼の澤庵和尙が初めて之れを製つたから、さういふのだとも申しますが、之れは些と受取り難い話で實は品川東海寺にあります澤庵和尙の墓石が、無縫塔の種類で唯丸い石を臺石の上に置いてあるばかりのが、恰も大根漬の壓石に丸い石を置いた形狀と同じなので、その漬けた大根を誰れいふとなく澤庵漬と稱びまゐつたのでございます。



昔も今も定まつて丸い壓石を用ふるのはこんな理由からですが、又澤庵漬の美味劣味いの分岐點は實に此壓石の加減にあるので、最初はなるべく強く石なども重ね、漸々石を輕くするといふ工合にまゐれば、樽底の品まで充分美味しく食けます。

## △大晦日の燒鳥

德川時代の初めには大晦日に、貴賤ともにつぐみ鳥を燒て食いたといふ風がありました。之れは、身を繼ぐの意味を祝つて、此の鳥を擇んだので、又安永、天明頃には質を取る家では爭つて樫鳥を燒いたので、歲暮近くになると樫鳥の價が上り、日頃儉約を以て歷々川柳子の題に上る質屋も、之れには價を惜まずに爭つて購つたといふ話が、其頃の隨筆に載つて居ります。これはやはり前のつぐみと同じ筆法で、其の心は金銀を他人に貸附けて、多くの利子を取らうといふ慾から出ました食物で、ちと落し噺のやうですが、昔の人が食品にまで御幣を擔いだのは之れで解りませう。

## △生　海　鼠

生海鼠は冬季輕淡な味を飲酒家に珍重されますので、箸休めの小肴には第一に押されませう。之の魚は御承知の通り、骨も鱗も、尾も鰭もなく、滑かで疣が多くちよつと黃ばんで虎彪に似て居るので、ある地方では虎子と稱んで居ります。面白いのは、水底で物が觸ると橫に縮つて、水を離れると胡瓜を半片に截つたやうになります。それで、どれも其の口と眼は小刀の痕のやうになつて居りますが、之れには由緒があるので、其れは舊事紀を見ますと解りますが、彥火瓊々杵尊の御時に、諸々の魚が皆仕へ奉らんといふ中に、獨り生海鼠は之れに從はないので、天の鈿女の命が怒つて、細い小刀で其口を拆いたのです。その故に今以て生海鼠の口が小刀の痕の如く拆けてゐるなどゝいふ神秘的な傳說があります。

壇の浦の蟹が、無限の怨をのんで亡びた平家一族の顏を其甲羅に顯して居るといふのと同じ格ですが、鈿女の命と生海鼠との對照が如何にも奇拔で面白いと思ひます。

金海鼠といふのは奧州の金華山沖で獲れます金色を帶びた生海鼠で、之れは高等な献立に用ひられます。又このわたといふのは生海鼠の腸の長いのを鹽としま

したので、婦人方には不向ですが飲酒家には見逃す事の能きぬ食品の一つです。

## △煤拂の献立

昔時は十二月十三日が將軍家の煤拂ひに當るので他の大名、旗本、御家人から商家までも此前後に煤を掃つたもので、此の夜には煤拂の祝儀として、簡單な膳部をつくつて、酒宴を催すのが恒例ださうです。その献立は家格によつて相違はあるでせうが、大概、里芋、大根、牛蒡、にんじん、燒豆腐、田作の平盛に豆腐の味噌汁、大根、にんじん、田作の膾、に鹽引の鮭の切身を燒物にする位の質素な献立で杯を擧げ、町家では蕎麥を振舞ふ家もあるさうでした。




今之れ等を參照して、左に大正式の煤拂祝の献立をつくつたので、新しい家庭で應用してくださらば感謝いたします。

向● 卸大根、もみ、海苔

汁● 鏡大根、簺目豆腐

平● 山かけ豆腐

膾● 作り身の魚一品、獨活、木茸、酢

などの外、小皿に卷するめ（燒いて槌で叩いて裂く）などをあしらひ、酣酒の後ちに蕎麥を侑めませうか。

## △煮豆の味

女子大學の戸川翁の談に、女教員に食品の嗜好を尋ねたら、隱元豆、黒豆、鶉豆、小豆に砂糖をかけて食くもの、空豆を煮て食くもの等、總て煮豆趣味が多數であつたとの事がありました。

女教師と謂はず、奥様、令孃、看護婦、交換手、女優、藝者、花魁など、新らしき女、舊き婦人、あらゆる階級の婦人を通じて最も婦人社會に勢力のある食品は實に此煮豆でございませう

市中の煮豆屋が歳々に繁昌し且殖えてまゐるのは、明らかに東京に婦人が多くなつたとも解されます。其證據には、いつも重な煮豆屋の店先には婦人客の絶えた事がなく、呼んで歩きます豆屋さんに聞ても其御得意は、八分迄婦人の多い家庭であるさうです。

從て煮豆の味も歳々に美味くなつてまいりました、つまり賣口のよい爲に煮置の古いのが尠くなつた爲めです、此煮豆の中で、豆屋によつて著しく味が違ふのは黒豆で、之れの最も美味いのは日本橋葭町の寶來屋で製るもので、此家のは江戸時代から一種特別の煮法があつて、いかにも軟かです。しかし此家の隱元豆の方は時によつて硬軟がひどくあるのは如何なものでせうか。

御多福豆といふのは京都圓山土産で先刻御承知でせうが、近來大分市中にも此招牌を見かけます。しかし何といつても日本橋の平野屋といふ割烹店で販るのに越したのはなく、此家は京都の本家から分かれただけに、純然たる京都風で結構です。なほ近頃は日比谷公園前にも此家の分店が出來ましたから、至極便利に得られます。

## △貝のはしら

冬が深くなるにつれて、貝の味がすぐれてまゐります。赤貝、鳥貝、みる貝、玉珧、ハシラ等皆此時を季節といたします。殊にハシラは此期間に限つて、種々な料理に應用されます。其の少さいのはジヤミと黒人

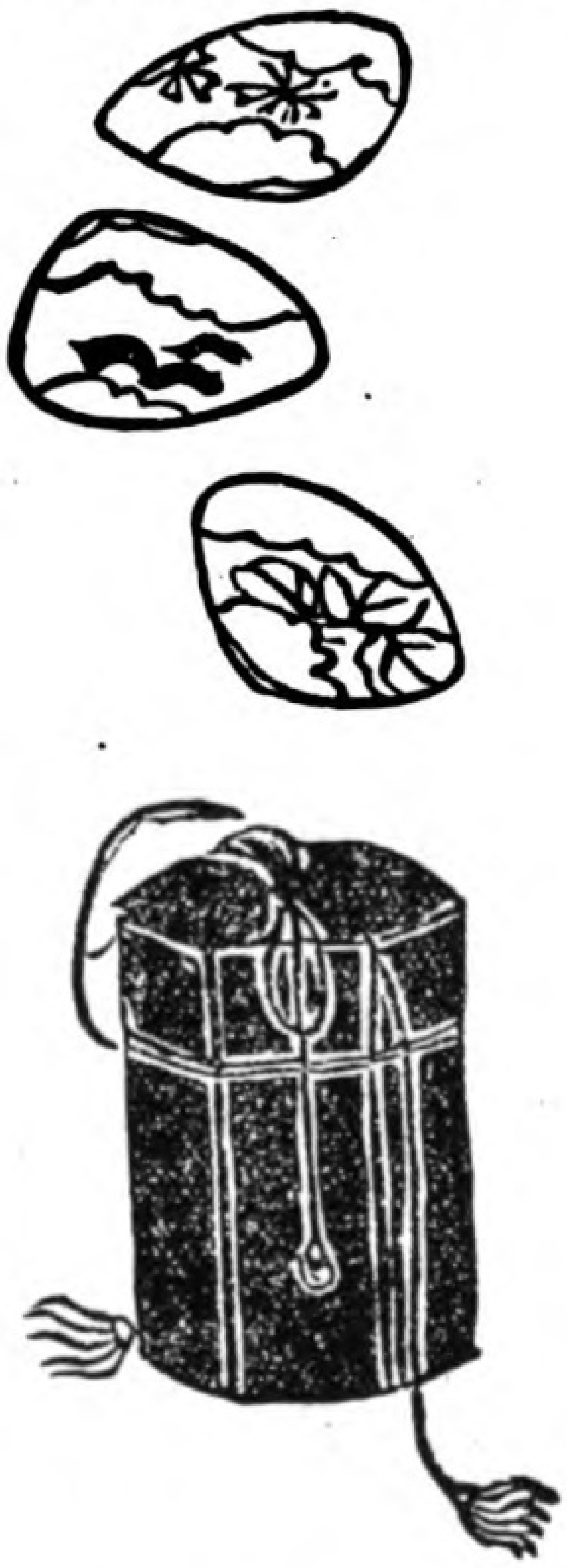
が呼んで味も劣り、安料理屋か駄天ぷらの種に葬られますが、其大なのは値も頗る高いかはり、非常に珍重されます。

飲酒家は、大根卸に之を少許交ぜて、三杯酢でもかけ、即席の膾に製つたらば喜ばれませう。婦人方は椀種か、雑煮に入れて召上れば頬をうたれませう。天ぷらは之れをカキ揚に致すのですが、之れを美味く食くのはどうしても、天金などと云ふ繁昌する家へ行かなくつては味はれません。

又之れを蕎麦種にいたしたのは『アラレ蕎麦』と呼んで、蓋をとれば焼海苔の香がプンと鼻を撲つて食かぬ先きに垂涎三尺といふありさまです。しかし普通の蕎麦屋では、ハシラの大粒のものを値の関係から、使用ひきれぬので多く小粒で誤魔かして置くので、注文して、飛んだ目に合ひます。まづ此蕎麦を求めるならば日本橋、京橋の両区の有名な蕎麦屋につくより外はありません。

又鮓飯の白いのを薄手の丼にあつさり容れて其の上に之のはしらを七八粒もバラリと並べ、上に焼海苔を細かくもんで振りかければ、至極趣味のある、五もく飯が製られませう。専門の鮓屋ではまだ之の法を試みませんから、家庭の方で、是非先鞭をつけられたら如何でせう。





# 小禽と籠

花かご

小鳥は此籠の中で生れました。而して生れてからもう何年を經ちましたでせう、何時ともなしに月日が行き廻りして、兎に角雛から子鳥になり、それから又一人前……一羽並みの音を囀る迄に成長して來たのです。

此籠は至つて廣濶とした、綺麗な、小鳥にとつては住み心の好い家なのでした。而して何時でも餌壺には丹念に作られた美味しい摺餌や、清新な水が絶えず盛られて有りました。此の中で至つて悠々と、此小鳥は育つて來ましたのでした。

雨の降る日、又風の吹く日、其の大空を羽翼もたわわに飛んで居る他の小鳥を、籠の目から通して眺めた此小鳥の眼には、何れ程いぢらしく憐に映りましたでせう。而して又其の都度に、自分の境遇に對しては、何麼にか滿足な心を持つた事でせう。

籠も又よく此の小鳥を守りました。

彼の毛色の醜い、風來な猫が、骨張つた脊中を凹の如に持上げて、髭をぴんと、斯う凄い眼をして、今にも取つて食はれるかと思ふ程な樣子で狙ひ寄られた時、彼のふうーと、鼻息とも違ふ唸り聲には、何れ程に小鳥は恐れて戰きましたでせう。

然し此敵が、如何程擬勢を張つて脅しても、籠の中迄に手は附けられませんのでした。小鳥は愈ゝ此の籠の有難味を知つて、益ゝ此籠に信頼して居ました、而して何時も人に愛せられ乍ら、不斷に樂しい春を囀つて居たのでした。此至つて樂しい、何の物思ひも無い時代は、小鳥にとつてかなり永く續きました。

或る年の或る朝。不圖此小鳥は籠の中から外の景色

を眺めました。其時其庭には、色々美しく咲いて居る花や、香ばしい若葉などが、生々として日光に輝いて居て、而して其中間をば、小鳥の群が縫ふ様に飛び廻つて、嬉々と遊んで居るのでした。

始め暫時の間、何の氣も無く眺めて居た籠の小鳥は漸々見て居る間に何と無く羨しく感じて來ました。其の和らかな日の光り、嫋々として吹く風の戰めき、色有る花、清き若葉。

小鳥の眼は美くしい憧憬の輝きを帶びて來ました。而して我知らず、其樂しげな群にお仲間入りする積りで、はた／＼と羽搏いて見ましたけれど、直ぐ籠の目で支へて了ふ。其時始めて、籠の目が自分を抑へて居る事を、少し迷惑に感つたのでした。それかと云つて其を又破つて飛出すといふ、そんな考迄は起りませんでした。

其以來、籠の小鳥は絶えず外の空氣に憧憬れて居ました、今迄は廣濶とした自由の家よと大滿足で居た此籠が、俄に窮屈な狹苦しいものとなつて了つて、今では却て、彼の雨風には惱まされて居ても、彼して苦しんでる鳥の方が意義の有る生活の樣に思はれて、何故斯う急に、心の總ての調子が狂つて來たのか知らんと時々止まり木にぢつと斯う、小首を傾けて、考へ込んで居た事も度々でした。

敵が來れば固く防いで護つて與れる、斯うして茲にさへ居たならと、得意氣に悦び怡んで居たのは既に過去と成りました。無二の味方と信頼んで居た者が、忽に敵になつて了つたらば、恰度こんな心持だらうと思はれました。此籠の目は敵を防ぐ爲のぢや無い、却て是の爲めに自分の自由を奪はれて居たのだと考へ出してからの小鳥は、何時も焦れつたさうに籠の目から天空の色に恍惚と見入つて居たのでした。

是は小鳥が居るからそれで作つた籠なのぢやお無い籠が有つたから夫れを飾る爲めに生を呼び起された小鳥なのでした。實際折角の籠でも、中が空で有つては何の榮えも無い譯で、さればこそ小鳥は可愛がられて氣を迎へられて、大切に大切にと守られて、今日迄は

育つて來たのでした。然し一度他へ外れた小鳥の心には、其の大切に大切にが、中々反て苦痛でした。一層の事邪魔者扱ひにされて、粗雜に育てられて居たならば、此時小鳥は籠を破つて飛び出して居たのかも知れません。でも絕えず表面丈けは、今迄通り樂しさうに囀つて居ました。

さうして其間に、又二三年は經つて行きました。

小鳥は愈々可愛がられて居たのでしたけれど、其內段々年が經つに從つて、今迄至つて堅固いかためで有つた籠の目も自然々々に彼方此方と朽ちかゝつて來ました、殆もう半分以上は壞れたと云つても良い程に。而して小鳥は自由に飛び出しても好い樣に、隙間は其處此處に出來て參りました。



見知らぬ他の鳥は、いつも來ては草に餌を求り、樹木に息ひ、花に戲れ、飽けば羽翼に任せて大空を西―東―、さも樂しさうに勝手に飛び廻つて居ます。籠の小鳥は、以前として羨望の眼で是等を見守つては居りましたけれど、却て拔け出し易く自由が與へられてからは、妙に心が落付いて了つて先の樣に羽搏いて飛び出さうなどゝ、試みる事は無くなりました。

それでも懷かしいみ空は、矢張いつも懷かしう御座いました。彼の澄み切つた、ジッと斯う注視て居ると、

何とも云へ無い玄妙な感じの湧いて來る久遠の天空ーそれを猶も一心に注視て居る間に、物も無い虚無の裏には、種々様々意味有り氣な記號に充満されて在る樣にも見えて來る。嗚、飛んで見たい、縦横に彼の虚空を、而したら彼れが一々氷釋て行くのだなど〻、小鳥はたゆげの瞳をあげては、猶も朽籠の中から、自由の天空に憧憬れて居ました。

老朽して來た籠が壊れ始めては、もう氣の引ける程にずん／＼と、今は小鳥の立途さへ危い位になりました。一度此籠の束縛を怨んだ小鳥は、再び此籠の中の生活が親しまれて來まして、今では一心に此の哀な陰に頼つて身をよせて、何時迄もいつ迄も、斯うして有りたいと願う樣になりました。



今になつて斯様な考への起つて來たのは、小鳥にとつては不幸でした。遂に此籠から放り出される曉、其時には悲しい、追憶となつて絶えず小鳥の心に纏はるのでせう。

月は行く、日は行く日は行く、月は行く。逝いて止まらない「時」の陰には、遂に此籠も消えて隠れて了ふのです。さうすれば、厭やでも應でも此小鳥は、便も知らない涯もない、み空の旅路に放浪はなければならない。小鳥は日に月に亡びに近づきつ〻有る憐れの籠を、淋しい眼でじつと守つて居るのでした。

# 巴里みやげ

與謝野晶子

## △美しい巴里婦人

さうですね、お土産話つて被仰つても何にも御座いませんよ、これつてお話致しますやうな事は…。何しろ滞在の日數も少ない事でしたし、病氣で引き籠つて居つたり致したものですから、觀察も何もあつたものぢや御座いません、ほんの惘然行つて歸つたと云ふ迄です、第一言葉がさつぱり分りやしませんもの、ほんとにお恥かしい次第で…。たゞもう巴里では綺麗な人を澤山見て參りました、皆な彼地の婦人は綺麗で御座いますね、女優なんて實に美くしいと思ひました、さう大した美人と云ふ程でもないんですけれどほんとうに綺麗です、ハア顔がですの、化粧法が進歩して居るんで御座いませうか、その癖お化粧なんてちつとも時間がかゝりません、ほんの五分か六分で手早く致します、顔なんぞもさう丁寧に洗つたりしないやうですし白粉と云つてもたゞ粉白粉を刷きつけるのみの事で、厚化粧でも粉を何處も上につけるだけです、決して水白粉だの煉白粉だのをつけやしません、よつぽどのお洒落でなくつちや…ですから日本の女みたいに肌の色を塗りかくして仕舞ふやうな厚化粧はありません。

## △調和の巧みな巴里婦人

巴里は派手つて聞いて居りましたが服の色なんかは地味でした、英吉利では鶯色や水色の服をふわ〳〵著て居りましたが巴里では重に紫紺なんぞの黒つぽいものでそれにいろ〳〵のレースの飾りをつけたりしてそればかりを着てゐます、中には夏冬一つで通すと云ふ人もあるさうです。それに英吉利人は皆ロープを着て居るのに佛蘭西ではロープは僅かに二三分通りで七八分通りの人はジャケツを着て居ります、ロープと云ふのは上下續いた服でジャケツは男の人の背廣みたいに上と下と別々です、この二つを比べますとロープの方

が優しくつてジヤケツの方が少しいつかく見えますが、巴里婦人の美くしい表情的な顔と、女らしいしなやかな身體には却つてこのジヤケツがよく似合ふのです。そこへ又艶めかしい帽子を被つたのが如何にも全體の調和をよく見せるので何とも云へぬ和らかな感じを與へて居ります、

## △澁い好みの巴里婦人

流行の移り替りの烈しい事と申したら、一年に六度も變りますので一月か二月で又別のをすると云ふ有樣です、その度毎莫大な金を流行に擲つ人もありますが擬ひものも隨分巧みに出來て居りますので、それで間に合せる人も多いやうです。一體に巴里婦人の方が英國婦人よりは澁い好みで品もよいものを着けて居るやうです。英國の婦人は眞面目だと云ふ事ですが一寸見たところこわい顏をして居ますから親しみがたいやうに思はれます。一體に西洋婦人は表情に富んでゐると云ひますがその中でも巴里婦人が一番表情が巧いやうに思はれます。日本の婦人も皆なあんなに綺麗にして見たいやうに思ひますが、美術品か何かのやうにして置くのなら宜しいでせうが一生懸命働らかねばならないものではあゝしても居られますまい。私は西洋へ行つても日本服で居る積りでしたが、一寸市中を歩いても買物をして居ましても皆な珍らしがつて寄つて來ますし、四五軒さきから誘ひ合つて見に來ると云ふ始末で、おまけに支那人だ〳〵なんて云はれますから、厭になりましてとう〳〵洋服を着る事に致しました、似合ひも何もしませんけれど。

## △便利な髢

西洋の女は美しいには美しいのですが髮の毛は少ないのです、子供の時には澤山あつてもあんまりいろいろと虐める爲に大人になると減つて仕舞ふらしいのですですから、大抵前髮にかづらを用ゐます、鬘と云つても日本のやうに頭全體に被るのではなくかもじのやうに添へ毛を入れるのです、極輕く出來て居りまして

旅行などには至極便利ださうです、あちらの女は毎日髮に癖をつけるので、夜分やすむ時にすつかり癖卷きに毛を卷きつけまして、朝起きてもその儘で午後二時三時に初めて髮を結びお化粧をします、それから五時六時頃には遊びに出かけるとか友達を訪問するとかして十二時頃にかへるのが普通です。生活の程度などもずつと高いと聞て居りましたけれど、只今では日本でも食料品などが非常に騰貴して居りますからあまり大した差はありますまいと考へます、下等住民なんぞはパンにポテトーの副食物がついて一食日本の四錢位であがるとか云ふ事です、日本では殘飯でもなければその位では食べて行かれますまい一口に生活の程度が高いとか低いとか申しましても矢張り高いものもあるし、低いものもあるので何處の國でも同じ事なんでせう、しかし佛蘭西の料理は實に上手で御座いますね、何を食べても我の國とは違ひます。

### △人を馬鹿にしたやうな

日本も世界の一等國のお仲間入りが出來たとやら申しますからもう少し西洋の方へも紹介されて居る事と思つて居りましたが、實際はさうでありませんね、日本の人形なんかも澤山出來て賣つて居ますけれども、皆な妙なものばかりです、日本の繪では歌麿の美人畫が一番珍重がられて居るさうで、さう云ふものや錦繪のやうなものからいろ〳〵想像して作つたのでせう、それも繪の通りならまだよろしいのですけれどあんまり人を馬鹿にしたやうな格好でほんとうに腹の立つやうなのがあります。

美術の鑑賞眼なんぞは婦人でも大分進んで居りまして日本などとは比べものになりません。

劇ではユーゴーのものが一番もてはやされて居りまして、劇場は何處でも隨分盛んのやうでした。表面では矢張り婦人が尊敬されて居りますが内部はどうか知りません、まあ一寸外から眺めた位ではとても詳しい事など知れやう筈が御座いません。（談話）

# 歌留多の追憶

神月道子

もう、冬！　ですわねえ、朝々おく霜の白い色が、大分はつきりと解るやうに成りました。今朝なんか、爪先にしみる冷さが、隨分、強く感じられましたもの……。

障子一杯に日影のさし込む、いつもの八疊に陣どつて、縫物を前に控へながら、又しては鏝の火鉢を抱へ込んでしまふのよ。早くこの綿入をくけ上げて、あと長襦袢一枚さへぬへば、もういつ何どき、お正月が來たつて大丈夫と思ひながら、矢張、暇つぶしを爲ますの、エ、春着はそれで、全部決了（よしさんの口癖ぢやないが）なんですもの。

よしさんつたら、ほんとに暢氣ですわ、あと二十と幾つとかねれば、お正月だからつて、この頃ぢや、每晩〳〵かるたのお稽古なんですよ。よしさんも、人一倍かるた狂ですけれど、私だつて隨分なのよ、でも私は、場所馴れないから駄目ですわ、いざとなると氣おくれがして、眼がチラ〳〵して、耳がガン〳〵鳴つて來てねえ、「山里は冬……」なのに、わざ〳〵「人めも草」を通り越して「人つで」をふつとばしたり、「つくばねの峰……」に、「戀に朽ちなむ」をはねて見たりして、ほんとに見つとも無いつたらありませんのよ。

天保錢といふ程ではないけれど、「女といふ者は」つていふ言葉をこの上もない武器として、娘をしつける主義の、かなり昔氣質の母をもつた私は、內藤さん式の樂しい歌留多會なんぞ、夢にも覗いて見た事はないんですの、情ないわねえ、少女十六の美しい春を、さしたる思ひ出も無く過してしまうたんですから……。でも、まあ、そんなに悲觀する程のこつちや無いわ、ホ、、、。

まあ、聞いて頂戴、かうなんですもの、……、なにしろ、母の昔氣質の所へもつて來て、それに辵をかけたやうな祖母が、ちやあんとがんばつて居るんでせう？　うつかり惡ふざけなんか出來やしません。

級友のお宅でかるた會があつて、招かれる事がありましてもね、「男の書生さんの御一緒のやうな所へは……」つて、一言のもとに斷はられてしまひますのよ。遂かりそめのもの語りに、「×さんのお兄様がかう」とか、「△さんのお從兄さんが……」なんて申しましたのをよく覺えて居まして、

「今夜の會にはきつと、お兄様がたのお友達連もお集りだらうから」なんて、氣を廻すんですもの、助りつこありやしません。

一度、隣町の佐々木田さんで、「今夜かるたを致しますから、是非お孃樣に」つて、再三のお使ひ、さすがの母もお斷りしきれなかつたのでせう、

「道、やつて上げませうねえ」つて言はれた時の嬉しさ、今日こそ、天下晴れてかるたがとれると喜びながら、荒い矢羽根おめしに緋紋緞子の帶をたてこにしよつて、濟に送られて門を出た時！　まあ、どんなだつたと思召す?!

でもねえ、それが矢張、こつちの思ふやうにいかなかつたんですよ、あなた、八時つていへば、まだほんの宵の口でせう、やつと二番位すんで、これからいよいよ興たけなはつていふ時に、もう、ちやあんと、お迎ひにつて來たんですもの、他人樣のうちで、駄々をこねる譯にもいかず、當がはづれてぼんやりと、大人しく歸りましたわ。

十四の春だつたと思ひます、近所の中村さんつていふお醫者樣の、お孃さんと仲好になつて、お宅へあがつた事がありました、歸つてから母に、

「よかつたね、何して遊んで來ましたかい?」つてきかれて、何氣なく、

「ねえお母樣、今日は面白かつたんですよ、きれいな歌留多を爲ましたの、お月樣とね、松と桐と櫻と、それからあのう、お公卿樣とが揃ふとね、一番えらい人になれるのよ。」つて、申しましたが運の盡、母は默つてをりましたけれど、それつきり、中村さんへはやつて下さいませんでしたわ、行きたいつてせがんでも、好くない遊びをおさせなさるからとばかり。

確か、十六の時でした、學校から歸りますと、
「道、今日は渡邊さんから、かるた會にお招きがありましたから、いつていらつしやい」つて、
まあ珍らしい、私や、夢ぢやないかと思ひましたの。
渡邊さんといふのはね、祖母のお友達とかで、ある漢學者の未亡人なんです、日本橋の片ほとりに以前から、小さな私塾を營んで、廿人近くの塾生に、よみかきと、裁縫と活花とを敎へていらつしやる、純然寺子屋式のお師匠樣。
その時分の私は、場所なんぞ何處だつて構やしない、かるたさへ出來りや、所撰ばず行きたかつたのですから、もうニコ／＼者で參りましたの。
忘れもしない正月十五日、軒並に美しくひらめく國旗を仰ぎみて、無性にうれしく思ひながら、廂の深い、古風な格子戸の、やゝ、陰氣なうちへ連れて行かれました。玄關の障子がスーツと開いて、丸顔のかあいらしい、十八ばかりの娘さんが、三つ指ついてあらはれる、そのかたの後へついて、廣いお座敷へ行きますと、切髮姿の優しげな、ねず色御紋付のお被布を召した、御隱居樣がすわつていらつしやいました、その方がお師匠樣でしたの、物言の靜かなかたでね。
「あなたが道子さんですか？ まあ／＼今日はようこそお出で下さいました、おばあ樣や皆樣、御機嫌よう御座いますか」なんて……、私はたゞ、
「今日はお招き下さいましてあり難う御座います、皆がよろしくと申しました」つて、出がけに母に敎へられた通りを、口移しのやうに小さな聲で言ひましたの。
お塾生のかた／＼は、十七八から廿二三位迄、皆、高髷に白丈長を捲いて、古風な柄の糸織か何かに、帶をキチンと、お太鼓にしめていらつしやいましたつけ。
「かあいゝ孃樣、おうつくしい孃樣」つて、年のいかない私を珍らしさうに、いろ／＼世話して下さいます、

その夜の、かるた會の實況！　どんなだつたと思召して？　そりやあもう、お話になりやしませんの、二手に別かれた組は、お座敷一パイに陣どつて、讀手は例のお師匠様……、お定まりの、男女七歳にして何とやら式に、出來上つて居るんですから、男氣といつたら、藥にしたくもなし、まつたく、雄猫一匹居や致しません、

二三枚よみ上られた後は、私やほんとうに、呆れてしまいましたわ。

「これやこのゆくも歸るも別れては……」

「ハイ、御座いました」

「ゆらのとを渡る船人……」

「ハイ、戴きます」

「恐れ入りました」

一寸、かういつた體裁なのよ、調子に乘つて、「失禮ッ」だの「ハイッ」なんて、跳ね飛さうもんなら、

「コレ〳〵、そのやうな荒々しい事を、なさるものではございません、」と、すぐに一本キメつけられるんですもの、活動ぶりなんか少しでも示さうもんなら、何てたしなめられるか解りやしません。

他人の前のをとる時にや、ちやんと、「ハイ、戴きます」つて、斷るの、……、とられた方の人は、

「恐れ入ります」つて、言ふんでせう、あら！　まさかつておつしやるの？　それがほんとうなんですから、私だつて愛想がつきてしまつたんですわ。さうしてねまあ笑はないで聞いて頂戴よ、お手付でもすれば「おもち遊ばせ」つて言はれるし、さうすれば又、「恐れ入ります」でせう？

一番すむ間に、何遍恐れ入る事か、つく〴〵、くさくさしてしまつたの……。

私には馴れないから、中々、「恐れ入ります」が出ないんですよ、「オ……オソレ……」つて、まご〳〵してるうちに、すぐ次になつて、又、とられて居るんですもの。

でも外のかた〴〵は、さすがに毎日、その式で暮していらつしやるだけあつて、そりやなか〳〵お上手なものよ感心してしまひましたわ。

餘り遲くならないうちにつて、八時半頃、送られて歸る車の上で、私やつく〴〵、母が恨めしうございましたの。「やつて頂戴」つて頼んでも「女の兒つていふものはそんなに無暗と、外へ出たがるものぢやありません、どんな所へお嫁にゆくか解らないのに、幼さい時分から、よそへ出る癖がついて居るといけませんから」なんて、私の大嫌ひだつたお嫁の事なんかばかりいつて、許しては呉れず、たまさかやつて下されば、あんなお局樣の寄合みたいなかるた會、どんなに私、



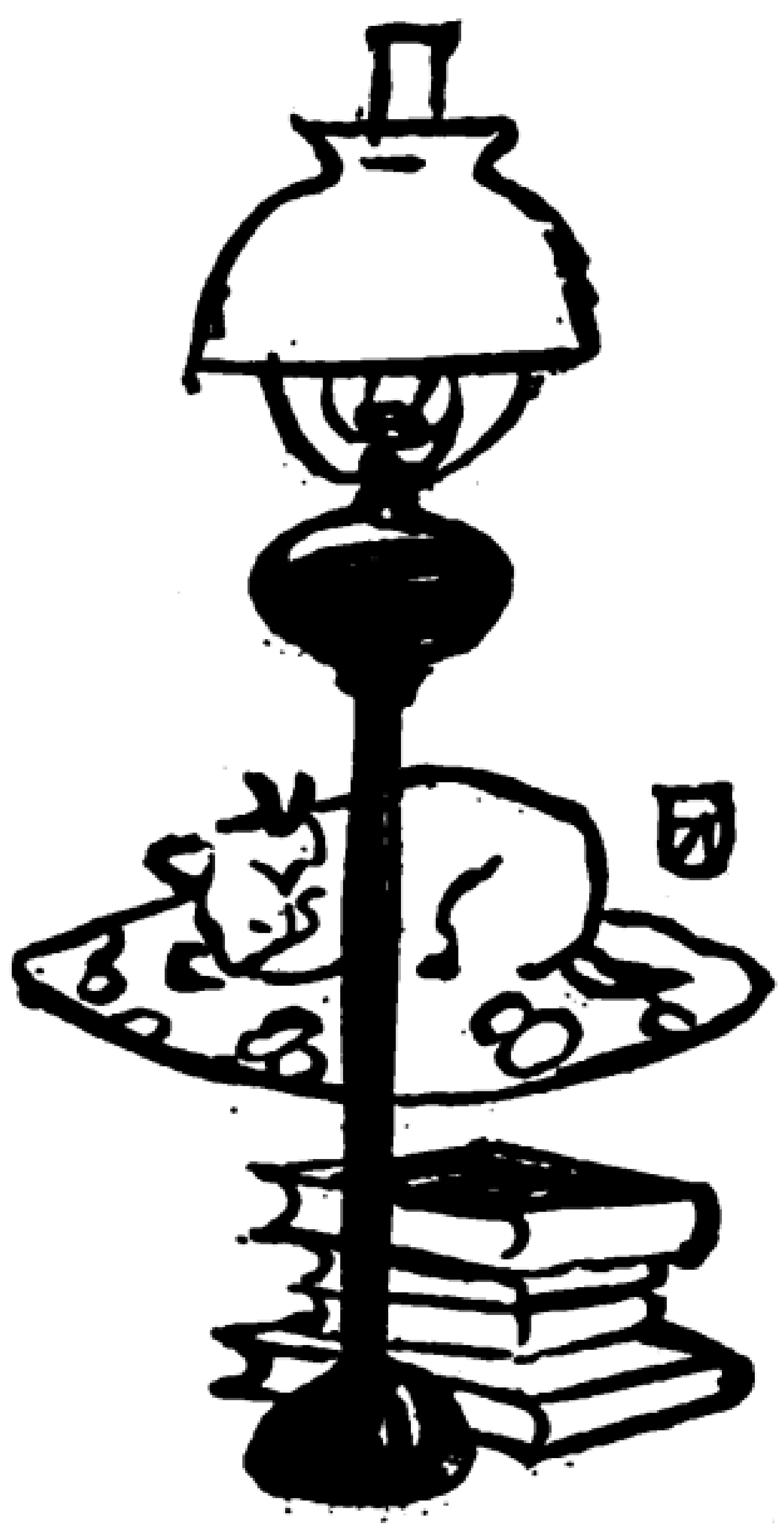
氣辛度だつたか、知れやしませんでしたもの。

それつきり、こりてしまつて、かるた會にやつて下さいなんか、頼みも致しませんでしたわ、だからこの年になる迄でまだ一度も、華やかなかるた會に逢つた事なんか御座いませんの、エ？　いくつでおつしやるの？　私のとし……、まあ、この年につて言つたつて、そんなにお婆さんぢやありませんのよ、これでも廿歳になつたばかり、……ぢやなかつた、明くれば廿一になるニユーマダムなんですもの、ホヽヽ。

日向の縁に、金絲雀がよく囀りますこと！

まあ、御ゆつくり遊ばせよ、お汁粉でもこしらへませうから……。

# 新ホーム



秋雨

### ○風の夜

十一月二十日、朝から降り出した雨も夕方にはもう止んだ。そして西の空を蔽ふて居た灰色の雲が動き出すと共に風が出た、風は夜に入つて益々勢を強くした。

家から程近い松林の、松の梢がザーッ〳〵と音立てるのが、丁度渚を甜める波の遠音のやうに聞える。

此時まで茶の間に足袋つぎをしてゐた母樣が何思つたかわざ〳〵立つて來て襖の外から「しづさん隨分な風になつたね、汽車の中は寒いだらうよ」

と太い沈み切つた聲で、さも頼りなさ相にかう言はれた。留守の間の仕事にと頼まれた隆さまの沓下を編んで居た妾は此時フッと手を憩めて一本抜いた編針を前髪のあたりに自暴に差し込みながら凝乎とラムプの心を見つめて

「もう何處邊まで行らしつたでせうね、エヽと今九時半だから沼津にすぐでせうよ、でも汽車の中は暖爐があるから……」

と獨言のやうに答へた。

鉢前の手拭かけが風に搖れて閉めた雨戸を思ひ出したやうに折々うつので、一寸外の方を見遣つて

「こんな晩に火事でもあつたら堪りませんわね」

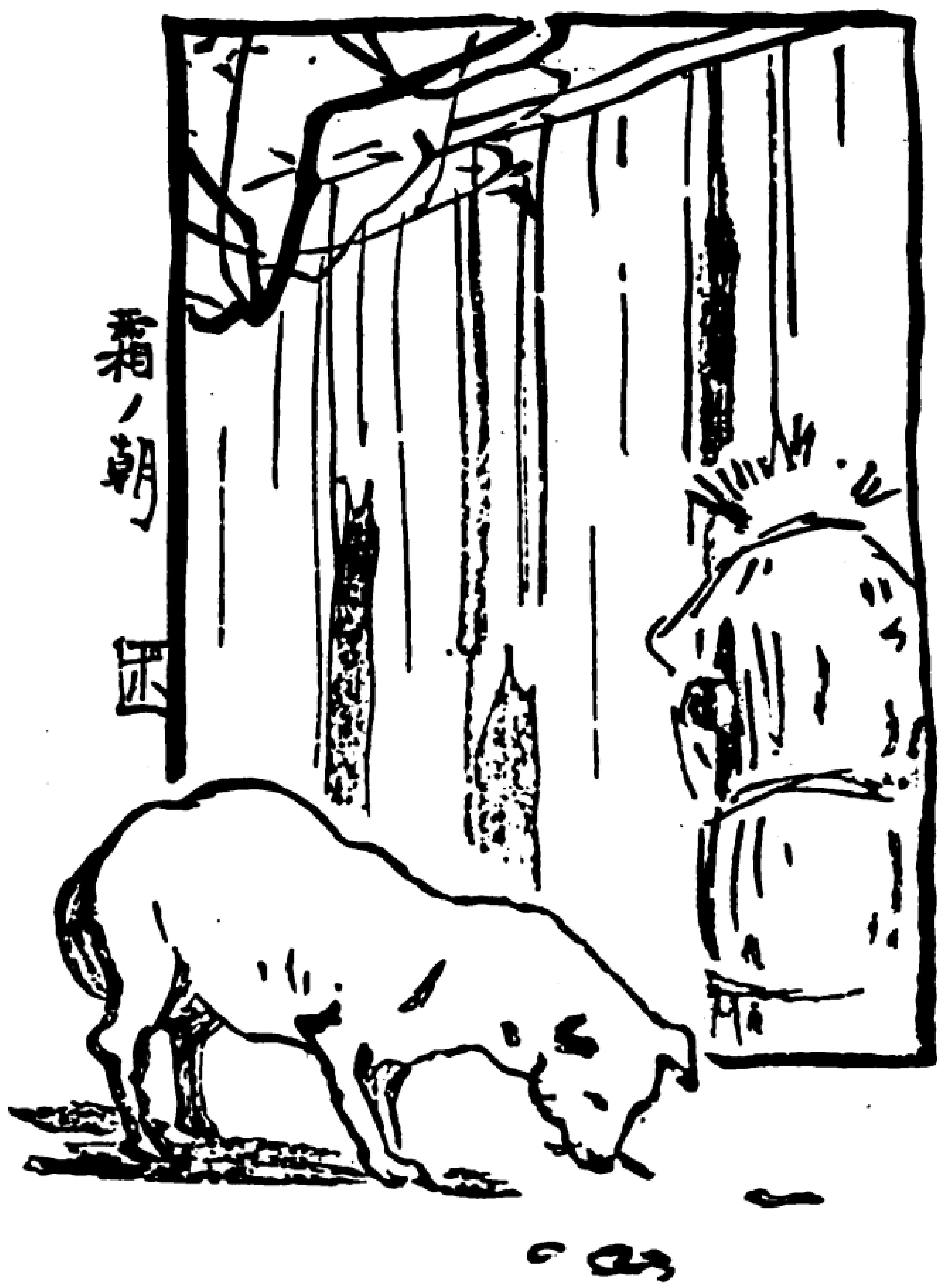
といひ足した。

「はんとよ火元に氣をつけなさい、もう表戸もかけやうかね」

といひ捨てゝ母は衣服の裾をばた〳〵いはせ乍ら玄關の方へ入らしつた。

「もう表戸はかけやうね」訊きなれた言葉ではあるが今夜は何だか「あゝもう少し待つて頂戴」と云ひ度かつた。良人は今汽車の旅にあると意識しながら、それでも今にも「オイ志津子ッ」と呼んで格子をお開けになるような氣がしてならなかつたからだ。

もう再び編み針を手にしやうともせず、櫻炭が白い灰を被つて埋まつて居る伊萬里燒の火鉢に手を翳し、何と云ふ事なしにホーッと溜息を吐いた。四邊は寂然と靜まり返つて、今寝た許りと思ふ母の寢息が一室を隔いて手にとるやうにきこえる。年寄でもようあんなに早く寢めるものだと思ひながら表道を通る火の番の足音に耳を澄した。




「何故こんなに氣が滅入るのかしら」

と口の中で呟いてゲッソリした肩を矢庭にすぼめた。

何だか暗い部屋に只一人投り出されて、いくら大きな聲をしても誰れも來て與れぬやうな淋しさを過ぎた不安恐怖の空氣が妾の全身をとり捲き、そして隙間を風がヒヤッと頰を掠めるごとに鬢の縺れ毛が耳朶のあたりを漂ふた。

やがて見るともなしに眼は晝間活けた床の懸花瓶に注ぐ、それが流れて同じく床に立て掛けてある良人の琵琶に止まり、更に廻つて机に落ちた、其顏にはありくと、

「此夜のやうな淋しい晩に寢まれるものか」と云つた影が映つて居た。

つと編みかけの沓下を膝から滑らして向き直つて、音せぬやうに机の抽出しをぬいて、そつと寫眞の一葉二葉、更に大きなのをもう一枚とり出した。

切めて寫眞とでも——相對の偶像に自問自答をやるやうな——語つたならとの幽かな慰安の道をこれに求める。こそばゆい笑みを誰れも居ぬながら漏すまいとしてか口のあたりの筋肉がピリ〳〵と動く、其度に眩し氣な眼を瞬いて、暫らくそれに見入つた。

大きい方のはそのまゝに、妾の兩手はカビネ形の二枚をはなれぬ。

不意に右手の一枚が裏返つた。「花下送別記念‥‥七月此時二十一」としてあつた。

これは妾が規定の學業を終えて校門を辭する當日の俤であつた。と思ふと胸は押へられるやうに苦しかつた。事實は兎も角初めて觀る實社會、これから渡つて行く世間には、强い人、弱い人、智慧の勝つた人、卑怯な人、さぞ色々な人に交際つて行く事であらう、思はぬ事件に負けてしまひはしないだらうか‥‥此等の想像は絶えず頭腦を往來して居た。それが！それが！

欠伸一つして今度は左のをランプの火影に透して上げたり下げたりして見たのは島田に結げて竹の模樣のある帶をしめた立姿であつた。此を見て初心に首を曲げてニタリと笑つたが

「關ケ原の寫眞！」

ニタリともう一度笑つて見た。

其年の秋の菊日和に何の氣なしに撮つたこれが生涯のラインを示す目標となつてしまつたので「關ケ原の寫眞」とは良人がつけた名だ。妾はこれを見る毎に淋しい影が後から被さつて來るやうな氣がしてならなかつた。逝く春、逝く春、妾は此の言葉が大好きである。一番あとからあけて見たのは忘れ得ぬ日の當時のものであつた。

妾の眼は電氣でも通つて來たやうに輝いて來た。其靜まだ見ぬ箱の中をでも覘くやうな格好をして眞正面

にそれを見様とはせず突然袂と共にそれを顔に押しあてゝかすかに強く幽かに「貴郎！」と呼で見た。人や見ると四圍を見まはしながら。

追憶の影、現在の形未來の畫像、此等の想は織るが如く走つて、すでに妾そのものゝ自我は何の權威もなく只管良人の上にのみ支配された、感情は他の何物を考へる餘裕もなくなつて一日否僅かに五本の指を折る時間の物思にさへ荒むまで心を亂した。待つ身には一日千秋などゝ定つた文句をも思ふて見た。近くを走る電車の音にも耳をすましました。風の強い濱名の鐵橋を通過する孤兒のやうな汽車小さい世界、大きい自然の風力の事など極端に悲観した末



「早く夜が明ければよい」

此一言が衝いて出ずには居られなかつた。

潮の遠鳴に似た風はまたひとしきりゴーッと唸つて小さい胸を縮め、柱が裂けるのかキーッと刺すやうな響が更に淋しい心を抉つた

○煤掃き

新ホームの煤掃きなんて手柄のかけ古しで如輪木目の艶をかけるのが關の山だらうつて？まあそんなに仰しやらなくつたつて好う御座いませう、酷ですわ、春や昔廿一の花の四月紫九寸の振袖を縮めて惜しかりし文金の水元結切て離してからまだ二年とはならないのですもの、何故つて‥‥後幾日ならずして君を異鄉

の月に送つた半年がほどを差引たならホヽ、可愛想に今度のお正月が志津にとつては新ホーム成つて初めてのお正月で御座いますわ。

　それはもう甘い蜜のやうな歡樂の天地はすでに過去の思出となりました、處女心の憧憬に美事築きあげた絢爛の理想の樂園はほんの僅かの夢の間に消えて、代りに地味な切實な浮世の響がひし／＼と身に刻み入つて來るやうになりました。學校のまどから突然とび出した妾は、難かしい人生の行路、山にあらず水にあらぬ人情の表裏を覗いて只驚きの眼を睜つて居ります。浮世の久しい經驗を持つて世に處して入らつしやる貴女のお眼から御覽になつたら、それはさぞかし子供の飯事とよりか御見えになりますまい、けれども／＼志津はもうこれで一生懸命なのです、力一杯なのです。大眞面目なのです。それだのに折々締りのないことをしては我れと我が身をかき悶へて泣きますの、とかう抽象なこと許り申上てもお判りになりますまいが、御承知の通り私ほど交際の下手なものは御座いません、また私ほど經濟にうといものはありますまい、それがために毎時うける結果は實に辛い情ない、もうこれが叩きつぶしての眞實の告白で御座います。ない金をあるやうに見せる御夫人もあれば、ある金をないやうに見せる奧樣も御出になる――世間に何故私はかうなのでせう。

　然し今更そんなことを彼是云つた處で仕方のない話し、一年々々に經驗を積んで行くより外に焦つても道はないと思ひました。人は家々の煤掃きに忙しいとき私は心の煤掃きに忙しい毎日を送つて居ります、そうして更に新らしい天地の光に覺め度いと祈つて居りますさらば、折角實の多いよい年をおとり遊ばすやう

　十一月廿五日　　志津ゟ

節子樣



# 兒童觀察より見たる家庭教育

高師教授　佐々木吉三郎

## ▲親の方が敗訴

家庭教育は、様々の方面から改良したいことが澤山ありませうが、先第一に子供の性質を觀察して、性にピタリと合ふ教育を施したいものだと思ふ。私がこれまで見た中には隨分立派なのもあるが、その多數は無理なやり方で子供を困らせて居る。若し私が裁判官で子と親の訴を判決するならば、親の方が敗訴に歸するでせう。私はこゝに一言子供のために義憤を漏したいのであります。

## ▲家の子は湯嫌ひで困る

錢湯で幼い子供を熱い湯の中へつゝこむ親がよくありますが、自分は神田子だぞと云つた調子で、子供がゆで蛸のやうになつて泣ても我慢させて居る、親自身は身體の皮が千枚張だから平氣だらうが、搗立の餅のやうな子がギャア〱泣くのを、何が熱いものか、馬鹿と叱りつけて、無理に推こむのは實に殘酷なやり方です。そして薄い皮膚を垢すりでゴシ〱擦るから子供は痛がつて上んが〱と泣く、これでも親は最少し最少しと抑へて洗つて居る。これで子供は懲りてお湯と云ふとかぶりを振れば、家の子はお湯嫌ひで困るとこぼしますが、嫌らひになるのは當然で、かう云ふ親子が私の裁判廷へ來たら、無論親の方が敗訴に歸するの

です。

▲お詫をするのが至當

家の子は何故かう成績が惡いのだらう。サア復習ですよ。と怖い顏でにらめつけるから子供は先づプルプルとふるへ上る。親は益々威猛高になつて、お前は第一算術が少しも出來ません。サア五に五を足したら幾つ、十ですか、宜しいそれなら十を二つに分たら、ナニ四つ！　馬鹿をお云ひなさるな。これ位なことが分らないのですか、とギユー〳〵膝詰談判で責つける。これではどぎまぎして判つたことも判らなくなり、折角の復習が賽の河原の石拾ひとなります。一體算術なその不出來は、子供が惡いのか、親が惡いのか判りません。どんな子だつて算術を間違ひたいと思つて居るものはあるまい。子供は總じて豪くなりたがる念が盛んで、陸海軍大將や總理大臣になりたいと考へて居る位であるのに、級中の劣等生となるのは、抑々誰の罪であらうかと考へなければならぬ。親は己のみが悧巧で子が馬鹿だと思ふ勿れ。飲酒家の父親、煩悶家の母親なぞがとくとその禍因を省りみたら、叱るどころかお詫して復習して差上ぐべきではあるまいか。兎に角膝詰談判で成績を良くしやうと云ふのは出來ない相談です。

▲三界に往きどころなし

雨降の日曜なぞに子供が座敷や書齋でドシ〳〵遊ぶと五月蠅〳〵と父親は叱られるから、緣側へ出て柱と柱へ帶を吊してブランコでも始めると、亂暴しちやアいけませんと母親に制される。仕方がないから臺所へ逃込めば邪魔ですよあつちへいらつしやいと下女に追拂はれる。子供部屋も具へてない家でかう皆に退はれる子供は、飛行機でゞも逃出さなけりやア三界に往ところなしで實に氣の毒なものです。一般に子供と云ふものを最少し考へ、子供になつて見て性にあつた無理のない家庭敎育を施したら如何でせう。

## ▲心理學者に尋ねなくても判る

子供を觀察してその心理を明らかに知るのは難しいことのやうですが、親には容易く出來る事です、何も専門の心理學者の如く統計を作り、弧線を畫いて何分の一なぞと云ふ研究をしないでも、大體の性情は少し氣をつけて子供を見て居れば判るものです。一寸遠足をしても子供は途中の様々な物に目がつく。ヤア大鯛が酒樽を抱て居らァと廣告看板に眼をつけるかと思ふと、君來給へ丸つ子だよと金魚屋の前に立止る。そこに繪葉書屋があれば、イヨー乃木大將だと眺める。教師がお寺を見せて、この天井を御覽なさい。これが天平式ですなぞと説明して居る内に、生徒は巣を運ぶ雀に眼が移つて、ヤア雀が雀



がとさわぐ。先づこんなことでも大人は一直線で子供は綽々餘裕あることが判ります。又子供の畫を見ても會話して見ても、よくその性が判る。アー、と泣のは悲しいのか可笑しいのかと一々心理學者に尋ねなければ判らぬと云ふこともありますまい、心理學者は俗人の知つて居ることを尙細密に系統的に知つて居るのですが、大體の觀察は親がよく氣をつけさへすれば出來るものです。

### ▲觀察仕放しでは役にたゝぬ

併し觀察をしても仕放しでは役に立ゝぬ。これを貯へて置て敎育に利用しなければなりません。敎育は全く一の技術です。彫刻家が大理石は斯の如き物、ナイフ、かやうな質である。このナイフを用ゐてかうすれば大理石が刻めると云ふことを理解しただけでは、實地の彫刻は出來ぬやうなもので、敎育の理法に到達したばかりではうまい敎育は出來ません。觀察を綜合して一の生た形のあるものを作るのが敎育です。植物學を知らなくても植木屋は彼流の知識で結構やる。彫刻家は化學を心得ないでも美術品を刻む。この上に科學の知識があれば尙更結構であるが、單に知識ばかりでは駄目です。敎育も矢張心理學の知識を旨く組合せてこれを應用する技術が必要であります。

### ▲敎育は藝術的

子供の性質は、活動的でテニスの球の如く轉々變化し、所作も注意も大人のやうに長續しないものであるから、躾をするのに餘程機轉が要ります。假令ば幼兒に牛乳を呑ませる場合なぞ、サア〳〵と續けざまに匙を運べば、極好な兒でないと、大抵五六度で厭とつきのける。これに變化を與へて、今度はお砂糖をどつさり入れましたよ、オヽ旨いこと、ソラもう一遍でおしまい。とか何とか巧く繰つり作ら口へ入れてやれば、うか〳〵と豫定の分量だけ飲んで了ふ。父親の書齋で、インキ壺へ手をかけた折なぞでも、「おいたしちやアいけません」と叱ればワアーと泣てじれるが、「オヤこん

な綺麗な畫がありましたよ、御覧なさい」と云つて子供の注意力を他に轉じさせる内に、インキツボをチヨイと隠して了へば難なく治まる。顔を洗つてやるにも只洗つては汚れが落ちぬ内に厭がるが、サア最一つお鼻のバッチを取ませう、ホラ今度で綺麗になりますよそしたらお父親がお褒でせうなぞと興味を與へれば容易く洗はせて了ふと云ふ工合で、何でも機轉を用ゐると子供と喧嘩せずに目的を達し得られるものです。又



用語にも却々機轉が要るので、三つ兒に向つて、「そんなことをしちやア困るぢやアありませんか」と云つても、困ると云ふ事が何だか判らないが、姉さんやお母さんがアーン〱と泣きますと具體的に言へば判る。お婆さんが大きな桃を拾つたと云つてもよく判らないが、オヽ重い〱と桃を抱へる眞似をし乍ら話せばよく判る。凡て年齢に應ずる言葉の程度を知つて相當の語を使へば彼の腑によく落ちるのです。子供の教育は

どうしても獨立的にやる必要があります。

## ▲自治的に導く工夫

子供を自治的に導いて見ようと考へた場合には、先づ彼にこの性があるかどうかを觀察するが宜しい。ヨタ〱歩き出す兒をオヽ危いと抑へれば尚歩かうとするし、牛乳を飲み御飯を食べるのも獨りでするのを喜ぶところを見ると、自治は兒性に反對したことでないのが判りますから、利用次第で理想的の場合まで導かれるに相違ありません。ヨタ〱歩く子が倒れると、アヽ轉んだオヽ危いと騷ぐのが普通ですが、こゝが自治心養成の時だと心づいて、エライぞ、獨りで起るから御褒美と勵ませば子供は不動樣の顔を爲乍らも獨りで起上る。若し轉ぶ度に起してやれば、兒供も大人の騷ぐのを面白い位に思つて起されるのを待つやうになります。子供が自分獨りでやることは成る可く褒めてやつて、「お母ちやん私お手玉獨りでつけてよ、」「マアさう樂いことネー、」「僕獨りで學校へ往かれる、」「さう樂いネー今度は獨りでお道具を揃へてごらん出來ますかそれで宜しい樂いこと」と云つた調子に勵ませると、段々良い癖がつくものです。尋常五年生位になれば、靴を磨いてごらんよく出來ますかなぞと云つてやらせば、乾度出來るやうになります。

## ▲時間と勢力の經濟

書生や下女が帶も靴の紐も結んでやると云ふやうな上中流の子供なぞは、ワザと泥濘へ踏込で靴を汚し、召使達を騷がせるのを面白がる風がよくあります。一體日本の生活程度では、どこの家でも自治心をみつしり養つて勢力と經濟に餘裕を作らなければならぬのにどうもこれが缺陷して居るやうです。惡くすると教育者の家庭も亂脈を免れぬのがあつて、元日の朝學校へ出る主人が、ネクタイはどうしたと妻君を呼ぶ、妻君が忙てゝ探して居ると、母さん僕の靴下は、私のリボンはと子供が尋ねに來る。そこへおかちんは幾つ燒きませうかと下女が顔を出す。妻君も千手觀音でないか

ら四方八方から追求されて逆せ上る、主人はプン／＼怒つて雑煮も食べずに出校する。而して生徒の前に立つて、夫婦相和しと勅語を讀上げると云ふやうなとがないとも言はれません。自治心の缺乏は恐るべき影響を來すものでありますから、子供の内から發達の階段に應じて、一歩／＼養成するのが肝要です。

## ▲賞罰の手加減

お祭りの來るのは指を折つて待つて居るが、晴物が出來ればいゝなアと待つて居る子はない、褒められるより叱られるのが好きなものはない。こんな點に子供も大人も共通でせう。であるから何でも一度爲た行ひに對し、善事であればそれに愉快な情を結ひつけて置くのが必要で、褒ることを怠つてはいけません。下ざまの家庭では、朝から晩まで子を叱り續けて居るが、子供は却つて惡たれてばかり居る。吾々が批評教授をする時に、諸君のは準備が頗る惡いと頭からこなして終りに、併し整頓は良いと褒ても、其人は褒められたことは頭腦にはいらないで、只けなされたのばかり殘念に感ずる。それより整頓が實に宜しいと充分褒めて置いて、只殘念なことには準備が少しと云ふ風に良い方を先に擧げると、彼は長所を認められたのを悦んで快よく短所を悟るものです。子供にも矢張この筆法を用ゐれば、彼等は長所を示さう／＼と爲て居る内に自づと善に進みます。若し止を得ずして罰を當ふる場合には、同情ある見方でこれを加へたいものです。併し乍ら時に横着を繰返した場合には、霹靂一聲ウンと取ちめて随分體罰も加ふべきであるが、これは擧國一致の態度に出なければなりません。父親が處罰するのを母親が止めたり、祖母さんがかばつたりすれば、子供はいゝ味方が出來たりとつけ上る、これでは鷸蚌の爭ひ漁夫の利となるもので更に效力はありません。執拗な子でも誰に泣つかうが許されなければ、三千世界に寄邊なしと感じて詫る氣になるものです。（心理學通俗講話）

# まあちやんの死

松平　鋭子

枝折戸を開けて、七つばかりの少女の手を引いた奥さんがはいッて来た。

西尾の小母さんはまあちやんの死骸の前に、默念と座つてゐたが、この時つと眼をあげて奥さんの顔を見た。視線がぱつたりと合ふたけれど、二人ともだまッて眼を戻らしたつきり、何とも云はない。

「おばさん」

振分髪が肩過ぎたのを、古めかしい耕塵の子の布で前髪を結へた、友禅の元禄袖、奥さんの袂に縋つた儘、

「おばさん」

と彌生さんがまた呼んだ。

「唉、はい」

おばさんが、泪に濡れた眸で、幼い人の面を見ると、こちらもつまされた悲しさに、母御の袖に顔を隠して

「おばさん、あたし、まあちやんに遊びに来たの」

「まあよくいらして下さいましたのね、まあやも彌生ちやまにお逢ひしたいッて、さう云つてをりますよ」

「まあちやんが……だッてまあちやんは、もう、死んでおしまひなすつたんぢやあなかつたの」

言葉の間に奥さんもおばさんも、同じやうに縁に近寄つて。

「おばさん、おさつしよつてをりますよ」

奥さんは泪を拭く。

「まあちやんをお亡しなすつて、嘆いておいでのおばさんのところへ、彌生なんぞを連れて参つて、さぞ心ない奴だとお憎しみになるでせうけれど……堪忍して下さいおばさん、あんまり彌生が、まあちやんにお逢ひしたい したいッて、せがんでならないもんですから……」

「何のまあ あなた」

おばさんは故意らしく元気よく、云ひ切ると同時に、浅黄メリンス襦袢の袖を噛み〳〵めて、俯向いた。

「お上り遊ばしまし、奥さん……彌生ちやま……さア、まあやに逢つて下さいまし」

おばさんが片手をついて、振り返つた座敷の中に立てまわした倒屏風の端が、襖の隙に僅か見える。

…………。

更紗模様の蒲團の裏に、まあちやんは横たはつてゐた。その眼こそ閉ぢたれ、唇の色さへ褪せず、まるで眠つたやうに見えるのを。ぢつと凝視たのみでは抱き起らぬ、揺起して あの美くしい眸が明いたら、また飯事でもして遊びたい、と彌生さんは思つた。

もう覚めぬ人にまあちやんはなつて了つた、紙人形の顔を半ば描きかけた儘で、まあちやんはお墓へゆく……、彌生さんはほろ〳〵と泪を零した。

奥さんは居座り寄つて、組み合はしたまあちやんの手日々見馴れた美くしい両輪の、青褪めたのを打ち見やると、せかれた泪に顔を反けて、

そつと白い布を元の様に懸け直した。

　おばさんは泣くにも聲が出ない。枕邊の白木の臺に、線香の火は小さく、たつた一線傾なげに立ち登る白烟の末は、仄ぼのと部屋の薄暗がりに消えてゆく……。

「南無……」

とばかり奥さんは、傍への彌生さんの左手を取つて引き寄せると、三の掌を合せて、瞑目した。

＊　＊　＊　＊　＊

　まあちやんは九つで死んだ。

　恰度秋と冬との境目の、山茶花の葩が足音もなく土に歸る日であつた。折悪く風があつたものだから、庭に敷いた花ござの家を疊んで、彌生さんの座敷にうつツてからは、二人して人形を作つてゐた。

　まあちやんは人形をこしらへるのが大變に上手かつた。半紙を新らしい、柳箸にきりきりと捲いて、先端を疊につけて紙を縮める、一ぱいに延びてゐたのを半分程に縮めて、箸を拔くと、美くしい小皺の寄つた紙は、人形の縮緬の代になるのであつた。

　白い絹糸で括つたのは母さん、紫は姉、妹は紅、島田丸髷切禿、緋鹿の子かけた唐人髷の娘さんの中に、ちよん髷の父さんが鹿爪らしい。

　黒繻子の小布を蛇の目に切つて、綿を心に入れた丸坊主の頭に張ると、お芥子を置いたちよび助になる。

　島田には銀の平打、丸髷には白珊瑚の根懸、若い娘達は花簪と、その人びとの粧ひをも、まあちやんはよく知つてゐた。

　千代紙切つて振袖やら留袖やら、襟に重ねたのは紅絞の友禪、裾下の折返しに、藤の紫蹴出のあやめも艶やかだつた。

　まあちやんはその日、こしらへた人形の顔を描いた脣の紅が、まあちやんの筆で彩られると、殊更に色新らしく、蘇生つたやうな艶を持つ。

　彌生さんはその傍で、動いてゆく手先の美しさを、圓な眸をあげて見やり乍ら、人形の衣服を廣げたり疊んだりした。

　寒氣がするツて、まあちやんは夕暮方いつもより早く家に歸つた。見送る名殘惜しさうに門に立つて、いとしさうに振返つて稚ない人を、まあちやんは莞爾した。

「また明日ね、明日は屹度こしらへてよ。さようなら、彌生さん」

こつくりをすると

「きつと〳〵明日よ」

彌生さんもうなづいた。固く約して　まあちやんは別れたのだつたけれども……。

　彌生さんは、まあちやんを姉さんのやうに思つてゐた、家の富の高こそ違へ、年も二つ許の、よろず嫻やかなまあちやんは、稚い彌生さんの爲に、どんなに懐かしい人だつたかしれぬ。

　遊ぶにもまあちやん、寢てもまあちやんの夢を見る。

　そんな中の好い二人が、もう遊ぶ事も適はなくなつてしまつた。惡性の氣管支炎で、まあちやんはその夜から人心地もなかつた。

五年前に夫に先立たれて、まあちやん一人を賴みに暮してゐたおばさんの悲嘆は、よその見る目も傷ましい位。……おばさんはまあちやんが優しい子で、何かにつけて勞つて吳れた事、もの一つ强請る事も好くしなかつたことなどを思ひ浮べて、掻むしられたやうな胸を抱いて泪してゐる。

まあちやんは死んで了つた、たつた九つにしかならないで……。

おばさんの泣いたのは無論のこと奥さんも泣いた、彌生さんも泣いた……みんなが泣いた。

晩生れで年齢が足なくつて、七つになつても學校へ行かれぬ彌生さんは、早く來年になれば好い。まあちやんと一緒に學校へゆかれるからと樂しみにして待つてゐたのに。

＊　＊　＊　＊　＊

逐々まあちやんのお葬式の日になつた。

喪主に立つた彌生さんは、白綸子の長い袂を垂れて、白い帶、白い緞帶、白蓮の蕾のやう。黑髮のみが益々艶好く、またいたいけに見えるのだつた。

まあちやんの學校の先生は、優しいまあちやんの靈を弔ふべく、一級の生徒を具して供に參じた、

同じやうな年頃の、まあちやんに似通つた生徒達の風姿を見やつて、おばさんは泣いた。

「悲しいものを見せて下さる」

といッて、はら〳〵と泪を零した。

彌生さんも潤んだ眸を伏せて、小さい姿を疊の上に斜に座つた。緋の法衣、金襴の袈裟、畢、御僧が、まあちやんの爲に何卷かの經を讀む。

師走の空は寒く、まあちやんの死を悲しむのか、黄ばんだ葉が音もなく散るばかり、日光もさゝない。

彌生さんは、多くの坊さん逹の後に端座して、歸らぬまあちやんのことを思つて泣いた。

學校が退けると、毎日々々彌生さんの家へゆくのがならひのまあちやんは、彌生さんの母さんのことを、同じやうに母さんッて呼んでゐた。

日暮れて歸つて行くまあちやんの影―、枯れた柳の葉がついてゐたことなども彌生さんは記憶えてゐる。

まあちやんの柩には、死切の京人形と紅入繻珍の袋に入つた小さい數珠とまあちやんが好きな、折鶴と椿の花の千代紙などが、仲好の彌生さんの手によつて入れられた。

時過ぎてまあちやんの柩は、懷かしい家の門を離れた。

高い空、繁れる木立、聳ゆるのは彌生さんの家で、朝夕に千代紙切つて、姉さま作つた小座敷のあるところ……。

まあちやんは九年の間、親しみ懷かしんだ記憶から離れて、知らぬ國へと距たりゆく。

そのしらせか、一同の胸を刳つて泣け泣けといふやうな音に、侘しやにかな鉦が鳴る。

彌生さんは白い袂を顏に當てゝ、ほろ〳〵と止め度もなく泪を零した。

〰〰〰〰

# 落穗籠

紅蝶



○

先日神田の青年會館で「金色夜叉」と「己が罪」の擬裁判があつたさうですね。そして間貫一は無罪、塚口虔三は罰金四拾圓の判決であつたとか云ひますわ。今更ながら男子方の蟲の良過るのに呆れるぢやありませんか。そりやお宮は虚榮のため、許嫁の男を捨てたのは惡かつたかも知れませんね、環が輕々しく男を信じて許したのは莫迦であつたかも知れませんわ。然しそれがためかよわい女の身體を傷けたり、大切な節操を弄ばれた罪が宥るされたり、僅少な罰金で濟んだりするのは餘りぢやありませんか。お互に女つて何うして這麼に割が惡く生れて來たんでせう。これぢや矢島さん達がいくら男子の姦淫罪なんぞ議會へ提出しても駄目ですわ、それにそんな法律でも拵へやうものなら先づ議員さん達が皆罪人にならなければならないつてぢやありませんか。しかし私等は矢島さん達の勇氣に敬服してますわ。結局やり遂すか握り潰ぶされて了ふか可い根競べですのね。

○

青踏社の方のことが大層問題になつてゐるやうですね。殊にむらさきつて方なんて、無茶苦茶な事をいつて、くさしてゐらつしやるわ。私は何も青踏社の辯護をする譯ぢやありませんがね、女だつて人間ですもの、何もお酒を飲んだつて、又一時の好奇心でお女郎買位したつて、何もさう色情狂の無頼漢のといふに當るまいと思ひますわ。それよりは表面えらさうな事をいつてゐながら、陰へ廻つちや暗い待合の奥邊で俳優遊びをする貴婦人達の方が餘程下等ぢやないでせうか。

そんな方に限つて人に向つては、屹度「まアあの人逹は女だてらに酒を呑んだり、お女郎買をするんですつて」などゝえらさうな言をいつて濟ましてゐらつしやるに定つてゐますわ。それから見れば尾竹紅吉さんなんどの方は餘程無邪氣ですわ。公然とやつてゐるんですもの、其麼事を彼是いつてゐたら、男子方の俳優や其他の藝人を贔屓にするのも矢張り下等ですわ。同性を愛するつて事が其麼に惡いんでせうか。

○

物事は何でも最初にやり出す人が、賞められたり憎まれたり排斥されたりするものですわ。それ丈又えらい處があるのですわ。青鞜社の人々は男に對抗して行く丈の力を一番先に現實にしてゐるのですわ。それをし得ない人が妬んで傍からわい／＼云ふのよ。現に尾竹さんは何うか知りませんがね、平塚明子さんなんてそりや一寸女に珍しい確りした人ですよ。森鷗外先生なんかも始終賞めてゐらつしやるぢやありませんか。男の哲學者なんて駄目だ、明子女史の方が餘程確りした言をいつてゐるつてね。あゝ嫉妬心てものはいやね、白を黒く見せるのも心の働ですつて何處かの學者が云つてましたよ。

○

それで思ひ出したのは内藤千代子さんのお噂、「あの方も女學世界に寫眞をお出しにならなければね……」とほゝゝゝ失禮ですわね。

處であの寫眞を拜見してから男子方で大分御獨身主義の方が殖えたさうですすて、女で崇拜する方が殖えたつてますが妙なものですわ。それにしても此頃お作の見えないのは、何だか氣になりますわ。「箱から出た女」をお書きになつてから自覺なすつたんだつて、誰かゞ云つてましたつけ。こんな事を申しちや濟みませんけれど、私から見れば「箱から出た女」なんて眞實に千代子さんには悲慘な滑稽ですわ。あの作を拜見した時分、私は美しい幼兒が長い熟睡の夢から醒めて、半ば夢心地で親に何か強請つてゐるやうな感がしましたよ。矢張千代子さんは千代子さんで鏡花式の調子の可

い美しい情趣の豊かな文章を書いて、其特色を發揮なさるが可いと思ひますわ。

○

作家の中で私の好きなは田村とし子さん、大嫌なのは尾島菊子さん又の名小島文子女史何とやらいふ御機關雜誌で大層男子方の事を惡く仰しやりながら、表面では尾島菊子で中々若い男子と御交際がお好きなんですつてね。だから女の強がるのも當にならぬものだなんて男に云はれるんですわ。

○

醜業婦々々等とよく藝者なんかのことを卑しんで仰しやる奧樣がつまらない女に『まア奧樣のお髮のよく出來ましたこと、新橋に奧樣の後姿にそつくりなのが居ましたつけ。』なんて云はれると內々御得意なんだから。矛盾した世の中ですわね。そして社會からは藝者許りが男を墮落させるやうに思はれてゐる位なのに、又其藝者の一寸した事なんぞか新聞に堂々と二號標題になるから凄じいね。金を儲けて名前を弘めるのは藝者か女優になるに限るつて、先日も私の處へ去專門學校を出て或會社へ勤めてゐる若い男が來て『僕も子供をもつたら、男なら俳優、女なら藝者にしますよ。』つて眞面目になつて云ひ出すのを聞いて、吹出すことも出來ませんでした。それ程藝者つて男の眼にはよく映るものですかね。其時あゝ私も最早少しお多福に生れ付かなかつたならば…と熟々感心して了ひましたわ。いゝえ醉狂ではないのよ。





繪もの語

# 夢

太田三郎

## 詩　扇

往昔、支那に木生と云ふ青年がありました。常に泰山に登つて、朝暾の美しさに眺め入るのを樂しみとして居りましたが、或夜、泰觀峰の宿に一つの夢を見ました。

其處に品の好い夫人と、美くしさの極みを一身に集めた令孃と、二人の女が渠の前に在りました。美くしい一本の扇は、美しい人の手に依つて渠に贈られました。それには手跡麗はしう一絕が記されてあるのを見ました。刹那、曉の鐘は殷々と響き渡つて、忽ち現へ戻されました。

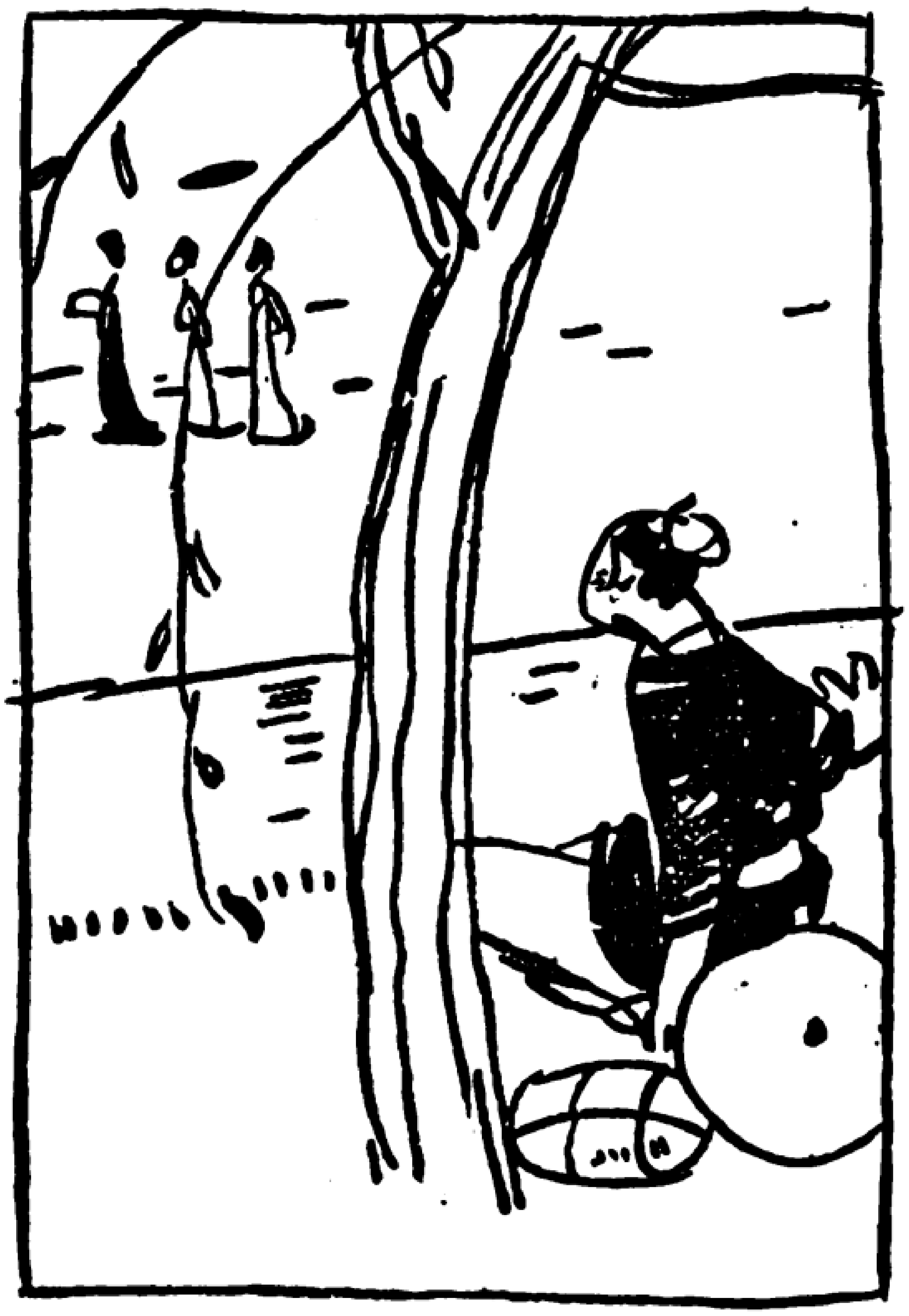
夢はたゞそれだけです。けれどどうした譯か青年の心は、ひどく夫れに唆られて、うら若い胸の血を高鳴らせずには居られませんでした。寶石のやうな瞳の輝き、床しい文字の匂ひ、さうした印象は深く鋭く渠の心臟に烙印を押して、日を經、月を經てもなほ消えませんでした。空想がちな青年は、黃昏の銀濁色の壁に身を凭せて、遠い思ひを夢中の少女に馳せた事が幾度だつたか知れません。

其翌年、渠は笈を負ふて都に上る身となりました。春ももう滑かな鶯の聲に老いる頃、住み慣れた地を後に、其途に上りました。

一日、それは脚絆の埃と額の汗とが、漸く其日の疲勞を覺えさせ初める午さがりの事でありました。氣の阻みを少時路傍の柳の爽やかな蔭に慰めて居りますと折しもちらと渠の眼に入つたものがあります、それは小川を隔てた遠い彼方を搖ぐ紅の色、凝視すると美しさうな三人の少女が、何か知ら語ひながら徑を辿るのでありました。春三月、日の光柔かくそよ風暖かい野の、鮮やかな綠の中にしな〳〵と紅の裳裾を曳く三人

の少女、若い男の心は時めかずには居られません。思ひ無しか此方へと吹く風にも、異性の匂ひの艶めかしさが感せられて、渠はじつとじつと、瞬きもせず貪り眺めるのでありました。

が、やゝあつて或る不審は油然として胸に上りました。三人の中の前の一人は、何と云ふ事はなしに嘗て何處かで相見たものゝやうに感せられるのです、羅のやうな春の日の午後の光りを隔て、猶ゆらゆらと立ち上る陽炎に形を亂されて、其面輪も唯白いとのみ、外廓すら分ち兼るほどですから、もとよりそれと思ひ極める事は出來ませんけれど、すらりとした體の運びは、如何にしても初めて見る夫れと思はれませんでした。惑亂の青年は生暖かい歯痒ゆい或るものに卷かれて、



總身に丁度酔ひ痴れた人の快よさと苦しさとが感觸されるのでありました。

する中に、もう赤い裾はだんだんと、より遠ざかつて、果ては野の末遥かにぼうと霞み渡る金泥の中に溶け込んで了ひました。掌中の珠を奪はれた憾み、渠は頓に氣の衰へを覺えて、宛でうつけたる人のやうでした塔へかねて傍の柳の幹を削り、其處に矢立の墨も濃みがちに、

隔ㇾ江遥望緑楊斜　聯袂女郎歌ニ落花一　風定細聲聴不ㇾ見　茜紅裾入ニ那人家一

と感傷したりなどもしてみました。

惱うさうな姿がその蔭を出たのは、小半時も過ぎてからでした。遅々として歩みは果取りません。一歩一歩、渠の心は重るばかりでした。と、不圖見ると路

傍の草に一本の扇がありました。手に執るとこは如何に、それは嘗ての夢さながらの品です。記された詩の句にも一字の違ひがありませんでした。不思議さ、懐しさ、靑年は思はずひしと握り締めて、熱い唇を當てました。突端、はたと思ひ當つたのは先刻の女のことです。彼女は正しく夢の女であつたのでした。さあ、もう足は一歩も前へは出でません。終に路を轉じて小川を渡りました。

心推てにとめて行つた其方向には、一の寂しい部落がありました。併し其處にはさうした人達の住家と覺しき家もありません。處の人に種々と問ひ試みても、滿足に値する答へは、一つも得られませんでした。——とうとう其夜は其部落の汚なげな旅舘に悶え明して了ひました。

次の日、靑年の姿は再び曩の川邊に在りました。もしや再び其處に昨日の人を見得る幸ひもあらうかと、萬一を僥倖したのです。けれどそれは、本統に果敢ない望みでした。悠々とした遲日の光の中に凝乎と立ち盡す渠に、はらはらと又はらはらと紅の花は散りかゝつて、音も無く逝く水の姿が徒に哀愁を唆るばかり期待の人は影さへ見せないのでありました。昨日の柳に又一絕、

異鳥嬌花不レ奈レ愁　湘簾初捲月沈レ鉤　人間三月無二紅葉一　却放二桃花一逐レ水流

かくて其夜も亦昨夜の宿に明されました。けれど行く手の道は尙遠い。靑雲の志に燃える若人の心の一の聲は、其儘其處にじつと止らしては置きませんでした。渠は翌日、進まぬ足を强て進めました。

話は十年ばかり飛びます。

木生は終に學成り身を立てました。往年の感傷的な一靑年も、今は世に時めく官位に居て、繁激な其職務は、空想の世界をだんだんと渠から奪つて行きました古い夢も出京當時の出來事も、今はたゞ美くしい思ひ出として、ほんの時折に忍ばれるばかりとなりました。が、たゞ彼の路傍に拾つた扇だけは、何となく棄て難

いものに思はれて、常に身邊に携へて居ました。

玆に或る年の春の事であります。一日、渠は郊外に出で、うらゝかな眺めを賞して居ました。と、繋いだ乘馬が遽に何に驚いたのか、綱振り切つて奔りましたので、左右の侍臣が其後を追ふ間、少時傍の民家の軒に佇んで居りました。すると其家の主の老翁は、貴人に對する禮として懇ろに渠を屋内に誘ひました。

それは表にも似ず、樓臺のさまが壯麗な家でありました。其處に渠は止められました、悠々と扇を展いて四邊の畫壁を賞玩したりなどしました。すると老翁は頻りに其扇に見入つて、何事をか思ひわづらふ樣でしたが、終に口を切つて暫時それの借覽を乞ふのでした。して、何思つてか、つと夫を携へたまゝ奥へ馳せ入つて了ひました。



軈て再び其室に現れた翁は、前にも増して面を和げ、なほ切に請うて更に或る一室に渠を導くのでした。と、こは如何に、眩ゆきばかり美しい室の中にしとやかに頭を下げた夫人は、彼の夢の女の、年長けた方その儘なのです。……扇の主は玆に始めて分明しました。

夫人は錢氏と云つて、今は世に無き人の田將軍と稱ばれた軍人の妻でありました。嘗て將軍は、西征の軍に流矢の傷くる所となり、夫れを或る山間の別業に療養して居りましたが、其時それに侍して北地に往つたのは、娟々と云ふ當時十四の愛姫でありました。

ある日娟々は、その日病やゝ快よい父に勸められて

侍女二人を從へて目も遙かな春の野に、看護の疲れを慰めました。が、歸宅の後に心附くと其時彼女は己れの扇を遺失して居ました。己が手跡己が諷詠が、何處如何なる人に見らるゝ事かと、それが堪へがたく物憂くて、彼女は其翌々日の午後、暇を偸んで出でゝ野に夫れを求めました。併し尋ねる品はもう何處にもありません。彼女は落膽して踵を回らしました。が、折柄ふと認めたのは、一本の柳の樹に錄された二首の詩です。文學好きの若い女は好奇の眼を輝やかして、しなやかな柳の削られた白い肌に躍る墨の色を追ひました。

ところが不思議にも、其時彼女は、我にもあらず柔かい暖かい、而して又何となく恥しい、嘗て經驗した事もない或る感じが、しみ〴〵と胸に湧くのを覺えさせられるのでした。して、歸宅の後も、自から絕えず其詩が口にせられて、而して其度毎に一種の快感を味はされるのでした。

する中、不幸にして將軍は痼疾終に癒えずして世を去りました。娟々は母と共に叔父、母の兄の許に身を寄せることゝなりました。世の常越して美くしい身の妻にと望む若殿原も多うございましたが、何思つてか彼女は悉くそれを拒み、もう二十幾つの今日が日まで、童貞の惱みを深く秘めて、朝夕に彼の詩を誦しつゝ寂しい生活を續けて來たのでありました。

「ところが、失つたと云ふ其扇が、今貴方の御所持のそれなのでございます。

と夫人の聲は奇遇の歡びに顫へました。

聽て、ほつと耳の根までも眞赤にした娟々の照り榮へる美しさは、其席を彩りました。

果して、それは曩日の夢に寸毫の差もない處女でありました。

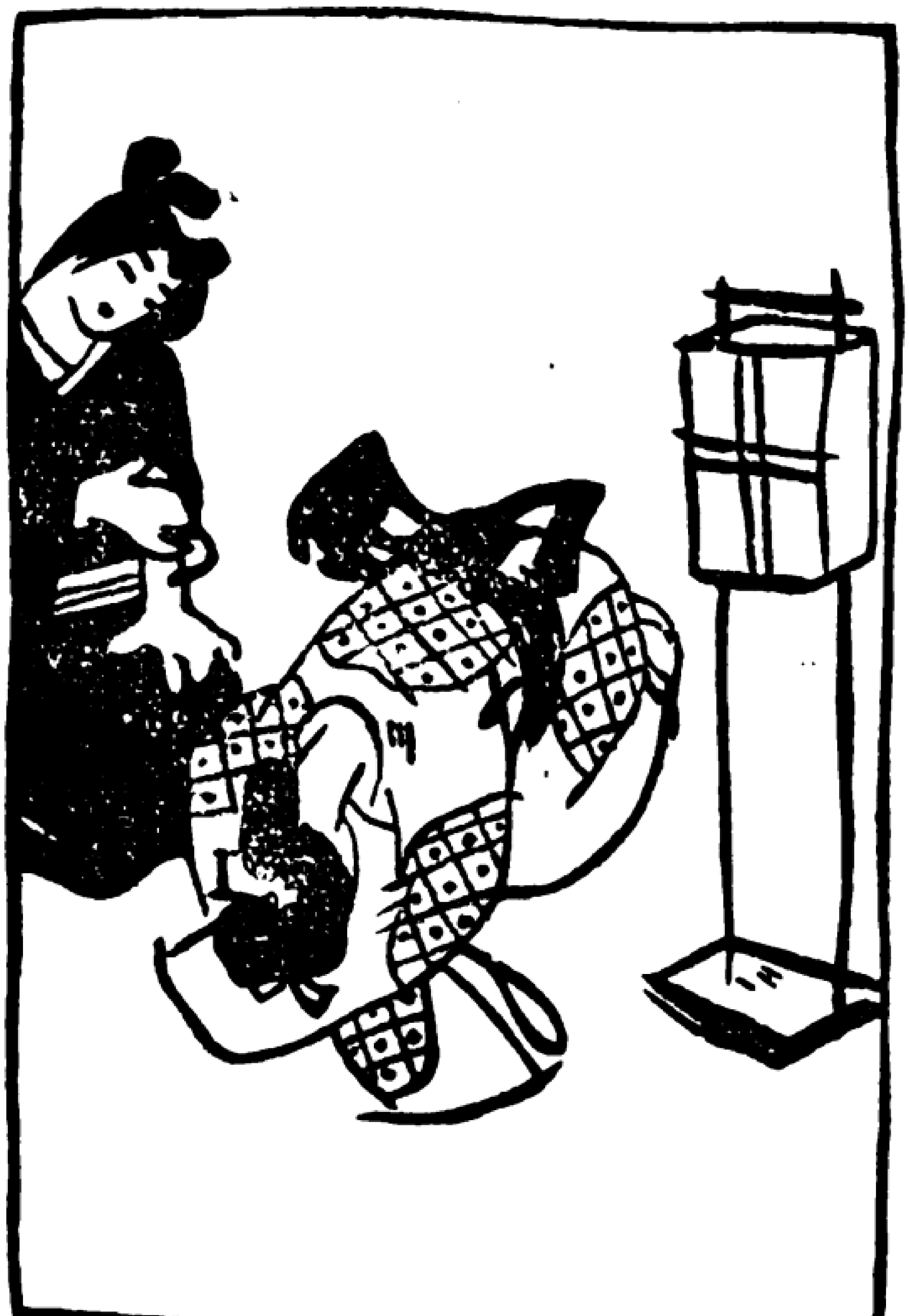
間も無く二人の間に華燭の典が擧げられたのは云ふまでもありません。

## 裏着る衣

越後、蒲原に、宇平治と云つて豊かな暮しの人がありました。其處に一人の娘がありました。

雪の白い北の國の女はすべて其肌が白い、夜燃える北の海の女はすべて其瞳が輝かしい。中にもこれは白きが上に白く、輝かしさの上に輝かしう、あえかな少女となつて、周圍の異性の烈しい憧憬の中に、盛りの花の雌蕊の驕りを擅にして居るのでありました。

ところが其矜持も少時の間でした。突如として怖ろしい、併し嬉しい美の壓迫者は彼女の前に立ちました。程遠からぬ地の或る富豪の許に、一人の美少年が都から來たのです。それは其家の子で、七歳の時から京に上つて大覺寺に給仕して居たのが、故あつて此郷國に歸つて來たのでした。絶え間なく、流動する都會の空



氣の中に人となつて、華やかな色と強い薫りとに自ら洗練せられて來た其容姿が、土臭い周圍からくつきりと浮き出して見えたのは勿論です。美しい、とは云へ尙北國の片田舎の處女は、もう一目見てそれに囚はれて了ひました。

思慕懊惱、さうした日は覺醒した彼女の春の心に續きました。が、深窓の下に親々の監視嚴しう起き臥しする地方の豪家のお孃樣は如何にして其燒け爛れるやうな思ひを恥しい人に傳へやうやら、其術さへも知りませんでした。否、よし其術は知り得ても、それを施すべき機會などはありませんでした。

思慕懊惱の日は、なほ續き續きするのでした。

男は、素よりさうした事を夢にも知りませんで居ました。ところが或夜のことであります。既に四邊が寝静まつた頃、庭に面した部屋の戸を、ほと〳〵と打叩く者がありましたので、審つて戸を推しますと、颯と馳け入つたのはこはそも彼女でした。──驚くべきは戀の力でありませんか。女の一念、とは云へそよろの風にも堪へ得ぬやうな弱々しい身で、まあどうしてあの厳しい家を脱け、あの恐ろしい眞黒の闇を辿つて來たのでしやう。そは兎に角、其處に黄色く漂ふ灯の光の中にがばと身を伏せて、眞紅の六尺袖に顔を埋めたまゝ、耐え切れぬ羞恥に圓い優肩を震はせる姿は、宛で當時流行つた師宣の一枚繪その儘の風情を見せるのでした。……最初あまりの意外に嶮しく睜られた男の瞳も、だん〳〵と圭角を柔げて行かずには居られませんでした……。が、軈て忽ち其和げられた瞳は赫とばかりに燃え初めました。男は都育ち、花鳥の情に敏感を缺くものではなかつたのです。

嬉しさは其夜に始まつて、夜毎に續きました。雨、風の別ち無く、女の艶めかしい影が、男の室の襖を潛ほさぬ夜とてありませんでした。

眞赤な花の歡樂は、程なく緑の實を見せました。女は終に包むにも包まれぬやうに其軀をしたのであります。二人は驚きました。が、それよりもより驚いたのは女の親でした。突然の其現象は、渠等にとつて二重の審しさであつたからです。

それはすべてが不可思議でした。女は毎夜、親の寝室に親と共に寝て、嘗て一夜も家を出でなかつたのです。責められても賺されても、それは神かけて女の誓ふところでした。たゞ眞赤にさし俯首いて、吐切れ〳〵に洩したのは、夜毎々々に焦るゝ人と恥しい快さを味ふのを夢みたと云ふ一事でした。

想ふに一本氣な處女の、思ひ詰めては矢も楯も堪らぬ魂が、終にすや〳〵と眠る肉體から離れて、對象に向つたものでありましやう。それと知つては親々も今更に靈妙な戀の權威を無視する譯にはゆきませんでした。人を介して彼方の男の家とも議り、幾千代かけて目出度う夫婦の杯を擧げさしたさうであります。

河井醉茗君著

# 新體少女書翰文

本書は従來の候文に依らず口語文體にて思想を表はすべく模範を示したる者にして書中長上に對し尊敬を拂ふべき敬語同輩に向つての感情の披瀝等には一段の注意を以て實際を述べ盡くし得べく勉めたり。

全一册洋裝四六判
紙數四百四十二頁
正價六十五錢
郵税八錢

西村醉夢君著

# 鳥の一年

本書は著者獨特の輕妙なる筆致を以て、日本産鳥類數十種に就き記述したるもの、こゝに科學と文學との調和あり。家庭の讀物として、學生の伴侶として、はた學校敎育の資料、狩獵家の參考、愛禽家の座右銘として、本書の右に出づるものなかる可し。挿入の繪畫數十箇、精細緻密にして卷頭の三色版寫眞版と映發す、眞に近來の快著にして鳥に關する書としては日本第一のものたるを失はず。

四六判洋裝
南京製紙數二百六十餘頁
正價六十五錢
郵税六錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

廣（その三）

創刊七大叢書の一

# 盛好評如湧

校註國文叢書

# 源氏物語

附 紫家七論

下卷

裝幀莊雅函入
挿畫數十圖入
紙數八九〇頁

下卷 新刊

源氏物語下卷は若菜より夢の浮橋に至る三十一帖なり。本文は『頭書源氏』を底本として諸書と參考し、句讀段落を明にし、漢字を挿入しながら國語を失はざるやうにし、頭註は『湖月抄』その他古今の說を取捨して宜しきに從ひ且帖ごとに繪畫を挿入し、卷首には『各筆源氏』の後醍醐天皇宸筆の外、福岡子爵家藏紫式部筆古今集一頁を揭げ、卷尾には『紫家七論』の外、この物語の本旨について近藤芳樹翁の著はせる『源語奥旨』を加へたり。今や源氏の縮冊多しと雖も此の如く校註挿畫相須て完備せるものは蓋稀なり。其裝幀及印刷紙面の鮮麗、製本の善美を盡せる其價格の至廉なるは本館の得意とする所今更に贅せざるなり。

## 國文叢書(第一期刊行)書目

- 源氏物語 附菫草 上卷
- 源氏物語 附紫家七論 下卷
- 太平記 上卷 一卷
- 太平記 下卷 / 曾我物語 一卷
- 源平盛衰記 上卷 一卷
- 源平盛衰記 下卷 / 義經記 一卷
- 水鏡。大鏡 / 増鏡。今鏡 一卷
- 平家物語。保元物語 / 平治物語。承久物語 一卷
- 榮花物語 一卷
- 竹取物語、伊勢物語。落窪物語。土佐日記、枕草子。徒然草。紫式部日記。 一卷
- 宇治拾遺物語。月のゆくへ。池の藻屑、松蔭日記。 一卷
- 蜻蛉日記。とりかへばや物語、唐物語。濱松中納言物語。方丈記。更科日記。大和物語。海道記、東關紀行。 一卷

東京博文館

女（なの六）

# 創刊七大叢書

## 西洋文藝叢書（續刊）書目

| 書名 | 種別 | 國 | 原著者 | 譯者 |
|---|---|---|---|---|
| サラムボオ | 【小說】 | 佛 | フロオベル | 生田長江 |
| 死人の家 | 【小說】 | 露 | ドストーフスキイ | 片上伸 |
| 人と超人 | 【脚本】 | 英 | ショオ | 楠山正雄 |
| 處女地 | 【小說】 | 露 | ツルゲネフ | 相馬御風 |
| サッフオオ | 【小說】 | 佛 | ドウデエ | 鈴木三重吉 |
| 陥穽 | 【小說】 | 佛 | ゴンクウル | 前田晁 |
| 氷島の漁夫 | 【小說】 | 佛 | ピエルロチ | 吉江孤雁 |
| 炎 | 【小說】 | 伊 | ダヌンチオ | 森田草平 |
| 死よりも強し | 【小說】 | 佛 | モウパッサン | 中村星湖 |
| 日の出前。織匠。鼠 | 【脚本】 | 獨 | ハウプトマン | 小宮豐隆 |
| クロイッエルソナタ其他 | 【小說】 | 露 | トルストイ | 阿部次郎 |

東京博文館

女（その七）

第一巻第九號……十二月一日發行

# 淑女畫報

四六倍判 口繪光澤紙寫眞版六十頁 石版三色版數頁 本文百頁

正價廿五錢 郵稅二錢

六冊壹圓卅五錢 十二冊二圓六拾錢 外要税

## 讀物

◎三面記事に現はれたる女の運命……佐藤紅綠

◎男性征伐……野菊 ◎木曾の紅葉……坪谷水哉

◎各國婦人の勳章……澁谷散人

◎自覺して男子の翫弄物たれ……青柳有美

◎社交よりは家庭が先……伯爵 小笠原長幹

## 畫報

（表紙）道行振り……太田三郎畫

（口繪）二八の暮（彩色石版畫）……北野恒富畫

衣の香（原色版）……歌麿筆

寫眞版

◎伯爵夫人の新粧 ◎姉妹の愛 ◎浦路のヘッダ

◎松平侯爵の家庭 ◎絹傘の内 ◎外交官夫人

◎天災の避難 其他 淑女、家庭寫眞四十頁

## 讀物

◎私の嫌いな婦人……岩野清

◎江戸の女と東京の女……饗庭篁村

◎女不動詣で……龍岡すみゑ

◎思想劇の評判記 紫帽子 ◎嫁撰み……つゝれ式部

◎現代は女の中毒期……某大家

博文館

東京日本橋本町 振替東京二四〇番

# 百歳の會話

藤田靈齋

百歳會長大隈伯は、『人間が平常心身を鍛錬するに於て、百廿五歳の定命を保ち得ることが出來る。さうして百歳會を組織せし藤田靈齋君の息心調和の修養法は、吾輩の所説を科學的に組織し大成したもので、これに依て修錬を積めば、心身の强健を得るのみならず、修養の極致にまで達し得ると云ふのは、實驗した人達の效果に於て確かめられた事實である』と主張して居られます。記者一日芝高輪の養眞會に到り靈齋藤田氏に乞ふて聞き得た談話の大略を左に紹介いたします。

## ▲病死は恥辱

近頃不老長生と云ふ事を研究する學者が多くなつて或學者なぞは、人間は絶對に死なゝいでも良いとまで主張して居ます。成程肉體を組織した個々の細胞は或は死なぬかも知れませんが、この細胞の集合體である肉體はどうしても死を免れるわけにゆきますまい。併し死ぬるにも死方があつて今の醫學上でも自然死と病死を區別して病死は不自然の死と稱へて居ます。畢竟肉體を作つて居る個々の細胞が自然に解散するのが自然死でありますが、これは春の木の芽が萌出るために秋に木の葉が落るのと同じく、自然の新陳代謝であります。人間が天壽のある間健やかに働らきぬいてさうして一生を終るのは、一寸の休息若くは衣更の如きものであつて、これを遂てこそ人格を全ふすることが出來るのですが、若しさうでなく病死するが如きは不自然の甚しきものである病死は實に恥づべき鐡道往生と見做しても差支へありません。

## ▲人の定命

凡ての生物は、成熟期より五倍乃至八倍の命を保つべきものと云ふのは學者の一致說ですが、之に依ると男子二十五歳、女子十八歳平均二十二歳の成熟期より

計算して百十歳から百七十五歳までが本當の命數でなければなりません、この命數のある内は無病壯健愉快活潑に働らきぬいて、期に至れば何の苦みもなく歸するが如く往生すべきである、ダストル氏はこの境界について『生命の終りに死を要するは、一日の終りに眠りを要するが如し』と云はれたが本當の定命の終りに苦しみのある筈はなく、晏然として終るのが自然の死であります。これは理窟に非ず、昔より偉人はかくのごとき終りを遂げて居るのです。



▲自然死の實例

知人谷村某の親戚に八十一歳になる山本と云ふ翁があつて本年九月十六日に歿したが、その一週間前から唯身體に疲倦を覺えたばかりで少しの苦しみもなく終り、醫師も病源は判らぬと云つた。ところが妙なことには、その妻も夫の歿した日から疲倦を感じて二十三日に矢張苦もなく夫の後を追ひました。これらは美しい自然死の實例です、尤もこの人達も本當の定命より若い終りでありますがこれについて吾々は左の説を提供したいのであります

▲信念の力

八十にして自然死を遂た右の人達が、若し初より人間は百歳以上が天壽だと堅く信じて居たならば、もつと長生したに違ひない。信念は、死生の上に大なる力

をもつて居ることは昔から多くの實例に照して明でありますが、最近の例として左の實話がある。本郷の消防夫た組の某は熱心な不動信仰家であつたが、若い時から其不動の命日に當る二十八日に死ぬのだと云つて居たところ、果して先月二十八日午前七時に眠るが如く終つた。吾々は壯年の内より百以上の生を保てるものと云ふ信念を堅く持つて居ることが大切で、百歳會の起つたのも畢竟この主旨に基くのであります。百歳會は只老人達が集つて相樂しむのではない、前に云ふやうな信念あるものが鍛錬を勉むる會員となつて天壽を全ふし、大ひに活動しやうと云ふ目的に他ならぬであります。

### ▲病氣とは何か

前に申す通り人間は百歳以上生られる自然の性をもつて居るのですが、世の進むにつれて困難が復生し、精神が弱つてこの信念も持ち得ぬやうになり、從つて身體は日々に薄弱になつて病魔に犯され治病の力も乏しくなつたのは、心細い次第です。さらば如何してこの病魔を退治せんかについては、根本的から研究し又實行するのが今日の最大急務でありませう。昔印度では地水火風の不調を病と稱へたが、近頃の進歩した學説に依つても歸するところは、細胞の不統一不調和が病であつて、細かく云へば細胞生活の異常現象を呈して組織の構造には、形の上の變化を起し、組織の成分には化學的の變化を起すと、生活機能が減退して、發營新陳代謝及び動作、蕃殖などの働きが出來なくなるのが病氣で、醫學上これを總稱して不自然の變體と云ふのです。病氣はかやうに不自然なものとすれば、つまり自然の常體に立かへらせればそれで宜いのですが、扨どうしたら常體に歸らせることが出來やうか、爰に吾々が大に喜ばなければならぬことがあります。

### ▲自然療法

人體の構造を仔細に研究すれば、自然が吾々に病を防ぐための極々巧妙な器械を與へてあることを會得しま

す。例令ば黴菌が身の内に入つて來ると白血球がこれを殺す、若し殺し得ない場合には身の組織を變ずる力があるしこれも叶はなければ、白血球から一種の毒を發して黴菌を殺す、又黴菌に慣て犯されぬやうになる免役作用もある。其他再生力（或局部の組織が失せると直にあとからその通りのものが出來る、火傷や切傷の跡が治る類）。代償機能（一方の腎臟が働を失へば、他の腎臟が代つて働らく類）や溫度の調節機、害物の防禦機も具つてあつて凡ての病に打勝仕掛がチヤンと出來て居るのであるからこの自然療能を充分に發達させれば病にかゝる筈はないのです。では如何したらこの働の發達を得られやうかと云ふことになると、醫學上に於る從來の攝生法や治療法と吾々の握り得たものとの間に大な差違を生ずるのでありますが、兎に角どんな方法に依らうとも自然の治癒力を發達させれば宜いのです。



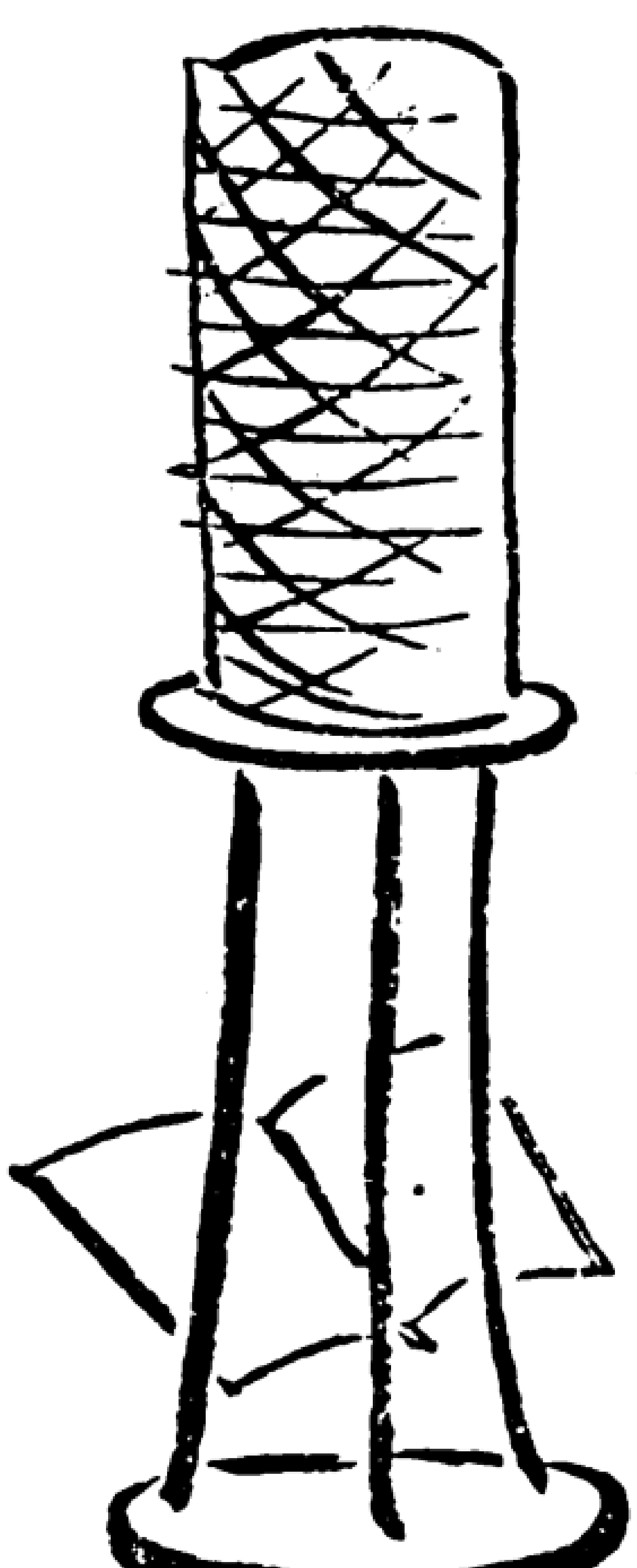
### ▲調息と精神作用

どんな病氣にかゝつても愈々死ぬる前には、必らず、心臟、肺、腦の中の一つを犯されて終るのでありますが、この三つを强健にすることを勉めれば先以て死の關門を免れることが出來る。吾々が自然の呼吸法を奬勵するのもこゝでありますが、これと共に最も大切なのは前に云ふ如き天壽を確信する精神であります。

この精神作用と生理的の調息法と合して偉大な働を起し、病魔を防ぎ現在の病を治するのみならず精神上にも一大變革を生じて向上せしむるのが私の申す息心調和の修養法であつて、是は實に多年の研究と實驗により確信するところであります。

## ▲難病の治療した老媼

當時實業界に錚々たる片岡直輝、直溫兩氏の母堂のぶ子刀自は、今より四年前七十八歳の時、動脈硬化症にかゝり續いて劇烈な神經痛を發し、醫療その他あらゆる手をつくしたが治らず。昨年七月頃は衰弱の極點に達して體量七貫目に減じ、醫も匙を投げ、自身も早く殺してもらつて苦を免れたいと云はれるほどであつた。兩令息の心痛は申すに及ばず、直輝氏の夫人は寢食を忘れて治療の法を講じたが更に效が見えない。萬策盡た折から、夫人は或機會に修得した息心調和法を母堂に勸めたところ、母堂は熱心に實行して居られる内、段々病氣が治つて、本年一月には體量が十一貫目に復し、八十一とは見えぬ位血色が麗はしく、元氣旺盛になつて、今度百歳會の特別會員になられたのです。直輝氏の夫人も肺氣衝で不治と診定され、喘息を併發して苦まれたが、勵精して九分通り治り、大に働らひて居られます。のぶ子刀自が百以上の天壽を保つやうにならるゝことは、只刀自の自身の希望ばかりでなく、吾々も堅く信ずることが出來る。何故なれば、さう云ふ方法に依て不自然の病氣を癒し、自然の强健體に復した以上は、不自然の死、即ち病死を遁れて、自然の天壽、即ち百歳以上の命數を保つて、芽出度自然死を遂げらるゝことは必然の結果と申すべきでありますから、吾々はそれに就て少しも不思議と思はないのであります。



# 女の勝利

富樫千代子

最早クラスメートも多くは人の妻となりぬ。いでやそが中にて感すべき二三の物語を書き綴らむ。眞實の名に憚る節の無きにあらねばすべて改め置きつ。

さるにても、我がクラスにて最も柔順しかりしお方と云へば皆々のそれと首肯く靜子さまこそ女の鏡とは云ふべかりけれ、女學校の運動場は常に新らしき新聞にて滿されつ。此の門をくゞらぬ方々の噂、さてはクラス〳〵に於ける姉妹の品定めから、はては師のきみの上まであげつらふこと多かり。さはれ靜子さまばかりは何時も彼の柳の木蔭へさりとしもなく避け給ひしを心から慕ひまゐらせしが。

いよ〳〵噂の如く戸田家へ嫁ぎ給ひしと聞ける時の哀しさよ。

戸田家の次男久雄さまは其の美しき容貌に誤られけん。まだ學校に物學びせる折より、惡しき遊びを覺え、今は父上の銀行に勤めらるゝと云ふも實は名ばかりにて、少しも行ひを改められぬと聞くものを。

若し「妻にても迎へたらんには。」と、異見の限りを仕盡くしたる御兩親の勸めに、さらば「彼の方ならば」とやう〳〵久雄さまのうべない給ふに、またも機嫌の變らぬうちと、早々さるべき人を賴みて申し込めりとまでは嘗て友より聞きしが、靜子さまにはとんだ白羽の矢を向けられしものかなと微笑みながら、男の子持つ親の餘りに勝手なるが腹立たしうもなりつ。「女を玩弄品のやうにや思ふらん。」と云へば、「かゝる話の纏まるべきにあらねば腹立つにも及ぶまじ。」と友は笑ひぬ。「げにも左なり。」とわれも同じつ。その後はいかく心にも留めざりしことの意外にも事實となれるは柔しき靜子さまの拒みかねたる爲めなるべし。嗚呼友の一人は殺されつ」と或友の文のはしに書かれたるも道理なり。

されど久雄さまにして「人。」とならんには、女の價

も安からずと思ひ返しけるが、一日二日こそ家居したれ。その後相も變はらずまたも浮かれ歩けりと聞いてはいよ〳〵靜子さまの不幸を嘆きぬ。ことに御兩親とも至つて氣むづかしきお方と聞くものぞ、如何にして時を過ごさせ給ふらんと案じまゐらせつ。げにも女には生まるべきものならじ。

　あまりの御痛はしさにせめてもと文もて慰めまゐらせしが。

只々兩親を大切にと存じ候も至らぬ勝ちにて恥かしき至に候。

とばかり。一つの怨みもなし、慰めし身の却つて氣恥かしき心地こそ仕たれ。

　かくて半年ばかり仕けん。久雄さまの外遊ははたと止りぬ。

之れには知る限り、眼を丸めぬものとて無かりしが、更に〳〵其の靜子さまを愛するさまの深きには驚されつ。

　さすがに遊びを盡したる方とて、氣のさばけたる事云はん方なく、靜子さまはいつしか最大の幸福者となれり。

「如何にして？。」

と、親しき間柄なれば遠慮なく尋ねまゐらせしとありしが、只微笑みて居たるこそ面惡くけれ。

「机上の銘は？。」

と不意に尋ねまゐらせし時。

「何事も云はぬが勝ち。」

と、靜子さまは面を赤らめ給ひぬ。

　さてこそ〳〵久雄さまも遂に其のしほらしさに打ち負かされしなりけり。

口數多き女は人に忌まるるとやら、兎角女はつゝましさに若かざれど、靜子さまの如きは稀なるべし。

友の母は世馴れたる人なるが、强いて夫の外遊を止めんとするは夫の心をそゝり立つるに過ぎずと云ひしことあり。ふと思ひ出して靜子さまの勝利を祝しぬ。

# 月給鳥

野　蘭

○

夢の世や！、きのふの榮花はけふの枯葉、荒みはてた自分の心の奥を剖かれたやうで、淺ましい目尻の下つた、胡麻鹽頭のトーゴーさんといふのは、町使ひの○○の綽名なんです。町使ひとは、一般に知らせて置くべき雜多の事を、一々町内に傳令の役目、其他町内の雜費や、鎭守様のお神樂錢まで取集めて歩く……、つまり月給大枚四圓五十錢を所得する町役人？、の一人なのです、「○○さんいつも壯健ね、何歳になるの」ときけば、きつと、にやりと薄笑ひして「わしは、はあ、かう見えても東郷大將と同い年さ、しかも同じ月同じ日の生れだが……、何でもはあ生れ剋限でも異つてゐたかも知んねえね…」

○

○○歌劇部の主任とやら、有名なる聲樂家T女史の、艶麗なるお寫眞などが、新聞や雜誌に出てると、お君さんは、荒れた掌を窶れた頰にあてゝ、感慨無量の態に、眺めて見つ、すかして見つ「私なんかもう、似ても似つかぬやうになつちやつた、せめて、同い年だと見えるでせうかねえ」と、きまつて言ふ。「さうねえ、此方は充分お粉裝してるから若く見えるけれど、よくよく見ると、却て、あなたの方が、お若いやうよ」といふと、「さうでもないでせう、私はもう、三人の子持ちなんだもの……」……でも、心嬉しい樣子して、其二三日は、T女史擬ひの大庇髮に、時には、白いもの薄つすり、はいたりする。お君さんは都生れ、芝あたりの質屋の娘、で、Tさんとは小學校時代の級友…、それが世にいふ他人の空似とやらで、脊格好なら面ざしなら、瓜を二つと云はれた昔もあつたといふ。似たとは眞に外面の空似か、彼は常世の花匂ふ藝術の國の天才と唱はれ、これは田舍の駐在所の奧さん——、白米一圓に、三升五合がへといふ、せち辛い世を、十五圓の

月給で、一家五人の生命を繋ぐ、昔思へば涙もこぼれやう、其境遇の愚痴も漏さず、せつせと經木眞田の内職をしてる。「お君さんあなた御存じの彼方がね、帝劇で熊野をやつてますよ」と私が申しましたらね、「おやまあ、ゆやを始めなすつたの？、まあ……。しかしあの方が番臺にゐりやあ、お湯屋はきつと當りますよ」ですつて、おほゝゝ。實際は私ほゝゝ。其時笑ふどころではなかつたのです。言はふやうない悲哀の情が、もう胸一ぱいになつて、お君さんをぢつと瞻めました。



○

お常は嬉しさに戰く手で、抱へてきた包の結目をとく／＼溢れて零るゝ双頰の笑を、隱す事が出來ませんでした。滲紙で張つたやうな、父親の鈍栗眼も、干葉のやうにやせた、母のくしや／＼目も、一樣にお常の手元に集まりました。現はれたのは何？、これが袴！、メリンスの袴！、お常の袴！、紫紺色の、香も新らしい女袴でした。あゝけふからこ

れ穿いてゆくんだと、お常の眼は爛やきました、おらがお常は月給取になつたんだと、親達の口元も綻みました。

お常は去年の春、小學校を優等で卒業するまで、とう〳〵袴なしで、すましてしまつたのです。空色の袴海老茶の袴——、小さいお常の夢は一年生の昔から、斷えず袴を買ふ所にばかり、漂つて居たのでした。しかし、貧家の常、父は毎日、他家の米搗や、薪割や、下足番やに雇はれて、僅かな傭賃で、家内六人の、口を糊してゆくのですもの、袴なんて、木綿のでも、買つてやる事は出來なかつた、それが、此春、此田舍町にも電話が架設せられたので、前から此子の性質に、注目して居られた校長先生のお世話で、お常は其交換手になることが出來たのです。そして、生れて始めてけふ、此紫紺の袴はいて、町の通りを歩くといふんだすもの、お常が履歴の一頁としては、却々の重大事件なんです。

お常は幾度も、此袴の新らしい匂ひを、心の奥で味ひながら、やがて傾きかゝつた我家の檐を出ました。

「やあお常ちやんが袴はいてくらあ！」青洟垂れた子守つ子が、目早く見つけて急を報すると、「どれえ」といふ聲が、彼方の戸口、こちらの破窓に響いて、羨望の眼光がお常をつゝみました。と、突あたりの家から「やい月給とりの卵！、日傭とりの味と、どつちがうめえ…、あつはゝゝ」と、わめいた。取卷た娘も守つ子も、わつはゝと聲を合せて、笑ひ崩れました。が、お常は昨夜母親に買つてもらつた、レザーの草履で、ともすれば踏まへさうになる袴の裾が氣になつてやつぱり二寸ばかり、揚綴をとつて置かうかしらなど、考へ考へ、無意味に、につこりしたばかりで、顔も赤めず　さつさと通りすぎてしまひました。

○

白地メリンスは、秋草の亂れ染、この單衣に緋鹿の子の中巾帯、きつとよく似合ふことよ、と言つたら姪の秀子はもう、すぐ縫つてくれと、せがんで仕方がない、「けふはいけないの、裁物は酉の日がいゝのよ。何

故つて……、鳥の羽衣のやうに、柔かい着物が、幾重ねも〳〵も、出來るやうにといふ、お呪ひなの」と賺して置いた。それは或月の末つ方……。秀ちやんは慌急しく、表から駈込んでねえ「叔母さん、けふは酉の日ですつて……」と息を喘ませてる。うそよ、先刻暦を見たけれど、けふは、未の日ですよ」「だつてね、今お光ちやんとこの叔母さんが、けふは、とりの日だから、お刺身でもとつて、光ちやんにも、何か奢らふかつて言つてたわ……」。噫、とりの日か、とりの日か……、其とりの日には、仕出しやの、岡持がはいつたり、新らしい反物が擴げられたり、樂しげな笑ひ聲も聞えませう……。が其裏口に耳を澄せば、恐ろしいかけとりや借金鳥などの、叫聲も、聞えやしないかしら……。



○

「人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂他人による」などいふたは、千年も前の唐人の寝言、苟も現代旭日國の新婦人たる者が、そんな弱音に耳を傾けるやうでは、光彩ある生活を味ふ事は不可能です、といふて、私は徒らに自覺呼りをして、平和なる家庭の破壞を企てるのではない、唯、良人をこれ天と仰ぎ、之に依賴し、之に寄食し子を生すを以て最大の責務と心得てる、因循頑迷の夢を覺さねばならぬと申すのです……」少し、くせのあるお髮を

大廂に遊して、淺黑い丸顏に金緣眼鏡、五尺三寸肥大の御身に、藍色袴ゆたかに召して不動の姿勢、滔々懸河の辯をお振ひ遊す時は、四十の生徒が若い胸は、抱負の浪の高鳴りして、優しい瞳も火と燃えます。これはS女學校のK先生、お得意を家庭論と承はると、去年の春から御形成になつた、新家庭の御樣子も偲ばれます。敎壇に立てるK先生の四邊を壓する御容子を見上ると、其マダム振も彷彿として……、ほゝゝゝ、性格には、よそ行もごふだんもないと見えましてね、それは實に家庭の女王たる、威嚴と權力とを、遺憾なく發揮していらつしやる。で異物が混入すると、家の空氣が濁るといふ御意見で、小女一人お置きになるでもなく……、といふて苟にも敎諭の肩書を持つてらつしやる夫人ですもの、お米一つお洗ひにもなりやしません。勿論臺所一切は旦那樣のお受持……、軒低く舞ふ炊事の烟はこの寒空のまだ薄明りの曉から、此スヰートホームをめぐつて居ります。だつて仕方がないんです……と旦那樣は中學出身の小學敎師、孜々として、所謂鼻たらし天使のお守りして、得る所の料はやつと十八金……、奧樣が月俸の半にも達しないのですもの……。

K先生新に、賢母の資格を得らるゝ御豫定ださうですが、さうなつたなら旦那樣は、小學校をお退きになつて、家庭專任におなりだとの……、これは噂……。

あゝ、人生女と生れて、安月給取の妻となる勿れ、百年の苦勞他人に嘲らる、の嘆聲は、常に私の腦裡を離れ得ぬ繰言ですが、K夫人のやうに、自ら運命を、開拓して行かるゝ方を見ますと、意氣地ない心にも、この所、大に奮勵一番せねばならぬ……と、思ふ時も御座います。



# 出戻りもの

汀舟女

○

乃木大將夫人が自殺された模樣、私はあの大阪毎日新聞が號外として出した石黑男爵の談話と云ふものを讀みました。今ではよくはつきり覺えて居ませんけれど、初めに心臟を刺された、死に切れないので其の刃を拔いで更らに喉を突かれた、まだ死ねなかつたのでまた刃を拔いて何處かを刺されたと云ふ樣な事が印刷されてあつたと思ひます。私はあの記事を讀みました時、身慄ひ致しました、かう刃を心臟――ハート――女の心とも魂とも云ふ樣な所に、當てられたのだと思つた丈けでも水を浴びた樣な、電氣にでも打たれた樣な恐ろしいとも何とも云へない、すうつと身體中の神經が、肌に栗した樣に覺えました。そんな〳〵殘酷な事が私共のお手本になるんでせうか、私はいやです、私はもうそんなことを想像致しましてさへ、隱れ場所が無い樣に思はれます、いざとなつたら日本の女子ともあらうものは、あんな覺悟も致さねばならないのでせうか、私は助けて下さいよ――と叫びますわ。

○

私は其れが、自分の事で無いのならどんな事でも云へますわ、乃木夫人だつて――それあ立派な事をなされたのです。私共の其の場を思つてさへ、身慄する樣な世の中に生きて居る女子なんどの、とても〳〵眞似の出來ない事をなされましたんですから、何とも申されませんけれど、私に損得の行かない、平氣でお茶話しに出來る事なら、私、何でも云へますわ、ねえ乃木夫人は女大學で養はれた最も理想的な方なんださうですけれどあんなもう昔の事だと許り思つて居た細川忠興夫人の樣な方が今の世に出で下さつたと云ふのは私隨分だと思つて居ます、血を見てでさへもう顏色を變へねばならん私共に、婦德の最後が血潮に彩れる樣な事をせなければならないのでしたら、どうしませう、

迚もそんな勇氣など出つこの無い私共はどうしたらよいんでせう、

○

けれど、あの平塚さんなんどなら隨分其んな偉い事でも出來なさると思ひますわあの方は森田さんの『煤煙』に書かれた事が本當なら、あの鹽原の雪の積つた山の中で、四邊りの雪よりか白い肌を出されて、さあ、其の短刀を胸にお刺しなさいと平氣で居られたんですもの、そして森田さんの方がおつかながつて、短刀を谿間に拋り出されたんですもの、あんな強い方なら隨分乃木夫人の樣な人の鑑に成る樣な事でも出來なされうと思ふんですけれど、私共の樣な何ぞと云つたら泣く事の外は知らない弱い／＼女には何か外に行き所は無いのでせうか、それや愛し合つた夫の爲にならどんな苦勞だつて厭ひは致しませんつもりですけれど、刃物をハートの所に當てるなんて、私其麼事を自分の大事な夫からでも迫まられましたら、どう致しませう、私鎌倉の圓覺寺とやらにでも行つて、禪の修業でもして、平塚さん見たいに『線香の灰の落つる音に天地の崩れる音を聞く』樣な女にでもならなけれやなりませんわ。

○

一體此度の乃木夫人のお自殺に就いては、女のサークルよりか、男の方々の御感激の方が強いのだと思ひますわ、私だつて日本國民ですもの、國民的感受性と云ふ樣なものは、人後に落ちは致しません。あの乃木大將の殉死との號外を大阪日報で讀みました時は、もう何とも云へない、ついぞ今迄に經驗した事の無い強い感情に襲はれましたのです、だけれど奥さんが御一緒に死なれたと云ふ事で私はそんな感激に打たれは致しませんでしたわ、たゞ乃木大將の殉死と云ふ事が強く私の胸を打ちましたのです、夫人も御一緒だつたと云ふ事はあとから私にいろ／＼な事を考へさせましたけれど、其の時はたゞ乃木大將が切腹されたんだと云ふ事しか私は思ひませんでした、奥さんも一緒にと書いてはありましたのを讀みは讀みました筈なんです

けれど其時私はたゞ大將一人死なれた樣にしか思はれませんでした．あとから夫人も一緒に自殺だと、縱度自分の心を呼び覺して寧ろ自分から促す樣に感激し度いと努めましたんですけれど、どうしても私には夫人の死に對しては理性が先に立たうとして純粹な涙が頬を傳ふるに任かすと樣な譯に參りませんでした其れ程深く私に物を思はしたのです、其の物を思はすと云ふのは固より判斷の物思ひでした。

○

けれども、どんなに判斷してよいか分ら無いうちに男の方々では乃木大將に感心なされるよりか、乃木大將もだけれど、夫人は殊にえらいもんですなあ、なんて皆んな云はれる人ばかりです、私は自分の心に引き比べて乃木靜子樣と云ふ方が、何とも云い樣の無いおかはいさうで、もうお氣の毒で堪ら無い樣な感じが致しましたんです、けれどもまあ今の男の方つて隨分お勝手だと思ひますわ、新聞の論説なんて云ふものなんど恬で時代を數百年も後に引戻した事を自慢さうに、マグダもノラも顏色があるまいと云ふ樣な事許り書いてゐられた樣ですけれど、私どうも合點が參りませんわ乃木夫人の事は女子の間には問題として殘りは致しますけれど、今の男子の方々が、自分では乃木大將の心持ちの一つも實際に眞似さへ出來ぬ癖に、乃木夫人の行爲で「時代の女」をも悉く解釋され樣とされるのは僭越お至極だと考へますわ、先づ乃木大將の樣なお人格をお拵へに成つてから乃木夫人のお行爲を御批評なさいと云ひ度なりますわ、私などは假令乃木大將の樣な尊い神樣の樣なお人格の方を夫にしてゐても、女としては靜子夫人の外に行く途が無つたか否かと云ふ事を考へたいと思つて居ますのに、今のちやんちやら可笑しい男子の方々が乃木大將のたゞ一人行ひ得られた事を自分などが殉死でもされた樣な立場に立たれて、今の女の問題を悉く解決されやうとお企てに成るのは片腹痛い事ですとも何とも御挨拶に困りますわ、まあ暫く靜として居て下さい、女の事は女の方で今に解決を付けますからと云ひ度くも成るのですわ。

○

私、今夜神經が昂奮して居ますので順序立つて物が云へませんけれど此度の乃木大將一件と云ひ、其他の事と云ひ、男子程勝手なものは無いと思ひますわ、私などは小學校時代から孝は百行の基とか、孝子の門より忠臣を出すとか、親に孝行を盡す事が何よりも大事なものと思つて居ますのに、今の男の方は直ぐ「貴女が本當に私を愛して下さるんなら、御兩親に背かれてもよいぢやありませんか、愛する者の前には親も何も無い筈ぢやありませんか」なんて脅迫なさるんですもの、それや夫と定まつた上は貞節は盡し度いと思ひますわ、貞節を全ふして郎の一夜の情に妾が百年の命を絕つと云ふ樣な事にでも覺悟を定める事も有らうと思ひますけれど、だつて女に取つては親程當てになるものは無いんですもの、男の方に身を任したつてどうなるか分らんと云ふ不安は私共の心に深く沁み込んで居るのに、親はもう本當に自身を忘れて娘の事と云つたら眼が無いんですもの、女の全身許りで足ずに女が僅に繫ぎ得てゐる兩親への儚ない絲までも絕たなければ承知しないと云ふ男ほど恐しいものはありません。

○

何を隱しませう、私は出戾りなんです、私は男と云ふ物――さう男は物ですよ、よく男の方のお書きに成つたものを見ますと、女は至極物質的なもの〻樣に云はれてゐますけれど、男ほど物質的なものはありませんわ、自分が由來物質的なんですから女を物質的に取扱つて居るんです、物質的に甘んせない女が態度男からの非難の的にされるんです――も大概分つて了つた積りなんです、我は初め兩親の下で大事に育てられて居た時一人の男が私に云ひ寄つたんです、そして、あなたのお父さんはあんな頑固な人だけれど、お互に愛し合つてさへ居れば、お父さんの頑固な事位はどんなでも辛棒出來るぢやありませんか、ね、ねえ…さん、僕はどんな無理でもお父さんから云はれても必ず融和の道を發見するから僕を信じて僕の所に來て下さいと仰しやつて下さつたんでせう、私は父の當世向なら

ぬ頑固な人だと云ふ事を承知して居たから、結婚と云ふ所まで話しを進め度く無かつたんですけれど、私だつて其の時分はその方には一生懸命だつたんですからあなたさへ其の氣ならと前後の考へも無く承知したんです、

○

その私の夫だつた人はよくお酒を飲む樣に成つたんです、亦今夜は何處にお泊りだらうと私はヒステリチツクな青い顏をして居る朝の九時頃に何時も歸つて來て、藝者である向ふの女の事をちよい〳〵と針で突く樣に云ふんです、その痩せ友人の所に社用で遲く成つて泊つたなんて申譯をして私の氣を休まさして、馬鹿な私を一安心さした上である料理屋での女の噂をするんです、私が一生懸命に媚くのを嬉しがつて居るんです、けれど私は大事な人を失ひ度く無かつたから辛棒して居たのです、しまひに私は戀さへも物質的に扱はれて居たのだと氣付きましたけれど在來の敎へに從つて辛棒してゐたんでしたのを遂には里の父が承知しないで、度々私共の新宅にやつて來てその人に注告したんです、その人は酒に醉つて父が私に話し掛けるのを承知しないのです、「よし子は私のものです、あなたのものぢやありません、どうか其んな命令見た樣な事は云はないで下さい」なんて云ふんです、或る晩、父が餘りの事に私に歸れと云つたんですね、するとその人は憤つて「僕のものにあなたが指圖する權利は無い」て突つ掛つて到頭二人取組みを初めたぢやありませんか、近所の人達が皆見物に來ましたわ、そしてその人は父が近所の人に間を隔てられたすきに此度は私の胸を捉へて「おいおまへ、歸る氣かい」ときくんです、私だつて餘んまりだと思つて居ましたから「歸りますわ」と云つたんです「何に、歸る、歸る、貴樣は」と云ひながら私はどんなにひどい目に逢ひましたらう、父は其後、その人が鬼人の樣に荒れるのを取殘して私を伴れて歸つて仕舞ひました、私泣いて歸りましたわ。

○

その人は今鎌倉の圓覺寺に座禪を組んで居るんださ

うです、そして近頃東京から歸つた友人の話しを聞きますと、座禪を組むなんどは虛で、その圓覺寺の境内の藏六庵とか云ふ安下宿見た樣な所に居て、門前の安泊宿の二階で寺の惰落坊さんなどを相手に酒許り飲んで居るんださうです、今に親讓りの財產も皆無くなして了うんでせう。

○

禪と云へば大乘の悟りとかを振り廻はして、一葉女史を小乘思想に捉はれた憫れな舊式な女だと敢て言ひ得た平塚さんは羨ましい程偉い方だと思ひますわ、あの人は結婚なんて云ふ事を笑つて居るんでせう、あの自敍傳にあつたお茶の水でしたか水道橋の所でしたかの、支那人専門の下宿屋の二階で草平さんと泊られた時の祕密は私共の知らない事ですけれど、あの人は兎に角結婚などすると女子の天分と云ふものが盡されないと公告する人ですもの、偉いぢやありませんか、私などは今でこそ男を笑ふ事が出來ますけれど矢張り一度は男と女との生理的表象に支配された女ですものを——其の間からいろんな感情を流露さして其の上で男と云ふ物に愛想をつかした女ですけれど、あの人などは所謂新しい女の方で、此の限り知れない偉大な自然に對しての反抗者なんですもの、あの人の眼中には男女の區別さへも絶してゐるんですもの、假令兩者の生理的表象が如何なる事を示して居るにしても、新しい女として、殆んど小兒だましに等しい瞬間の享樂に對しての馬鹿〳〵しさを、其の經驗以前に痛切に感じてゐる人なんですもの。

男女の區別を絶した上に女子の天分を盡さうと云ふのが平塚さん達の願なんださうです、あの一寸坊だと云はれる野依秀一さんとのお話しが實業の世界に出て居ると聞きまして私も讀みました、「結婚してはどうしても女子の天分は盡されません」と云はれた所を見て私今更らに神樣の樣な平塚さんのお人格に感心致しましたわ、そして何でも男のやる丈けの欲望は滿たして見せると力味んで居られるんだと云ふ所を讀んで私は自分ながら平塚崇拜の心に一のヂレンマを感じましたわ——だつて平塚さんはお酒やお煙草を召上る次には何をなさるんでせうと、



# 人情の表裏

つゞれ式部

華紋お召の若紫、地色と共糸の菊藤模樣、友禪羽二重のお下着を金紗縮緬クリームの裾にしつとり揃へて優肩に脊負ふた糸錦の帶は眼さむる許りの洗ひ朱の大模樣、初々しい

## 高髷にはゆる瑇瑁螺鈿

の櫛かんざし、すうと金紋黑塗を學校の玄關にのりつけて、履脱のあたりとんと下車りた千代田草履の緋の鼻緒や――几帳面に机控へて出迎へてる同窓會の幹事達にほゝゝゝと笑窪の何ならねどさても可愛う、皆さま御機嫌よう。今日はようこそお出かけ。はあの皆さんは？　ええもう大概お集會ですよ何卒控へ室にと案內せんとすれば、あの私その前に校長先生にお眼にかゝつて來ますことよと塵埃だらけの廊下を惜し氣もなく裾拂はせ小走りにかけ出て行く。丁度出會がしらの都合よく褪せたりといへどもフロックコート、午後四時頃のを一着に及んで胡麻鹽頭の先生がのそりのそりと此方に遣つて被出る。あら先生御かはりもなくつい御無沙汰申し上げてすみません。えーと和女は誰だつたかね。ほゝ厭な先生、河崎で御座んす十回の卒業生の河崎なつ子で御座いますよ。はーさうでしたかと老眼鏡をふき直し直し、今更きまり惡さを笑でまぎらしてはお出でなさるが――こんな手合が一人ならず二人ならず大概がクラス會に一つも出席し樣てのは衣裳に事缺かぬ金持の愛娘が多いのだから厄介な――やれりボンの幅が三分ばかり失禮しましてよ、前髪もついでにひき込ませて、愛嬌毛か知らないが

## 遲れ髮が豐頰に亂るゝ

きつと御法度と、い、、、しつきり無しに叱られた復讐つてんでもまさかありますまいけど、學校と云ふ籠から生

徒といふ名前から離れたが最後、これ見たかとばかりのめかし方、一寸それでは惡けませんでしよ、着物は銘仙かぎりの筈でしたわねえつて、むづ〳〵むづこみ上げて來る例の小言を老刀自達がお年齡の故でうつかり洩らしでも遊ばして御覽じませ。およし下さいな餘計なことですよ、私達はもう生徒ぢや、御座いませんもの、先生方の治外法權貴女方から塵一つばもお世話になつてやしませんからね、指嘲へてひつこんで被在いと出るのは必然ですよ。百鳴りを以て聞えてる生徒監といへども、こ




こに至つては後へに瞠若、そのはづみに中風が起つたつて、皆は冷やかに笑つてるかも知れませんのよ。地に墜ちたり交道義や師弟の情、四年五年の間、口酸つぱくした效果は更らに見えないとは傷しいかな悲しい哉。黯然潸然涙垂るゝお隙がありましたなら、まあさつまらない私風情の世迷言もお耳かして下さいましな。それは成程、學校では間斷なく拔け目なく質素と云ふ事をふき込んで下すつた、否むしろ強いて下さいました、でも質素だの儉約だのつて、餘り好もしいものでは御座いませ

んのね、少くともお金に餘裕のある方々には無用の文字に過ぎませんでせう。世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし、ほんに物思はせちやありませんか。うら／＼と匂ひ出でたる美しさ華やかさ。

## あらゆる美あらゆる精

を綜合し結晶させて天塵寰に下し給ふやこの尤物、それ異體にあらずとも、美人の前には一言半句の理窟も通りませんのよ、なべての色彩綾羅珠玉、佳人を俟つてはじめてこゝに光あり、美人ならずとも妙齢の娘さんを持つた阿父さん阿母さんの、よし我身は手織の布子綿ぬく／＼と寒さ凌げば事は足る、娘は有り樣が賣り物、飾らねば自然お客足も遠からうつてので、ね、お解りなすつたでしよ、甲家の令孃に時世粧の贅があれば、乙家の娘には粉黛のこまやかなるあり、實際ね人仲に出まして我が娘の見劣りのするのは人情としてあんまり氣もちのいゝものではない、肩身はせまいし口惜しくもある。口惜しい位は些細な感情なんだから、眼をつぶつてゝもすむけれども、適者生存優勝劣敗。

## 競爭場裡の花比べ

に敗を取つたとあればその娘の、前途の運命に關はることが大きいのですからね。世間の男性方が皆瀧鶴臺の樣に容姿なぞはどうでもいゝ、精神の美人格の美なんてずんとさばけて下されば、大に私共醜婦連も助かりますし、一層又妙な骨董品がお好とあつて、なるたけ色の黑い賓頭盧尊者然とした嫁が欲しいと出て下さつたならなほ更ですけど、さうでない限りは、決して決して三越は破產しないさうですよ、關口白牡丹も繁昌するさうですよ、實を申すと困りものですのねえこの頃の樣に一體に贅澤になつては、華美になつては、刺戟の強いけば／＼しい化粧が流行し出しては、淸楚な落ち着いたしほらしい風俗は漸次婦人界から消失せて行く。それと云ふのも貴婦人の趣味が未だ未だ精練されて居ないからではないでせうか。舞臺に立つ役者を凌ぐ迄の事々しさ、やたらにかがやいてたら、

それがもう裝飾のベストをつくしたおつもりらしい。況や媚賣る女の抜衣紋、妖艶な左褄を粋だわねえと御意遊ばして御眞似なさるゝに至つては、眞實以て側がたまらない。

あゝ世はなべて混濁れり

而して我獨り清む、衆人皆酔ふ而して我れ獨り醒めたり、蕪窓の下淨机を据ゑて屈原もどきにはなたれたつて、おやお風邪召したのお可愛想にと冷かして呉れても無からうではありませんか。弱



きもの汝の名は女なりですか。まあ暫く時流に從つて其の糟を餔ひ其の醨を啜るつて、人様が本場を召す場合には、桐生あたりをぼつて着なし、瓦斯糸入の厚板たかく\／と、模造金の指輪に新ダイヤきらく\／させた方がむしろお怜悧かも知れませんのね。えゝこんな俗世界は思ひすてました悟りました、髮こそ下ろさね身も心も無垢童貞の清さを以て一生不幸な孤兒の母となり靜な生涯を暮して行きませう、浮世の榮華をも何に價すると高くとまつてしまつた

つて、秋風吹けばさても悲しう侘しう。

## 三十路近くの細眉

を明鏡に對して曇らするさみしい夜半がないとは料られない。所詮女は損なもの口惜しいもの、善なれ惡なれ、大きな時代の潮流に逆うて行けとはお無理で御座んす。可愛想で御座んす。あれは偏屈だよ變り女だよと云はれては、女はたつ瀬がありませんものね。奇骨稜々だの倜儻不羈なんてそれは男性方なら、なんぼ當世ハイカラ流行でも一寸面白い男だよ位一通りは通りませうが、それでさへ彼は常識に缺けてるよと貶されるのが普通とあつて、立身も成功も先づむづかしいさうですね。夫れ然り、況んやそこは女性の‥‥噫。

この頃私の現在住んでる市に、當今教育界で令名のある老刀自がお下向相成つて、市會議事室に於て御講演があると云ふ。出嫌の私もふつと氣のりがして行つて見ましたの。常ならば禿頭がづらりと列んで寄木細工の天井からつり下がつてる花瓦斯に反射する筈の議員席から二階の傍聽席まで、今日はリボンかんざし香水の香、むつとこめて逆上性の私なんかもうそろ〳〵上りさう、だのにどうしたのか定刻の時間をやがて四十分になつても主催者らしい人の影は少しも見えない。

## はて扨て不思議

と思つて居ると、四十男の分別顏なのが先導で、當地で歷々の夫人方が這入つていらつした。例に依つてチエーンを胸に下げてましたのよ、江戸褄ははつきりと浮き出して居ましたのよ。かの四十男は十餘人の夫人連の一々の米搗ばつた然とお會釋申上げ、案内する席と云つぱ、驚きましたね、普通の聽衆をぐつと下目に見下した一段ずつと高い上段の間、演臺の後にずらりとお雛様はおならびなさいました。あれが知事さんの奥さまよ、此方が市長夫人なの、あれはね某會社の重役の令嬢よ、はゝゝあの案内して來た男はあれは某課の屬官なんですよ、あゝしてると生意地がないではありませんかねえ、とさゝやく聲は方々に起つた。

やがてその後すぐ老刀自は黒のお被布しならしく這入つて被在いました。手短な紹介の演說があつて、刀自は演壇にお立ち遊ばしたので、お話は婦人雜誌でよくお伺ひしてるお若い時の。

## 奮鬪の歴史

盲目の良人に仕へ貧苦と戰ひつゝも學問をして學校を經營するし、子供達も立派に育て上げた、さうして今日の名譽ある地位を得た、だから私は昔のことを思へば贅澤をする氣にはならない、婦人は足ることを知らねばいけない、質素着實に見榮のない家庭の仕事に從事して、自



分の才能天分のすべてを子供に傳へて生きて行くがいい――とまあざつとこんなお話。

成る程御尤もお無理はさら〲御座いませんと私は拜聽仕りました。處がですね、他の多くのうら若い聽衆達はどちらかと云へば、ひからびた小つぽけなお婆さんが低い關西訛で諄々とお說きになるのを耳に入れる前、かの貴婦人達を眼の方の直觀で、きつく頭腦にやきつけてしまつたらしいのです。講演がすむかすまぬ、老刀自が壇上をお去りになるかならないのに、此方でも彼方でも、あゝと忍び欠伸の眼からほろ〲と、決して感涙

ぢやあなかつた様、あのほら左から。

## 三番目の紫のお被布

の方ね、うちの學校の去年の卒業よ、お綺麗だつて、さうでもなかつたわ、在校中はね元よりお穢くはなかつたけれどほゝゝゝと執念深くもまだお雛壇の噂らしい。あゝ質素もよう御座んす、着實もよう御座んす、家庭的婦人はまさに贊成で御座いまする。だがいくら若い女の耳からそんなことをお聞かせ下すつたつて、現在眼の前にあらはれる社會的現象がさうでなかつたら、どうしたつて效果は薄う御座います。一層生徒をお叱りになる前、百尺竿頭一歩をふみ出して社會なべての階級に通じ、不心得者を叱つていたゞきたい、獅子吼してほしい、さういふ立派な殊勝な一大教育家はないものでせうか。

### 米國婦人の軍旗禮法

世界一の突飛もの、お轉婆ものを米國婦人となすとは、一般の定評であるが、事實は夫程で無く、却つて彼等が萬事に規律正しく、快濶で温淑なる點に感ずべきものがあると云ふが、軍旗禮法の如きは、我國の婦人と云ふよりも、寧ろ一般の男子が學んで好い事と思ふ。自由と平等と、而て貨財とを命の如く愛すると云ふ米國人にも、愛國心は充ち〳〵て居る、殊に婦人が愛國の念は一層強烈で、各州各市の婦人は、漸々に愛國婦人會を組織して、眞に國のものゝ如く盡瘁共進的や、有名無實的のもので無く、軍艦を造るとか、新軍隊が成立さるゝ場合などは、必ず率先して其業を助けるのである、然るに最近政府の愛國婦人會員等は、名譽ある自國の軍旗、及び艦旗に對する、婦人の敬意を表すべき法式の定めて居ないのは迷惑だと云ふので、一同協議の結果、會員は軍旗に對し、必ず敬禮すべき事を決議し、五通りの方式を定めた、其五通の方式は、孰れも謹嚴な心持の中にも、女らしき優美な容姿を缺いてはならぬと云ふ事が、深く注意された、で第一には正式の敬禮で是は吾國の軍隊の徒手の時のと同じ擧手注目である、第二は簡單の敬禮で、兩手を胸の上に交叉し、上體を前方に屈める次には兩手を前方に揃へ上體を前に曲げて、極めて鄭重な最敬法、第四には日傘を持つた時の方式で、第五のキスのと同樣に非常に華やかな艷麗なもの、最後は跪坐法で、感謝の意を溢るゝまでに表現する形式である、兎に角優くて婦人小兒にまで敬愛せられる星と線との軍旗は、彌が上にも其光榮に輝やく事であらう。

# 十二月の惣菜料理獻立（一）

| 日 | 朝 | 晝 | 夕 |
|---|---|---|---|
| 一日（日） | 大根味噌汁 | ハンペンつけ燒 | 平目煮付 |
| 二日（月） | 燒海苔 | あぢ鹽燒 | 豆腐餡かけ |
| 三日（火） | ねぎ味噌汁 | 海老天ぷら 大根おろし | 干芋 油あげ煮染 |
| 四日（水） | 豆腐椎茸清汁 | 新鹽鮭 | 豚肉カツレツ |
| 五日（木） | 半熟玉子燒パン | 鰆のすゝめ燒 | 鯖の味噌煮 |
| 六日（金） | さつま芋味噌汁 | いかつけ燒 | 豆腐山かけ |
| 七日（土） | 鯛のでんぶ | 鰯しほ燒 | 小かぶ旨煮 |
| 八日（日） | 豆腐味噌汁 | さんま干物 | 牛肉つけやき |
| 九日（月） | [illegible]浸 | 小鯛鹽やき | 三葉玉子とじ |
| 十日（火） | 油揚煮しめ | ライスカレー | いわしうしほ |
| 十一日（水） | わかめ味噌汁 | まぐろてり燒 | はす、にんじん、里芋、煮しめ |
| 十二日（木） | 牛蒡旨煮 | 鱈干物 | 平目につけ |
| 十三日（金） | 大根味噌汁 | 玉子やき 大根おろし | かれい煮付 |
| 十四日（土） | 白いんげん ふくませ煮 | 新鹽鮭 | カキフライ |
| 十五日（日） | 里いも味噌汁 | いわし鹽やき | 大根ふろふき |

# 十二月の惣菜料理献立 (二)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 十六日(月) | 朝 やきのり | 晝 子芋ころ煮 | 夕 ぶりてり焼 |
| 十七日(火) | 朝 ジャガ芋味噌汁 | 晝 鰈しほ焼 | 夕 湯豆腐 |
| 十八日(水) | 朝 福神漬 | 晝 菠薐草ひたし 花がつを | 夕 海老フライ |
| 十九日(木) | 朝 豆腐味噌汁 | 晝 平目煮つけ | 夕 ぜんまい油揚煮つけ |
| 二十日(金) | 朝 大根おろし花がつを | 晝 牛肉、こんにやく 牛蒡、煮つけ | 夕 むきみねぎ清汁 |
| 二十一日(土) | 朝 小かぶ味噌汁 | 晝 鯖みそ煮 | 夕 にしん昆布巻 |
| 二十二日(日) | 朝 海苔佃煮 | 晝 カキ酢物 | 夕 鮪やまかけ |
| 二十三日(月) | 朝 ねぎみそ汁 | 晝 いかつけやき | 夕 玉子やき 大根おろし |
| 二十四日(火) | 朝 金山寺味噌、煮まめ | 晝 豚肉角煮 | 夕 鯛[illegible]清汁 |
| 二十五日(水) | 朝 大根味噌汁 | 晝 鯛でんぶ | 夕 蛤みそ煮 |
| 二十六日(木) | 朝 ぜんまい みそ汁 | 晝 川ぶな甘露煮 | 夕 豆腐田がく |
| 二十七日(金) | 朝 いり豆腐 | 晝 えびつくだ煮 | 夕 雞肉玉ねぎ、ジャガ芋オムレツ |
| 二十八日(土) | 朝 菠薐草ひたし 花がつを | 晝 焼ハンペン 山葵醤油 | 夕 鮪さしみ |
| 二十九日(日) | 朝 さつまいも 味噌汁 | 晝 ビフテキ | 夕 山かけ豆腐 |
| 三十日(月) | 朝 焼海苔 | 晝 棒だら煮つけ | 夕 カキフライ |
| 三十一日(火) | 朝 わかめ味噌汁 | 晝 焼ちくわ煮しめ | 晩 ぼらてり焼 |

# 蒲鞭（二）

袖頭巾

◎紙緒か閊がらか

十兵衞爺は秋の夜長のつれ〴〵に隣村の權左が家を尋ねぬ。日頃話の合ふ間柄なりしかば、草鞋造り居し權左も喜び迎へ爐など拂ひ乍ら圍爐裏の前に請じぬ。さて話に灯は要らずとて權左行燈の火をふつと吹き消し暗闇にてうち寬き互に儉約なる物語りし、何するには斯くすれば簡略也。何するは無駄なる事なりなど物の要らぬ方法を敎へあいて面白く談りぬ。最早夜も更け星も傾きぬとて、十兵衞歸らむとするに、權左もさのみは止めず、上り框に出で、紙緒か閊がらか、閊がらか紙緒かと火打ちを打ちて十兵衞が草履を求めんとするにいかにしけんあらず。暫くして十兵衞思ひ出して己は跣にて來て居たりといひぬとぞ。

古きシャツはいかに利用すべきか、破れし靴下は何に用ふべきかは若き女に殊更に敎へずともの事なり。親の恩惠に飢ゑと寒さを知らぬ幸福にして意氣地無き男子の他はたとへ、最高の學府を出でし者にてすらまのあたりパンを得るだに難き今日の社會にて、よしや男子の三十を越して家を持つとも樂しかるべき新家庭は既に貧苦の鬼の住家となれるをいかにせん。覺悟は有りとも昨日迄父母の元にありて高價なる香水や飾りピンを何とも思はざりし若き妻君は、忽ち馴れぬ苦勞を身にしめて碎ゆるなるべし。古きシャツや破れし足袋をいかにすべきかと習はずとも自ら工夫積るぞわりなき世なるや。琴を學びしもいまだ人の師となるには至らず。學は攻めしもこれも世渡る晃しの文は取りてなし、只管收入の道を知らぬに困じ若く天麗なるべき頭をあたら冷く曇らはしき儉約の一方に傾けて、物見遊山は思ひもよらず、始めは置きし下女も返して自ら水仕業をし、古下駄の鼻緒も自ら立て換へ、ランプや七厘の火を消す事を怠らず。それも費えと親しかりし友と文の遣り取りもやめ、夏は御飯に酢を入れて焚き、

冬は霰の様なるにて我慢し、火鉢に炭を次がず、髪に油をつけず、手づから障子を繕ひて二十歳にして松下禪尼を凌ぐこそいと〳〵殊勝にも甲斐なき世なり。

幸にしてかゝる辛き世は經ずとも、なべて女は色を離るれば慾に凝るものとぞ。身健かにして長生すればいよ〳〵慾心強くなりて、十萬十五萬の資産は有りとも覺えず。大方ならぬ高利に貸して猶此の上にと思ひて寢ねし間も忘れず。朝は暗まぎれより跳ね起きて人々を起し、下女が焚き付けし竈の薪を減じ。折れ櫛にて鬢掻き付くる事もせず。湯漬け掻き込みて



人より先にお箸を置き、あたふた蠶室へと駈け込む。我れが斯うして働けばこそ年に二三百は延びても行くをと、若き者共を窘め、朝より出る欠を見ても咎めはせで、淫猥なる流行唄や落し話をして仕事の手を勵まし、息も次がせぬ使ひぶりに、箪笥七昇き長持八昇きにて來たる若き嫁を何の因果かと泣かせ、一人の孫息子の肺を病みて痩せ行くを見ては不精病といひて爲すべき養生もさせぬに、是れを見る隣の人等は彼の安達は孫よりも金が大事か己れはいつ迄生くるつもりぞと心地よげに笑ふとぞ。女の一念凝つては中々に怖し。破れしシャツや破れし足

媚は如何にすべきかは若き人にさのみ敎へずもあらまほし。

◎愛と嫉妬

神は殊更に女の胸に嫉妬といふ火を與へぬ。女のあらゆる思の中にて最強き力を有するは嫉妬ならむ。嫉妬は城の砦の如く守衛に立てる兵の如し、弱く從順なる女も是れが爲には忽怖き迄に強くなり、將に死なむとする時にも是れが爲には目を塞がず。其の力外に向つて發するを抑ふれば内に燃えて心を焦し命をも滅す。こは僞りがたき眞なり。さるを世に怪しきは夫の心の他處に移れるを見てもわざと知らぬふりを裝ひ、或は己が胸に此の思ひ無きを此の上無き美徳の樣に心得て誇りがにいひ出る者など有り、抑男女の間は愛によりて繋がる。廣き世界に唯の一人を見出でゝ、心も靈も其の人の前に投げ出して生くる女の身に、男の限なき愛を領じ得ずはいかばかりか、口惜しく甲斐なからん。愛無き胸に嫉妬も無く嫉妬無き胸に愛は無し。とはいへ女の胸に燃ゆる火は男の心の持ち方一つにて暖き愛ともなり燃くが如き嫉妬ともなる。此の火消えはてむ節は、此の世は最早花に色無く月に光も無くならん。

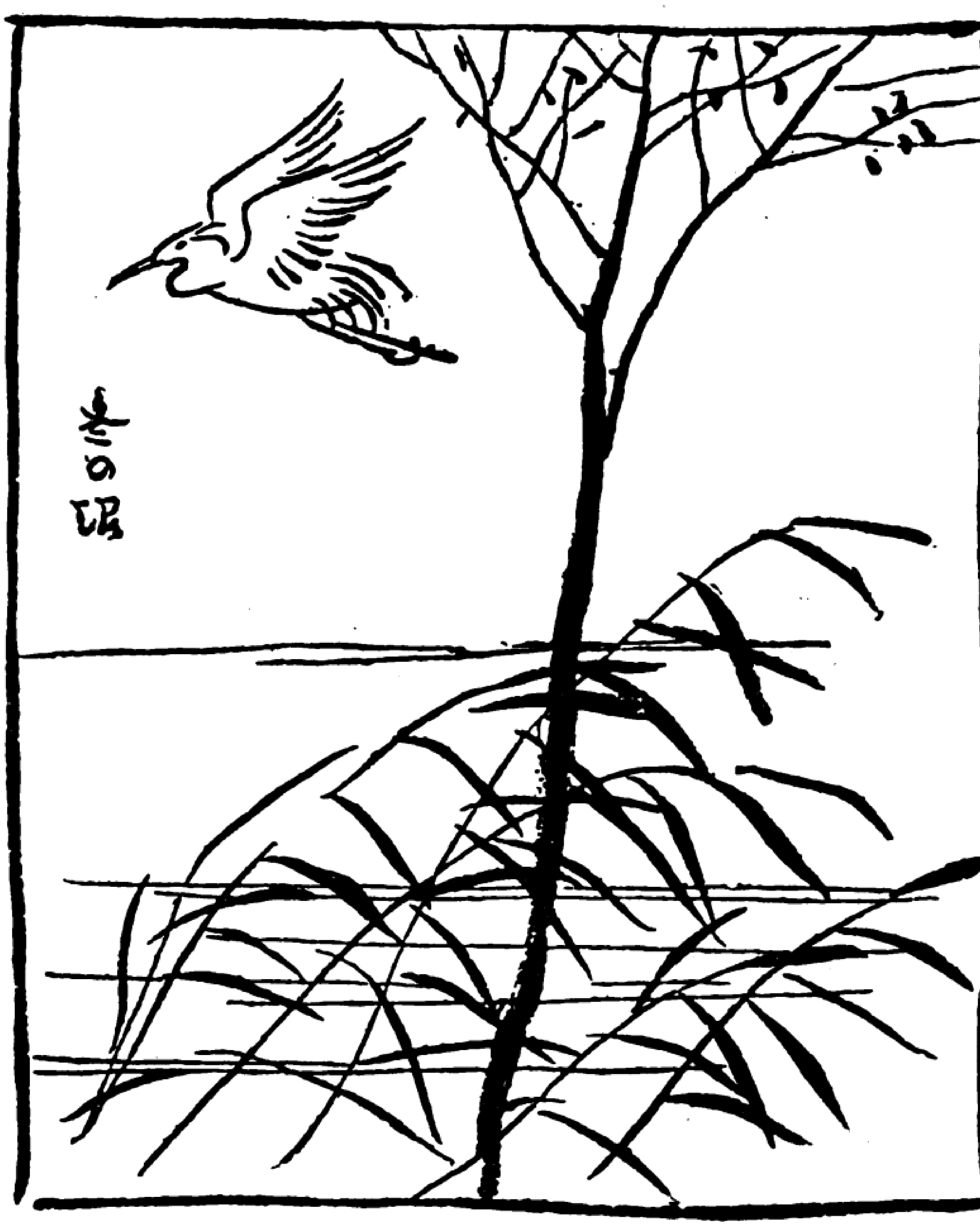
◎女のいふ謎

さる禪宗の老師の許に行けば、いつもみ手づから御茶賜るなるが、今一杯どうじやと問はせ給ふ時、最早澤山なりとかもう宜しくなどゝいへば、必ずもう厭かと念を押し給ふ。

若き男女の懸くる謎はおきて、なべての女は日常の事にもよく謎をいふ。そは卒直にいはば角立たむを恐るゝと、いふまじき事と知りつゝも包みあへでほのかに一をいひて後を殘し、裏をいひて表を覺らするなど、いと煩しく善くせずば判じ損いて思はぬ過する事あり。

大學に學び給へるさる君借し間を探して居給ひし事有りぬ。折ふし我が知れる夫人の、何時か、離れを學生に貸度し、心當りもあらば御世話頼むと事の次序にいひ給へりし事思ひ出でて、我先づ行きて夫人に申しゝ

に、そは此の上無き借り人なれど此方は子供なども多くて騒しければ御勉强の御妨げともならんがお氣の毒なりといひ給ふ。其の事大學の君に傳ふれば、今年は試驗も無く氣樂なり、殊に何時も圖書館にて暮す身、騒しきは厭はず。いはるゝに、さらばとて我御案內して其の家見に行きぬ如才なき御男子の事なれば氣さくに、こは日當りも善く新しくて住み心地も善からん、是れにて屋賃は幾干にやなど訊き給ふ。夫人が、このあたり日當りよく弘やかなれば、近邊の幼き子の數多集ひ來ていといとうろさく騒がしき由を重ね〳〵語り給ふを聞きつゝ門を出でし時、我は此處に極めたりとのたまふに、さらば我其の事傳へ申すべしといひて別れぬ。



一角人の御世話爲はてしつもりなりしに、次の日になりて、夫人あたふたと來給ひて、きのふの事主人に話せしに、そはいとよき御方なれど餘りに窮苦しき處なり、ことに宅の子供は手に合はぬがんさい許りとて、御貸し申して後の御氣の毒は目の前に見ゆ、大學などに學び給ふ方の爲には我其の中別に靜なる處へ新らしく建てん考なれば其の時にこそといひけり。昨日の方の

若しお氣に叶はざりしならば善けれど、何卒悪しからず。とのたまふに、さてはと我もやう〳〵合點行きて、其の日の中に取り急ぎ紐を戻しぬ。

日頃親しとにはあらぬ少し物めかしき或夫人一日ふと入らせ給ひぬ。此の夫人何處に行きても主が〳〵と不平言ふ癖ありと聞きぬ。其の日も背の君のみ情薄き事をいひ、打たれしの歸らざりしのといふ中に、何となう辻褄の合はぬ自惚れもませて半日談り給ひぬ。主の君はさる人にはあらじと兼て思へば、我も聞かぬ氣の、そはいと御痛ましき極みなり。女の身は他に頼まむ人もなきものかくては、御前様日頃の御心苦しさいか許りと察し參らす、げに片時にても御家を忘れ給ふ方許りあぢきなく頼み甲斐無きはあらじ。と話の表を合せしに、其れよりはふつと御入來も無く、再さる愚痴も聞えずなりぬ。

◎我と等しき人ありとも

よき女友達こそ有らまほしけれ。幼き程は隔てなくをかしき交り結びし友も有りしを、やう〳〵年重ぬるに從ひ自ら離れ行きて五年十年心許して變らず交る人の無きはいかにぞや。たま〳〵さし向ひで談るとも大方は其の場限り對手の心破らじと應へして、談ることは淺墓に狹く話に興の湧き立つを覺ゆるものなし。すべて女は年重ぬるに從ひ其の面の寠れ行くごと大方心も冷く淺間しくなりゆくものなれば、かたみに懐しさ堪へがたきを覺ゆる事なく、文の行き來も絶え〴〵になるは自らなる異にて、家の務めの忙しきが故にはあらじ。さはいへ男の胸こそ大らかなるものなれ。長き月日を朝夕睦び暮して飽く事無きはあながち妻といひ背といふ縁の故にはあらじ。かくばかりならずともせめて我を忘れず折々このをかしき事忘れる事など打ち明け談らるゝ程の善き女の友の一人は有れかし。など我れ日頃切に思へど大方叶はぬ願ひなり。もしも此の世に我と露違はぬ人の有りとしても、そは我れ懐しとも戀しとも思ひは遣るべくもあらねば。

女(わの一)

創刊七大叢書の一

文學博士 幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生 校訂

# 文藝叢書

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯 装幀

空押及色模様摺込
天金縁製本頗瑰麗

菊判總クロース上製
每巻挿繪數十個挿入
新鑄十ポイント活字
十七行、四十八字詰

第一期刊行（凡隔月發行）十二册——紙數約壹萬頁（每巻七百五十頁乃至千餘頁）

■正價一册金壹圓（小包料内地十二錢）■特價十二册金拾圓（外に小包料を要す）

本書は時代の有理なる熱烈の要求に應せんが爲めに出でたり。時代は威力の絶大なるものを求む。本叢書の具する威力が絶大にして效果の雄偉なるは、廉價と良質と精確と優麗とを提げて精神上及び物質上の大勢力を背後に有しつゝ、本書の巨軀を江湖に現出するの日に於て直に分明せん。見よ、見られん。比較

幸田露伴先生校訂
口紙數九百三十餘頁

新刊 發賣

文藝叢書第二編

## 椿説弓張月

俊寛僧都島物語
頼豪阿闍梨怪鼠傳
密畫數十個

保元の奇傑源爲朝は日本の快男兒にして、○椿説弓張月は其傳奇なり。世目して馬琴著作中傑作の第一とす。其巻帙の浩澣なる事に於て八犬傳に及ばすと雖も結構整齊、首尾完結し、

東京博文館

# 創刊七大叢書の一

せよ、比較せられん。審重に判斷せよ。判斷せられて而して後是認せられ採擇せられんことを欲するは進歩せる時代の出版界の最善最正の商理なることを信じて本書を新刊す。文藝の價値の如きは江湖既に知れ復贅説を要せざる也。

●文品亦爛熟の境に入り、眞に翁が著作中の完璧を以て目すべきもの、今『後寛僧都島物語』『賴豪阿闍梨怪鼠傳』を合せて一本とし、幸田先生に請ひ嚴重なる校訂を加へ文藝叢書第二編として發售す、校正の嚴格なると裝幀の瀟洒なると價格の低廉なるとは本館の誇とする所、庶幾は天下の清賞を得ん

饗庭篁村先生 校訂

## 忠臣藏文庫

大好評 紙數九百頁 密畫數十個

## 文藝叢書（第一期刊行）書目

| 卷 | 書名 | 著者 |
|---|---|---|
| 第一卷 | 忠臣藏文庫 | 饗庭篁村 |
| 第二卷 | 椿説弓張月・俊寛僧都島物語・賴豪阿闍梨怪鼠傳 | 幸田露伴 |
| 第三卷 | 西鶴文集 | 幸田露伴 |
| 第四卷 | 道中膝栗毛全集 | 饗庭篁村 |
| 第五卷 | 俠客全集 | 塚原澁柿 |
| 第六卷 | 演劇脚本集 | 饗庭篁村 |
| 第七卷 | 忠義復讐傳 | 塚原澁柿 |
| 第八卷 | 南總里見八犬傳（前編） | 幸田露伴 |
| 第九卷 | 南總里見八犬傳（中編） | 幸田露伴 |
| 第十卷 | 南總里見八犬傳（後編） | 幸田露伴 |
| 第十一卷 | 世話淨瑠璃名作集 | 饗庭篁村 |
| 第十二卷 | 紀行文編 | 幸田露伴 |

東京博文館

天皇皇后皇太后三陛下奉呈

大喪使御編纂
參謀本部陸地測量部御撮影

# 明治天皇御大喪儀寫眞帖

（發行元 株式會社 審美書院）

四切判寫眞七十一枚 内二十一枚續青山葬場殿全景、三枚續桃山御陵所全景、附錄……鹵簿内の御具十一點

**定價上製金三圓五十錢** **普通金一圓八十錢**

**體樣**上製はコロタイプ印刷用紙上質西洋紙活版説明江戸川紙製本脊革クロース、普通製は精良銅版光澤紙印刷説明刷込製本大和綴厚紙表紙何れも竪約九寸横約三寸の大冊

東京市内は配達無料 市外は一部荷造料三十錢

明治天皇陛下御大葬儀に際し大喪使に於て陸地測量部寫眞班に囑して東京及桃山に於ける御模様を精細に撮影せしめられ之をコロタイプ印刷の複本に製して 三陛下に奉呈せられ又皇族の御方々を始め當時御參列の列國御名代宮及各國使臣に御贈進相成り且我御近臣大喪使事務官等に下賜せられたる者にして一般に對しては其希望に依り實費にて之を頒つことを允許せられたるを以て今回非常の廉價を以て汎く發賣す一たび之を繙けば親しく御大葬儀の大典を拜觀するの感あらしむ國民が 先帝の御盛德を景仰記念し奉るべき寶帖として正に後代に傳ふべきものなり其印刷の精巧なると體裁の高雅なるとは他に其比を見ず乞ふ希望者は至急申込あれ

發賣元 東京日本橋本町 振替東京二四〇番 博文館

☞ 婦女必讀の大全書

第廿五編 新式化粧法 藤波芙蓉君著

第廿六編 室内装飾法 近藤正一君著

第廿七編 衣服の調整 石崎篁園君著

第廿八編 洋樂手引 前田久八君著

第廿九編 兒童訓話 母の知識 木村小舟君著

第卅編 洋食の調理 東京治庖會講師著

第卅一編 衞生と衣食住 福田琴月君著

第卅二編 東西名婦の面影 高須梅溪君著

第卅三編 婚姻のかゞみ 河崎酔雨君著

第卅四編 交際と談話 福田琴月君著

第卅五編 婦人日常座右銘 高須梅溪君著

第卅六編 日用家庭理科 一戸清方君著

第卅七編 偉人の妻 前田雪子女史著

第卅八編 家庭日常 公けの心得 小西眞雄君著

第卅九編 歐米魚介新料理 赤堀峰吉君著

第四十編 家庭新飲料 赤堀峰吉君小原雄作君共著

第四十一編 洋菓子の調製 赤堀峰吉君赤堀道子女史共著

第四十二編 續編物指南 石井とみ子女史著

第四十三編 看病と養生 醫學士森友道君閲 伊藤尚賢君著

●上編看護法‖緒論○看護の一般注意○病室の設け方○病人に適當なる衣食○病人の觀測法○病人の介輔○藥物給與の方法○藥の特効なる使用法○罨法の仕方○洗滌法○特別なる手當法○消毒法（繃帯の仕方○腦神經病と其看護○呼吸器病と其看護法○循環器病と其看護法○消化器病と其看護法○泌尿器病と其看護法○運動器病と其看護法○法定傳染病と其看護法○一般傳染病と其看護法●下編養生法‖養生法とは何ぞや○神經衰弱の養生○眼病の養生法○耳疾の養生法○鼻病の養生法○呼吸器病の養生法○齒の養生と齲齒の養生法○心臓病の養生法○胃腸病の養生法○痔疾の養生法○腎臓病の養生法○脚氣の養生法○花柳病の養生法○皮膚病の養生法○婦人病の養生法○月經の養生と月經不順の養生法○つはりの養生法○妊娠中の養生法

第四十四編 和洋花の園藝 北村東紅著

花を植ゑんと志しつゝも、未だ着手せぬ人 花を求めたれど、如何に處理せんかと惑ふ人。花を植ゑたれど、名も知らずと困ぜらるゝ方。花の名は知れど、培養の心得なきを歎ぜらるゝ方。花の咲く草や木が春からそへかけて、百千數知れぬ程ある許りか、近來は舶載の品種踵を接して輸入し來るので、到底其一々に通じられん事、大方の難しとし給ふ處ならん、本書著者は曩に『花』と『庭』の著ありて斯界の高評を得たる北村東紅氏、如上の人々の爲めに實地萬般の培養方法を極めて簡易且つ懇切に説叙せられ、加ふるに苟も園藝的觀賞に値する、和洋草木を一々辭彙的索引に依て記上したれば、讀者座ながらにして、草姿花形花色の細より、個々の培養法を悉知するを得べく、眞に花の園藝に於て、遺漏なきを得たりと謂ふ可し。

博文館 振替口座東京二四〇番

# 秋風吟

萩香



笛の手何かきよき音は、
安き身にこそ興も見れ、
人を怨みて動ずる身、
唯泣かしむる節ばかり。

小百合は恍然と、潮の遠鳴に聞きとれて、羽織の脇明へ兩手をつゝこんだまゝ、物憂い身を、緣の柱に凭せました。

暖い午後の日に照らされて、面やせた淋しい頰にもポッと薔薇色の血の氣が上つた。紅絲のはいつた、荒い米琉の飛白、鶸色の籠打の紐をキチンと結んだ間から勝色繻子の帶が見えて、褪紅色へ大きく罌粟の花を刺繡の半襟は、傷々しいほど細い首筋に卷きついてゐます。

秋毛でめつきり減つた黑髮をば、油氣なしのバサバサにして、背後に純黑なリボンを結はへ、眞に諒闇の乙女にふさはしい小百合は、厄年の今年十九。親もな

い、同胞もない、家もない、友もない。たゞ日頃、天地に一人と馴れ親んで、その袖の蔭に保護されてゐた、若い美しい戀人はありましたが、運命の神は兩人を妬んだ。それはもうこの世の人ではありません、降りつゞく梅雨にホロホロと栗の花のこぼるゝ夕、力なき小百合の雙腕に抱かれて、醒めぬ眠りに入りました。

絶望――暮れゆく心――前途は闇――あゝあゝ、何をおもひ、何を生命に生き行く身でせう　しかし小百合は「死なゝい！」




と松が枝ごしに碧瑠璃の空を見上げてつぶやきました。

「あのお母様の、生きてらつしやる間は、死なゝい！」

ひとりごつて、ヒタと閉ぢた、長い綺麗な睫毛の中から、水晶のやうな涙がホロリとまろび出た。

折れさうな細い手首、透きとほるばかり白い皮膚の下には、靜脈血管が紫や青筋と

なつて目立つてゐます。身をけづる咳嗽は絶間もなく咽へつき上つて來ます。

「死なゝい！」

と三度云つた。

あゝお母樣はどうして被居しやるかしら。も未來と云ふものゝない生涯、過去の思ひ出にのみ生くるお方である。忘れて下されやいいけれど、なか〳〵忘れては下さるまい。今頃は私の寫眞に、針でも突さして被居しやる時分かも知れない、と淋しい笑を浮べた。

こんな女がついてるから死に切れないの、伜は小百合さんを恨んで死んだ、親子の仇！　とまで云はれゝば澤山。



「男一人の運命にもなつたと思へば、女は嬉しう厶んすわ」

誰やらが科白ではないけれど、と我知らずまた冷やかな笑を漂はせずには居られなかつた。

そんな方ではないと信じる、私の明樣は、そんな方ではなかつたけれど。

諺言に‥‥お母樣があの樣な鬼になる程、何を口走りなすつたの？　明さま、それほど憎い女とおぼし召して被居たか！

「伜が死んだら生靈と死靈と取つきます」

とやら仰有つたけれど、まだお出がないと見える。

お母樣の生靈なんか眞平だけれど、お化でもいゝ、明樣にはお目に掛りたい、せめて夢になりとも願ふても、滅多に叶へちや下さらないんだもの。夢の中で話をすれば、その人は成佛したしるしだとか云ふけれど、本統かしら？

死出の旅路の晴衣、結ばぬ絲に縫ひ終へて、千行の涙そゝいだ、經帷子着て、頭陀袋かけて、竹の杖した、おゝまざ〳〵と目に殘る昨夜の姿！

何故先の樣にちよい〳〵入來ては下さいませんの、と瘠せた指に取縋つてなげゝば、

「毎日でも來たいけれど、冥途の掟がさうはゆるさぬ」つて。おゝ明樣、どんなに死にたくなかつたのでせう。燃ゆる靑雲の志望を抱いて、空しく土に歸つた才人……。けれど、けれど、逝つて了つた人にはもう、悲しみもなければ、苦しみもない。なまじひに、殘されし身を推し給へ……。

兩袖を胸に抱へてがつくり、仰向いた咽が白い。果髪ははらりと頰から背後へ櫻紅葉がハラ〳〵散る、櫻紅葉がハラ〳〵散る。あれ、またヒラ〳〵と梢を離れて、血の樣に鮮やかな唐紅が、ひよろ〳〵と野菊の屈んでる竹垣や、緣の端にも手水鉢にも、小百合の肩にも散りかゝりました。

爪端消さ、指を反らして組み合せ、念ずるやうに額へ加へつ。思ひ入りたる小百合の眼の前には、髣髴たる亡き人の面影が、おへども〳〵去りませぬ。

「何故、何故、私はもつと女らしく、優しくして上げなかつたんでせう？　あゝこんな事になつて了ふくらゐなら――」

男性の如何な威力を以つてしても、魔力を以つてしても、おどしつ、賺かしつ、なだめても、怒つても、願つても、どうしても、かよわい自分一人を従はせることは出來なかつた。死を以つても、爭ひ通さうと決心してたのに、もう、もう、何事も云ふに忍びない、甘んじてすべてを捧げつくして了つた。今までの强も意氣地も、乙女の權威も……。

やつぱり私は囚はれてゐたんだ、明様は勝利者だ、地下で快哉を叫んで被居るかも知れない。

『いつそ……』と思ひ定めてふらふらと柱に倒れかゝつたのも幾度でせう。だつて一人ぢやあないんですもの、明様はきつと待つてゝ下さると思ふの。蓮の臺にのつたつて、一人ぢやあ淋しいでせう、と微笑みもした。

『けれど……』と考へると、また赫々と頭に血が上る。



死なゝい、死なゝい！ 意地になつても生きなければならぬ、石に食ひついても生きなければならぬ。あのお母様の世に被居す間は……呪はれて死んだと云はるゝが口惜しい。

併しそれも、先頃中のやうにこの病氣どつと重つたらどうしやう、誰が看護などしてくれるのだらう、誰が最後などみてくれるのだらう？ 心強く手をあづけて行く人のあるうちに、何故死んで了はなかつたか。

私が、私が、明樣の臨終の床に侍らうなどとは、夢さら思ひはしませんでした。

自分の始末は自分でつけるより仕方がない、今更どの顏下げておめ〳〵と、義叔父樣達にまみえられやう。みんな、きつと〳〵、それ見た事か、と指さして笑つて居やうも知れぬ。えゝ口惜しい！　キッと嚙みしめた皓齒は、キリ〳〵と少やかな音を立つ。

身に引くらべて、つく〳〵思ひやられるのは、杖とも柱とも賴む一人子に、先立たれて了つた母君の寂寞悲歎、半狂亂に當り散らされるのも無理はない。こんな病氣さへなかつたらお母樣のお世話は私がして上げる、誠心にはむかふ刃はない筈、どんなにもお仕へして頑固なお心も和らげてみせるのだけれど……、なんて考へる時もある。

がすぐとまた、夢にもおぼえのない濡衣を着せられ、罵られ、打据ゑられて、返す言葉もなく、伏し沈むで了つた時の口惜しさが湧き上ると、憤りに耳まで熱くなる。

我が子の頸へすら、手は上げなからうものを、よくも人の子に——親はないとて人の子である、木の股から生れたわけでもありませぬ。私は恨みを忘れやうとするけれど、忘れられない。あゝ孤兒と云ふものは、何處まで人にあなどられるものか——その時學士の枕頭に侍つてゐた看護婦の、さげすむ樣な冷たい目つきを思ひ出してぞつとした。

思へば丁度一年前、はじめて明樣に紹介されたのは——萩もすがれて、芙蓉も枯れて、ホロ〳〵と緣の下にコホロギのなく、侘しい秋雨の夕であつた。

文學をもつて、世に立つ志望はないかと云はれた。奮起せよ、努力せよ、天分を自覺せよと叫ばれ、至囑至囑とはげまされた。

その時の小百合の胸は、どんなに高波を打ちましたらう、色ガラスを透してのぞいた世界は、みんな紅でした、紫でした、希望に滿ち〳〵た綠色でした。

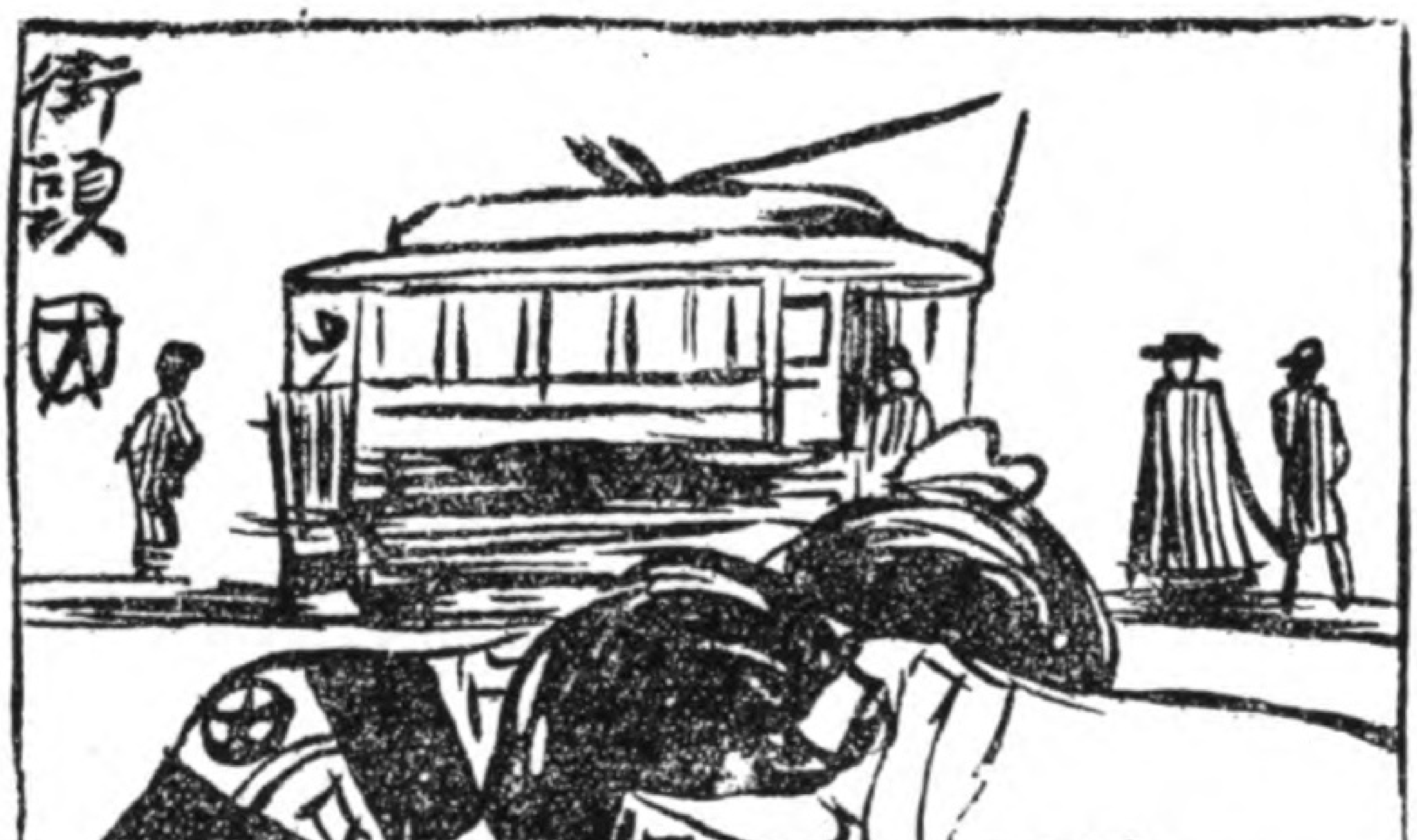
それが二月過つか過たぬうち、

「小百合ちやん、女の勝氣や强情と云ふものは、自分

ちやそれでおエライと思つてるのかも知れないが、他からみるとこれほど笑止な惘然なものはない」とか『文學なんて人氣商賣だ』『獨身の獨歩のと云つたつてこの世に存在する以上、何一つ男に頼らないで生きて行くことが出來るか』

脅迫がましい——と、小百合は憤りが沸々湧いた。こんな矛盾した言を、平氣で云ふ男が憎くつて堪らなくなつた。

けれとも、女の身の弱さ、はかなさ、何のかのと云




ひながら、やつぱり憐れまれて居たかつたのですもの明様に捨てられて、一日も生きてゐる心はなかつた。

飽くまでもつきまとはんとする一重心に打ちまけて、どんな要求でも入れるやうになりはしまいか、とそればつかりが心元なく、一度節を屈して了つたら、もう、もうお仕舞だ、明樣の戀は駄々つ子の樣な、とゞかぬ枝の花が欲しい。摘まれては、花の命はもろきものを……あゝ明様が最初のやうに、妹とし敢へ子として許してさへおいて下すつたなら——と

涙に袖の干くひまもなかつた。

幼にして母なき兒、三歳の年に別れた小百合は、懷かしい母さまのお顔を知りません。佛壇の中にかざつてある、黒紋附の丸髷姿、若い美しい夫人の寫眞に對しても、露ほども子らしい感情の、湧いた事はないんでした。父様はその頃から、肺を病んで居ました。その懷に抱かれて、諸所を流浪しながら友もなく、同胞もなく、淋しく暗く生ひ立つた小百合ですもの。何處か世の常の乙女とは、ちがつたところがありました。それが學士の好奇心に投じたのかも知れない。

呪はれたる小百合父子！　なにがし病院の割引患者として、父様の最後もあはれなものでした。廣い天地によらん蔭なき孤兒の、周圍からは同情のない結婚を强ひられて、溺るゝものは藁をもつかむ、學士の（學士は即ち明さまなる人、名門出の若手の俊秀法學士）膝に泣き伏したは誰。

「心配しなくたつていゝ、僕が責任を以つて引受けて上げる。いやならことはつてお了ひなさい、そんな縁談。今つからヘッポコ官吏の奥さんになぞなつたつてつまらんぢやないか。

ね、勉强してもつと世界的の女にならなければいけない自重なさい、自覺なさい、貴女の天分を」

優しく背を撫でられて、うなづき乍らも

「ですけれど、世間でうるさいもんですから……私のために御迷惑遊ばすやうなことがあつてはすみません。先生だつてまだお若いんですもの、これから――折角夫人お迎へ遊ばさうとする、お障りにもなりますわ」

涙に濡れた顔を上げると、

「隨分な苦勞性だね、小百合さんは。そんなことはどうでも好い、たゞ僕を信じなさい。信じてそむきさへしなければ、乾度貴女を幸福な身にして上げる、ね、餘計な事は考へない方がいゝ。

妹と思つたら何ともないことぢやないか、何の御縁か知らないが、かうして親しくなつて、今更見捨てられるものか。

君のためには何でもやつて上げるよ、小百合さん、今理由は說明しないが、僕は君のためになら、大抵の無理は驚かん――イヤ、無理を道理で通して上げる覺悟だ。ほんとうに何でも心から打ち明けたまへ、ねえ、僕を信じてくれないか……わかつたかい」

「え〻」

とむせび入つて正體もなし。

それ以來學士は萬事萬端小百合の一身を引うけて希望にまかせ女子大學の寮舍へも入れると云つた。兄と呼ばせて、リボンの世話まで燒いてくれました。




艶やかに笑む小百合の眼元には、溶ける樣な媚が含まれてゐた。豐かな頰のあたり漣立つて、チラ〳〵と朱唇を洩る〻皓齒の、惜しや一枚缺けてゐるのを、學士はひどく氣にして、齒科醫へ行け〳〵とす〻めました。

「こんな兄妹があるものか小百合ちやんが戀しくつてたまらない」

とはよくさ〻やかれた言葉でしたが

「あら、いやゐだ」

と小百合は跳ね退いて笑ひました。

が、それも一時、これも一事…事もなげに云ひきかされたけれど、小百合は絶え入るばかり泣き沈んだ。

「母さんも、肺結核で逝つたのですつて。その腐つた胸から出るお乳をのんでゐた私は…」

馬鹿なことをと叱られ、はげまされ、慰められて、こゝ茅ケ崎の知己の家に、一まづ身をよせることゝなつた。

失望、落膽、猜疑、嫉妬、さしぐむ咳嗽をおさへて晝も夜も、煑らるゝやうに悶ゆる彼女は、病の故のそれのみならで、目に立つてやせて行くのでした。しかし學士は日曜毎に、元氣よくやつて來ました。

かうなつてはもう、後見人の保護者のと云はふより正しく戀人のそれとなつて了つて、恍然卓に凭りかゝつてなど居ると、不意に擦りよつて

「小百合ちやん」

とよく肩をまかれた。額を吸はれた。力なき身は振り放さうともがいても、いたずらに息のはづむばかり、小百合はそんな時、忿怒に眼の色を燃しました、大聲で母家の主婦を呼ばうとする。

優しうは指一本もふれさせず、そのくせ機嫌の好い時は、明様々と他事もなく、三つ児の様にまつはり甘へて、切ない思ひをつのらせやうとする。可愛さ餘つて何とやら、男子の憤怒に滿ち〳〵た眼を上げて

「僕が、僕がフンガイするともうお了ひだ」

平常の學士に似合はぬ、こんな事を云つたりしました。

針の様な神經をもつてる小百合は物を云はうと思つても口が利けません、暗い面に何とも云へぬ表情があらはれる。思ひせまつて海川へ身でも沈められてはと氣づかはれ、それ以上強い言は云へませんでした。けれどそれまでは、病氣の故とのみ、笑つて許しておいた我儘も、我をなぶるか操なすかと邪推せられてせめて怒つて女を泣かせることも珍らしくはなかつた。

小百合はひどい壓迫を、感ぜずには居られませんでした。ふとかりそめのノートの端に

「人に憫れまるゝは侮辱をうくるなり」なんて書きつけて、學士に發見られたのもその頃のこと。

あの地位で、あの手腕で、さまざまな縁談の口は降るほどあるし立身の道はドン〳〵開いてる、眞に衆人羨望の的にあたつて得意なるべき筈の男、金屛銀燭の席、紅燈綠酒のちまた、何處へ行つても相當に、持てはやされる身でありながら、どこがよくつてあの様な病人を、と一部の人々に指笑されながらも、なやめる小百合のさびしい笑顔は、何物にも代へがたくいとをしかつた。



病美人！抱きしめたいほど細やかな身體、涙と微笑に潤んだ眼元、薄紅の頰、薔薇の蕾の様な唇小百合は病んでゝも若々しい艶麗な色香を失ひませんでした。

けれど、到底學士の美には及ぶべくもなかつた。學

士の寫眞はいまも小百合の本箱の上にかざられてあります、椅子にもたれた七分身、黒五つ紋に仙臺平の袴、金指環はめた右手を卓において、眉の濃い、輪廓の强い、天庭の廣い、鼻の隆い、口許のしまつた、希臘の神像にでもありさうな——ほとんど彫刻の美に近くつて、をかしがたい中にも愛嬌の滴るやうな大きな目には、金ぶちらしい眼鏡をかけて、供へられたコスモスの花の中に微笑んでゐる。

これほどの人に思はれて、誰がため立て通す心の意地ぞ。何にも知らない幼な心に、かつて一度は戀を戀した時代もあつた。戀する人はいかばかり、樂しく幸福なものであらうと憧憬れ、月の夜や春の花野のそゞろ歩き愛する人の胸によつて、蜜の樣な甘いさゝやきを、きいてみたいと願ふたこともありました。

しかし現實の嵐は無慘にも彼女の築いた美しい空中の樓閣を吹き散らして了つた。醒むれば辛き現し世である。冷たきベツトに悶々として、松吹く風や浪の音鳴く鳥の音も船歌も病める胸には餘情ある律呂ぞ切に堪へがたき。

長からぬ命、とは病の宣告をきいた時、その場からすでに覺悟した。よし長らへばとて輝ける人の花妻と匂はうなどは、かけても思ひ及ばぬこと。それを御存じない明さまでもあるまいに、と小百合は小百合で、優しくされゝばされるほど口惜しく、早く癒つて、どうしてかうしてと、夢の樣な花の樣な未來のことなど聞かせらるゝ度、はね散して泣いた。我ならぬ女の丸髷姿や、可愛き稚兒にパヽと呼ばるゝ、樂しげな樣を見せつけられるやうに思ふて——。

と共にムラ〳〵起るのは、もちまへの負けず嫌ひです。勝利の死だわ、死の勝利だわ。權威ある死、明さまの膝にもたれて、そつと劇藥を仰いだら……と思ひ、彈丸が頸を貫いたら——と思つた。遺書を書きかけてみたり、指環を嚙みつぶして了つたり、ピストルや短刀にうなされ通して。眠られぬ夜も多かつた。

一緒に死ねたら——と思つたこともある。惜しからぬ命ではあるけれど、折角この世に生れいでた十九年

の生涯を、何の記録もとゞめずに、泡のやうに消えて了ふのも厭、せめては愛人の胸になりと、永久に忘れられぬ、深刻な印象が殘して逝きたい！　これが小百合の願でした。

ところが思ひがけない學士の發病。

呼びよせた小百合を擁して、學士の母君は物狂はしう、倅を迷はせた妖婦、惡魔、たゞはおかぬと疊を叩いた、半白の切髪振り亂して、青白い唇嚙みしめて、煙管を膝に突きたてゝ、

「小百合さん！」



と詰められた時、あまりの恐ろしさに戰慄ました、何處か逃口はないかと、室内を見まはした程でした。

「明さまは何もかも御存じだわねえ」

人心地もない病床の人の搦手に縋つて泣き入れば、知るや知らずや學士の目からも、大きい露が止度なしにほろ〳〵とこぼれた。

「小百合ですよ、明！小百合ですよ、明様、明様、あゝ明さま」

「小百合さんだよ、わかつたかい口惜しいか、うれしいか、おゝ、おゝ、お泣きでない、お泣きでない。この仇は、きつと私が取つて上げる、安心してお父様のお

傍へお行き。なア小百合さん、人には私念と云ふものがあります。キッとおぼえてお出なさい。イヤ何もかも知つてます、見なさい、明は昨夜一夜小百合さんの名を呼んでうなされつゞけてゐた、病氣のもとは小百合さんときはまつた、お醫者樣にでも看護婦にでもきいてみるが好い。顔に似合はぬ恐ろしい女、何と云ふことだらう、惡魔！　男殺し！

　うちの明を殺したやうに、まだこれからも幾人の男を殺すか知れなからう、けれど、けれど、もう私がさうはさせない。何？　何を云つてるのえ、云ひわけのあるほどならば、明の命をまどつてくれ、さゝまどつてくれ、まどつてくれ。おや、何を泣くことがある、空涙！　賣女の空涙！　何だ、その服裝は、おつう澄まして令孃ぶつて……お召縮緬――博多の帶――その着物も帶も、みんな明をだまして、こさえて貰つたものだらう、えゝ、腹が立つえゝ〳〵。

　以前にやみすぼらしい銘仙の、洗ひざらしなんか着てゐたぢやないか。何だ、小百合なんかちつとも美人ぢやない、この位な女は世間にいくらでもある！」

　小百合の面には、颯と紅をそゝいだけれど、息がつまつて聲も出ぬ。わなゝく手に氷袋をおさへた、藥もすゝめた。絶えず羽楊子に水を含ませては脣を濡らしてやり、頬に傳はる涙をぬぐふた。

　かくて三日二晩、學士は苦しさうに微笑んだり、血走しつた目を空にみひらいて、無意識に看護婦の腕をかき抱きなどしたが、母君はじめ小百合にも、誰にも、何を一言殘してはくれませんでした。

　何と云ふ本意ない別れでありましたらう、九原遠く芳魂去つた學士の死顔は、つねにもまして美しかつた。夢に夢みる心地の小百合、火のやうに熱した胸の塊は、熱い〳〵湯玉となつて、絶えず面を流れるのでしたけれど、集ひよる人々の前に、そんな泣顔を見せたくはなかつた、縁に立つてばかり居りました。

　やがて寢棺は高い臺にのせられて、床の間の前へ安置せられた。通夜の人々の目をしのんで、小百合は傍へ忍びより氷の樣な冷たい額へ頬ずりよせて泣いた、

強く〱脣をおしつけました。

「明さまは永久に私のもの、私は永久に明さまのもの、やつぱり明様は勝利者ですよ」

溢ゆる涙ははら〱と、白衣の胸に合掌させた、指の上へと落ちました。あゝこの涙この接吻、生前學士がどんなにか、望んでゐたものでせう、けれどけれど、もうおそかつた。

　縷々として立のぼる香煙のうちに、袖を抱へて立上つた小百合。亂れ毛を口にふくんで、ふつと顔を上げると、目に入つたのは、魔除にと供へられた短刀で、棺のふちへ總が長く垂れかゝつて、錦の袋の口が弛んで、チラと金梨地の鞘が見えてゐる。



ずつと寄つてキッとなり、また蒼くなつた。蠟の火はまたゝいた。そこへ、白髮の亂れにも悲嘆のあといちじるき母君が、水晶の珠數を雙手に入つて來られたので、小百合はつと次の室へのがれた。

　それから三日目の葬送の朝、いよ〱最後の見納めと、看護婦の腕にたすけられて、やう〱棺前へ進んだもの〻、得堪へずそこへくづ折れて了つた。柩を閉づる金槌の音は、傷める胸に堪へがたい響でした。

學士は落合の火葬場で、一夜のうちに淺ましい白骨と變りはて、少さな白木の箱にをさめられ、針金で十

文字にからげられ、母君の袖に抱かれて、俥にのつて歸つて來た。
小百合は孤影悄然として、茅ケ崎の停車場へ下り立ちました。
「おやつれなすつたねえ」
とつく／＼見られて、
「うそよ」
とそむける笑顔のさびしさ。
何と云ふ心强さ、小百合はこの家の主婦にまで、學士の死をば祕めてゐました。何にも知らない小母さんは、沈み切つてる小百合のつれ／＼を慰めやうとて、よくお茶をいれては世間話しなどにまゐりました。
「旦那樣はどうなさいました、お便りが厶いますか、いつ頃お歸りなので御座いますえ。どんなにお心細う厶んせう、旦那樣でも、さぞお案じなすつて被居いませう。おいとひなさらなければいけませんよ」
など〻云ひますと、
「だつて、お役のための御出張なら仕方がありません。その代り私も今度のおかへりまでには、精出して養生して、丈夫になつて置きませうねえ」
莞爾と笑つてみせても、すぐ涙ぐんで口元が引しまつて來る。唇はぴり、ぴりッと痙攣して、それがかうじると口からは烈しく涙をふりこぼしながらも、發作のやうな笑ひ聲を立てることは、珍らしくはなかつた。
　こ〻の家にもいつまでか居られやう、明樣と云ふ保護者を失なつて了つたときけば、體よく立退を命ぜられるくらゐなもの。行くに路なく歸るべき家も知らず立よらむ蔭もなく、賴むべき人もなし。おきどころなき五尺の身、紅深き唇にのぼるは、世をも人をも自己をも、嘲けりの冷笑のみ。美しかつた大きな黑い瞳は、するどくおちいつて、かはくまもない、猜疑と涙で光つてゐました。
　火の樣にみなぎる思ひを、せめてはと折々机に凭つてもみるけれど、焦れに焦れては筆を投げた。書きさしの原稿紙は風に舞ふて、緣の下やらどぶの中にまで散らばるのでした。

ありし日をそのまゝ、毎日綺麗にお化粧して、大好きな着物を着て、緣の柱にもたれては、かうしてゐると、今にも明さまの訪ふて來さうに思はれる、それがせめてもの心やりなのでした、あだとは知れどわだちの響に、幾度胸をとゞろかせたでせう。何をみても追懷のたねと、學士逝いてよりこゝに百何十日、小百合は一歩も外へ出ません夜は不眠になやまされつゝ憂きを抱いて入る床にまた今夜の夢も、どんなに悲しく寒からう…あゝ。

冷やかな夕の空氣は咳嗽を誘ふて、小百合は夢から覺めたやうに、フッと四邊をみまはしました。

仰げば半月中天に高く、暮れゆく空の薄むらさき、浪はゆるやかに遠鳴して、魂を引よするものゝやう。

『月が、月が、あゝ懷しい月、見ねば忘れられるかとも思つたけれど…もう、もう、どうせ私は——今夜はこの月をみて心ゆくまで思ひ明しませう。あゝ明さま、今頃どうしてゐらつしやるかしら？　蟲よ啼け、ないて消ぬべき愁ひなら……』

冷たい緣にくづ折れて、ヒシと雙手に肩を抱いた。

色なき頰にはあとから／＼、銀の涙が光つて流れる。

月色皎々、松風颯々…石膏のやうな小百合の姿は突伏したまゝいつまでも／＼。

（了）





# 後奈良院 御謎百番

## 松の操

(一)三輪の山、もり來る月は影もなし――答三輪の山だから杉木立がくらいでせう。杉眞闇(杉枕)
(二)明石のうらに月すます――答明石は播磨です。播磨に月がすまぬのですから播磨闇(はり枕)
(三)ゆきは下よりとけてみづの上そう――答雪が下からとけたから　ゆの字が殘つて、水のみの字上に來るとゆみと讀めませう。ゆみ(弓)
(四)春は花、夏は卯の花、秋楓、冬は氷の下くゞる水――答　春夏秋冬の下くゞる水は四季の川であります。四季川(敷皮)
(五)思ふ事いはでたゞにや止ぬべき、我にひとしき人し無ければ――答上の句は唖を云つたのであります。下の句はひとしき人しがないと云つてひとしを取る、きが殘つておしき(おしき)となります。
(六)ろはにほへと――答いは無し(岩梨)
(七)ろはにほへと――答さき折れ假名(さき折かんな)
(八)まへなは目あき、後なは目くら、――答目あきだから見えます、目くらだから見えないでせう。だから見見ず(蚯蚓)
(九)いろは習へ――答假名書け(かんな掛)
(一〇)やぶれ蚊帳――答蚊入る(蛙)
(一一)水――答ゆで無し(ゆで梨)
(一二)塵は無し――答掃いたか(はい鷹)
(一三)いもじ――答いと云ふ文字はかながしらでありませう。(魚)
(一四)三位の中將は何故うたれ給ふぞ――答平重衡は奈良を燒いたと云ふ罪で討たれました。奈良火罰(奈

良火鉢)

(一五)嵐は山を去つて軒のへんにあり――答嵐が山を去ると風が殘ります。軒の邊は車でありヽす(風車)

(一六)竹生島に山鳥居らず――答山鳥と書いのは島の事です、島が無いと竹生之をつめると笙でせう(笙)

(一七)みやつかひ、かひこそ無けれ身を捨て、しはさかさまに引は何ぞも――答みやつかひ、かひこそ無けれでかひをとるからみやつになりませう、夫をまた身を捨てると云ふのでみをとるとやつであります。しはさかさまになるとはしですから。(八橋)

(一八)唐にたのむ社のあればこそ、まゐらぬまでも身をばきよむれ。――答唐の社は唐神でせう。身をきよむると云ふのは唐神を請じて祭ると云ふのでせう。唐神請じ(唐紙障子)

(一九)秋の田の露おもげなる景色かな――答露かおもいから穗が垂れます。穗垂る(螢)

(二〇)うはぎえしたる雪ぞたえせぬ――答雪がうはぎえするときが殘ります、たえせぬと云ふから常にもあるのでせう。き常(狐)

(二一)寶生が刀にひをながくかいたる――答寶生の刀は片名でほうと讀ませます。日をながく書ますと月と云ふ文字になりませう。ほう月(ほうづき)

(二二)しちくの中の鶯は尾ばかりぞ見えける――答しちくの中は葉の中で、鶯の尾と云ふのはすの字の事を云ふのであります。葉す(蓮)

(二三)らふそくの先き、たびの中にあり――答らふそくの先はらの字がたびの中にはいりますとたらひでせう(盥)

(二四)人をうらみて昔を語る――答人と云ふ字をうらから見ると入であります、昔を語ると云ふのは元の事を云ふ。元いひですから、之は入元言ひ(入元結)

(二五)ないしのうへのきぬ、とのの上がさね――答ないしの上をのけますとしが殘ります、とのの上とはかさねるとゝでせう。(しとゝ)

(二六)喜撰が歌はせんもなく歌ちなし。秋の月の暁の雲にあへるが如し――答喜撰のせんがないと云ふて

喜が殘るでせう。秋月晩雲にかくれると世界はまた眞闇の筈であります。喜眞闇(木枕)

(二七)火をともし候ぞ、御入り候へ　答あかりをつけて請じますから、あかり請じ(明障子)

(二八)今日は朔日、明日は晦日——答三十日の前へ一日が來てはさかさ月であります。さかつき(盃)

(二九)十里の道をけさ歸る——答十里の道ですから數學的に云ふと二つ五里があるでせう二五里、けさ歸るとはけさをかへすのでさけと云ふ事ですから二五里さけ(にごり酒)であります。

(三〇)やわたりの朝——答やわたりは移轉のことです。引越しをすませた家の初めての朝ですから、住初めの今朝。(墨染のけさ)でありませう。

(三一)風待ち坊主——答坊主は何々師などと云つて師とも云ふのでせう。師が風を待つのだから涼む師です。(鈴蟲)

(三二)因果歷然——答報いぬ。(むくいぬ)

(三三)十三になれども、ひだるい——答十三は九と四にわける事が出來るでせう。ひだるい人の事をがきと云ひます。九四がき(串柿)

(三四)海の道十里にたらず——答海の道と云ふのは濱道の事を云ふのです。之が十里に足らぬと云ふから九里でせう。濱九里(蛤)

(三五)何も漆のあるとき——答塗り置け。(塗桶)

(三六)かきの中の篠——答かきの中へさゝをいれて讀みますと、かささぎ(鵲)となります。

(三七)深山路や深山がくれのうす紅葉、もみぢはちりて跡かたも無し——答深山ちやの上句深山がかくれると、ちやが殘ります、うす紅葉のもみぢが散るとうすが殘ります。すると殘つたのはちやうす(茶臼)であります。

(三八)ふくろうのくろうはなくて、耳づくの耳なき繪こそ可笑かりけれ。——答ふくろうのくろうはなくてと云ふから、くろうを取つて見るとふが殘ります。又耳づくの耳がないとづくが殘るでせう。其繪ですからふづく繪ではありませんか。(文机)

(三九)宇佐も宮熊野もおなじ神なれば、伊勢住吉もおなじかみ／＼――答此歌はうさ、くまの、いせ、すみよしの上々をとつて見よと云ふのです。この四つの上を取つて見るとうくいすとなります。うくいす(鶯)

(四〇)にくさに去りぬ。さりながら忘れぬ――答にくさに去つたと云ふからのいた、のきと云ふ譯であります。さりながら忘れたと云ふから、其事を忍んだのでありませう。のき忍ふ(軒のしのぶ)

(四一)文机の上の源氏の九の巻――答文机の上と云ふから考へて見るとふであります。源氏の九の巻は須磨でせう。ですからふすま(襖)

(四二)さしぬきのすえ損じたるかへり花――答さしぬきの裾の方を損ずるとさしだけ殘ります。かへり花ははながかへるからなはであります。(さしなは)

(四三)うしやたゞ足もやすめず古郷に、かへりては行く山路なりけり。――答之は故郷にかへつては又旅をつゞけると云ふ意味の歌で又旅(木天蓼)であります

(四四)廿人木にのぼる――答茶。

(四五)風呂のうちの連歌――答連歌は句をつゞけるのです風呂の中で句を考へるのですからふくろ(袋)であります。

(四六)しほ／＼としほ／＼／＼としほ／＼と、しほたれまはる宿の夕顔――答歌の中のしほと云ふ文字を數へて見ると都合八つあります。宿の夕顔とはひさごの事ですから、之を合せると八鹽のひさご(杓)と讀めるでせう。

(四七)人突く牛をとくうのき見ん――答ひとつくうしからとくうの三字をのぞいたなら何と讀めます。ひつじ(羊)でありませう。

(四八)羊の角なきは仙人の乘物――答ひつじのつのなきはと云ふからひしであります。仙人の乘物は鶴の事、これはひし鶴(菱鶴)であります。

(四九)妻戸のまより歸る――答つまどのまかうかへると云ふから戸をのけて、まかうかへして讀みますとまつ(松)であります。



# 和歌

一等

○ 赤々と夕日かゞやく秋の海に魚とる人は磯節うたふ　横濱　高橋壽美子

評　深秋海邊の景色、自ら眼前にあらはる。

二等

○ 遠く近く藁打つ槌の音たえて靜かに更くる初雪の村　大津　安福有爲

評　北國の人にあらざれば此趣を解し得まじ。

○ 風もなく月もかすけき小夜中を大天地は雪ふりしきる　神戸　吉田多嗣

評　夜色沈々萬境空し。

三等

○ しづかなる御寺の園のコスモスに虹の群れ飛ぶ小春日の晝　越後　丸山きみ子

評　實景實舒。

○ かすかなる羽音をたてゝ茶の花に虻慕ひよる霜どけの朝　岡崎　加藤婦志子

評　以上二首同據なれども何れも捨て難し。

○ 過ぎ行きし下り列車の音たへて秋の夕をレールの光る　田端　塀和濱子

評　平凡なるが如くにして趣多し。

秀逸

○ 大利根の夜は川下に流れ行きて川岸の薪に霜白く置く　水戸　川和美代子

評　一讀肌の寒さを覺ゆ。

○ 山里は日ごと〳〵のつゝの音に鳥も來鳴かず年の暮れり　羽後　伊藤浪江子

評　銑鐵流行の弊何處も斯くの如し。

○ なく蟲も聲かれはてゝ今はたゞ御陵つめたく時雨ふる　靜岡　初田實子

なり

評 一讀新愁を催す。

○ 小石川 植松きみ子

日ざしうけて鳩の諸羽をかい抱けば温し和かしいと快よし

評 平温玉の如し。

○ 大阪 磯 子

後より着せまゐらするお羽織の肩にふれたる手のおののきよ

評 新人の眞相。

○ 日暮里 廣瀬春代

朝もやの湖ふるはして鐘の音は大津の町にあかつき告ぐる

評 園城寺の晩鐘なるべし。

○ 和歌山 阪上きく子

お幾つと問へば小さき指折りて可愛き子なり京とよぶ名も

評 歌も亦可愛らしゝ。

○ 成田町 白柳幸子

君は去る秋は暮れゆく里は寂ぶあせしコスモスまばらの蟲の音

評 去れる人亦同感なるべし。

○ 兵庫 花野つの

生れざりしならばと思ふこともありと姉のたよりの悲しきことかな

評 同胞の情。

## 佳作

○ 大阪 杉本種子

幼子が大振袖を重たげに羽子つく音の愛らしき哉

○ 靜岡 山田蓬江

みつむればそとうつむきて頬そむる新妻人の美はしきかな

○ 大阪 露子

浮世繪に似たる姿と畫だくみのうわさにのぼる糸屋の人よ

○ 久留米 中村みどり

若かりし日の思出に泣けよとて寂しき秋は日に深みゆく

○ 福島 坂本曇仙子

落葉うつ秋雨の音のさびしさにひとり泣く日のうちつゞきける

○ 神奈川 磯野さだ

暖かき涙持つ人乞食よびて金やりぬ時雨ふる夕

○ 小石川 石井しか

老いませし故郷の母やつゝがなく秋の夜長を臼やひくらん

○ 兵庫 古谷知子

ひし〳〵とむれにせめくる寂しさをひとり泣かばや蟲なく夕

○ 下總 宇智田てい女

小濱に魚つる子等に道きゝて紅葉たづぬる鹽原の里
○　愛媛　八木瑞枝

晩秋のひろしづかなる山里のかきれのつたのほろ〳〵と散る
○　成田　白幡幸子

牛居る小屋のみ見ゆる廣き野に咲ける野菊も霜に亂れて
○　名古屋　安藤直子

少女子のふりの袂に染めまほし籬に香ふ白菊の花
○　横濱　金井きよ

植が家の夕餉の煙り細々とのぼるこずゑにかゝる夕月
○　福島　江崎かれ

影うつる桃割姿なつかしみ逝く十八の惜しまるゝかな
○　茨城　今泉、義子

金色の夕日を受けて銀杏散る八幡宮の石のきざはし
○　三河　山田經子

憂き秋をさゝやく風の音さえて夕へかなしきみさゝきのみち
○　河内　糸若柳野子

世をうらみ人をうらみて逝きし子が魂か夜寒を螢一つなく
○　伏見　田島かれ

五位鷺のおちゆく澤に秋立ちて夕風寒く葦の末ふく
○　松本　淺輪久子

ものいはで微笑むのみの君にくし十九の秋をことさらに肥ゆ
○　熊本　甲斐千枝子

稲を刈る乙女の頬に笑見えて夕日まぶしき秋晴の里
○　水戸　上市文子

はる〳〵と松の枯葉のこほれ落ちて雨かとまがふ山里の夜半
○　大阪　寺田ひで子

さく〳〵と落葉ふみつゝ小羊の一つさまよふ牧場の暮
○　名古屋　山田秋子

たゞならぬ雲の旗手を吹きたてゝ野こえ山こえ木枯さはぐ
○　東京　江口みどり

こからしに散りしく落葉かきわけて里の子二人椎の實ひらう
○　神戸　山口さい子

鐵道の堤に咲けるコスモスの花なつかしき秋のたそがれ
○　日暮里　廣瀬すみ子

雨の如木の葉の落つる音かなし十月の村の秋のたそがれ
○　大阪　小村桂子

留守居せば春の日をだに淋しきを秋の夜長のたへがたくして
○　大津　安福有爲

遠近に浮ぶ帆影のほの見えて港靜かに夜は明け初めぬ
○　群馬　尾池みち子

亡き君の柩さびしく行くあとを二ひら三ひら柿もみぢ散る
○　麻布　八谷文子

赤き葉の二ひら三片まひ落ちて一人居わびし里の小春日
○　周防　花子

コスモスのせより高しと乳母はいふ小春日よりのそゞろあるきよ
○　成田町　白幡幸子

奥深く秋の山寺問ひゆけば望む限りは紅葉なりけり
○　四谷　岩田富子

鐘樓のかれは音せず古寺のうらのかや原日は落ちらんとす



# 俳句

天
紀の旅や夕日彩る蜜柑山　浅草　奥田稔子

地
島渡りする嫁舟や小春凪　牛込　畑中小子

人
冷々として佛前の水仙花　麹町　河越せい子

秀逸
ストーブや連峰遠き雪の窓　東京　大竹栞子
蟷螂のレール横ぎる日和かな　横濱　美村
秋晴や鳶舞下る一軒家　小石川　石崎芳子
絹夜具の襟元寒きくさみかな　神戸　熊澤衣子
むつぎ干す裏垣わびし黍枯て　小樽　鈴木水若草

佳作
晩秋の案山子は骨となりにけり　大阪　加島かた
川隈に錦を綴る落葉かな　静岡　北川和子
大佛の膝に溜りし落葉かな　久留米　日笠さかゑ
煤掃や箪笥の陰の鼠の子　芝　篠崎八重子
刎橋に下駄音さゆる霜夜かな　茨城　岩田清香子
かべ越しの喧嘩もきくや年の暮　久留米　中村みどり
山茶花や素足冷たき庭草履　群馬　神崎菫子
小春日や野は人の聲百舌の聲　千葉　千代女
敵陣の篝火白き霜夜かな　四谷　佐藤操子
雪の日は人から先に暮れにけり　栃木　柳岡久子
落葉掻いて施藥煎ずる寺法かな　肥前　隈部藤代
小山田は案山子一人となりにけり　石見　品川富美子
山寺や霜ふる夜半を聲さゆる　横濱　大村壽々子
鴫立つや落葉の水の溜り水　浅草　山本春子
富士は時雨れ筑波の山は夕やけす　駿河　高瀬てつ子
杣が唄一句一句の木だまかな　大阪　田中ひろ子
何一つしたともなしに年暮れぬ　佐賀　野田やす子
杣小屋の軒につるせし干茸かな　愛知　淺沼節子
森として只拜殿の落葉かな　上總　地曳さだ子
木枯しに十戸の村の早寢かな　茨城　今泉義子
空高し枯野を雉子の一文字　京都　元生落葉子
流れ木に寄居蟲蠢めくし小春かな　香川　大井久子
潮木焚けば汐曇る濱や群千鳥　東京　金丸ふで子
重箱を脊に花野雨戻りけり　伯耆　里見光子
落葉かけば失せし玩具や庭の秋　尾張　紫人
鐘の音や木立渡りて火事のあり　兵庫　脇坂夢子

白菊や鐵砂日和を尾長鶏　名古屋 安藤直子

名所の古墳探や冬の月　大阪 町田若葉子

銀杏落つ驛路古し關近く　福田 中村勝子

初霜に新染の衣の匂ひかな　鹿兒島 榎本とし子

朽ちはてし多賀の鳥居や枯尾花　德島 郡友江

萩散つて佛一つの庵かな　若松 高橋藤子

豆菊や鐵達堂に日の匂ふ　芝 早船たけを

里神樂更けて狐の嚏なな　香川 大井俊子

橋下に鴛鴦の寄り添ふ時雨哉　靜岡 あき子

磯隱す白粉淋し秋の暮　臺北 芳仙

蜜柑とりの畑を下る夕日哉　和歌山 崎山才子

冬枯れに苔むす薔薇あり籬垣　安藝 松島鶯世子

月の出の蘆間に鳴くや手負鴨　埼玉 町巻若葉

山門に熊の胃を賣る小春かな　京都 德田初枝

冬の夜や三里を走る汽車の笛　京都長谷川まさ子

白菊や古驛の寺の燭暗き　四谷 杉本靜江

帆ばらみの餘り風吹く歳寒し　麴町 小牧銀葉

菊の香や憂愁更に新なり　滿洲 敏子

ゆく年や髭ぼう／＼と人の果　安藝 松島里代子

秋晴やつるす大根の土白く　北見 越智しげ子

秋はれて一物もなき廣野哉　肥前 植木繁子

殘月一痕何千本の冬木立　芝 篠崎きみ子

武に疎き文士の庭や冬牡丹　朝鮮 水澤秋子

いぎたなき妻の早寢の布團かな　新潟 田澤つれ子

小春日の落窪村や風　小石川 中川月子

吊乾葉や軒端に風と小夜嵐　京都 田井中篤子

コスモスの亂れて散りて秋は逝く　福島 澤香子

竹籔に足袋干す家の落葉哉　名古屋三田村とみゑ

水仙に姫ばかりの茶の會哉　京都 都路桂子

白菊や秀歌の君に言葉なし　福井 山口靜枝

灯に風賢しき夜寒の眼　神戸 山田富美子

秋の夜や歌よむ人の肱枕　牛込 鈴山廣子

水晶を磨く山家の小菊哉　芝 早船小松

若き日の歌燒き捨てぬ秋の暮　神戸 山村香枝

柚味噌つくる庖厨閑に鶲かな　下谷 小林しげ子

秋晴や船の底うつ釘の音　靜岡 森本榮子

朝霜や大根賣りの鼻赤き　千葉 伊藤稼

水干の公達見たり月の宿　三河 山田穂子

草の實のはじける音や風の秋　箱根 對木まさ子

塗柿の取殘されて枝の上　京都 渡邊八重

歌ならずして擲まはしたる火桶かな　京都 但部和歌子

小春日や日比谷の梅の返り咲　牛込 大山たか子

風や鴉の居直る枝の上　八王子 鈴木雪子

よろ／＼と壁這ひのはる蜂かな　愛知 安藤愛子

獵人の山から山に隱れけり　朝鮮 橋口みゆき子

ほうけたる尾花が末に夕やけす　羽後 伊藤濱子

冬木立只遙々と風が吹く　東大久保 中山保江

自動車に紅葉の散るや車轍　青山 森野英子

黄昏や嶽に狂ふ山羊の群れ　埼玉 柳崎菫子

大根引く路傍に嬰の子守かな　増毛 芳野秋子

# 新刊紹介

○眉山美文集（川上眉山著）　故眉山氏の小說以外の美文を集めたるものにして、内容は序跋書翰抄の類を初めとし、戯文、弔文、題詞、日記抄等種々の方面にわたり、氏の美文が獨特の妙を有して明治の文壇に多く並ぶ者なかりしことは人の知るところ、近來文章の兎角粗雜に流れんとする傾きある際、此の書の出でたるは喜ぶべきなり、岩田烏山、關谷楚山の兩氏の編輯にかゝり、石橋思案氏の校閲を經たるものにして、體裁も頗るよろし。（定價四拾八錢、本館發行）

○貞烈乃木夫人（遲塚麗水著）　乃木大將夫妻の明治天皇に殉せられたるは、世界を驚動せしめたる明治史最後の一頁なり、著者の此の著、よく夫人の高風淑德を叙して、讀む者をして、感奮興起、自ら襟を正さしむ。（定價七十錢、神田區三河町博愛堂發行）

○女官物語（齋藤溪舟著）　明治天皇陛下の御盛德を偲ふにつけても、知りたきは九重雲深き御あたりの御生活の有樣なり、著者は其の麗筆を振つて、ことに女官の生活を細かに述ぶ、材料の新しき所に著者の勞を認めらる。（定價七十錢本鄕一丁目日東京堂發行）

○通俗家庭和洋料理（赤堀菊子著）　著者は江戸前の料理に最も腕の確かなる人、此の書の一般家庭に有益なるは言ふまでもなし、料理に對する注意より初め、魚類、肉類、玉子、野菜の調理法、菓子の製法等すべて三百項に及びて平易に述べあり。（定價八十錢、麴町區飯田町東京社發行）

○通俗講和の理論及方法（加藤咄堂著）　如何にせば最も通俗に自己の思想を他に傳へ得べきか、是れ教育家並に宗教家等の特に考慮する所、此の書は曩きに東京府教育會主催の講習會に於て「講話に關する理論及方法」と題して此の問題に就て著者の述べたる筆記に、尚ほ二三を加へたるものゝ由にて、演說講話に關係ある人の好參考書なり。（定價九十錢、小石川區原町丙午出版社發行）

○歐米魚介新料理（赤堀峯吉著）　家庭百科全書第三十九篇として出づ、著者は曩に各國料理研究の爲め歐米各地を漫遊し、歸來、女子大學を初め、各女學校並に赤堀料理教場等に於て最新の料理法を教授し傍ら新著述を爲す等、專ら和洋料理法の革新に力めつゝありしが、今又此の書を出して最新の料理法を紹介す、割烹に注意する人は一本を備ふるを要すべし。（定價四十五錢、本館發行）

○現代處世指針（中島德造著）　本書は現代各種の人々が、總べて道德に關する諸種の事項に就いて著者に質疑し來れる問題と、之れに對する解答とを集錄し、併せて男女の修養に關する數篇を載せたるものにして、問ふ者も偽らず飾らず其の心を直寫し、答ふる者も亦た曲げず阿らず無遠慮に其の思ひを叙述したる點に於て蓋し活問活答といふべし。（定價八十錢、小石川區原町東洋大學出版部發行）

○青空（吉江孤雁著）　近作二十篇をなさむ、清新なる筆致にて自然の大景を寫すは著者獨特の境地、本書は就中落葉、月光、冬の森、其他雲、山頂の霧、海潮の響等に對したる時の著者の自覺、また伸びやかなる氣分を寫さんとつとめたる苦心の作なり。（定價四十五錢、神田區表神保町中興館書店發行）

○人形の奇遇（押川春浪著）　曾て少女世界に連載したる美少女の冒險小說なり、篇中の主人公は花のやうなる桃子孃にして、其の親友のエミ子孃も天女の如き美人、二人は不思議なる運命の手に捕へられて世にも不思議なる樣々の境遇を經る中に、讀者に大なる教訓を與ふる面白き作なり。（定價二十五錢、小石川區三軒町武俠世界社發行）



# 誌友倶樂部

空に鳴く雁の聲も、いと物哀れに、龜山の彼方より片割れ月の淋しさうに出る頃、私は只一人寮の窓によりて、遠く東の方にまします誌友の皆樣の事を思ひ出しました、富子樣の事なども思ひてホロりとしました、其時窓の下の野菊が私を慰めてくれる樣に思はれました、何故こんなに野菊が可愛のでありませうれ、皆樣も野菊おすきでせう、私を慰めてくれるものは、只一人の野菊あるばかりでございますよ、十一號の本誌、千代子樣鏡子樣のが出てゐませんので殘念に存じます、(山口にて橋喜美子)

▲妾は力んで投書した、けれどれ、妾の歌は先生にはむかない、先生は男のくせに、やわらかい歌、妾は女のくせに男の樣な歌、丸きり反對なんですもの、桃山とか御陵とか歌へばすぐ選に入る、不思議だわ、矢張り愛國心の强いせいかしら、妾は思ひきつた事が歌ひ度いの、けれど、處女てふ名の前にこれも出來ない、だからいつも白露とか、春子とか云つて、投書して居るんです、米子樣の繪段々上達しましたわ、平つか明子さん、妾大嫌ひあんな人、にくまれ口失禮、ヘイさようなら(雨子)

▲寧樂の花月樣、貴女御渡米なさるさうれ當地で婦人の仕事と申すと澤山にありますが、少しく語學が御出來になれば、案内働きが婦人に一番に適當だと思ひます、米國の習慣や風俗や家庭の作法を習ふに一番よいと思ひます、貴女御渡米なさるなれば、婦人としての覺悟が最も必要でございます、勤勉と忍耐と、日本婦人として恥しくはない樣な心掛が必要でございます、貴女の住所を知らせらるれば十分委細を御忠告申します、(北米の敬)

▲北千住の畑が、隅田川の水面をなめて、品川の海へ流れる樣になつて、帝都も漸く秋の自然の力に壓せられて來ました。秋晴の夕、所澤から來た雄大な飛行船は、夕日に映じて朱に、夕日を裏にして黒く頭上をかすめて甲斐の連山に去りました、歡樂境淺草は國技館の菊花大會、ザゴマ無くも、戰爭畫に子供を引く活動で、秋も春のやう、上野は池の邊の拓殖博覽會の白い建物と、靜かな畫、冷たい彫刻の文展に、日々淋しい秋の心を抱いた人が、飄颻と吸ひ吐かれて居て、上野の森の古風な御靈屋の金物に、弱い夕日がなげられる頃でなければ人は去りません、王子瀧の川の紅葉、品川の海晏寺の紅葉漸く人を引く樣になりました、(菊香)

▲十一月に『八面鋒』を、お書きになつたむらさき樣、よくマアんなに人樣の御批評が出來ますこと、感謝の外はありません、それでも、私きいてビックリしましたの、ほんとに平塚明子樣つてば、そんな方ですか、やはり「新しい女、新しい女」つて、やかましい程あつて、違つて居ますのれ、オホヽヽ、けど廣い世の中には、明子樣的な人は多いものですよ、餘り人の惡口云ふと大ばちが當つたら大變、モウ止して置きませう、(福岡縣後藤文子)

▲山陽高女に關係遊ばしてる誌友よ、文展の「初秋」といふ洋畫にお眼を留めなすつて、私初めは夢かと思ひましたワ、だつて其のモデルが三年か四年かの確か五十嵐さんといふ人にそつくりなんですもの、皆樣どう思召して、(星見草)

▲十月の本誌嬉しうございました、なつかしい綾樣のお作、大好きな鏡樣のも、玉露樣のも、殊に元祿姉さんの痛快なお筆久し振りで拜見しました、此れで萩香樣のがあれば申分なしですが――、(Y市S子)

▲松平鏡子さんの「江戸趣味と西洋趣味」はほんとに面白うございました、別に七枝さんがいやでまり子さんが好きといふのでなく、また西洋趣味に反對で、江戸趣味に贊成といふわけでもないですけれども……、(陸奥、と代子)

▲誌友の姉樣方のお内に、日本郵船會社歐洲航路船の高級船員の奧樣にて、麻布、澁谷、青山あたりにお住ひ遊ばす、お方はございませんか、おさしつかひなくばお交り下さい、(歐洲航路船醫の妻)

▲大分高女の皆樣、鶴崎の舟遊は如何でした、私、學生時代思ひ出して、ほんとに羨しかつたのよ、お對にキッと結んだリボンを、宇治川面にうつして、心行くばかり歌つた事もございましたのに……、平等院、扇芝を訪ひては、昔を語り、散り來る櫻花見ては、ともに興ぜしローズの君樣、今はどうして、ゐらつしやいますか伊勢のコスモス樣、私もれ別府大好きよ、まり

ーホテルの暮色、ほんとに詩的ですわれ、だんだんとうすれ行く豊後灘みてゐる時、私はいひえぬ、あくがれにとらはれますの、殊に月よき夜は平安の都なつかしく、又病める姉を思つて涙にくるゝのでございますよ、（別府にて月見草）

▲皆様、いよ〳〵お正月が近づきますネ、けれど悲しいお正月です、私先日桃山御陵へ参拝しましたら、おそれおほくつて〳〵、いつ迄もいつ迄も頭が上りませんでした、白砂に伏して泣て居りましたのよ、もう今年はお正月なんぞちつとも待ちどほしいとは思ひませんわ、寒くなりましたから、どうぞ皆様お大切に、（京都、花子）

▲詩友の皆様、どうぞ繪葉書の交換をお願ひ申します、御返事は必ず致します、又外國の少女と交換お望みの方は、御申込次第御紹介致します、（名古屋市中區白川二丁目、加藤照子）

▲記者様にお伺ひいたします、特別寄書の原稿紙は半紙でようございますか、そして幾字詰何行ですか、紙上にてくわしくお知らせをねがひます、（南筑の里にて、露草）すべて御自由にして御寄書下さい。

▲此の頃千代子様のお作がちつとも見えないので、何だか淋しうございます、以前のとほり、あや様とお二人で、美しいお筆を以て誌上をかざつて下さいましな、玉露様のお筆も大好きです、何卒ます〳〵おふるひ遊して、それから玉露様や松平様のおうつしゑぜひ出して頂だい、私ばかりの願ひではありません、（茅渟ノ浦にて、愁の花）

▲記者様、私は本年廿一歳になります者でございますが、今度東京の女子美術學校へ入學いたしたいと思つて居りますが、同校生徒の年齢は何歳位でございませうか、なほ同校は本郷のなに町にございませうか、誌上でお知らせ下さい（群馬の片田舎にて、ときわぎ）——本郷區菊坂にあります、委細は同校へお聞き合せ下さい、

▲毎號姉様方の御健筆には敬服です、殊に鏡子様と野菊様のが大好でございます、（宮城、丁子ただ子）

▲須美子様、おやさしいお言葉頂だいいたしましてまことにうれしう存じました、私丁度五月はじめから病の身となり、やう〳〵此頃もとの體となりました、私だとて御同様に順境にそだつた者ではございませんの、それですから、これからおたがひに親しくして、いろ〳〵なぐさめあひませう、私の所は下の所ですから、どうぞお文おめぐみ下さいませ、（横濱市櫻木町四丁目十六番地、萩原桐子）

▲記者様、私は私立の高等女學校を卒業仕たのですが、上野音樂學校に入學する事が出來ますか、本科に入學するには試驗が有るでしよやれえ、そして又二十二にも成つて入學する人がありますか、（さかえ）入學することが出來ます、試驗はあります、二十二歳位ではいる人も隨分あります。

▲日本の諸姉様方へ、繪葉書の御交換をお願ひ致します、妾や妾の父母は日本人好きなのよ、それで内へ日本人のスクールボーイ一人置いて有りますの、それですから文字は日本字で宜敷いの、このボーイに故郷の妹より毎月女學世界送つて來ますの、それを一々譯して下さるので實に嬉しいです、全く女學世界は良き雜誌なのれ、雜誌中のタインだわ、當地では全く見られないわ、諸姉様、自重なされて雜誌へ花を咲かして下さいれ、文通は英語なれば妾の爲に幸福です、左様なら、ホワイトリリー、（Miss lily white Helper Wah Box313. U.S.A.）

▲横濱市須美子様、未だ御面識も得ない私から唐突にお尋れ申すは失禮ながら、私事とくより横濱のゲンツウイラー商會廣告のストツキング製造機械求め度き希望でございますが、何様遠地の事とて信用も致しかれ、ためらつて居ます、實際廣告の如き收益あるものならば、御地には實驗者も多數の事と存じます、あなた様もし御存じならば、委細御報知下さる事願へませぬか、（香川、靜子）

▲記者様、和歌や俳句や端書文は、端書でなくて、葉書大の厚紙にかいて、一處に集めて開封で送つても宜しいのでございますか、（肥前、不知女）よろしうございます。

▲西濃谷間の白百合子様へ申上げます、お尋れの管井貞子は、去る明治三十八年十一月、父上の任地岩代國郡山にて死去せられました、私は生前一度も、お會ひ申した方ではありませんが當時の事はくわしく存じて居ます、又、お寫眞も持て居ます、お望みならば差上げます、（越後にて洋子）

▲六月增刊「月宮殿」に「家庭教師の一日」をおかき遊ばしたお方は何子様、誠に失禮とは存じますが、一寸お伺ひ致したい事があります故お差支ございませんでしたら、御住所姓名を紙上でおもらし下さいませ、（伊藤左千子）

▲記者様、御手數ながら、文藝協會（坪内博士

の)の所在地をお敎へ下さいませ、又協會は何時にても女優志願者を入れるのですか、又入會するには舞及び音樂等が出來なければならないでせうか(一少女) 牛込區大久保余丁町にあります、委しくは同會へお問合せを。

▲記者樣、特別寄書を出して、もし誌上に出して頂く事が出來ましたら、其の人には、誰れにでも報酬をお出しになりますのですか、(東京マンドリン)謝禮として一々差上げて居ります。

▲三河のK子樣、おたづねの永田樣は、只今兵庫縣大鹽村においでゞ御座います、あなたは御親友ですの? 私も女學校よりの無二の友として今も御つきあひ致して居ります、(三河碧海のN子)

▲今日か明日かと待つた增刊、胸跳らせて見ました、でも一つ物たらないのは、萩香樣がお出しになつてない事です、あゝ千代子さま、振つて頂戴よ、(宿毛にて野村喜久子)

▲恐れ入りますが、皆樣の内にて、本誌增刊の「姿見號」、「囁く手紙」、「心の日記」、「順境と逆境」お持ちの方はお惠みくださいませんか、お禮は心ばかりですが致します、(兵庫縣西須磨村須磨寺前靑山方、松下喜つ子)

▲誌友のお姉上樣、美しい繪はがきで、美しい御交際をして下さいませんか、御願ひ致しますまた寫眞の交換も願ひます、(名古屋市西區鹽町通小舟町森田屋方、科野みさを)

▲諸姉樣、「月宮殿」お持ちの御方は、下名へ、御惠み下さいませんか、御禮は必ず致します、(對馬國嚴原町今屋敷、原靜子)

▲松原の花月樣、お言葉誠に難有う、失禮ですがおさしつかへなくば、御本名おあかし下さいな、御本名承つたならば、貴女を存じて居るかも知れませんから、(穗月)

▲六月號にて繪葉書の交換をお願ひいたしましたら、地方の姉樣方より澤山御送り下さいまして、誠にありがとうございました、一々お返しいたしましたのですが、只越中伏木の松原樣のみは、お所を忘れまして、その爲め後れて居ます、どうぞ松原樣 のお所知らして下さいまし、(東京牛込、のだ)

▲諸姉樣、いつも御機嫌よく何よりで、ございます、私は一人ぼつちの子なので、高女卒業後は一しほ消極的になつて、いつも語るに友なく、一人で月見て泣いて居ります、たゞ〱笑む時は、女學世界が下女の聲のする時なんですの(紀の國、玉兎)

▲私事、只今親類の家に、てつだつて居りますが、此度内地の方へまゐり度候と存じます、如何なるこんなんもいとひませんから、私の樣な者でも女中にお使ひ下さるお宅はございませんでしやうか、三年はかならず辛棒いたします、若しお使ひ下さるお宅がございましたら、失禮でございますが、左記のところまで御一報いただけばかならず返事を申上げます。私は家に居りまして、繼母のためにくるしめられて、猶がへ一枚もよこさないで家を本年四月に追出されたのでございます、それがためどうする事も出來ませずせん方なく今は外へ勤めて居るのでございます、內地には繼母も居りますので、私が當地に居るのを非常に心配いたして居りますので私もどうかして內地にまゐりたいと願うて居ります(札幌區大通西丁目一〇岩佐榮太郎方、中村ふみ)

▲記者樣にお願ひ致します、新しき軍歌又は唱歌、其他樂器使用に關する書籍を求めたうございますが、何所へ申し込めば宜敷うございませうか御敎示下さい、(山中の愛讀連) 銀座松本樂器店出版部、或は銀座十字屋等へ問合せて御覽なさい。

▲御懷かしい諸姉樣方 御別狀もございませんか何卒此の上も變り給はず、我が愛讀せる誌上に於て、ます〱御才筆をおふるひ下さらん事を祈ります、以後よろしくお導き下さいませ、(上越にて芳香)

▲記者樣に、お尋ね申します、あの東京には結婚媒介所とか云ふ處がありますさうですが、何處にありますか、そして其處は何地の人でもお世話下さるのでせうか、何卒〱其處をお敎へ下さいませ、お願申します、(田舍の一娘) 四谷區須賀町高砂結婚媒介所、其他澤山あります、しかしどれほど信用が出來るものかよく知りません。

▲高岡の山本その子樣、十一月の本誌の和歌の部に、御許樣のを見ました時、私は大さううれしうございました、以後ます〱おふるひ遊ばせ、私は貴女と同じ時卒業したものでございます、(有磯の濱邊にて、柴の露)

▲千代子樣、この頃どう遊ばして、二三ヶ月お作が見えないのね、私し貴女樣のお作がないと失望致しますわ、やつぱし私しもあの華やかな調子にチヤームされてるのでしようか、ホヽヽ、千代子樣、以後ます〱お振ひなすつて、

毎日出して頂戴れ、(京都にて、深雪)

▲空の鳥がねぐらに急ぐ時に、夕鐘の淋しき音にわかき皆々様は、御むれにどんなお思ひをお抱き遊ばす事でしやう、私は花の朝、月の夕、有益なる本誌を友として居ります、何とぞ諸嬢様、誌上にてお交りをお願ひ申し上げます、(名古屋、喜代子)

▲筑前博多の方にお願ひ申します、御地に日蓮上人の銅像があるさうでありますが、もし其の繪葉書がありましやうなら、誰方様でもよろしうございますから、送つて下さいませんか、御禮には當地の繪葉書をさし上げます、(伊豫喜多郡平野村、菊池芳子)

▲誌友の諸姉様、寒くなりました事れ、でもお變りもなく、ます／＼盛んにお暮ひ遊ばして下さるので、毎號嬉しく拜見して居ります、十一月號の日臨子様、東京の白菊様、お悲しき御境遇、まことに御同情に堪へません私も、身につまされて悲しみました、何卒お姉様方お情深いお心の一端に、哀れの女と思して私等の名をお容れ下さいませ、(淺草にて、南香子)

▲如何あそばしたのでせう千代子様は、此度の増刊には見えませんでしたのれ、私千代子様のが見えないと、ほんとにがつかりしますの、鏡子様、振ひます事れ、櫻井縣子様、先日は「悲劇十番」お送り下さいましてありがとうございます、お手かずながら何卒御住所お知らせ下さいまし、(室蘭、高垣保子)

▲誌上の諸姉様、まことの不束者でございますが、これからどうぞお交はりをれがひます、(京都市下京區的場室町東入ル、友田かつ子)

▲重松淑子さんの御住所は何處でせうか至急はがきで御知らせ願ひます(記者)

▲記者様、一寸お尋ねいたしますが、同じ女學世界の讀者にても、東京の本社より購讀しなくては、色々投稿してもだめなのですか、私は十卷の一號よりの愛讀者ですが、度々投稿しても大方は沒書となります、何卒次號にて御知らせ下さいませ　滋賀縣伊香郡字西物部片山きくの)

記事さへよければどなたの投書でも歡迎します

▲諸姉様の御立派なお筆樂しく愛讀いだします私は東京の渡邊裁縫女學校を卒業してより早や三年に成ります、今は頼まれて是非なく當地の小學校にて裁縫教授を務めて居ります、田舎の事とて、秋に成れば生徒もへりて淋しく成ります、何卒御交際願ひます、(滋賀縣、白菊)

▲毎號拜見いたす皆様の和歌、ほんとうに羨望にたへません、私もどうかして春の花秋の月に思ひを筆にする様なりたいのですが、それにには何か手ほどきによい本がないでせうか、斯道の皆様、何卒お知らせ下さいませ(陸前、桂花)

▲私事、なにか仕事が欲しくてなりませんが、何もすることがなくて困りますのですが、何か筆の内職はございますまいか、少しばかりの文筆の自信はありますが、末長く續けることが出來るやうな職がありましたらば、御同情深き皆様、姉様方、何卒お知らせ下さいませ、(淺草宮美子)

▲四千哩の汐路をはる／＼と北米の野に身を寄せたる妾は、入り來る船ある毎に、故國のたよりを聞かんそればかりを樂しみに勉學して居るものです、皆様より御手紙頂けばどんなにうれしいでせうか、どうか日本全國のお方と手紙繪葉書の交換を望みます、(神田汀波)

▲誌友の諸姉様にお願ひ致します、私は或る商店の事務員をして居る者ですが、御交際下さいませ、(堺　野菊)

▲記者様に御尋ね申ます、一葉全集の前編が御社にございますか、又定價はいくらですか、まことに御面倒ながら、紙上で御返事下さいませ、(大阪の女)定價は一圓五十錢です。

▲皆様の内、誰か刺繍獨習書と本誌増刊「月宮殿」お持ちの方は、本年四月に求めたハーモニカと御交換下さいませんか、(イヨ松山、モミヂ)

▲名古屋の松原きよ子様おさしつかへなくば、誌上でお交り下さいませんか、次に外國にお出での諸姉様、不束者ですがお交り下さいな、外國の方が私おなつかしいの……(東京、野原さき子)

▲お懐しい誌友の諸姉様、私しは寂しい片田舎に悲しい思ひをして暮して居る者でございますが、たゞ女學世界を無二の友として居ります、どうぞ皆様ふつゝか者ですが、御交り下さいませ、(阿波政子)

▲大連市の立石満子様、おなつかしう御座います、御存じで御座いませう、いつも妹とおうわさ申し上げて居りますのよ、御手紙下さいませな(京都市東愛子)

▲十一月號の誌友倶樂部に、名古屋の松原喜代様とか申すお方に申上げます、私も本誌愛讀者の一人で有りますが、何卒以後御交際下さいませ、(越後白百合子)

# 募集（十一月八日〆切）

## ●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲短文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△短文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

### 賞品

▲和歌　▲俳句

一等賞　壹圓

二等賞　五拾錢

三等賞　參拾錢

---


## 每月一回一日發行

### 定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
（定刊數……十二冊
內（增刊四回：一、五、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

### 廣告料

| | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 一行（廿四字り） | …… | …… | …… | 七十錢 |
| 四半頁 | …… | …… | …… | 十一圓 |
| 半頁（卅二行） | …… | 廿八圓五十錢 | 廿三圓五十錢 | 二十圓 |
| 一頁（六十四行） | 六十五圓 | 五十五圓 | 四十五圓 | 三十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

### 註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

不許複製

大正元年十一月廿三日印刷納本
大正元年十二月一日發行
第拾貳卷第拾六號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　市川七作
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三千百三十八番・二千六百二十番・三千二百二十九番

# 大正二年 博文館發行雜誌＝新年號豫告

## 第十九卷 太陽

毎月一回 一日發行

●大判本文二百四十頁新年號總紙數は二百七十二頁
●寫眞版（三色版一枚三色刷一枚 光澤紙……十二頁）●外に本文中寫眞版數十箇挿入す
▲正價一册金參拾錢 郵税三錢（臺灣に限）三錢五厘

明治國運の大發展と離る可からざる光輝ある歴史を有し、若き大正の大有爲なる新時代を凱切堅實に指導し代表すべき豐富なる實力と權威を有する東洋唯一の大雜誌

### 新年附錄【創作五篇】

●小說（題未定）……森鷗外
●響（長篇）……島崎藤村
●山鹿素行（脚本）……塚原澁柿
●三代目小六（小說）森田草平
●千葉笑ひ（喜劇）……岡本綺堂

## 第二卷 地球

毎月一回 十五日發行

●大判本文二百卅二頁新年號は二百六十四頁
●寫眞版……光澤紙十二頁
▲正價一册金參拾錢郵税三錢

『地球』に使命あり、希望あり、主張あり、方針あり、策議評論は時代の最高智識を蒐め、經濟財政百般の懸案に對しては、絶えず公正なる批評者たり。誠實なる忠告者たり。高尚なる趣味の豐富なるは、讀者をして忙中自から閑あるの思あらしむべく、論策の時務に剴切にして、記述の有益精確なるは、『地球』の特長として聊か誇るに足る。世間が目して經濟界の刊行物の第一者となす偶然にあらず。

### 新年附錄 新講談（冊二頁）

●制度整理の成績と大正二年
●疑問の朝鮮總督府……
●經濟界の低氣壓……
●中部日本の商權伸長……
●總選擧後の新議會……
●官營事業の根本的整理……

（後付の一）

第八巻

# 農業世界

本誌は日本農業雜誌中の大王、讀者は農界の有ゆる階級に普及し、其數巨萬、勢力絶大、記事豐富比類なし、來年よりは以下一般記事の外、特に農業技術上の新研究を掲げて生產を啓發し、斬新なる農業を敎へて生計に餘力を與へ、又大に地方青年の良師たるを期すべし。

▼▼▼新年附錄 ■ 新講談 六十四頁 興味津々 △△△

●本書は、農業、林業、水産に關する朝野名家の有益嶄新なる明論卓說」耕種園藝、釀造、養蠶、畜産、土地改良、林業、水産、副業、等の事項に涉れる各專攻の學者實業家の執筆に係る學說實驗」農政問題、自治農村、產業組合、耕地整理等に對する意見と經驗」とを掲げ、斯界を改良指導することを期すべし。

●本誌には、農業林業、水産業者の人物經歷、事業實行逸話等」、農家が家庭に要すべき育兒、攝生、娛樂、料理、雇人待遇、家風、家法等」を掲げ、一は農界の人物を奬勵し、一は農家の家庭を改善することを期すべし。

●本誌には、各地方に於ける冠婚葬祭 祝事娛樂、奇蹟奇談等の風俗習慣農界に行はるゝ俳句俗謠、俚歌より詩歌講談小說の類」を掲げて文藝趣味と娛樂の念とを與ふべし。

●農村青年、農學生、地主小作人に對する名家の修養談、青年團體に對する大家の卓見、狀況、通信等を掲げて其啓發誘導を爲し、小學校、補習學校敎員等の爲め農業敎育指導の方法を說き海外の事情を詳記し、讀者の質問に叮嚀なる解答を與へ、又種苗、農具、書籍其他の仲介を爲すべし。

每月一回 一日發行

●菊判本文二百四十頁新年號は總紙數二百六十四頁
●寫眞版 光澤紙・四頁 ●彩色石版畫（植物標本） ●原色寫眞版 動物標本）
▲正價一冊金貳拾錢 郵稅二錢（一號限り）二錢五厘

第十九巻

# 文藝倶樂部

新年附錄

時代美人風俗双六

鏑木清方氏畫

每月一回 一日發行

●菊判本文紙數三百二十頁 ●原色寫眞版一枚
●寫眞版（二色刷光澤紙……二頁 光澤紙刷八頁普通四枚） ●木版摺錦繪一枚
▲正價一冊金廿五錢 郵稅二錢五厘（一號限り）三錢

卷を重ぬる事十有九、讀者を有する事數十萬、我國文藝雜誌中、嶄然頭角を表はせる『文藝倶樂部』は、爰に大正二年の陽春を迎へ更に大々的發展をなさんとするに方り、先づ新春の餘興として、當編輯部考案に成れる「時代美人風俗双六」を添附す、右は物語或は戲曲等に出たる美人を蒐集せるものにて、筆者は浮世繪の大家、鏑木清方氏なれば、濃艶華麗目を眩ずるばかりなるは、編者の喋々を俟たざるべく、その善を極め美を極めたるところは、之を實物に徵せられたし、其他の口繪寫眞版等に至つては技巧益々加はりて疇昔の比にあらず、倍舊の賞讃を懇請す。

第二卷

# 演藝倶樂部

毎月一回一日發行

●大判（四六二倍大）本文二百八頁着色木版畫挿入
●口繪一●木版數度刷折込畫一枚●コロタイプ刷一枚●三色版二頁●光澤紙寫眞版折込一枚●光澤紙寫眞版三十四頁
▲正價一冊金三十錢　郵税三錢（一冊限り）三錢五厘

## 新年附録
## 當り役
## 似顔繪双六

綜合藝術の精華たりまた一面群衆娯樂機關の神髄たる演劇はその國の藝術を代表す。その國の演劇を研究するは即ちその國の國民性の根本を研究するの謂なり。東洋の藝術國この藝術國の有する勝れたる演劇を研究する東洋唯一の大雜誌は當「演藝倶樂部」の他にはあるまじ。見よ本誌が大正二年の陽春より如何にその全精力を傾注するかを。尚本誌は新春の興を添へ、一面この美しき藝術國の演劇を代表する美しき名優數十名を選び特に諸彦に紹介せむため、斯道の名家名取春仙、林緑水二畫伯に依頼して、その似顔繪數十枚を双六とせるものを附錄とす、石版數十度刷、艶麗無比、一面似顔繪の復活の導火線たり、また一面明治より大正に渡る名優として永久保存すべきものならむ。

第十三卷

# 女學世界

毎月一回一日發行

●菊判紙數二百〇八頁　●原色寫眞版一枚
●寫眞版（光澤紙八頁）●石版（精巧彩色畫二枚）（筆蹟鉛筆畫毛筆畫二頁）
▲正價一冊金貳拾錢　郵税二錢（一冊限り）貳錢五厘

## 新年附錄
平福百穗畫伯筆
### 新案運勢占ひ
（大判極彩色艶麗無比）

## 《内容》



（後付の三）

第二卷

# 少女畫報

▽新年附錄△

## 新案夢判じ

太田三郎畫

(大判極彩色精巧美麗)

□繪物語……………大田三郎
□憎まれ口……………あざみどり
□井戸端會議……………しぐれ女
□田舍藝者の告白……………山の白百合
□ツー、マダム……………N T D
□滿天下の奥樣に……………憎まれ子
□人生の表裏……………水仙子
□樣々の美人……………小泉迂外
□落ちた女に揚つた女……………岩野清子
□天勝孃訪問記……………社會記者
□美しき生活の裏面……………佐藤紅綠

每月一回
一日發行

●大判(四六版二倍大)本文百頁一着色木版畫挿入
●極彩色石版畫(二頁大)一枚●原色版一枚
●光澤紙寫眞版……四十頁
●正價一冊 金二十五錢 郵税二錢(二號に限二錢五厘)

### 畫報

□變裝寫眞合せ……
□新裝乙女姿……
□新裝マダム振り……
□女學生スタイル……
□大正婦人風俗……
其他上流各家の夫人 令孃、家庭の寫眞を滿載す……

第十九卷

# 少年世界

誰が何と云ても『少年世界』は、少年雜誌界の大王です。本文紙數百十二頁、それが殆ど全部五色刷、其上、毎號大家の揮毫に成た油繪の原色版、水彩畫の精巧石版光澤寫眞版が四頁も添へてあります。殊に正月號には

## 大正少年雙六

小波案 三郎畫

の大附錄がある、そればかりでも十錢の價は優にある。兎に角一度手に取つて見て下さい。そして如何に面白くつて有益であるかを見て下さい。

每月一回
一日發行

●菊判本文紙數百十二頁 全部着色刷
●原色寫眞版…一枚 ●石版數色刷…一枚
●光澤紙寫眞版……四頁挿入
▲正價一冊 金十錢 郵税一錢五厘

●新皇帝陛下(油繪三色版)…中澤弘光筆
●東京名所(水彩畫)………三宅克己筆
■隱れマント(お伽小説)巖谷小波
■黑面將軍(學術小説)……竹貫佳水
■世界の一角(合作冒險)………櫻桃、湖山
■いたづら宿屋(滑稽小説)……磯萍水
■馬鹿と悧巧(新作お伽)………山內秋生

■地理談……坪谷水哉
■牛の話……石川博士
■自然物……三好博士
■海軍談……阿武少佐
■陸軍談……櫻井大尉
■熊谷直實……萩野博士
■牛若丸……兒玉花外
■牛歩……木村小舟
●少年唱歌……葛原齒

第八巻

# 少女世界

堅實な教訓と清新な趣味とによつて、絶えず內容の充實をはかつてゐるのは、本誌の誇るべき特色であります。新らしい氣分に觸れようとする少女は、必ず本誌を讀まねばなりません。實に本誌は、現代の少女に希望と慰安とを與へる最良の讀物です。

正月號附錄

○少女思ひ出雙六　山村耕花、萬代恒志畫

毎月一回 一日發行

●菊判本文紙數百二十頁（內三十二頁着色二色刷）●原色寫眞版一枚●石版口畫一枚●光澤紙寫眞版四頁挿入

▲正價一冊金十錢 郵稅一錢（二冊）一錢五厘

▲二色刷光澤紙寫眞版四ページ
▲東西正月の花（水彩畫）…丸山晚霞
▲ヴアイオリン（三色版）…石川寅治
▲羽子姿（表紙）……竹久夢二
▲お伽小說 闇の花園…巖谷小波
▲現代少女訓話……東京高等師範 佐々木教授
▲手帳の中より……沼田笠峰
▲日本文學 おちくぼ物語……永代美知代

▲東京見物の印象……田舍一少女
▲パリーの少女……與謝野晶子
▲初春の家……松井ゆり子
▲クリスマスの夜……佐々野旅夫
▲少女對話百物語……武田櫻桃
▲詩の都より……茅野雅子
▲少女小說『夢』……松山みどり
▲少女と家事……女子大學教授 飫木幸子

少女會館　學藝室、娛樂室、顧問室談話室、何れも讀者のために開放してあります。

第三巻

# 幼年世界

幼年世界も三歲になりました。從つて美くしい衣服を着て、大きくなつたゞけの事を、幼年諸君にお眼にかけねばなりません。そこで一月からの本誌は總八十頁色刷の計畫を立て全誌五色刷位の色刷になりますから、その美くしさはたとへやうもありません。またいかに衣服ばかりが立派でも、三歲になつたら、三歲になつたゞけの心懸が肝要ですから、記事にも一大改善を加へ、附錄には上のやうな大附錄を添へ、圖の側にある風景や國旗によつて、何處の國の子供であるかを當てる趣向で、大牛小牛は巖谷小波先生が、本誌の爲めに殊に骨を折つて書いて下すつたお伽噺で、面白いことは請合ひ。其他の記事もまた皆有益。子供雜誌界の大王は幼年世界であります。

新年附錄　懸賞新案世界子供合せ（極彩色の面白き附錄）　巖谷小波案　久保田金僊畫

毎月一回 一日發行

●菊判本文紙數八十頁全部色刷●石版口畫一枚

●寫眞版（光澤紙二色刷）……二頁

▲正價一冊金八錢 郵稅一錢

（後付の五）

（後付の六）

第十六卷

# 中學世界

每月一回
一日發行

新年附錄

## 明治の十大功臣

必讀の讀物八十頁文壇
諸名家並に諸博士執筆

明治大帝の崩御に次いで、乃木大將の忠烈なる殉死あり、正に震天撼地の大事變、而もこれが混沌たる思想界に一道の光明となり精神生活の歸趣を指示したるもの多大なりき。吾人青年の友として、斯界に重きをなすもの、此機會に逢着して、また頓に勇氣百倍す。恰も改年のこと近きにあり、一層の赤誠と努力を以て、雜誌の上にこの心理の印象を擴大し、大正青年の讀物として、益々理想的のものたらしめん。庶幾くば滿天下の青年諸君、幸に吾人の微衷を掬んで愈一層の愛顧を垂れよ。

●菊判本文紙數二百頁 新年號は二百三十二頁
●寫眞版…原色版…水彩畫等十數頁
▲正價一冊金貳拾錢 郵稅二錢（一區に限）貳錢五厘

## 丑年餘興

大懸賞問題

第八卷

# 文章世界

每月一回
一日發行

新年號は頁數を二倍、即ち四百八十頁となし、その中の一部を割きて、新年大附錄の讀物を掲載す。

新年號はつとめて材料を精選し、當代に於ける大家名家、新進作家に特に價値あるものを選むで、執筆を請ひ、以て一層の精彩を添へんことを期す。

新年號は、小說あり、評論あり、詩歌あり、史論あり、月旦あり、皆な一讀せざるべからざる快文字にして、讀者は應接に遑ま非ざるが如き感あるべし。

新年號は其特色の一として、讀物の豐富なるにあり。而してその讀物には面白き眞面目なるもの多し。眞摯なる努力の餘に成れるもの多し。

●菊判本文紙數二百四十頁●寫眞版光澤紙四頁
▲正價一冊金貳拾錢郵稅二錢
新年號に限り紙數四百八十頁、二倍大の原色寫眞版を增加す……正價金四十錢 郵稅四錢

新年號は大正第二年の文壇に於ける水先案內者たることを期すると共に、文章を學ぶもの〻好指針たることを期すること例に異らず。

新年號は新年雜誌界に於ける劈頭第一の偉觀たるべし。その量に於ても、その質に於ても。

新年附錄……（一五〇頁內外）には
島崎藤村 正宗白鳥 森田草平 鈴木三重吉
德田秋聲 中村星湖 田山花袋 小川未明
……等其他諸作家の作品を掲載すべし。

（後付の七）

# へ十二月の白木屋

## 樂しき買物廻り（ショッピング）の季節來る

十二月一日より

## ●歳暮大賣出し

御主人樣向奥樣向實用向贅澤向何に依らず一式陳列仕り餘興は一日より改題賑々敷開演可仕候へば御家族樣御打連れ御來店半日を樂しき買物調に費し給はゞ本年の御贈答品は一切御調濟と可相成と存候

十二月一日より

## ●新製羽子板陳列會開催

本年新製の天鳶絨燒繪羽子板●山水花鳥蒔繪羽子板を始め弊店特製の書繪羽子板●本年當り狂言羽子板等數百種の外廉價なる品々取揃三階に陳列仕候

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SCEOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界　第拾貳卷第拾六號　（毎月一回廿三日印刷納本）
（大正元年十一月廿三日印刷納本）

# ●白帶下は危險

一口に子宮病と言つたら、甚だ單純に見えるが、其實種類は多く、症候も複雜して居つて、一々これを詳說する事は、容易で無いから此に子宮病の最も普通な子宮內膜炎に付て一言して置かう

素人がよく子宮病々々といふのは、大概子宮內膜炎のことで、今の西洋醫のいふ子宮內膜炎は、漢方醫はこれを、白帶下と稱へて居た、即ち異名同病である、そして今も此名の方が通りがよい

## 「白帶下とは何んなものか」

急性と慢性とによつて多少違ふ處もあるが先づゾツト惡寒が起り、風でも引いたかなと思ふて居ると、熱が出初め、內股や腰のあたりが、引張る樣に痛み、下腹が壓し付けられる樣に重苦しく、頻りに小水を催し、子宮に劇しい痛みを覺え、子宮の粘膜は紅く腫れ、薄い水の樣な下りものがあり、段々重くなると、黄んだ粘りある濃いものが下りる、これは甚だ惡臭を發するから、素人にもすぐそれと勘付かれるそれから月經は多量になつて月經前には、子供を產む時の樣な痛みを覺え、兩足は冷え動悸は高まり、頭痛めまひがいたし、胸が苦しく、食慾は衰へ身體は弱くなり、貧血を起こし、顏色は血の氣を失ひ、精神は陰鬱になる、數月若くは、數年放置すれば、病勢が行きつ戻りつして居る中に、惜むべし他界の人となることがある、然るに婦人は、一般にこしけを輕く見る風があつていけない甲婦人が『妾は先月あたりから下りものがありますが何いふものでせう』と言へば、乙婦人はこれに應じて『妾もさうです、それでは下りものは女の役と見えますね』などゝ。それで濟まして仕舞ふものが多いが、誠に心得違ひの事であるさて死ぬの生きるのといふ心配は無いにしても、この病氣の結果として下るものは甚だ強酸性を帶びて居て、精蟲を殺す恐ろしき力を有つて居るからつまり

## 「白帶下は子種を殺す」

のである、それで身體に大した故障がある樣にも見えないで、子供の無いのは、大概こしけの爲めであるといふことも分る、而して此恐ろべきこしけは、何して起るかといふと、月經前後の風ひき、不熟練な醫者が子宮を診察する時に機械の使方を誤つたり、藥を間違へたりする爲めに起る事もあるし、御產をして乳を飲ませぬ場合、淋毒を受た時、などの場合である、而して最後に

## 「帶下の療法に付ては」

腹部を温めるがよろしい、故に家庭を離れて、氣の合つた友達と溫泉に行くなどは極よろしい、そして一方中將湯第三加減を服用し、傍ら寶壯散の浴液でよく局部を洗ひ、夜分休む時、子宮病藥たる中將球を、挿入して置けば、藥効は內外相應じて一層迅速である、猶ほ婦人衛生に關する詳細の記事は『婦人衞生手引』に載せてあるから、是を一讀すれば非常の參考になる、同書は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂へハガキで申込めば早速無代進呈する

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
定價貳拾[illegible]郵[illegible]貳[illegible]

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑯
大正元年11月(第12巻第15号)、12月(第12巻第16号)

2011年7月10日　第1刷発行　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　富士リプロ株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-4009-1 C3321